

鳴戸(3)遺跡

—一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2015年3月

青森県教育委員会

鳴戸(3)遺跡

—一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

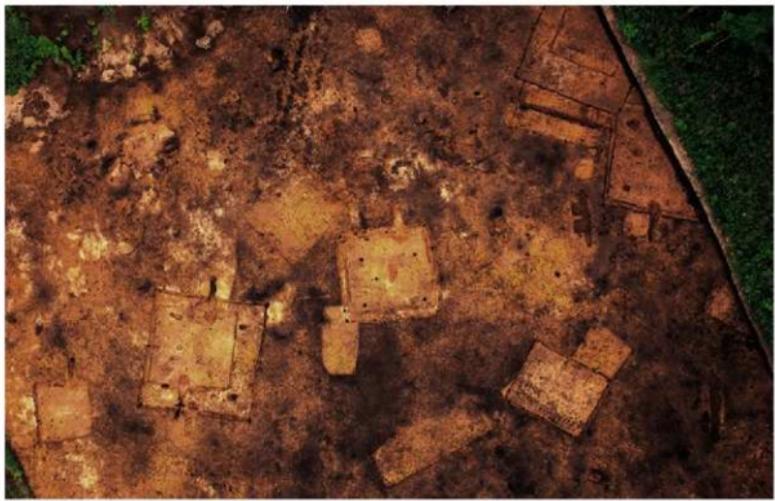
2015年3月

青森県教育委員会



鳴戸(3)遺跡上空から岩木山を望む

北より



鳴戸(3)遺跡調査区西側の遺構分布

西より

卷頭図版 1



第1号A竪穴住居跡カマド

南東より



トレンチ 2 土層断面

南東より



古代の出土遺物

卷頭図版 2

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成25年度に一般国道101号鰺ヶ沢道路建設事業予定地内に所在する鳴戸(3)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、鳴沢川の河口に面した段丘縁辺部から、平安時代の集落跡を検出しました。堅穴住居跡からは北海道の影響を受けたと考えられる擦文土器や、秋田県で製作されたと考えられる須恵器が出土しました。遺跡の眼前に広がる日本海を介した当時の交流の一端が窺える、大変貴重な事例といえます。また製炭土坑や、製塩土器、羽口等の発見は、当時の生業について重要な示唆を与えるものです。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。今後埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成27年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 三上 盛一

例　　言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成25年度に発掘調査を実施した、西津軽郡鰐ヶ沢町鳴戸(3)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は4,700m²である。
- 2 鳴戸(3)遺跡は青森県西津軽郡鰐ヶ沢町大字舞戸町字鳴戸に位置し、青森県遺跡番号は321111である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成25年6月4日～同年10月7日

整理・報告書作成期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は青森県埋蔵文化財調査センター畠山昇文化財保護主幹、浅田智晴文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル

石質鑑定 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 柴正敏

放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ

炭化材樹種同定 株式会社パレオ・ラボ

遺物の写真撮影 フォトショップいなみ・有限会社無限

- 7 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、それらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がそれらに優先する。

- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 9 発掘調査及び整理、報告書作成に際し、下記の方々からご協力、ご指導を得た（敬称略、順不同）。中田書矢、三浦圭介、宇部則保、斎藤淳、木村淳一、船木義勝、高橋学、五十嵐一治、五十嵐祐介、宇田川浩一、八木光則、村田淳、鎌田望、藤井浩、仙庭伸久、藤井誠二、秋山洋司、柏木大延、野月寿彦、小針大志、伊藤武士、神田和彌、藤原弘明、岩井浩介、東海林心

- 10 図1 遺跡位置図及びに掲載した地形図は、国土地理院発行の「電子地形図25000」

(140.24-40.78-A3-y-20141124-050359-0000)」を用いている。

- 11 测量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。

- 12 插図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

- 13 全体図等の縮尺は各挿図毎にスケール等を示した。

- 14 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。S I—堅穴住居跡、SD—溝跡、SK—土坑、SV—溝状土坑、SN—焼土遺構、

S X－性格不明遺構

- 15 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 16 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、各挿図毎にスケールを示した。
- 17 基本層序の層序番号にはローマ数字、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。
- 18 遺構実測図に使した網掛けの指示は、以下のとおりである。ただし図中に凡例を示している場合はこの限りではない。

 : 被熱硬化範囲  : 被熱範囲  : 焼土範囲
 : 炭化材範囲  : 粘土範囲、火山灰範囲、焼石範囲

- 19 土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2003年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を使用した。
 - 20 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。P－土器 S－石器 C－炭化物
 - 21 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。
 - 22 遺物実測図の縮尺は、原則として大型須恵器及び大型縄石器は1/4、土師器・擦文土器・繩文土器・縄石器は1/3、剥片石器・土製品は1/2に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
 - 23 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。
-  : 黒色処理  : 煤付着
- 24 遺物写真には遺物実測図と共に通し番号を付した(例:図5-3は5-3と表記)。
 - 25 遺物写真の縮尺は不同とした。

目 次

卷頭図版	
序	
例言	
目次	
挿図目次・表目次・写真図版目次	
第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 周辺環境	
第1節 遺跡周辺の地形と地質	7
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	11
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	15
(1) 壴穴住居跡	15
(2) 溝跡	62
(3) 土坑	62
(4) 溝状土坑	66
(5) 焼土遺構	67
(6) 性格不明遺構	67
第2節 出土遺物	70
(1) 土師器・擦文土器・製塙土器	70
(2) 須恵器	86
(3) 輞文土器	87
(4) 石器	96
(5) 土製品	98
(6) 鉄製品	99
(7) 鉄生産関連遺物	99
第4章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	101
第2節 鳴戸(3)遺跡の火山灰	
について	106
第3節 鳴戸(3)遺跡出土炭化材の	
樹種同定	109
第5章 総括	

挿図目次

図 1 遺跡位置図	5	図41 滝跡	63
図 2 調査区位置図	6	図42 土坑-1	64
図 3 遺跡周辺の地形分類図	9	図43 土坑-2	65
図 4 基本網作	10	図44 構造土坑	66
図 5 遺跡分布図	12	図45 燃土遺構	68
図 6 遺跡配置図	16	図46 性格不明遺構	69
図 7 第1号A型穴住居跡-1	17	図47 土師器、擦文土器、製塙土器-1	71
図 8 第1号A型穴住居跡-2	18	図48 土師器、擦文土器、製塙土器-2	72
図 9 第1号A型穴住居跡-3	19	図49 土師器、擦文土器、製塙土器-3	73
図10 第1号B型穴住居跡-1	20	図50 土師器、擦文土器、製塙土器-4	74
図11 第1号B型穴住居跡-2	22	図51 土師器、擦文土器、製塙土器-5	75
図12 第2号穴住居跡-1	24	図52 土師器、擦文土器、製塙土器-6	76
図13 第2号B型穴住居跡-2	25	図53 土師器、擦文土器、製塙土器-7	77
図14 第3号B型穴住居跡-1	27	図54 土師器、擦文土器、製塙土器-8	78
図15 第3号B型穴住居跡-2	28	図55 土師器、擦文土器、製塙土器-9	79
図16 第3号A型穴住居跡-1	29	図56 土師器、擦文土器、製塙土器-10	80
図17 第3号A型穴住居跡-2	30	図57 土師器、擦文土器、製塙土器-11	81
図18 第3号A型穴住居跡-3	31	図58 土師器、擦文土器、製塙土器-12	82
図19 第4号穴住居跡-1	33	図59 土師器、擦文土器、製塙土器-13	83
図20 第4号B型穴住居跡-2	34	図60 須恵器-1	88
図21 第5号穴住居跡	36	図61 須恵器-2	89
図22 第6号A型穴住居跡-1	37	図62 須恵器-3	90
図23 第6号A型穴住居跡-2	38	図63 鑑文土器	91
図24 第6号B型穴住居跡-1	40	図64 石器-1	92
図25 第6号B型穴住居跡-2	41	図65 石器-2	93
図26 第7号穴住居跡	42	図66 石器-3	94
図27 第8号穴住居跡	43	図67 石器-4	95
図28 第9号穴住居跡	45	図68 土製品	97
図29 第10号穴住居跡	47	図69 鉄製品	98
図30 第12号B型穴住居跡	49	図70 鉄生産関連遺物	99
図31 第12号B型穴住居跡	51	図71 穴住居跡集成図	118
図32 第12号C型穴住居跡	52	図72 カマド軸方向一覧	119
図33 第13号A型穴住居跡-1	54	図73 遺構間接合関係図	120
図34 第13号A型穴住居跡-2	55	図74 出土土器構成図-1	121
図35 第13号A型穴住居跡-3	56	図75 出土土器構成図-2	122
図36 第13号B型穴住居跡-1	58	図76 出土土器構成図-3	123
図37 第13号B型穴住居跡-2	59	図77 穴住居跡時期別分布図	124
図38 第14号A型穴住居跡-1	60		
図39 第14号A型穴住居跡-2	61		
図40 第14号B型穴住居跡	62		

表目次

表 1 周辺遺跡一覧	13	表12 須恵器觀察表	136
表 2 石器・石材一覧	100	表13 鑑文土器觀察表	136
表 3 穴住居跡複数観察表	129	表14 石器觀察表	137
表 4 滝跡観察表	130	表15 土製品(土製支脚)観察表	137
表 5 土坑観察表	130	表16 土製品觀察表	138
表 6 潟状土坑観察表	130	表17 鉄製品・鉄生産関連遺物観察表	138
表 7 燃土遺構観察表	130		
表 8 性格不明遺構観察表	130		
表 9 土師器観察表	131		
表10 擦文土器観察表	135		
表11 製塙土器観察表	135		

写真図版目次

卷頭図版 1	
鳴戸(3)遺跡上空から岩木山を望む、遺跡調査区西側の遺構分布	
卷頭図版 2	
第1号A堅穴住居跡カマド、トレンチ2土層断面、古代の出土遺物	
写真図版 1	139
鳴戸(3)遺跡上空から鳴沢川河口と七里長浜を望む、鳴戸(3)遺跡上空から金沢街道沢(1)遺跡と鳴沢川を望む	
写真図版 2	140
調査区遠景、調査区西側調査終了、調査区東側調査終了(S101~14)	
写真図版 3	141
第1号A堅穴住居跡完掘・断面、Pit2、3断面・Pit9、10断面	
写真図版 4	142
第1号A堅穴住居跡カマド完掘・q-r断面、カマド天井襯検出状況・煙道断面・k-l掘方断面	
写真図版 5	143
第1号A堅穴住居跡カマドn-m・q-t・o-p掘方断面、 第1号A・Bカマド掘方完掘、第1号A堅穴住居跡遺物出土状況、第1号A堅穴住居跡床面鉄製品出土状況、 第1号B堅穴住居跡断面	
写真図版 6	144
第1号A・B堅穴住居跡完掘、第1号B堅穴住居跡カマド断面・Pit21、Pit22断面・火床面断面	
写真図版 7	145
第2号堅穴住居跡完掘・断面、カマド確認・カマド断面	
写真図版 8	146
第2号堅穴住居跡カマド断面・完掘・炭化材出土状況・遺物・粘土出土状況・擦文土器出土状況、 カマド煙道・カマド遺物出土状況	
写真図版 9	147
第3号A・B堅穴住居跡完掘・断面	
写真図版10	148
第3号A堅穴住居跡西カマド完掘・掘方完掘・確認、第3号A堅穴住居跡東カマド確認・完掘・焼窯出土状況、 第3号B堅穴住居跡東カマド断面、第3号A堅穴住居跡西カマド確認・第3号B堅穴住居跡カマド断面、 第3号A堅穴住居跡カマド焼窯出土状況	
写真図版11	149
第3号A・B堅穴住居跡掘方完掘、第3号A堅穴住居跡Pit1断面・Pit2断面・Pit3断面・Pit4断面、 第3号A堅穴住居跡Pit5断面・Pit7断面	
写真図版12	150
第4号堅穴住居跡完掘・断面・カマド完掘・断面	
写真図版13	151
第4号堅穴住居跡カマド断面・第4号堅穴住居跡遺物出土状況・床面遺物出土状況・炭化材出土状況、 第5号堅穴住居跡完掘	
写真図版14	152
第5号堅穴住居跡断面・カマド完掘・カマド断面、第6号A・B堅穴住居跡完掘	
写真図版15	153
第6号A・B堅穴住居跡断面、第6号A堅穴住居跡カマド完掘・断面、第6号A・B堅穴住居跡カマド火床面断面、 第6号A堅穴住居跡カマド土器出土状況・遺物出土状況	

写真図版目次

写真図版16	154
第6号A・B竪穴住居跡カマド縦断面・掘方完掘、第7号竪穴住居跡完掘・断面、 第8号竪穴住居跡完掘・断面・カマド完掘	
写真図版17	155
第8号竪穴住居跡カマド断面・遺物出土状況、第9号竪穴住居跡完掘・断面	
写真図版18	156
第9号竪穴住居跡カマド完掘・断面・遺物出土状況・炭化材遺物出土状況、第10号竪穴住居跡完掘・ 炭化材・焼土検出	
写真図版19	157
第10号竪穴住居跡断面・カマド断面・カマド遺物出土状況、第12号A・B・C竪穴住居跡完掘	
写真図版20	158
第12号A・B・C竪穴住居跡断面、第12号B竪穴住居跡焼土検出状況、第12号A竪穴住居跡Pit2断面、 第13号A竪穴住居跡完掘	
写真図版21	159
第13号A竪穴住居跡・第10号土坑断面・カマド完掘・カマド断面	
写真図版22	160
第13号A竪穴住居跡カマド縫・石器出土状況・炭化材出土状況・カマド検出状況、第13号B竪穴住居跡完掘	
写真図版23	161
第13号B竪穴住居跡断面・炉断面、第13号A・B竪穴住居跡カマド完掘、 第13号B竪穴住居跡カマド断面・カマド火床面断面、第13号A竪穴住居跡Pit 1断面	
写真図版24	162
第14号A・B竪穴住居跡完掘・断面・掘方完掘・贴床断面、第14号A竪穴住居跡カマド断面・完掘	
写真図版25	163
第1号溝断面・粘土検出状況・完掘、第1号・第3号土坑完掘・断面・炭化材出土状況、第1号土坑炭化材出土状況 第2号土坑完掘・断面・炭化材出土状況	
写真図版26	164
第4号土坑完掘・断面・下部断面、第5号土坑完掘・断面・第6号土坑完掘・断面・焼土範囲	
写真図版27	165
第6号土坑焼土・遺物出土状況、第7号土坑完掘・断面・炭化材出土状況、 第9号土坑完掘・火山灰検出状況・断面・炭化材出土状況	
写真図版28	166
第10号土坑完掘・炭化材出土状況、第11号土坑完掘・断面・遺物出土状況、第12号土坑完掘・断面、 第13号土坑完掘	
写真図版29	167
第13号土坑断面・第1号溝状土坑断面・完掘、第2号溝状土坑断面・完掘、 第3号溝状土坑断面・完掘、第2号焼土遺構確認	
写真図版30	168
第2号焼土遺構断面、第2号・第3号焼土遺構完掘、第3号焼土遺構断面、第4号焼土遺構確認・断面・完掘、 第6号焼土遺構断面・完掘	
写真図版31	169
第7号焼土遺構確認・断面、第8号焼土遺構確認・断面、第1号性格不明焼構断面、第2号性格不明焼構断面、 第3号性格不明焼構断面・作業風景	

写真図版目次

写真図版32	170
第5号性格不明遺構完掘・断面・遺物出土状況、遺構外遺物出土状況、作業風景		
写真図版33	171
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡		
写真図版34	172
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡		
写真図版35	173
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡		
写真図版36	174
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡、壁穴住居跡・性格不明遺構、壁穴住居跡・遺構外、壁穴住居跡・土坑		
写真図版37	175
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡、壁穴住居跡・遺構外		
写真図版38	176
土師器・擦文土器・製塙土器 壁穴住居跡、溝跡・土坑、土坑・遺構外・性格不明遺構、遺構外		
写真図版39	177
須恵器 壁穴住居跡・遺構外、壁穴住居跡・土坑、遺構外		
繩文土器 遺構外		
石器 壁穴住居跡		
写真図版40	178
石器 壁穴住居跡・土坑、壁穴住居跡・遺構外		
土製品 壁穴住居跡・土坑・遺構外		
鉄製品 壁穴住居跡		
鉄生産関連遺物 壁穴住居跡・土坑		

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下「青森河川国道事務所」）から一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に関する埋蔵文化財の取り扱いについて照会があり、青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）では平成22～23年度に事業予定地の現地踏査を実施、平成23年10月に試掘調査を行った（青森県教委2012）。

試掘調査を受けて本発掘調査が必要とされた範囲については、平成24年9月の、青森河川国道事務所、文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターによる現地協議を経て、平成25年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。

本報告に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、青森河川国道事務所長から平成24年2月1日付け国東整青二調第79号でなされ、これを受けて青森県教育委員会教育長から、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を平成24年2月22日付け青教文第1283号で通知されている。

なお、未取得用地区域については、平成25年9月に文化財保護課が試掘調査を実施し、必要範囲を平成26年度以降に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行うこととした。

（中嶋）

第2節 調査の方法

（1）発掘作業の方法

県文化財保護課が実施した試掘調査の結果（青森県教委2012）、平安時代の堅穴住居跡の可能性のある遺構や遺物を検出した。このため、調査開始時は平安時代の遺構検出に重点をおいた。

遺構測量点は、用地幅杭等の設置に用いた4級基準点を使用した。基準点の座標値は青森河川国道事務所から提供を受けた。基準点からの測量に支障が生じた場合は、用地幅杭や調査区内に任意点を設置し使用した。また、水準原点は調査区脇の3級基準点21-21(35.245m)を用い、調査区内の任意点に適宜水準移動を行った。

グリッドは、調査区を網羅するように設定した。1グリッドは $4 \times 4\text{ m}$ とし、原点は、平面直角座標第X系の $X=86900, Y=-50300$ とした。南から北方向に向かってローマ数字（I～V）とアルファベット（A～Y）を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。このため原点の呼称はIA-0となる。

なお、測量基準点、水準点は平成22年以前に設置されており、使用した値は平成23年の東日本大震災による影響を受ける前のデータとなっている。本報告では混乱を避けるため、測量時のデータで提示している。国土地理院のPatchJGD Ver.1.0.1(補正パラメータファイル:touhokutaiheiyouoki2011.par)を用いて変動後の原点座標値を求める、 $X=86899.5345, Y=-50299.5716$ となる。また国土地理院のPatchJGD(標準版) Ver.1.0.1(補正パラメータファイル:touhoku2010_h.par)及びtouhokutaiheiyouoki2011_h.par)を用いて水準原点の変動後の標高値を求める、35.340 mとなる。

遺跡の基本層序は、地表面から順に層序番号をI層、II層とローマ数字で付した。試掘調査において

て、I層にあたる表土及び盛土は遺物が希薄であると判明したため、掘削時に重機を併用して省力化を図った。出土した遺物は、適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。遺構内堆積土観察用のセクションベルトは、遺構の形態・大きさ等に応じて、基本的に4分割又は2分割で設定した。遺構内堆積土には、層序番号を確認面から順に算用数字で付し、ローマ数字を付した基本層序と区別した。

遺構の実測と遺物の出土位置は、造り方測量及びソキア製トータルステーションによる測量点や俯瞰写真を用いた株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」で行った。実測図は縮尺1/20を基本とし、遺構規模や性格に応じて縮尺を変更した。出土遺物は、遺構単位で層位を基準に取り上げることを基本とし、必要に応じて出土位置の記録や形状実測図等を作成した。

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素数のデジタルカメラを併用し、遺構検出状況、遺物出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる調査区域全体の空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託して行った。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

鳴戸(3)遺跡は、縄文時代の溝状土坑3基、平安時代の堅穴住跡20軒、土坑12基、焼土遺構6基、溝跡1条、性格不明遺構5基を検出し、遺物は土器や石器が段ボール箱に換算して20箱出土した。整理・報告書作成作業は、検出された遺構の構築時期や性格等の検討をしながら進めた。

トータルステーションによる測量で作成した図面は、パソコン上で確認作業及び図面調整を行った。造り方測量で実測した図面は調整後スキャナーでデジタル画像化し、トータルステーションで作図したものと合成した。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータはタイトルを入力し、日付毎と内容毎に整理した。

遺物の注記は調査年度、遺跡名、遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては出土地点・層位等の整理を怠らないようにした。

遺物の選別は遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。選別資料は慎重に観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

写真撮影は業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。また、石器の石材产地を同定するため、石質鑑定を専門家に委託して行った。

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社 Cubic 製「遺構実測支援システム」を使用した。実測図版・写真図版等の版下作成はアドビシステムズ製「Illustrator」、「Photoshop」をそれぞれ使用した。また、割付作業はアドビシステムズ製「InDesign」を使用した。

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司（現青森県立郷土館館長）

次長（総務GM）高橋 雅人

調査第一GM 中嶋 友文

文化財保護主幹 島山 异（発掘調査担当者）

文化財保護主査 浅田 智晴（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 藤沼 邦彦 前弘前大学教授（考古学）

〃 関根 達人 国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）

〃 山口 義伸 日本第四紀学会会員（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

5月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

6月4日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った後、調査区東側より粗掘を開始した。

6月上旬 調査区東側で重機による表土除去を行った。

6月中旬 調査区東側の遺構精査を開始した。

6月下旬 調査区西側の状況を把握するため、トレーナーを設定し掘り下げを開始した。

7月17日 ラジコンヘリによる空撮を行った（1回目）。

7月下旬 調査区西側で重機による表土除去を行った（～8月上旬）。

8月9日 山口調査員の現地指導を受けた。

8月29日 ラジコンヘリによる空撮を行った（2回目）。

8月30日 調査事務所設置部分を除く範囲の調査を終了した。

9月10日 調査事務所撤去後、設置部分の表土除去を行い、土坑を1基検出した。

10月7日 調査事務所設置部分で検出した土坑の調査を行い、全ての調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成24年度に実施した発掘調査に関する報告書刊行事業は、平成25年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成24年12月に終了した。この他の整理作業・報告書作成作業は平成25年4月から平成26年3月まで行った。主体となる時期は平安時代であるため、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹 島山 异（発掘調査担当者）

文化財保護主査 浅田 智晴（発掘調査担当者）

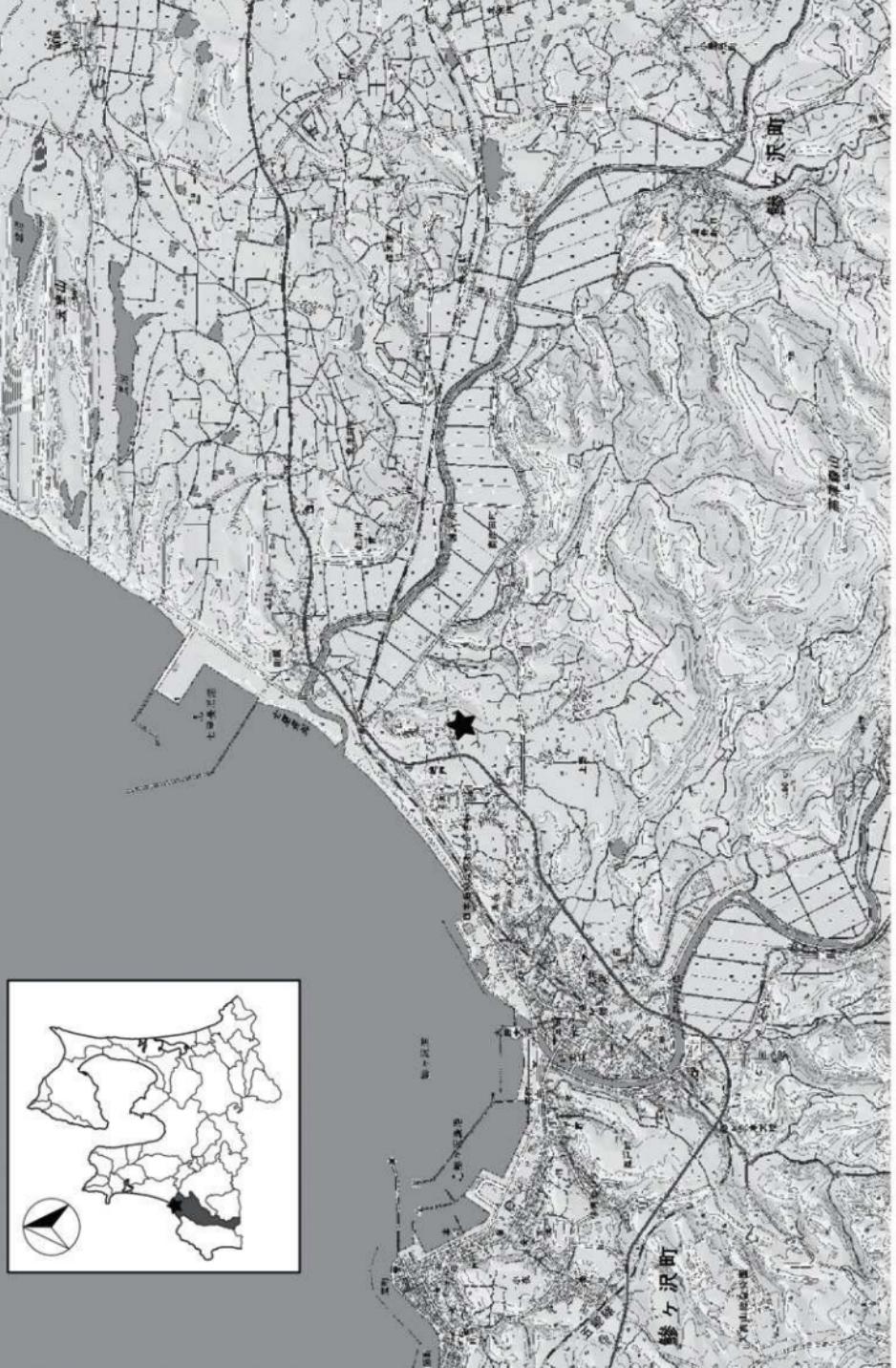
本報告書に関する整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

- 平成24年12月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行い、写真類の整理作業は終了した。
- 平成25年4月 発掘作業で作成した図面類の整理作業を行った。遺物は数量や重量計測後、土師器から順次接合・復元作業を進めた。石器は報告書掲載遺物を選別した。
- 6月上旬 土器類の接合・復元作業が終了したので報告書掲載遺物の選別作業を行った。引き続き選別した遺物の実測作業を開始した。
- 8月下旬 炭化材樹種同定委託及び放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 11月上旬 報告書掲載遺物の写真撮影を有限会社無限(土器等)、PhotoShopいなみ(石器)に委託した。また調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。
- 12月下旬 トレイスが終了した図版から順次組版作業を開始した。また、山口調査員に石質鑑定を依頼した。
- 1月中旬 卷頭写真的撮影をシルバーフォトに委託した。
- 1月下旬 原稿・版下が揃ったので、報告書の編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月26日 3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

(浅田)

0
50m
Scale 1/2500

図1 遺跡位置図



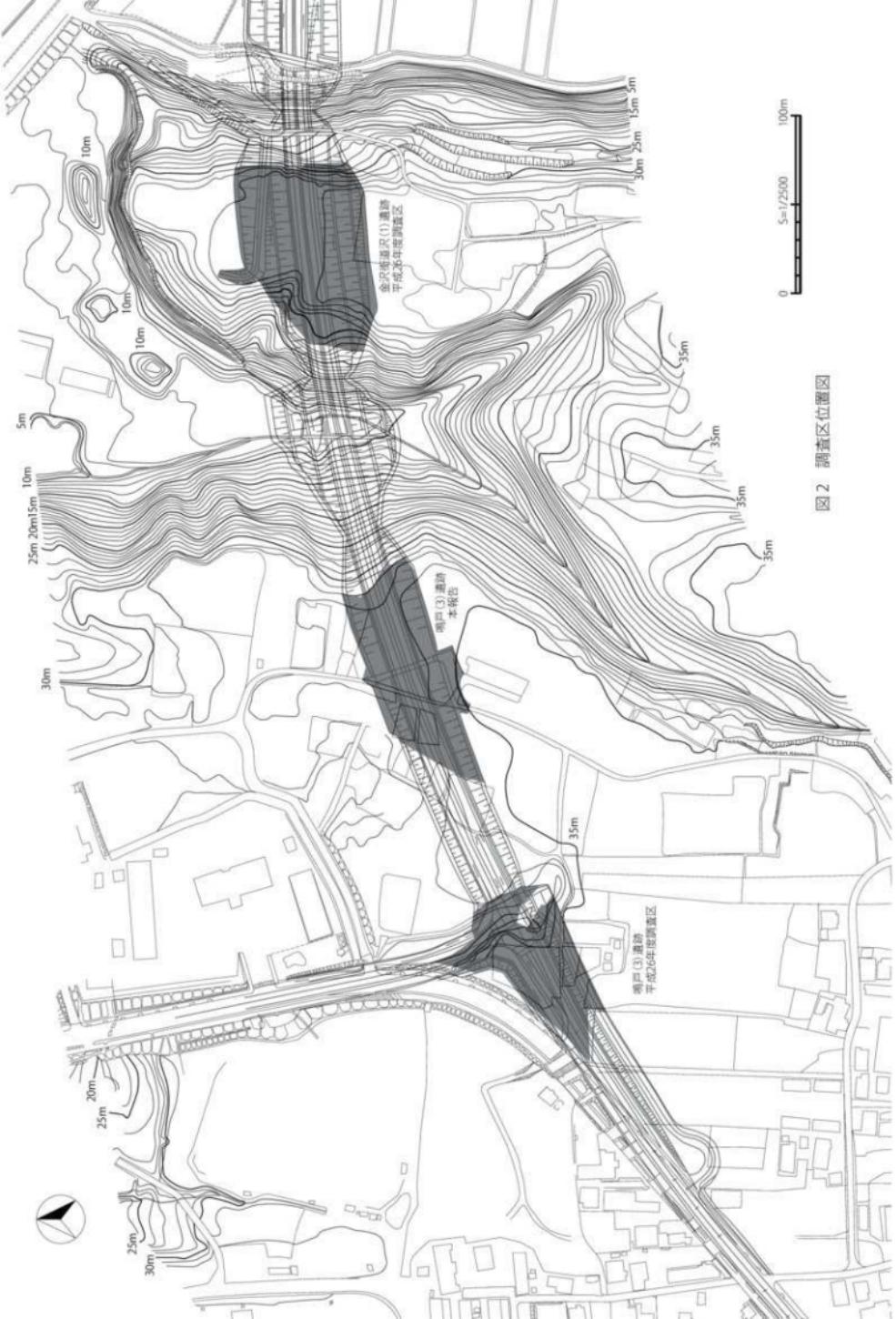


図2 調査区位置図

第2章 周辺環境

第1節 遺跡周辺の地形と地質

調査員 山口 義伸

本遺跡は西津軽郡鰺ヶ沢町大字舞戸町字鳴戸に所在し、町のほぼ東端を流れる鳴沢川河口付近に分布する海岸段丘上に立地している。

鰺ヶ沢町は南西側に白神山地が、南側に岩木火山が位置し、北端は日本海に面している。海岸線をみると、鰺ヶ沢町から北方の十三湖にかけては日本海に面して緩やかにカーブする七里長浜が展開し、海岸線に並行して屏風山が発達している。一方、西側の深浦町にかけては津軽西海岸と呼ばれる岩石海岸が展開し、海岸沿いには海岸段丘が発達している。本遺跡の北側を流れる鳴沢川は岩木山の放射谷であり、岩木火山体の西端部をほぼ南北に流れる中村川は白神山地内の四兵衛森(642m)に源を発し、鰺ヶ沢町中心街に達している。

深浦町北金ヶ沢から東方に分布する鰺ヶ沢台地は3段に区分される。高位段丘は大童子川一赤石川間では標高100~120m、赤石川以東では70~90mと東方ほどその高度が低くなっている。同じく中位段丘も深浦町間で60~80m、赤石川以東で50~60mであり、高位段丘と中位段丘とは約30mの段丘崖で接している。低位段丘は20~30mであり、赤石川以東に断片的に分布するだけである(青森県史2001)。一方、北の七里長浜に並行する屏風山は中位段丘に相当する山田野段丘が砂丘砂で被覆された地域であって、約4kmの幅で南北に約30kmの長さで分布している。この地域の南部には天皇山(標高56.7m)に代表されるように東西方向に長軸を有する縦列砂丘が発達し、砂丘列の間には冷水沼、喰沼、長沼などの低湿地帯も分布し、起伏に富んでいる。

鰺ヶ沢町周辺の地質を概観すると、おおむね深浦町北金ヶ沢を境に構成層に違いが認められる。青森県史(2001)によると、西側では背後の白神山地や丘陵地を構成する新第三紀中新世の笠内川層や大戸瀬層などが基盤岩として分布し、主に安山岩質溶岩や同質火碎岩などからなっている。また、北金ヶ沢から東側の鳴沢川にかけての海岸部には新第三紀鮮新世の泥岩主体の舞戸層や鳴沢層などが分布している。海岸部に露出する露頭観察から、舞戸層や鳴沢層などは東西方向の圧縮応力を受けた南北性の褶曲構造に支配されており、特に中村川東方の各地層は馬の背状の鰺ヶ沢背斜の東翼に堆積している。なお、中村川の東側には岩木火山体が位置し、その広い山麓部には軽石等を含む火山噴出物や山体崩壊に関わる岩屑なだれ堆積物が認められ、特に本遺跡に近い鰺ヶ沢町山田野、建石地区などは岩屑なだれ堆積面上に位置している。

一方、鳴沢川から北側には山田野層に相当する砂、シルト、疊からなる未固結の堆積物が10m以上の厚さで堆積している。青森県史(2001)は広域火山灰である洞爺火山灰(Toya)の存在から山田野層の堆積時期を約124,000年前とし、鳴沢川流域を含め、屏風山地域に分布する山田野段丘の形成に関わる海進期に相当すると考えている。北岸の保木原での露頭観察で、厚さ14~15mに及ぶ未固結の山田野層を確認し、おおむね3層に区分できた。下部層(厚さ500cm以上)は下位からクロスラミナの発達した淘汰不良な砂層、塊状の中粒砂、ラミナを有する中粒砂一細礫互層と細粒砂層、そして最上部の

細粒砂—砂鉄互層からなっている。中部層(200cm)は塊状のシルト層のみ、上部層(600cm)は下底に泥炭—細粒砂互層を有し、上位には下底部と不連続面で接するクロスラミナを有する酸化砂鉄—細礫互層、ラミナを有する中粒砂—砂鉄互層、レンズ状の泥炭層を含む細粒砂—シルト互層、ラミナを有する砂からなっている。これら一連の堆積物から推測すると、中部層が高海水準期の堆積と考えられ、上部層はレンズ状の泥炭層の挟在や細礫等の混入による上方粗粒化を考慮すると、海退時の堆積と考えられる。なお、これらの山田野層を覆う形で、クロスラミナを有するレンズ状の砂層を挟在する塊状砂層(古期砂丘砂)が200cm以上の厚さで堆積し、そして地表直下には十和田一八戸火山灰(To-Hp)を含む褐色火山灰層が堆積している。褐色火山灰層の下底部からは洞爺火山灰(Toya)を確認することができなかった。

ところで、図3には本遺跡周辺の地形分類を示した。地形分類にあたっては、昭和50年9月作成の鰐ヶ沢町森林基本図(1/10000)を使用した。

鳴沢川流域には標高30~40mの山田野段丘が分布しており、鳴沢川北岸の同段丘面に立地する外馬屋前田(1)遺跡周辺の露頭観察で、段丘砂礫層と古期砂丘砂上に載る褐色降下火山灰層下底部に洞爺火山灰(Toya)を確認している。この山田野段丘は、南岸において海岸線に平行して約1.5kmの幅で分布し、開析谷が発達するものの、きわめて平坦である。一方、北岸では同段丘が約4kmの幅で分布しているが、開析谷の発達だけでなく、今須(3)遺跡において降下火山灰層下の古期砂丘砂(厚さ約2m)の堆積により、砂丘砂上面の起伏が地表面にも反映していることを確認している。

調査区は標高33~34mの平坦な段丘面であって、東西両端には小谷がみられる。東端部を流れる小谷には谷底まで20m以上の急な谷壁で臨んでいる(図2)。この急崖は等高線の配列が頂部では弧状を成し、斜面下方ではその間隔がやや広くなっていることから、斜面崩壊によるものと考えられ、谷内に崩落物のマウンドが認められる。西端部は段丘面に谷頭を有する小谷であって、段丘面から深さ2~3mで谷底になり、その南側斜面からは製鉄関連の遺構が検出された。

本遺跡周辺に露出する基盤岩は新第三系鮮新世の舞戸層であって、緑灰~青灰色の塊状の珪藻質シルト岩~泥岩を主とし、凝灰質砂岩や軽石質凝灰岩などを挟んでいる。東端の小谷に面した谷壁を観察すると、露出するシルト岩は風化により軟質化し、クラックの発達でブロック状の崩落が顕著である。検出された平安時代の堅穴住居跡に付属するカマドの構築材には灰褐色シルト岩や灰白色凝灰質砂岩が利用されていると考えられる。シルト岩は風化によりやや脆く、凝灰質砂岩はやや緻密で硬さが見られた。おそらく、カマドに使用された石材は谷壁での崩落物、あるいは露頭からの切り出しによるものと考えられる。

次に、本遺跡調査区内の基本層序について述べる(図4)。各層の特徴は2トレンチでの堆積状況とともに記述している。調査区内は畠地整地により土層が大きく削平されており、耕作土直下には基本層序第V層が位置することが多く、遺構の確認面はおおむね第V層となっている。なお、トレンチ2は調査区北西側のII F以北では小谷に向かう傾斜地にあって、水の影響を受けて全体的に粘土質であり、整地のためにI層上位に盛土が認められる。

I層 黒褐色土(10YR2/2) 耕作土であるが、斜面低地では黒泥質となっていて湿地性の堆積状

況を呈している。平坦面では畠地整地により下位層が深く削平されており、耕作土直下にはIV層あるいはV層が露出する状況である。斜面低地には、本層上位に畠地整地による盛り土(厚さ

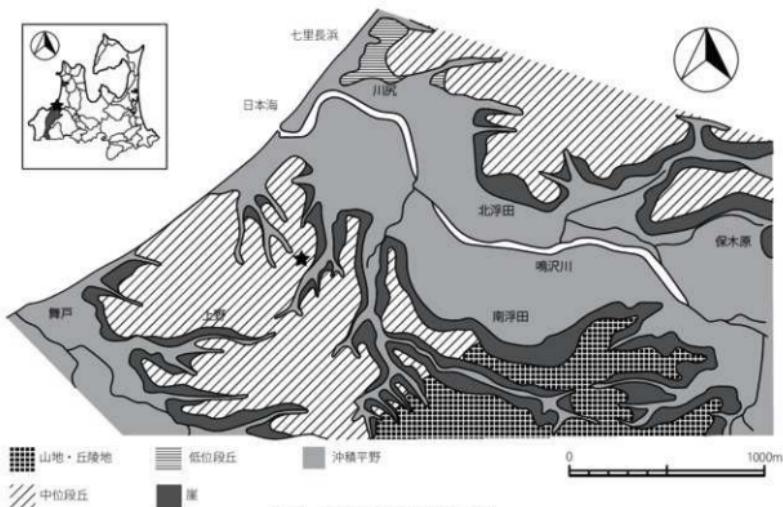


図3 遺跡周辺の地形分類図

10cm程度)が認められる。本来的な層相は粘性・湿性が弱く縮まりに欠け、乾くと黒灰色に変色しブロック状に割れやすく崩れやすい。なお盛り土には、下位層のブロックが多量に含まれております、特にV層の軽石ブロックやVI層以下のローム質粘土のブロックの混入が目立つ。

第II層 黒色土(10YR2/1) 平坦面で部分的に観察される特徴としては、粘性・湿性が多少みられ、全体的にソフトではあるが、乾くとクラックが発達し崩れやすい。厚さは10cm程度で、ローム粒や軽石粒が多少混入しているが、斜面低地では有機質粘土となっている。なお、本層下部か、あるいはIII層境界面に白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)がレンズ状に堆積することがある。

第III層 黒褐色腐植質土(10YR2/1) 粘性・湿性のある腐植質であって、全体的にソフトながら縮りがみられる。土層のカット面ではクラックもなく、平滑な面となっている。

第IV層 黒褐色土(10YR2/1) 漸移層である。全体的に粘性・湿性があり、多少かたさがあり縮まっている。下位層のローム粒や軽石粒の混入度合いにより上下2層に細分される。上位のIV a層ではローム粒や軽石粒の混入が目立つが、下位のIV b層ではブロック状の混入が目立つ。なお、ロームや軽石の粒子及びブロックの混入に関しては、IV a層では風化により土壤化が進行しているが、下位のIV b層では新鮮なブロックが目立っている。

第V層 黄褐色軽石層(10YR8/8) 千曳浮石(東北地方第四紀研究グループ1969)、八戸軽石(H P、青森県2001、柴・前島2009)に対比される。厚さは約10cmで、最大20cmに達することもある。

緻密堅固な軽石層であるが、層相から上下2層に区分できる。上部のV a層は軽石粒(径2~3mm大)を包含するローム層であり、下部のV b層はラビリ質軽石層である。部分的に細粒砂を含んだり全体的に酸化の染みがあつたりと、湿地性の堆積環境が想定される。なお、下位のVI層

との境界が凹凸であって、畠地整地による削平もあるが、凸地部分ではV a層とV b層が認められるが、凹地部分では酸化の染みのある軽石質ロームの堆積が目立つ。

第VI層 明黄褐色ローム質粘土(10YR7/6) 非常にかたく縮まったローム質粘土であって、クラックが発達する。本層及び下位のVII層は周氷河地帯に発達するインボリューションと考えられる凹凸のある堆積を示し、V層直下が径2~3mm大の細礫を含んだ硬い酸化層(厚さ5~10cm)であつたり淡いピンク色を呈する葉理のあるローム質粘土であつたりと層相変化が著しい。

第VII層 にぶい黄橙色ローム質粘土(10YR7/4) かたく縮まった、厚さ20~30cm以上の塊状の粘土層である。全体的に酸化の染みが認められる。酸化の染みが認められない下部ほど灰色を呈している。なお、本層は中位段丘を構成する降下火山灰の最上部に相当するが、粘土化している状況から水の影響を受けていると考えられる。

引用・参考文献

東北地方第四紀研究グループ(1969) 東北地方における第四紀海水準変化、日本の第四系、地学団体研究会 専報15。

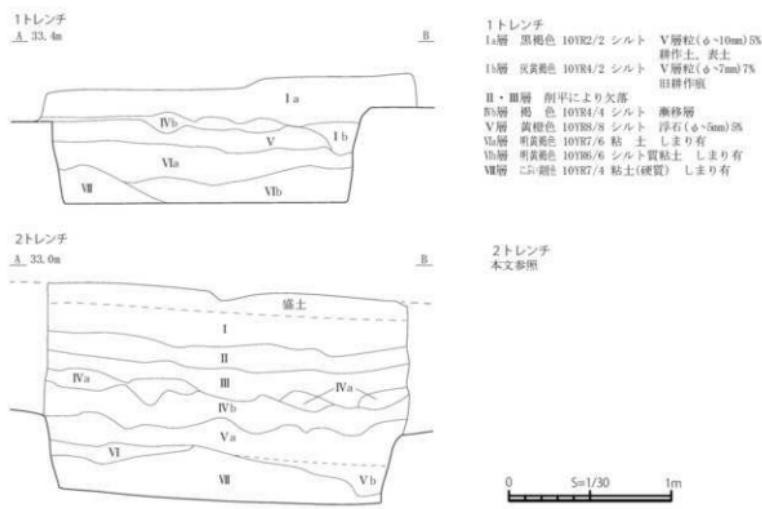
箕浦幸治・小菅正裕・柴 正敏・根本直樹・山口義伸(1998) 青森県の地質、青森県、

青森県教育委員会(1998) 外馬屋前田(1)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第242号

鰐ヶ沢町教育委員会(1999) 今須(3)遺跡 鰐ヶ沢町文化財シリーズ第14集

青森県史編さん自然部会(2001) 青森県史 自然編 地学。

柴 正敏・前島秀人(2009) 千曳軽石層の帰属について、青森地学No.54



第2節 遺跡周辺の歴史的環境

鳴戸(3)遺跡における最初の発掘調査は、現在供用中の国道101号鰐ヶ沢バイパス建設に伴い、鰐ヶ沢町教育委員会が行った（鰐ヶ沢町教委1979）。この調査で遺構は検出されなかつたが、縄文時代早期中葉の土器や石器、平安時代の土師器・須恵器、鉄滓が出土した。また、この報告書には鳴戸(3)遺跡周辺で発見された、口縁部が大きく開き、段状沈線が巡る擦文土器が掲載されている。

上記調査区は、一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業の終点部分に当たる。当該事業に伴う鳴戸(3)遺跡の発掘調査は、本報告である平成25年度調査区と、試掘調査の結果を受け調査不要となつた範囲を挟み、平成26年度に現国道バイパスと接する調査区で発掘調査を行つてゐる（図2）。調査面積は4,700m²で、谷地形に面した斜面で縄文時代中期の堅穴住居跡1軒を検出した他、谷に面した斜面部で平安時代の半地下式方形炉を18基検出したことが特筆される。また製炭土坑3基の検出や、縄文土器や石器、土師器、鉄生産関連遺物等が出土している（県埋文センター2014）。

図5は鳴戸(3)遺跡周辺の遺跡登録範囲を示したものである。以下の本文中で〔 〕内に記載した数字は、図5内の遺跡番号と対応している。また、図5内に記載した破線は、一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業の予定範囲を示してゐる。表1は本報告刊行時の遺跡地図を参考に作成し、図5と対応させたものである。

一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に係る発掘調査は、本遺跡[111]の他に、鳴沢川左岸の金沢街道沢(1)遺跡[102]、鳴沢川右岸の新沢(1)遺跡[40]及び新沢(2)遺跡[41]で、いずれも青森県埋蔵文化財調査センターが調査を行つてゐる。

本調査区の東側に位置する金沢街道沢(1)遺跡は、段丘を開析する谷を挟み対岸に位置する。平成26年に6,600m²の調査を行つてゐる。ここでは縄文時代の溝状土坑4基の他、奈良時代の土師器を伴う堅穴住居跡が9軒出土している。一方、平安時代の堅穴住居跡は11軒検出している。また、平安時代に伴う大型の溝跡は、1辺が平坦面を横断するような、コの字形の配置となつてゐる。出土遺物は縄文土器、石器、平安時代の土師器、須恵器、土製品、鉄製品である。

鳴沢川右岸の新沢(1)遺跡では、平成26年に3,500m²の調査を行つてゐる。縄文時代の土坑や溝状土坑の他、弥生時代の土器埋設遺構、平安時代の堅穴住居跡、土坑等を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、擦文土器、鉄製品、石器、土製品等が出土している。隣接する新沢(2)遺跡では、平成26年に8,300m²の調査を行つてゐる。縄文時代の堅穴住居跡、土坑、溝状土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、弥生時代の土坑、焼土遺構、平安時代の堅穴住居跡、土坑、近現代の炭窯などを検出している。また縄文時代の土器、石器、土製品、石製品、弥生土器、平安時代の土師器、鉄製品などが出士している。

鰐ヶ沢町北東部での発掘調査事例としては、津軽中部地区広域営農団地農道整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが塙沢遺跡[14]、外馬屋前田(1)遺跡[42]、湯舟(1)遺跡[47]、湯舟(2)遺跡[48]で、鰐ヶ沢町教育委員会が平野(2)遺跡[112]で行つてゐる。

塙沢遺跡では、縄文時代前期前葉の遺物集中ブロック、土坑、屋外炉や、平安時代の堅穴住居跡21軒、鉄生産関連遺構、近世以降の焼土遺構、炭窯を検出し、縄文土器や土師器、須恵器、肥前陶磁が出土している。平安時代の鉄生産関連遺構としては製鉄炉跡が34基、鍛冶遺構3基、炭窯3基を検出している。外馬屋前田(1)遺跡では、平安時代の堅穴住居跡18軒、掘立柱建物跡8棟、土坑20基、

図 5 遺跡分布図（網掛けは町戸（3）遺跡）

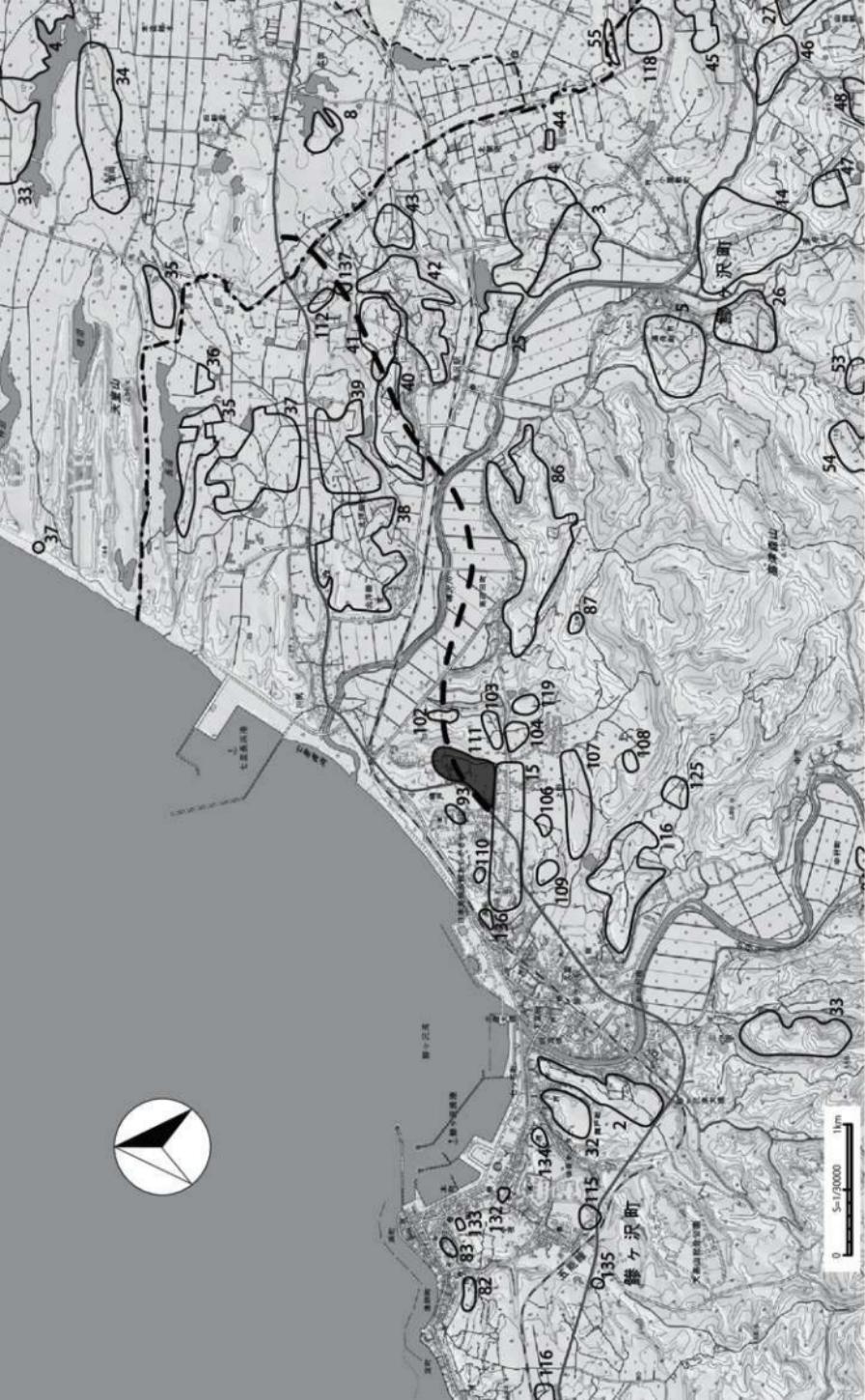


表1 周辺遺跡一覧

鰐ヶ沢町

遺跡番号	遺 跡 名	時 代	文 献 等
321002	芭蕉塚遺跡	縄文（中・後）、平安、中世	
321003	浮橋貝塚	縄文（前）、平安	岩木山 1968
321004	浮橋遺跡	縄文（前・中・後）、平安、中世	
321005	七尾遺跡	縄文（前・後）、平安	
321014	李沢遺跡	縄文（早・前・中・後・晚）、平安、近世	県教委 1990
321015	上野高地 館遺跡	縄文（前・中・後）、平安、近世	鰐ヶ沢町教委調査
321016	外馬屋遺跡	縄文（後）、平安、中世	
321025	若山遺跡	縄文（後）	岩木山 1968
321026	大曲遺跡	縄文（中・後・晚）、平安	岩木山 1968
321032	米町遺跡	縄文（後）、平安、中世	
321033	三ツ沢遺跡	縄文（後）、平安、中世	
321035	今須(1)遺跡	縄文（早・前・後・晚）、弥生、平安	
321036	今須(2)遺跡	縄文（前・後）、平安	
321037	今須(3)遺跡	縄文（中・後）、奈良、平安、中世	鰐ヶ沢町教委 1999
321038	今須(4)遺跡	縄文（前・後）、平安、中世	県教委 1998
321039	平野(1)遺跡	縄文（後・晚）、弥生	県教委 1998
321040	新沢(1)遺跡	縄文（前・中・後・晚）、奈良、平安	県教委 2014 調査
321041	新沢(2)遺跡	縄文（晚）、弥生、平安	県教委 2014 調査
321042	外馬屋前田(1)遺跡	縄文（前・中・後）、弥生、平安、近世	県教委 1998
321043	外馬屋前田(2)遺跡	縄文（中・後）、平安	
321044	北浮田遺跡	縄文（中）	
321045	建石(1)遺跡	縄文（中・後）	
321046	建石(2)遺跡	縄文（後）	
321047	湯舟(1)遺跡	縄文（前・中・後）、弥生	
321048	湯舟(2)遺跡	縄文（中・後）	
321049	建石(3)遺跡	縄文（前・中・後）	
321050	建石(4)遺跡	縄文（後）、平安	
321053	湯舟(3)遺跡	縄文（後）	
321054	下清水崎(1)遺跡	縄文（前・後）、弥生	
321055	下清水崎(2)遺跡	縄文（前・後）	
321082	鰐ヶ沢館	中世	
321083	天童山館	中世	
321084	中村館	中世	
321086	戸波城跡	平安、中世	
321087	鉢巻館	中世	
321093	鳴戸(1)遺跡	縄文（早・前・後）、平安	
321102	金沢街道沢(1)遺跡	平安	県教委 2014 調査
321103	金沢街道沢(2)遺跡	縄文、平安	
321104	金沢街道沢(3)遺跡	平安	
321106	東禿(1)遺跡	縄文	
321107	東禿(2)遺跡	縄文（前・中・後・晚）、平安	鰐ヶ沢町教委調査
321108	東禿(3)遺跡	縄文（後・晚）	
321109	東禿船跡	中世	
321110	鳴戸(2)遺跡	平安	
321111	鳴戸(3)遺跡	平安	鰐ヶ沢町教委 1979 本報告
321112	平野(2)遺跡	縄文	鰐ヶ沢町教委 2002
321115	小夜遺跡	縄文（後）、平安	
321116	大和田遺跡	縄文（前・晚）、平安	
321117	中山ノ井遺跡	縄文、平安	
321118	雲雀野遺跡	縄文、平安	

遺跡番号	遺跡名	時代	文献等
321119	金沢街道沢(4)遺跡	平安	
321125	齋見遺跡	平安	
321132	鯉ヶ沢御借屋跡	近世	
321133	法王寺庵跡	近世	
321134	神明館跡	中世	
321135	小夜薬師寺堂跡	中世	
321136	坂本台場遺跡	近世	
321137	平野(3)遺跡	縄文	鯉ヶ沢町教委調査

つがる市

209004	緩沢溜池中島遺跡	縄文(早・前・中・後)、平安	
209008	広岡溜池遺跡	縄文(前・中・後・晩)	
209033	神山(1)遺跡	縄文(前・後)、平安	
209034	神山(2)遺跡	縄文(前・後・晩)、弥生、平安	
209035	越水屏風山遺跡	縄文(後)、続縄文	
209037	神田遺跡	縄文(後)、続縄文	小山内・岡田 1983
209055	矢伏長根遺跡	縄文(前・中・後・晩)	

工房跡1基を検出した。堅穴住居跡には周堤が伴うものや掘立柱が伴うものが確認された。また、遺物は土師器、須恵器、製塙土器、鉄生産関連遺物、鉄製品、土製品、炭化種実が出土した。湯舟(1)遺跡では、縄文時代の土坑、中期末葉の土器埋設遺構、近世以降の道路状遺構を検出した。また縄文土器、弥生土器、石器が出土した。湯舟(2)遺跡では、遺構が検出されず、遺物も縄文土器片に留まった。平野(2)遺跡では縄文時代草創期の無文土器や石器が出土している。

県営中山間地域総合整備事業に伴う調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが平野(1)遺跡[39]と今須(4)遺跡[38]で、鯉ヶ沢町教育委員会が今須(3)遺跡[37]を行った。平野(1)遺跡では、平安時代の堅穴住居跡1軒を検出した。カマドに板状の砂岩を芯材に用い、粘土で覆う構造を持つ。火床面脇に土製支脚が使用時の原位置を保った状態で出土しており、土師器壊破片が支脚上部に乗せられた状態で出土している。遺構堆積土中には白頭山・苦小牧火山灰が堆積している。今須(4)遺跡では遺構が検出されず、縄文時代の石器と平安時代の土師器、須恵器が出土した。今須(3)遺跡では縄文時代の土坑と平安時代の堅穴住居跡、土坑、溝跡、近世の道路遺構が検出され、縄文土器、石器、土師器、擦文土器、須恵器、製塙土器、鉄生産関連遺物が出土した。縄文土器には縄文時代早期押型文土器が含まれている。

(浅田)

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 壁穴住居跡[SI] (図7~40)

壁穴住居跡は、いずれも調査区東側で20軒検出した。以下、検出順に詳細を記載する。

第1号A壁穴住居跡[SI01A](図7~9)

位置と確認 I X-49・50・51、I Y-49・50グリッドに位置する。南側は調査区外に存在する。周辺は畑耕作による削平を受けており、I層除去時に遺物の散布とカマドの構築材と思われる灰白色粘土を確認した。この段階では遺構プランが明瞭ではなかったため、第IV層上面まで掘り下げたところ、方形プランを確認した。

重複関係 第1号B壁穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。カマド煙道部北西側に第1・3号土坑が位置するが、関連は不明である。

規模・平面形 長軸6.33m、短軸6.31mの方形を呈する。推定床面積は35.3m²を測る。カマドは1基検出し、N-63°-Wに主軸を持つ。

堆積土 6層に分層できた。第5・6層は壁溝内や壁側に堆積しており、住居機能停止後、周囲から徐々に流入していることが窺える。第3・4層は床面上を覆うが、第3層は北側から、広く確認できたのに対し、第4層は南側でのみ僅かに確認できた。第2層も第4層と同様、南側でのみ僅かに確認できた。第2層の堆積が終了した段階で窪地状態になっており、第1層が窪地を埋没させている。

壁面・床面 確認できた範囲では壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面までの高さは最大38cmを測る。

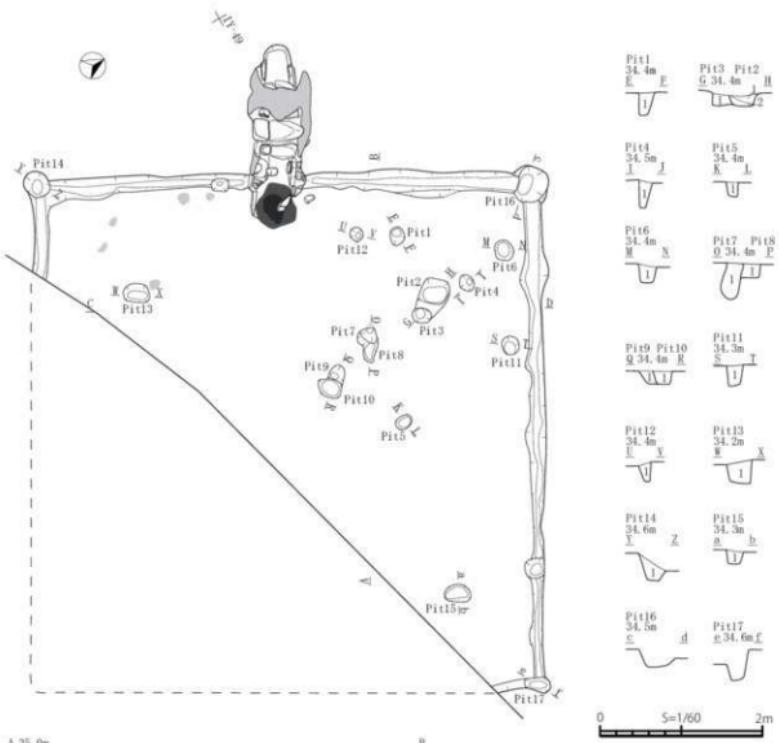
床面はV層をほぼ平坦に調整しているが、後述する第1号B壁穴住居跡と重複する部分では埋土上部が床面となるため、埋土に多量に混入しているV層のブロックが影響し、細かい凹凸が見られる。

壁周溝 確認できた範囲ではカマドを除くほぼ全面で構築している。幅は最大35cm、深さは最大41cmを測る。

カマド 北西壁ほぼ中央に構築している。煙道部の形態は半地下式で、煙道長は159cm、幅76cmを測る。煙道部の掘り込みは火床面の高さから5°上方に傾斜しているが、ほぼ水平と認識できる。煙出部は僅かに窪むが、特別な構造は見られない。確認面からは38cm掘り込んでいる。堆積土は煙出部を中心自然流入したものと考えられる。本遺構の特徴として、煙道部の構造が良好に残存していることが挙げられる。先ず煙道部を断面逆台形に掘りこんだ後、板状のシルト岩と砂岩を両側壁に垂直に配置し、掘方埋土を用いて隙間を充填している。縫の配置の際には溝状の掘方を掘り込むものが多い。特に左側壁は溝状に一気に掘り上げている。側壁疊配置後、側壁に用いた疊より長軸の長いシルト岩を蓋石として天井部に渡し、さらにその上をローム層母材の灰黄褐色粘土質シルトとシルト岩起源と思われる灰白色粘土で覆っている。用いられたシルト岩は、風化の度合いにより色調が灰色に近いものから白色化しているものまで見られる。第2章で述べられているように、シルト岩は基盤層に存在することから、近隣の露頭から採取してきたものと思われる。一方、砂岩は角が取れて丸みを帯びており、鳴沢川など近隣河川から採取したものと思われる。火床面は特に中央部が非常に強い被熱を受け

図 6 遺構配置図





S01A					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	綈土粒(φ~2mm)3%	炭化物粒(φ~2mm)3%
	褐色	10YR4/4	シルト	綈土粒(φ~15mm)7%	炭化物粒(φ~5mm)2%
2層	黒褐色	10YR2/3	シルト	ローム粒(φ~5mm)7%	炭化物粒(φ~2mm)1%
3層	黒褐色	10YR2/2	シルト	ローム粒(φ~10mm)3%	
4層	暗褐色	10YR3/3	シルト	ローム粒(φ~500mm)40%	堅溝堆積土
5層	暗褐色	10YR3/3	シルト	黑色(10YR2/1)シルトとの混合土	
6層	暗褐色	10YR3/3	シルト	ローム粒(φ~2mm)3%	堅溝堆積土
Pt1					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物粒(φ~2mm)1%	
Pt2					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~20mm)3%	
2層	黒褐色	10YR3/2	シルト	IV層との混合土	
Pt3					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~5mm)5%	
Pt4					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~2mm)2%	
Pt5					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~3mm)5%	
Pt6					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~10mm)3%	
Pt7					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物粒(φ~3mm)1%	ローム粒(φ~5mm)1%
Pt8					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~3mm)1%	
Pt9					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~10mm)1%	
Pt10					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~2mm)1%	
Pt11					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物粒(φ~3mm)1%	ローム粒(φ~5mm)1%
Pt12					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~2mm)1%	
Pt13					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~30mm)20%	灰白色粘土粒(φ~10mm)2%
Pt14					
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~30mm)5%	
Pt15					
1層	黒褐色	10YR2/2	シルト	ローム粒(φ~5mm)5%	

図7 第1号A竪穴住居跡-1

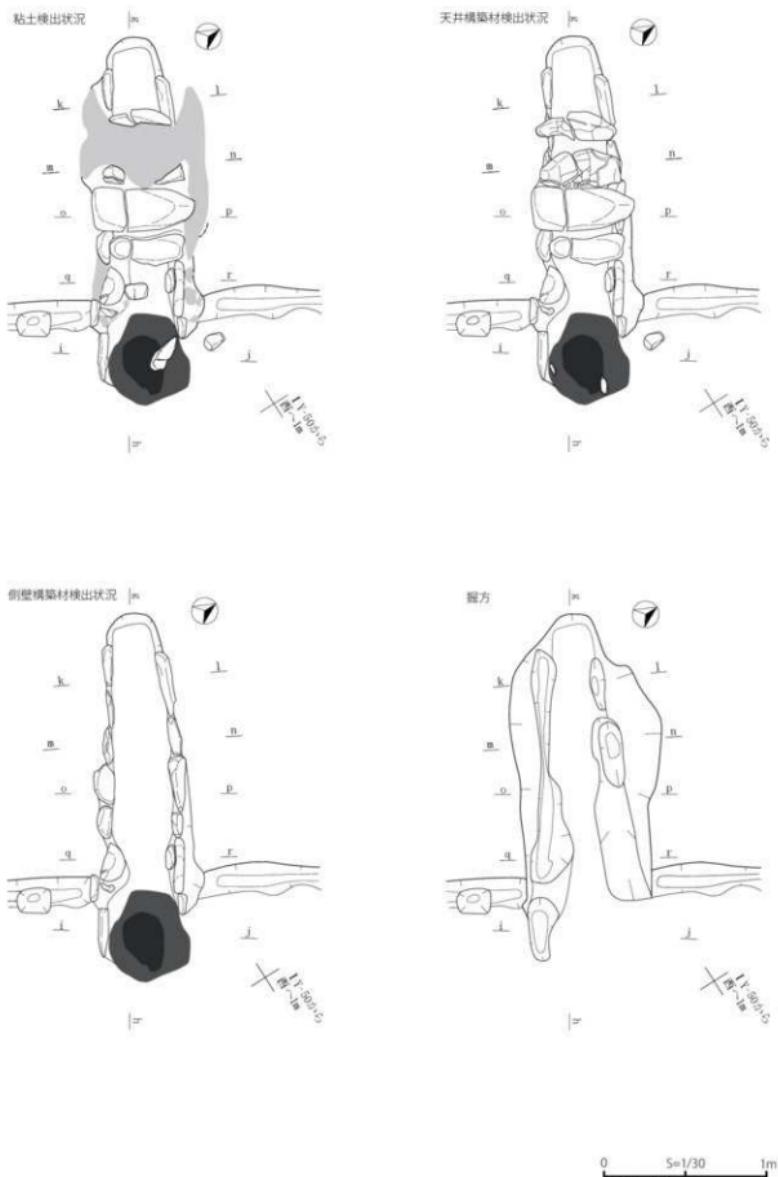


図8 第1号A竪穴住居跡－2

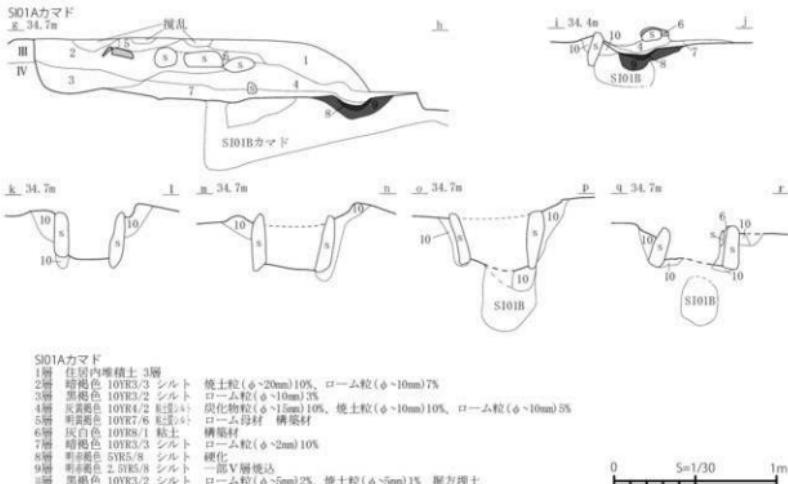


図9 第1号A竪穴住居跡-3

ており、長軸55cm、短軸49cm、被熱厚は9cmを測る。火床面の一部は、下部の第1号B竪穴住居跡カマド堆積土が被熱している。火床面周辺の構造物は左袖部に芯材となる板状の礫が掘方を伴い、煙道側壁と同様に立てられた状態で出土したが、右袖部からは礫が出土せず、掘方の痕跡も確認できなかつた。また、芯材を覆っていたと考えられる粘土も確認できなかつた。このため、構築時に礫を芯材に用いていなかつた可能性があるとともに、住居機能停止後、カマド本体が意図的に片付けられた可能性が高い。

柱穴 柱穴は17基検出した。主柱穴と考えられるのはPit 2・13・15で、いずれも対角線上に位置している。住居隅に補助柱穴と考えられるPit 14・16・17が位置する。対称的な配置となっているため、南側の調査区外にも対応する柱穴が存在すると思われる。平面形は円形から隅丸方形を呈する。規模は長軸で最大47cmを測るが、概ね30~40cmとなる。Pit 2は断面観察で住居堆積土第3層を切っていであることから、住居の廃絶後、第3層の堆積終了時まで柱が残存していたと考えられる。Pit 1・3~12はいずれも堆積土が単層で、Pit 2・3、Pit 7・8、Pit 9・10、はそれぞれ重複している。いずれも住居中央より北側にまとまっているが、機能については不明である。

出土遺物 遺物の出土位置は、確認面から1層に纏まつておらず、遺構廃絶後の窪地に廃棄されたものと捉えることができる。土師器は4点を図示した(図47-1~4)。図47-4は第1号B竪穴住居跡と接合している。また床面とPit 2から鉄製品(図69-1・2)が出土した。

小結 調査区内では最も西側で検出した竪穴住居跡である。第1号B竪穴住居跡を拡張する形で構築しており、床面積は倍増している。本調査区では大型に分類される。礫を組合せたカマド煙道部の構造が特徴的である。

(浅田)

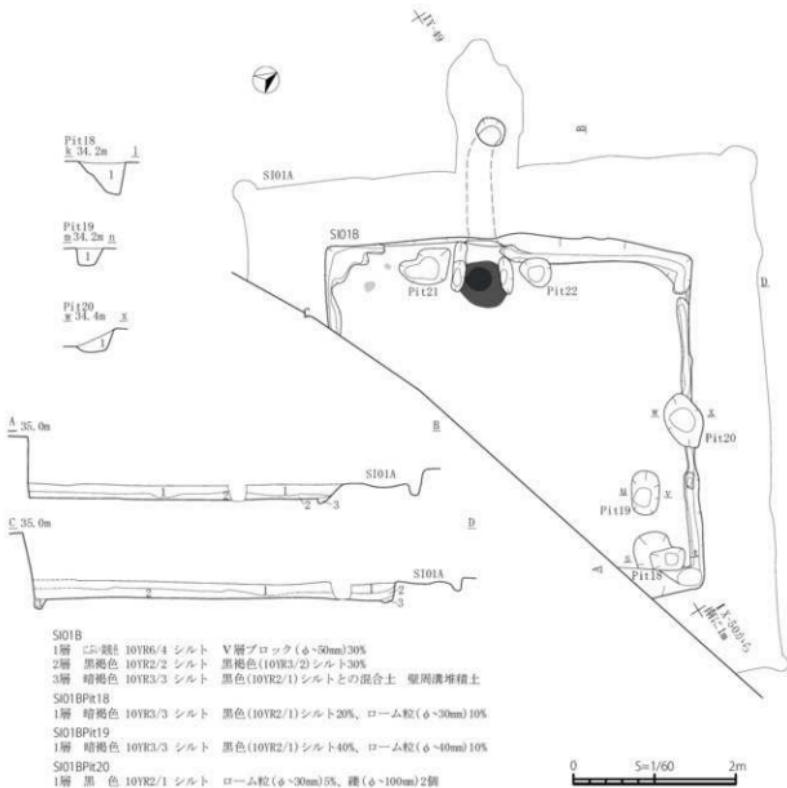


図10 第1号B竪穴住居跡-1

第1号B竪穴住居跡(SI01B)(図10~11)

位置と確認 I X・I Y~49・50 グリッドに位置する。第1号A竪穴住居跡と同様、南側は調査区外に存在する。第1号A竪穴住居跡を掘り下げた際、床面上で方形のプランを確認した。また第1号A竪穴住居跡カマド煙道下部で煙出部を確認した。

重複関係 第1号A竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

規模・平面形 規模は長軸4.49m、短軸4.40mの方形を呈する。推定床面積は16.1m²を測る。カマドは1基検出し、N~56°~Wに主軸を持ち、第1号A竪穴住居跡とほぼ一致する。

堆積土 3層に分層できた。第3層は壁構内にのみ堆積している。第2層は黒褐色土のみで床面上を水平に覆う。人為堆積の様相を示すが、混入物は非常に少ないとから母材は表土と推定できる。第1層はV層ブロックが多量に混入しており、人為的に掘り上げ土で埋め戻された様相を呈する。この

ことから、本遺構の機能停止後、第1号A堅穴住居跡は時間を置かず構築し始めたと推測できる。表土からロームまで、本遺構の周囲を上位より掘り下げ、掘り上げた土はそのまま本遺構に均しながら投入したものと思われる。これにより第1層上面が第1号A堅穴住居跡の床面として使用されており、堆積土は全て掘方理土となる。

壁面・床面 北東壁は開き気味になるが、そのほかは壁溝から垂直に立ち上がる。第1号A堅穴住居跡床面までの高さは最大27cmを測る。床面はV層をほぼ平坦に調整している。

壁周溝 部分的に途切れるが、ほぼ全面に構築している。幅は最大44cm、深さは最大36cmを測る。
カマド 北西壁ほぼ中央に構築している。煙道部の形態は地下式で、煙道長は147cmを測る。壁と垂直方向、火床面より14°下方に傾斜する角度でV層を削り貫いていき、煙出部付近で大きく北側に湾曲する。煙出部は第1号A堅穴住居跡カマド煙道部に位置しているため、上部構造は不明であるが、残存部分の深さは44cmを測る。火床面は非常に強い被熱を受けており、長軸57cm×短軸54cm、被熱厚は10cmを測る。火床面周辺の構造物は確認できず、掘方のみを検出した。火床面両脇に細長い溝状に掘り込まれており、第1号A堅穴住居跡と類似する。このため、本遺構でも板状の疊を芯材に用いていた可能性が考えられる。疊や構築材の粘土が検出できなかったのは、住居機能停止後、カマド本体が意図的に片付けられたためと思われる。外された疊については第1号A堅穴住居跡に再利用されている可能性も考えられる。堆積土はカマド部分で10層に分層できた。第1・2層は第1号A堅穴住居跡の掘方理土にあたり、第1層は貼床部分にあたる。火床面上に炭化物層の第5層が堆積しているが、これを直接掘方理土が覆っていることから、カマド片付け後、間をおかず埋め戻されていることを示している。第8・9層は火床面の被熱痕である。この被熱痕は第10層の疊設置掘方で急に途切れることから、この場所に被熱を遮断する疊が存在し、抜き取られたことを示唆している。煙道部はロームの混入した第6層で埋没しているが、煙出部は掘り下げ直後に空洞であることを確認した。このような空洞が生じるための要因として、現時点で2つの可能性が考えられる。1点目は、空洞の状況が、柱穴等で柱根部分の腐朽に伴い生じる空洞と類似していることから、本遺構でも廃棄時に有機質のものが埋められ、埋没後に腐朽し空洞化した可能性が挙げられる。2点目は、第1号A堅穴住居跡構築に向か一気に埋め戻されたため、細長い煙道部の奥まで上手く土が入らず、空洞のまま塞がれた可能性が挙げられる。

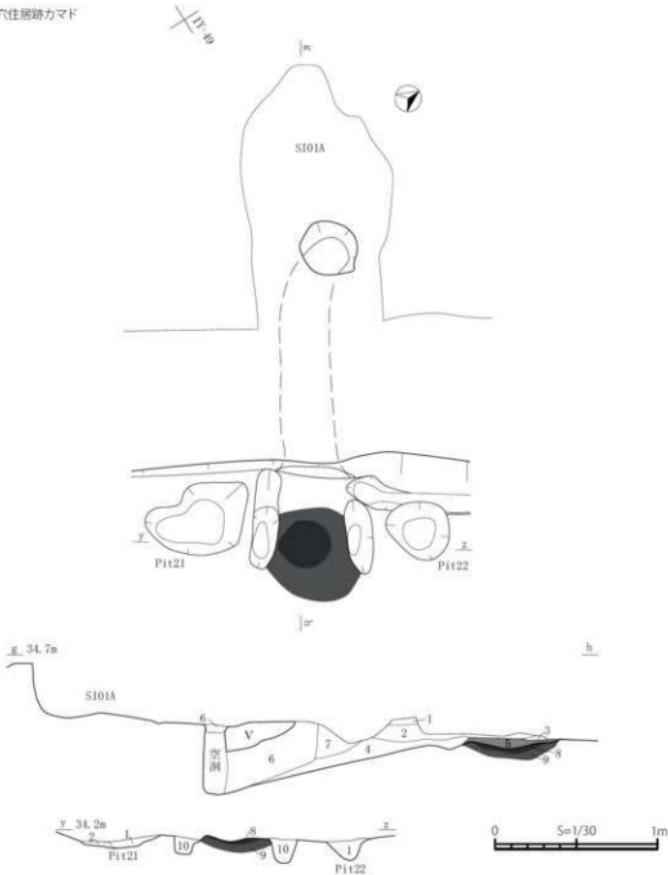
柱穴・土坑 5基検出した。平面形はPit18・19・21は隅丸方形、Pit20・22は楕円形を基調とする。Pit18・21は一部に不整形の掘り込みが伴っており、柱の抜き取り痕と考えられる。Pit20は北東壁中央部に位置し、壁面から一部張り出している。Pit21・22はいずれもカマド両袖外側に位置する。掘り込みが浅いことから、柱穴とは認定しづらく、カマドとの関連が窺われる。

出土遺物 土器は第2層から4点、床面から2点と少ない。いずれも埋め戻した土に混入していたものであろう。土師器は2点を図示した(図47-4・5)。図47-5は第1号A堅穴住居跡と接合している。石器はカマドから砥石(図64-4)が1点、Pit20底面から砥石的な使用痕跡を持つものが(図64-3)、2層及び確認面から不定形石器(図64-1・2)が出土した。

小結 第1号A堅穴住居跡へ拡張する以前の堅穴住居跡で、本調査区では小型に分類される。堆積土の状況や土師器の接合状況等から、住居機能停止後に埋め戻されていることが判明した。

(浅田)

第1号B豎穴住居跡カマド



SI01Bカマド

1層 明褐色	10YR7/6	シルト	SI01A底床
2層	10YR4/3	シルト	ローム粒(φ~20mm)10% 住居1層
3層 黒褐色	10YR3/2	シルト	住居2層
4層	10YR3/2	シルト	粘土粒(φ~10mm)25%
5層	10YR2/2	シルト	
6層 黒褐色	10YR2/2	シルト	ローム粒(φ~50mm)30%, 粘土粒(φ~5mm)3%
7層	10YR4/3	シルト	ローム粒(φ~30mm)5%, 粘土粒(φ~10mm)3%
8層 明赤色	5YR5/8	シルト	V層侵入、硬化範囲
9層 明赤色	2.5YR5/8	シルト	V層侵入
10層 黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~5mm)2%, 粘土粒(φ~5mm)1% 順理土

Pit21

1層 明褐色	7.5YR3/4	シルト	炭化物粒(φ~5mm)7%, 焙土粒(φ~5mm)3%
2層 黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒(φ~5mm)9%, 焙土粒(φ~5mm)3%

Pit22

1層 暗褐色	10YR4/3	シルト	ローム粒(φ~10mm)5%, 炭化物粒(φ~10mm)5%
--------	---------	-----	--------------------------------

図11 第1号B豎穴住居跡-2

第2号竪穴住居跡 [SI02](図12~13)

位置と確認 II L・II M-54・55 グリッドに位置している。遺構確認時、第IV層上面で検出した。

重複関係 なし。

規模・平面形 規模は長軸3.60m、短軸3.42mの長方形を呈する。床面積は11.0m²を測る。カマドは1基検出し、N=90° -Eに主軸を持つ。

堆積土 8層に分層できた。床面および壁際に黒褐色土主体の堆積が見られ(第5~8層)、中位にはにぶい黄褐色土(第4層)、上位には黒褐色土と暗褐色土の堆積が見られる。

壁面・床面 壁高はおおむね25~30cmである。床面は平坦で、カマド周辺はとくに堅い。

壁周溝 検出できなかった。

カマド 東壁の中央よりやや南側に構築している。カマド本体は北側へ崩落したような状況で、シルト岩の破片や焼土塊が多く見られた。カマド本体はシルト岩を主体として構築されているが、土師器片やシルト岩片を芯材にして粘土で構築されている部分もある。燃焼部底面は幅40cm、奥行き60cm前後で、火床面と煙道口との間には直径30cm、深さ5cmの浅いピットが見られた。この付近からは擦文土器や土製支脚の破片が重なり合って出土した。煙道部の構造は半地下式で、煙道底面は壁外に向かって2°下方に緩やかに傾斜する。煙出孔は壁から約1m離れており、確認面からの深さは43cm、大きさは直径40cmの円形である。上部からはシルト岩、中位から擦文土器や製塩土器の破片が出土した。

柱穴・土坑 カマドの北側に約50×70cmの楕円形の土坑を検出した。深さは約20cmで若干壁外へ膨らんでいる。柱穴は検出できなかった。

出土遺物 主に住居東側のカマドおよびカマド周辺から土師器、擦文土器、製塩土器、土製支脚等のほか、縄文土器が少量出土した。土器の出土量は、堆積土出土とカマド周辺ではほぼ同数となる。出土土師器は甕、壺、壗がある。擦文土器(図48-2)はカマド燃焼部からと煙道部煙出孔から出土したものが接合し、さらに第6号竪穴住居跡カマド周辺から出土したものとも接合した。土師器壗も第6号竪穴住居跡出土の破片と接合した。製塩土器(図48-1)は煙道部煙出孔と堆積土から出土したものが接合した。土製支脚(図68-1)はカマド燃焼部とカマド北側の堆積土から出土したものが接合した。

住居北西側(C-1)とカマド火床面西側(C-2)の堆積土から出土した炭化物の樹種同定を行った結果、いずれもイヌエンジュと同定された。また、カマド脇のPit 1底面に近い第6層から出土した炭化物は、カエデ属と同定された(第4章第3節参照)。また、Pit 1出土炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、2σでは8世紀後半から10世紀初頭の値を示し、1σでは9世紀後葉の確率が最も高くなかった(第4章第1節参照)。

小結 一边が3m程のほぼ方形を呈する住居である。本調査区では小型に分類される。カマドの確認状況や遺物の出土状況から、カマド破壊に伴って擦文土器や支脚片が意図的に置かれた可能性がある。また、出土遺物が遺構間接合の関係にある第6号竪穴住居跡とはカマドの主軸方位がほぼ一致しており、本遺構と第6号竪穴住居跡は同時存在の可能性が高い。

(畠山)

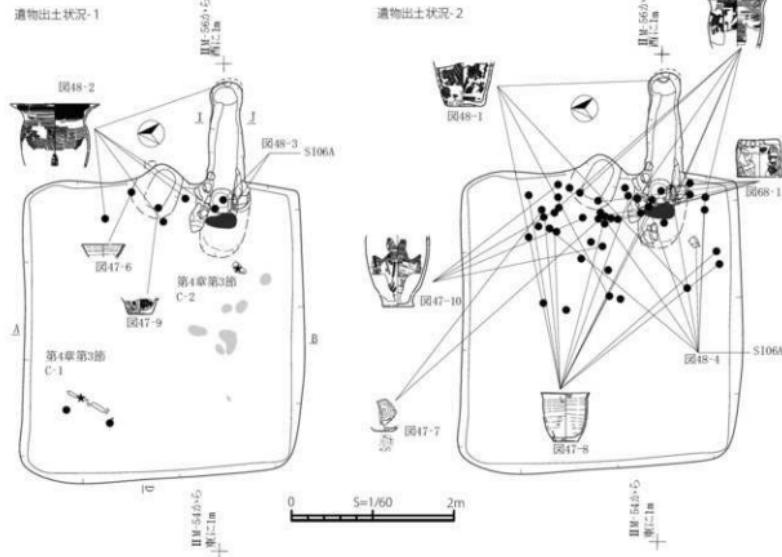
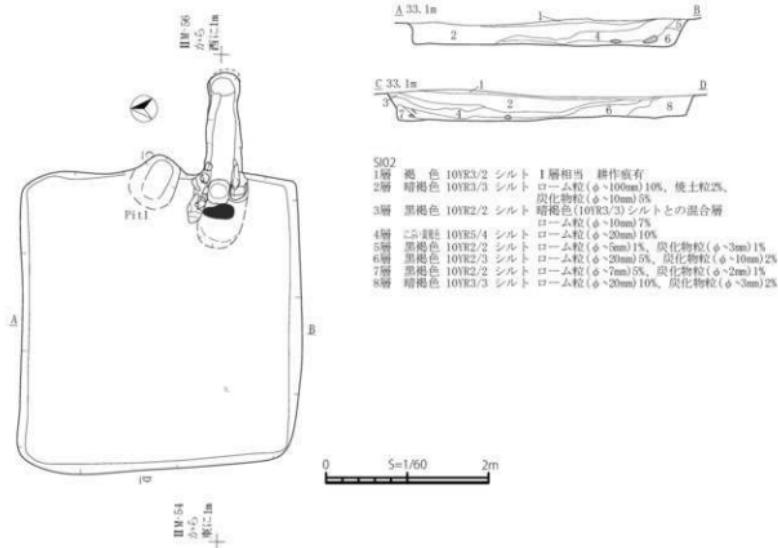
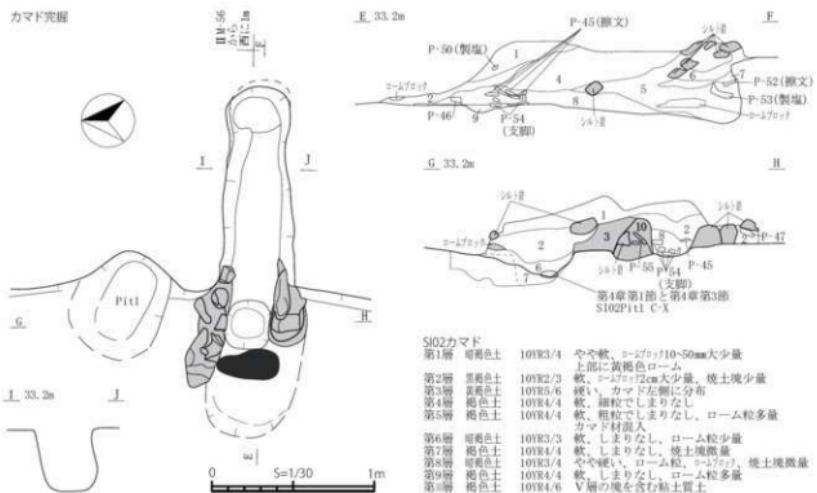


図12 第2号竪穴住居跡-1

カマド実掘



第1層	褐色土	10YR3/4	やや軟、 $\approx 2\text{cm}$ 厚10-50mm大少量
第2層	黒褐色土	10YR2/3	軟、 $\approx 2\text{cm}$ 厚2cm大少量、燒土塊少量
第3層	黄褐色土	10YR6/6	硬い、カマド左側に分布
第4層	褐色土	10YR4/4	軟、細粒でしまりなし
第5層	褐色土	10YR4/4	軟、粗粒でしまりなし
第6層	褐褐色土	10YR3/3	軟、しまりなし、ローム粒少量
第7層	褐色土	10YR4/4	軟、しまりなし、燒土塊微量
第8層	褐褐色土	10YR3/4	やや硬い、ローム粒、塊多量
第9層	褐色土	10YR4/4	軟、しまりなし、ローム粒多量
第10層	褐色土	10YR4/6	V層の塊を含む粘土質土

カマド検出状況

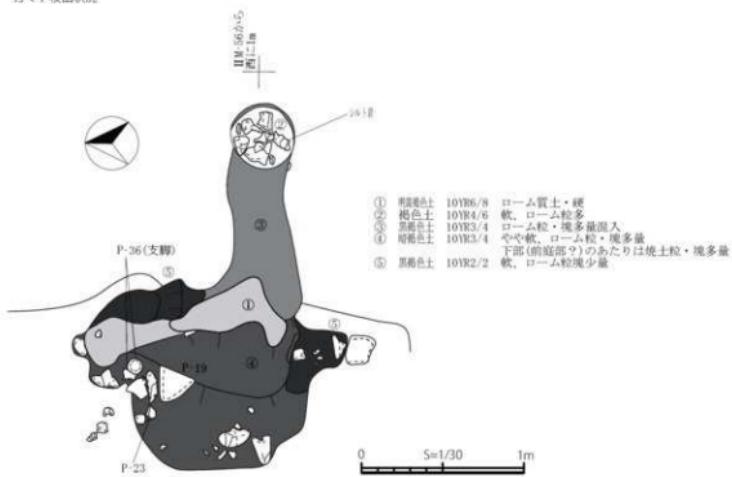


図13 第2号竪穴住居跡-2

第3号竪穴住居跡

位置と確認 II J・II K-54・55・56、II L-54 グリッドに位置している。第IV層上面で検出した。

重複関係 拡張が行われた竪穴住居跡である。拡張前の住居をA(SI03A)、拡張後の住居をB(SI03B)として報告する。

第3号B竪穴住居跡 [SI03B](図14～15)

規模・平面形 規模は長軸7.1m、短軸6.72mでほぼ方形を呈し、床面積は42.1m²を測る。カマドは1基検出し、N-78°-Wに主軸を持つ。

堆積土 3層に分層できた。第1層は表土(耕作土)、第2層は暗褐色土、第3層が褐色土である。第2層が大半を占め、上部では火山灰の小ブロックが見られた。分析の結果、白頭山-苦小牧火山灰と判明した(第4章第2節参照)。

壁面・床面 壁高はおおむね15～20cmである。床面は拡張前より15cm前後高い位置に構築されており、ほぼ平坦である。

壁周溝 東壁の中央付近では不明な部分があるが、カマドを除いてほぼ一周するものと思われる。幅は最大43cmを測るが、全体的には10～20cmが多い。深さは最大30cmを測る。

カマド 西壁のほぼ中央で検出した。火床面の周辺にシルト岩や焼土塊が、散乱した状況で見られた。遺存状態は悪く、火床面と煙道のみの確認である。火床面は幅55cm、奥行き50cmである。煙道は底面部分の確認で、幅70cm前後で、壁から水平に約1.4m伸びている。底面の両脇は溝状に掘り込まれているが、これはシルト岩を設置するための掘方と思われる。また、煙道西端の角状になっている部分には煙出孔があったものと思われる。

柱穴・土坑 床面から4基の柱穴を検出した。また、住居の四隅から4基、北・東・南壁の中央の壁周溝から柱穴を1基ずつ検出した。4基の主柱穴(Pit 1～4)と壁際の補助柱穴とで構成されるものと思われる。

出土遺物 堆積土及びカマドから土師器・須恵器が出土した。土器の出土量は、第2層からが最も多く、床面からは出土していない。

小結 第3号A竪穴住居跡を拡張して構築しており、床面積がほぼ2倍に増加した。本調査区で最も大きい竪穴住居跡で、特大型に分類される。カマド煙道部は半地下式の構造へと変わり、西壁の中央に設置されている。堆積土の上部に白頭山苦小牧火山灰を確認した。竪穴住居跡からの確認は、本遺構と第6号竪穴住居跡のみである。住居機能停止後、火山灰降下までに一定期間置いた状態であったと考えられる。

(島山)

第3号A竪穴住居跡 [SI03A](図16～18)

規模・平面形 規模は長軸5.07m、短軸4.77mで、ほぼ方形を呈する。床面積は21.1m²を測る。

カマドは2基検出した。それぞれN-75°-WとN-105°-Eに主軸を持つ。

堆積土 6層に分層できたが、大半は褐色土と黒褐色土であり、上部にはロームブロックを多量に含んでおり、特に第1層は第3号B竪穴住居跡の貼床となっている。

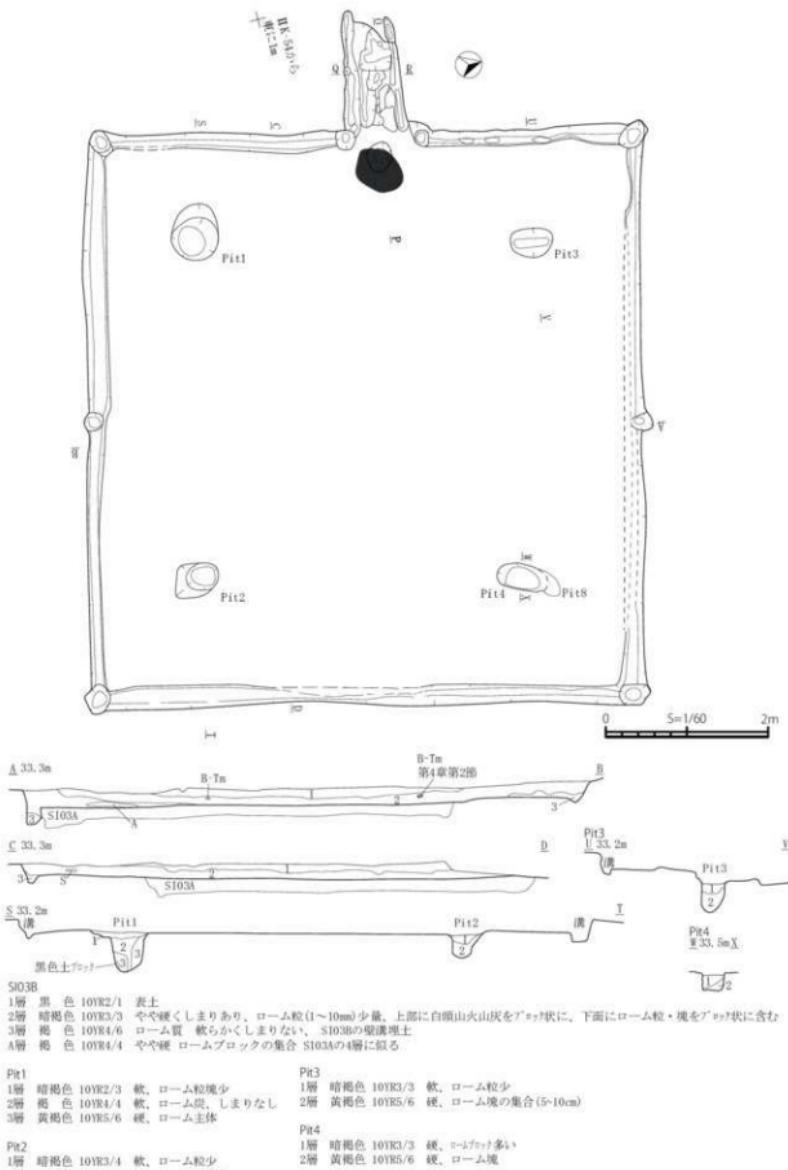


図14 第3号B竪穴住居跡-1

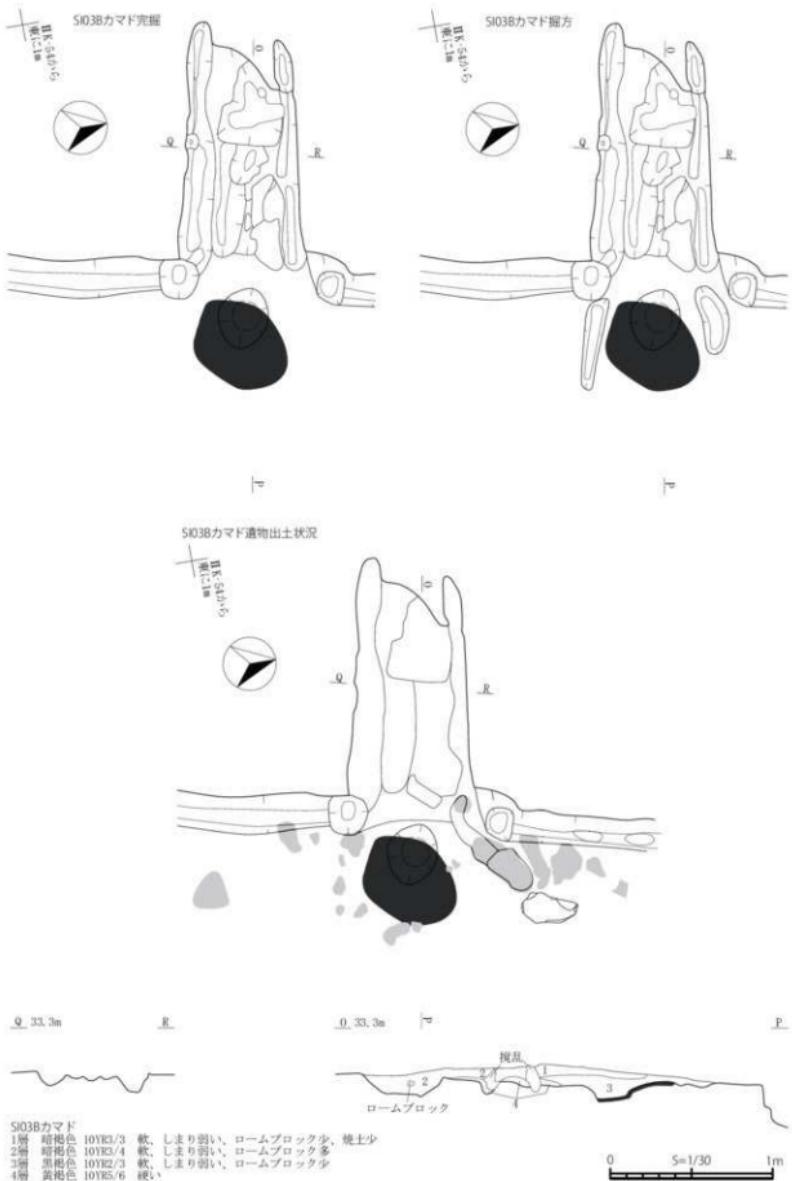


図15 第3号B竪穴住居跡－2

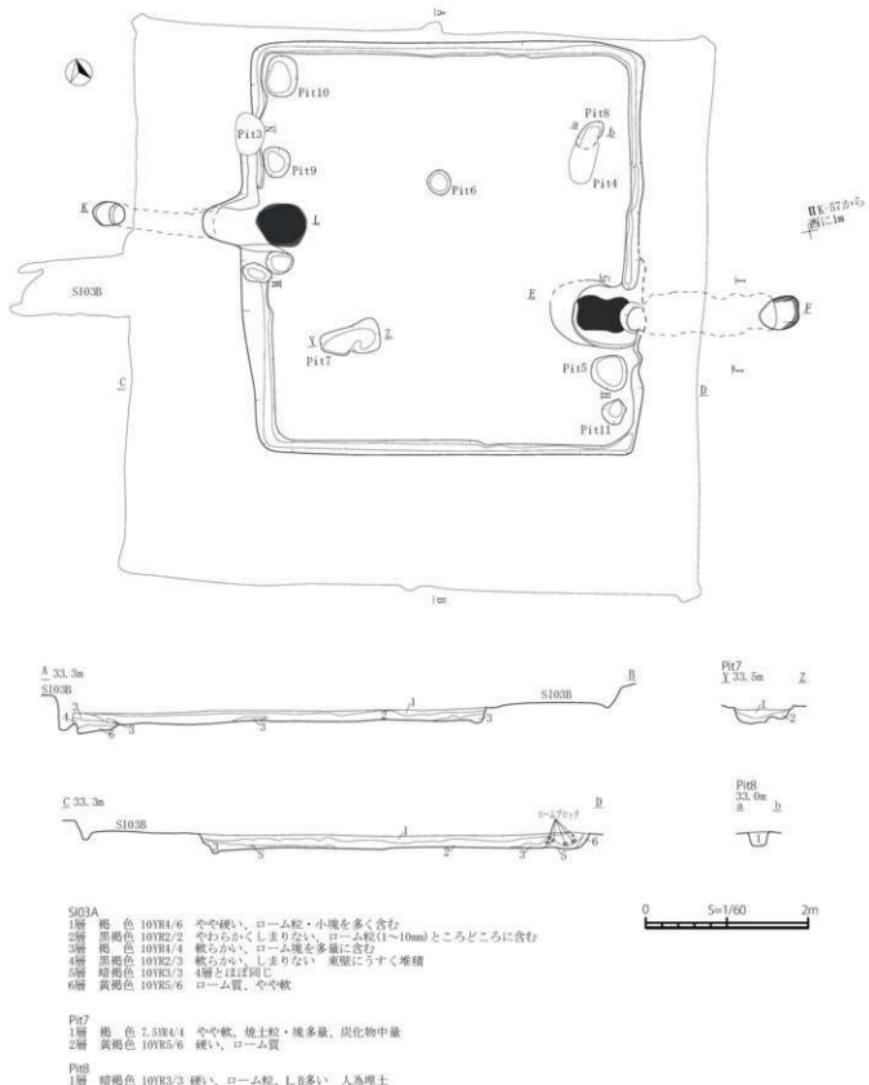


図16 第3号A竪穴住居跡-1

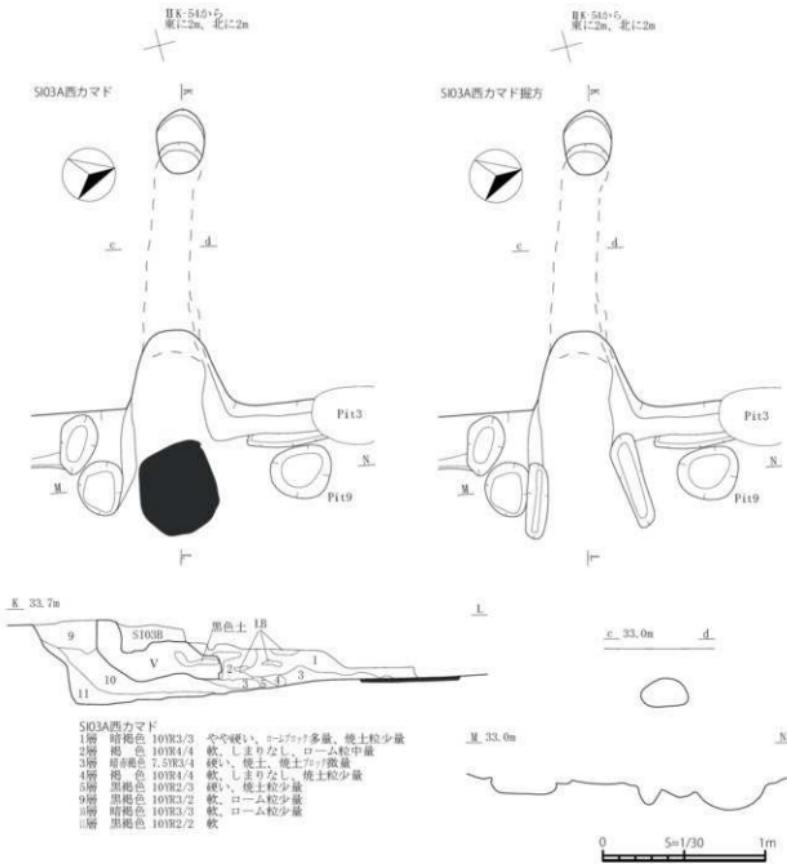


図17 第3号A竪穴住居跡-2

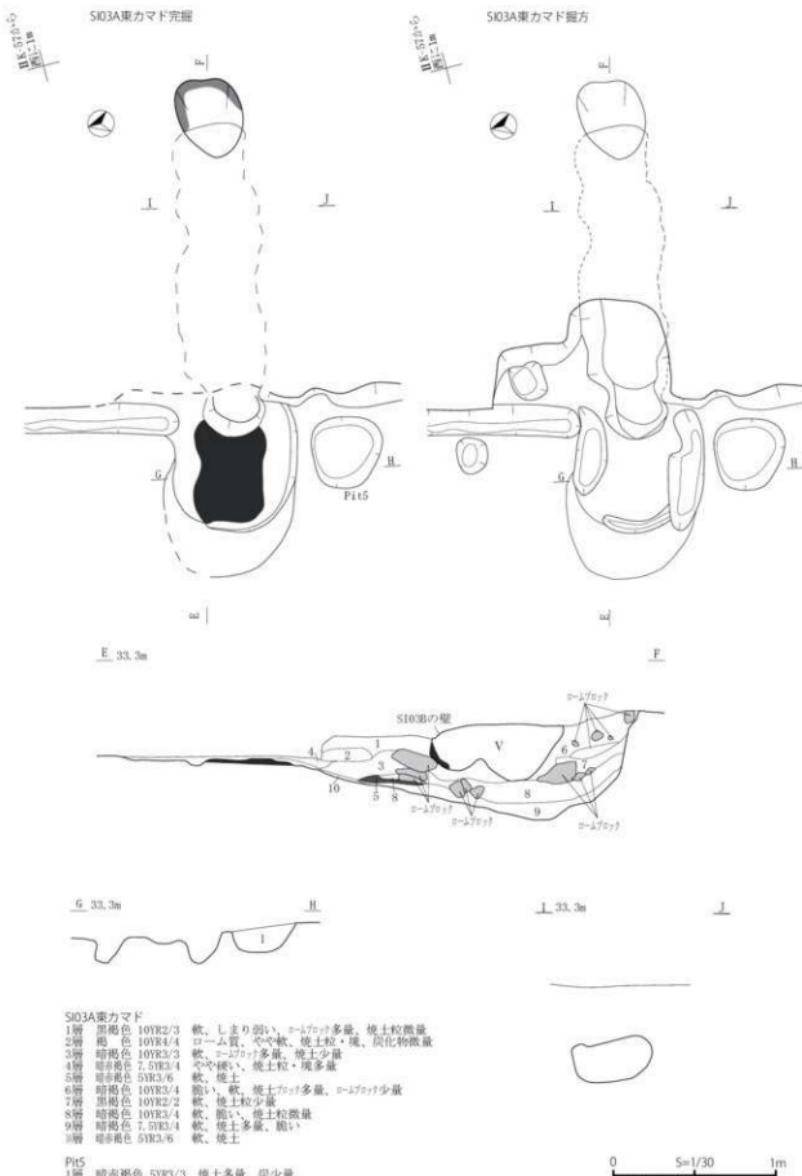


図18 第3号A竪穴住居跡-3

壁面・床面 壁高はおおむね24cmである。床面は平坦で堅い。

壁周溝 カマドおよび東壁の一部を除いた壁直下で幅最大39cm、平均15cm前後、深さは最大30cm、平均8cm前後の壁周溝を検出した。

力マド 東壁と西壁に検出した。どちらも火床面と煙道部の検出である。東壁に検出したカマド（東カマド）は壁辺の南寄り約三分の一のところにある。火床面は幅40cm、奥行き52cmで、火床面の両脇から袖の掘方と思われる浅い溝状のビットを検出した。煙道部の構造は地下式で、壁外へ向かって13°下方に徐々に傾斜しており、約1.5m離れたところの煙出孔も傾斜して掘り込まれている。掘り込みは66cmを測る。煙道部と煙出部の底面境界に段差が確認でき、両側から掘り込んだ際に生じたズレによるものと思われる。

西壁に検出したカマド（西カマド）は壁辺のほぼ中央に位置している。火床面は幅46cm、奥行き58cmで、火床面の両脇から袖石の掘方と思われる溝状の浅いビットを検出した。煙道部の構造は地下式で、煙道底面はと火床面から5°の角度で緩やかに下り、約1.4mのところに煙出孔が掘り込まれている。深さは51cmを測る。遺構検出時、煙出坑上部に被熱痕を持った板状のシルト岩が出土した。

柱穴・土坑 床面から8基のビットを検出した。いずれも15~20cmの深さで、柱穴らしくない。また、東カマドでは右側、西カマドでは東側に円形のビットを検出した。いずれも厨房施設に関するものと思われる。

出土遺物 堆積土から土師器（甕・壺）、砥石、焼成粘土塊、繩文土器が少量出土した。土師器壺には灯明具に転用されたものが1点ある。砥石は3点出土した。うち2点は小形で、弱い線条痕が見られる。また、図64-7は本遺構から出土した2片の砥石片と、第13号A堅穴住居跡および第6号土坑から出土した砥石片とが接合したものである。

小結 本調査区では中型に分類される。カマドを東西両壁に構築する例は本調査区内では唯一となる。

(畠山)

第4号堅穴住居跡 [SI04](図19~20)

位置と確認 II-E・II-F-53・54・55グリッドに位置する。文化財保護課による確認調査の際、トレンチ掘り下げ時に確認された。それ以外の周辺プランは第IV層上面で確認した。

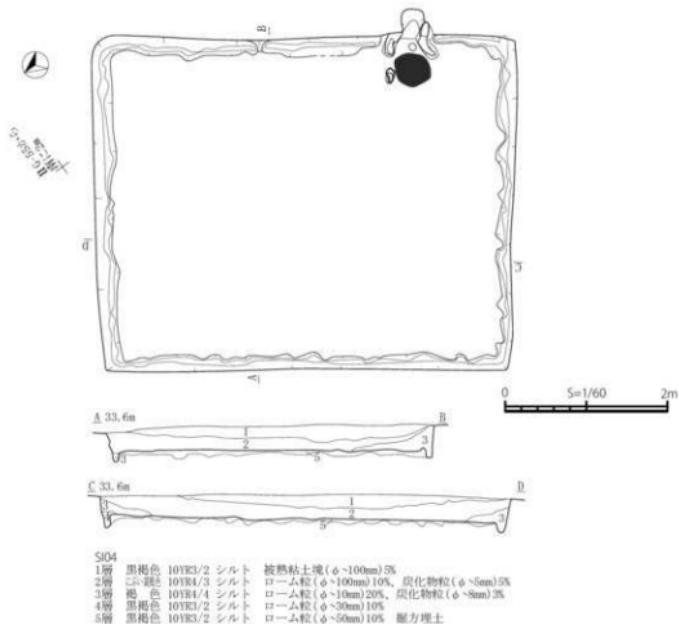
重複関係 なし。

規模・平面形 規模は長軸5.1m、短軸4.05mで、北東-南西方向に長軸を持つ長方形を呈する。床面積は17.6m²を測る。カマドは1基検出し、N-131°-Eに主軸を持つ。

堆積土 5層に分層できた。第5層は掘方埋土でロームの混入が目立つ。第4層は南西側の壁周溝部分にのみ堆積している。第3層は第4層上部とそれ以外の壁周溝及び壁際に堆積しており、第3・4層が初期堆積土と考えられる。その後、第2層の堆積で床面が一気に埋没する。ロームが多量に混入しており、人為堆積の様相を示す。その後窪地状態となった部分に第1層が流入している。

壁面・床面 南東壁は垂直に、それ以外はやや開き気味に立ち上がる。確認面までの壁高は48cmを測る。床面は掘方埋土によってほぼ平坦に整えられている。

壁周溝 カマド部分と南東壁側中央部で途切れるが、ほぼ全周するように検出した。壁側が直線的なに対し、床側は凹凸が激しい。幅は最大28cm、深さは最大60cmを測る。



遺物出土状況

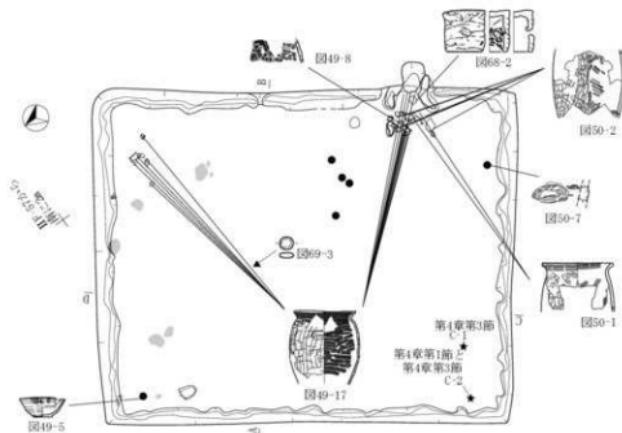


図19 第4号竪穴住居跡-1

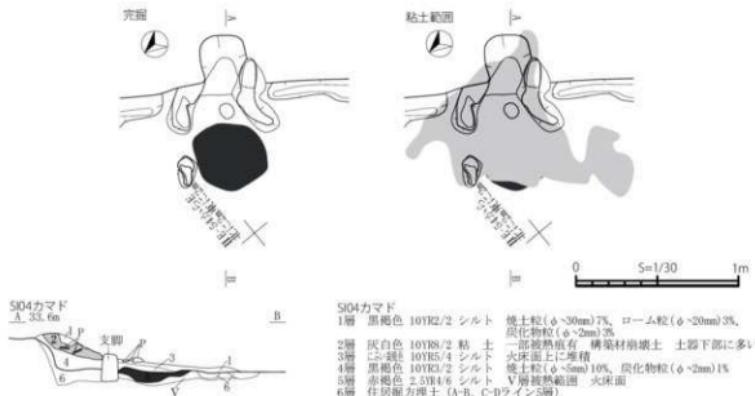


図20 第4号竪穴住跡－2

カマド 南東壁南寄りに構築している。煙道部の構造は半地下式である。上述した確認調査の際、トレンチがカマド部分に当たっており、煙道先端部は確認できなかった。残存する煙道長は29cm、幅は28cmを測る。火床面は掘方埋土が被熱しており、被熱厚は8cmを測る。火床面に接するように土製支脚(図68-2)が出土した。掘方に設置された状態であったため、最終使用時の原位置を保っていると考えられる。堆積土は6層に分層できた。第6層は床面構築に伴う掘方埋土で、その上面と同一レベルで火床面が存在し、第5層が焼け込んでいる。第4層は土製支脚と煙道間に最初に堆積した層で、焼土粒の混入が目立つ。カマド本体の崩落前に堆積したものと考えられる。第2・3層は本体の崩落物が堆積したもので、第2層下部から土器が出土していることから、機能停止から本体崩落までに時間差が存在しているものと思われる。

柱穴・土坑 竪穴住跡に伴うものは確認できなかった。

出土遺物 土器は第1層からの出土と床面周辺からの出土に分かれる。竪穴住跡北隅床面直上層から、灯明具に転用された土師器壺(図49-5)がほぼ完形で出土した。土師器甕(図49-17)は東隅床面上とカマドから出土した破片が接合している。他にカマド内からは土師器甕(図49-8、図50-1・2)が、床面から土師器甕(図49-12・13)、円形のメノウ(図65-3)が出土している。床面及び堆積土からは製塙土器(図50-4～7)が出土している。住居西側隅床面上から出土した炭化物(C-1・2)の樹種同定を行った結果、いずれもスギと同定された。また、C-2を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、 2σ で8世紀後半から9世紀後半が最も高い確率を示し、 1σ では8世紀末から9世紀前葉の確率が最も高くなかった(第4章第1節参照)。

小結 本調査区では小型に分類される。長軸と短軸の差が大きい長方形のプランで、方形が多い本調査区の中では特異な平面形を呈する。

(浅田)

第5号竪穴住居跡[SI05](図21)

位置と確認 II H-57、II I-56・57・58、II J-57に位置する。遺構確認時に第IV層上面で遺物の出土と方形プランを検出した。

重複関係 なし。

規模・平面形 規模は長軸4.76m、短軸4.47mで、南隅がやや張り出し、南西壁が僅かに湾曲する不整形面を呈する。床面積は19.1m²を測る。カマドは1基検出し、N-146°-Eに主軸を持つ。

堆積土 2層に分層できた。第2層は掘方埋土のため、住居機能停止後、第1層の堆積で一気に埋没していることになる。場所によって混入するロームの量が異なり、不均一な状況であるが、明確に分層することができなかった。このことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

壁面・床面 壁はやや開き気味に立ち上がり、壁高は36cmを測る。床面はほぼ平坦に整えられている。壁周溝 南西壁の南寄りで長さ69cm、最大幅27cm、深さ10cmの壁周溝を検出した。

カマド 東南壁南寄りで検出した。煙道部の構造は半地下式で、火床面から煙出部に向かって、12°上方に傾斜する。煙道部長は121cmを測る。煙出部は煙道が登り切った所から、柱穴状に約15cm掘り下げている。袖部は両側とも地山を僅かに掘り残した上に粘土を貼り、内側に板状のシルト岩を立てている。礫を設置する掘方は確認できなかった。遺存状態は良好ではなく、左袖はほぼ失われた状況であった。このため、住居機能停止後、意図的に壊された可能性が考えられる。堆積土は6層に分層できた。第5・6層は火床面で、第V層の被熱範囲になる。第4層は混入物が多く、煙出部に初期堆積した層と考えられる。対して第1～3層は焼土粒や炭化物粒を多く含むことから、構造物の解体に伴う堆積と考えられる。火床面は中央がより強い被熱を受けており、硬化している。規模は長軸66cm、短軸63cmを測る。

柱穴・土坑 2基検出した。2基とも断面方形で壁は垂直に立ち上がり、しっかりととした掘り込みである。Pit 1北西壁側や西寄り、Pit 2はカマド左側に位置している。対とするには中心線から外れており歪みが生じているが、現段階では主柱穴として捉えておきたい。

出土遺物 土器は堆積土からの出土が大半を占めるが、カマドを中心図示可能な土師器が出土した(図50-9・11)。破片での出土であること、機能停止後カマド自体が解体され、その際の堆積から出土していることから、使用に伴うものではなく、カマド廃棄後に廃棄されたものと推測する。

小結 本調査区では小型に分類される。住居の機能停止後カマドの解体を経て竪穴全体が埋め戻されている。

(浅田)

第6号竪穴住居跡

位置と確認 II J・II K-54・55・56、II L-54 グリッドに位置している。

重複関係 拡張が見られた住居跡で、拡張前の住居をB(SI06B)、拡張後の住居をA(SI06A)として報告する。

第6号A竪穴住居跡[SI06A](図22～23)

規模・平面形 規模は長軸5.90m、短軸5.54mのほぼ方形を呈する。床面積は28.1m²を測る。カマド

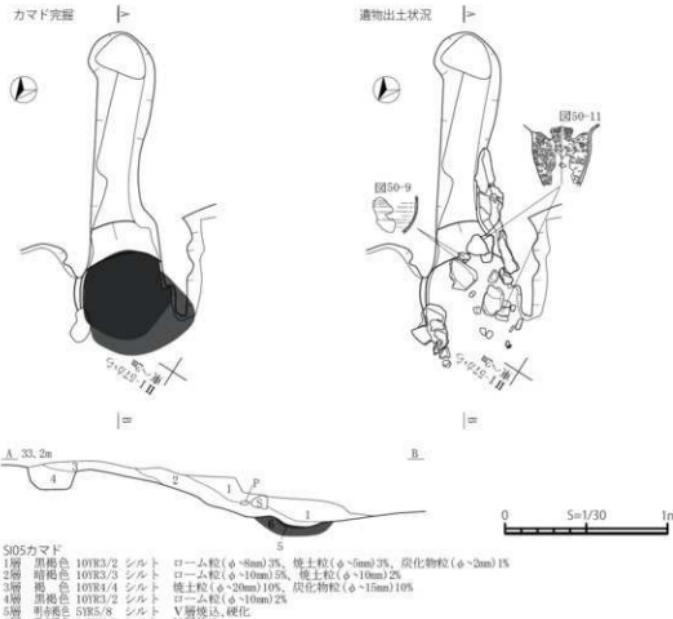
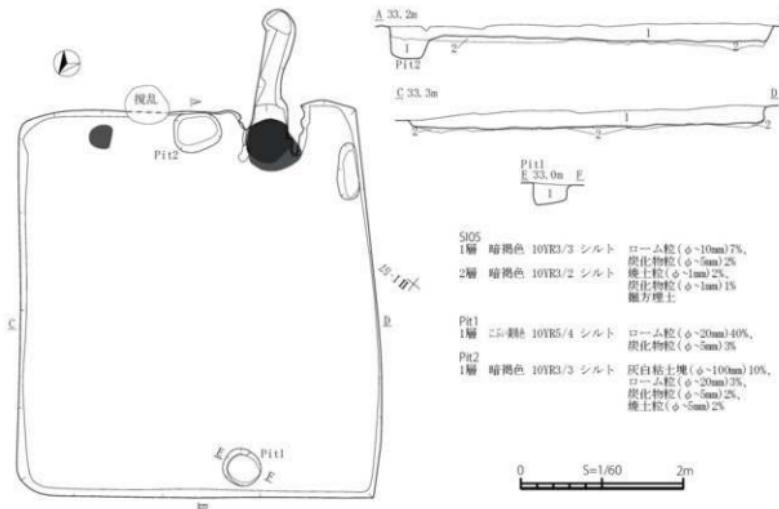


図21 第5号穴住居跡

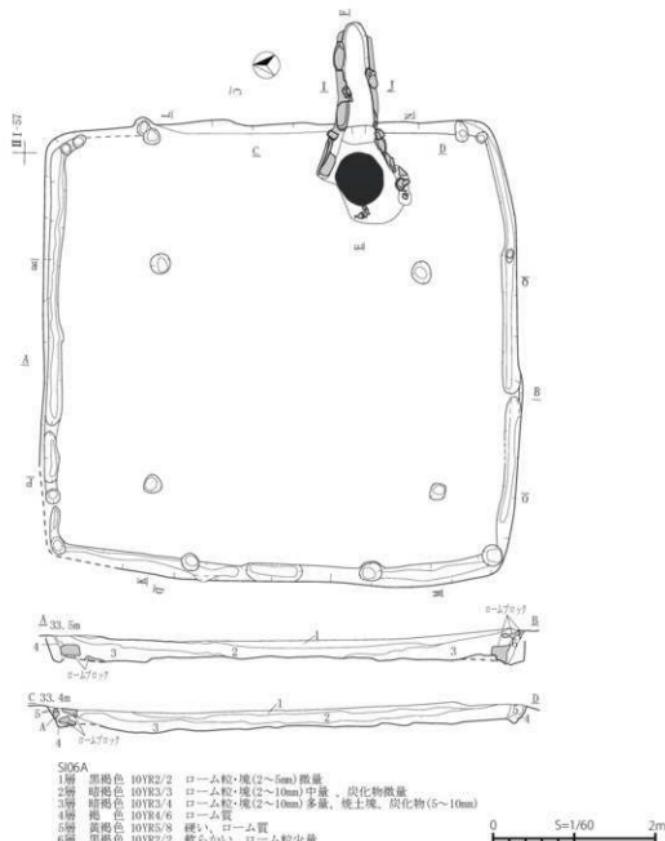


図22 第6号A竪穴住居跡-1

は1基検出し、N-88°-Eに主軸を持つ。

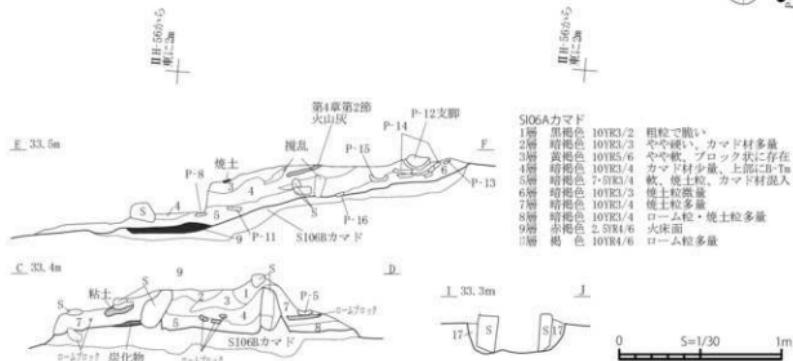
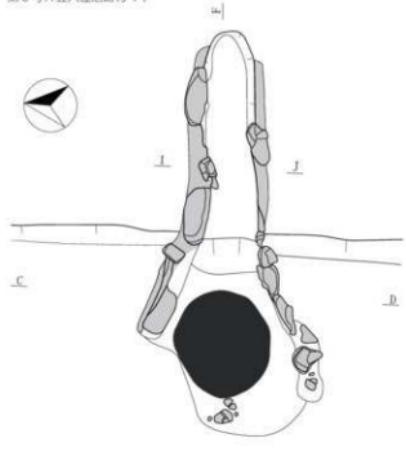
堆積土 6層に分層できた。大半はシルト質の暗褐色土で、壁際にローム質の褐色土、黄褐色土が見られる。第1・2層は窪地状態になった所に自然流入したものと考えられ、後述する出土遺物が第1層から多く出土していることもそれを裏付けている。

壁面・床面 壁高は10~20cmである。拡張前の竪穴住居跡より6~10cm高い位置に床面を構築している。

壁周溝 北・西・南壁で検出した。壁周溝の幅15~20cm、深さ5~10cmである。

カマド 東壁の南寄り約三分の一のところで検出した。カマド本体はシルト岩を主体に粘土を用いて

第6号A竪穴住居跡カマド



第6号A竪穴住居跡カマド遺物出土状況

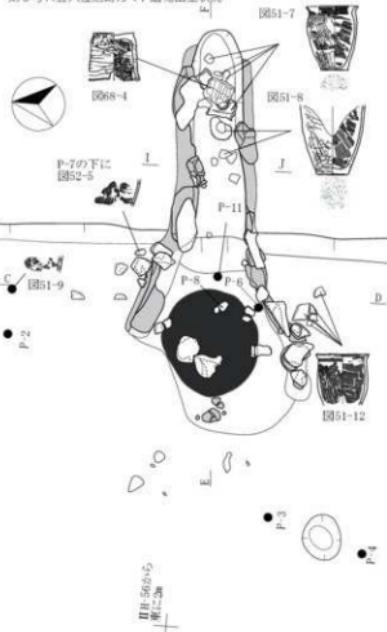


図23 第6号A竪穴住居跡－2

構築されたものと思われる。火床面は幅60cm、奥行き65cmの楕円形で、これを囲むように袖が見られたが、左袖は半分程度しか確認できなかった。煙道部の構造は半地下式で、煙道底面は壁外へ向かつて8°上方に緩やかに傾斜している。煙道側壁にはシルト岩が見られる部分があり、これと粘土とで構築されたことがわかる。壁から煙道端部まで1.19mで、端部には煙出孔が設けられていたであろう。この付近から土製支脚(図68-4)と土師器甕(図51-7・8)が折り重なるように出土した。カマドの機能停止に伴って意図的に置かれたものかもしれない。これらを覆うように第5層が堆積したあと、さらにその上層にあたる第4層上部で火山灰を確認している。分析の結果、白頭山-苦小牧火山灰と判明した(第4章第2節参照)。

柱穴・土坑 床面から4基、壁際および壁周溝から11基のピットを検出した。主柱穴と壁周溝および四隅から検出した壁柱穴とで構成される柱穴配置と思われる。

出土遺物 土器は大半が堆積土出土で、その中でも第1層からの出土に偏っている。このため埋没過程において窪地状態となった所へ、周辺からの廃棄行為が存在したことを見ている。土師器甕、須恵器壺、擦文土器、製塙土器、繩文土器、炉壁、土製支脚が出土した。須恵器壺は2点出土し、うち1点は転用窯の可能性がある。擦文土器はカマド周辺から出土し(図52-5)、第2号竪穴住居跡から出土した破片と接合したものもある。また、カマド右袖脇(図51-12)から土師器甕が、床直から製塙土器(図51-9)が出土している。

小結 本調査区では中型に分類される。拡張の結果、床面積が7m²増加した。カマドは拡張前と同じ場所に設置している。カマドの検出状況からカマド破壊が行われた可能性があり、煙道部煙出孔付近における土製支脚と土師器片の出土はそれに伴って置かれた可能性が高い。また、カマド周辺から出土した擦文土器は第2号竪穴住居跡のものと接合関係にあり、カマドの主軸方位もほぼ同じである。このことから、本住居と第2号竪穴住居跡は同時存在の可能性が高い。

(畠山)

第6号B竪穴住居跡 [SI06B](図24~25)

規模・平面形 規模は長軸5.31m、短軸4.81mのほぼ方形を呈する。床面積は21.1m²を測る。カマドは第6号A竪穴住居跡カマドと重複して1基検出し、主軸方向はN-88°-Wである。

堆積土 2層に分層できた。大半はローム粒を含む黒褐色土であり、部分的に褐色土が床面を覆っている。第6号A竪穴住居跡構築時に埋め戻されたものと思われる。

壁面・床面 壁高はおおむね20~30cmである。床面は平坦で堅い。

壁周溝 北・西・南壁で検出した。幅15~20cm、深さ5~20cmで、溝底面には凹凸がある。

カマド 第6号A竪穴住居跡のカマドと同一箇所に構築されており、5~10cmほど下位に位置する。ほぼ同規模である。火床面は幅55cm、奥行き42cmで、袖に相当する位置から浅い小ピットを検出した。煙道部も重ねており、構造は第6号A竪穴住居跡カマドと変わらない。火床面は地山が被熱しており、長軸55cm、短軸43cm、被熱厚5cmを測る。

柱穴・土坑 新たに床面および壁周溝から11基のピットを検出したが、柱穴と思われるものはない。本遺構の主柱穴は、すでに第6号A竪穴住居跡で検出されているPit 1~4と思われる。

炉跡 住居の中央付近で、不整三角形状に床面が被熱した痕跡を確認した。被熱部分の大きさは長軸

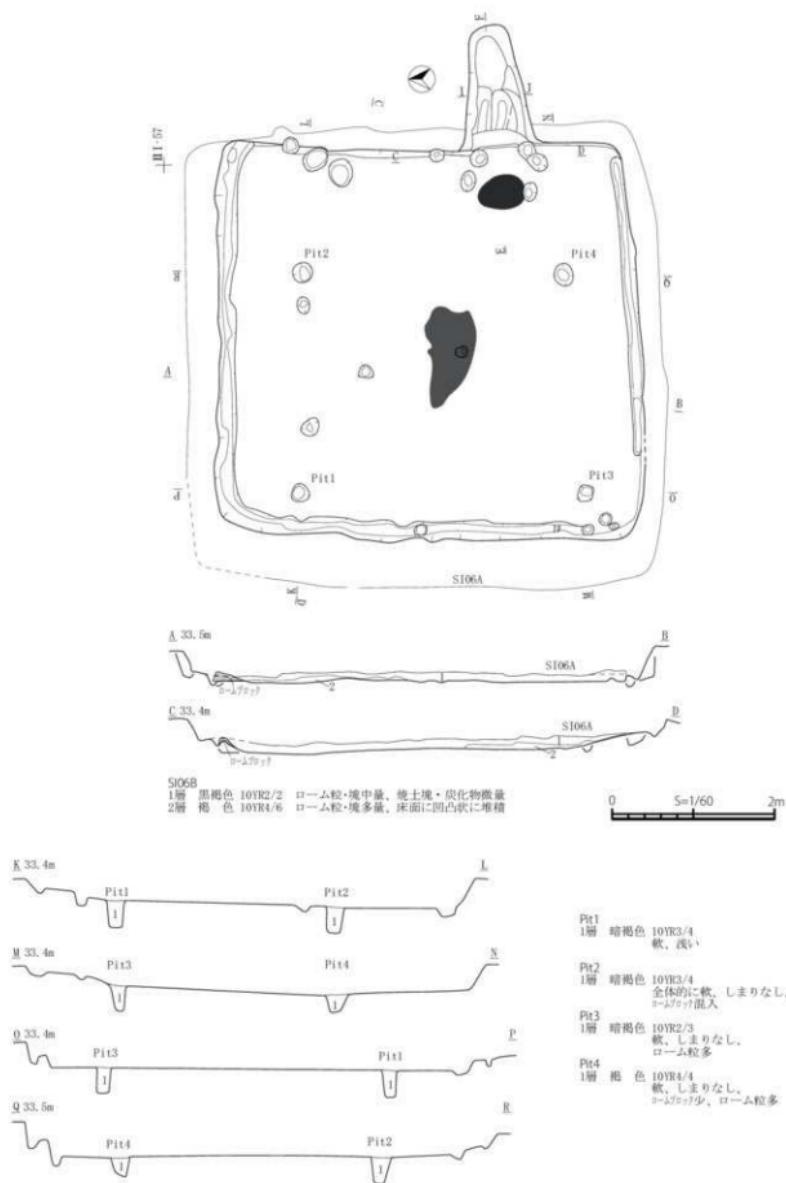


図24 第6号B竪穴住居跡-1

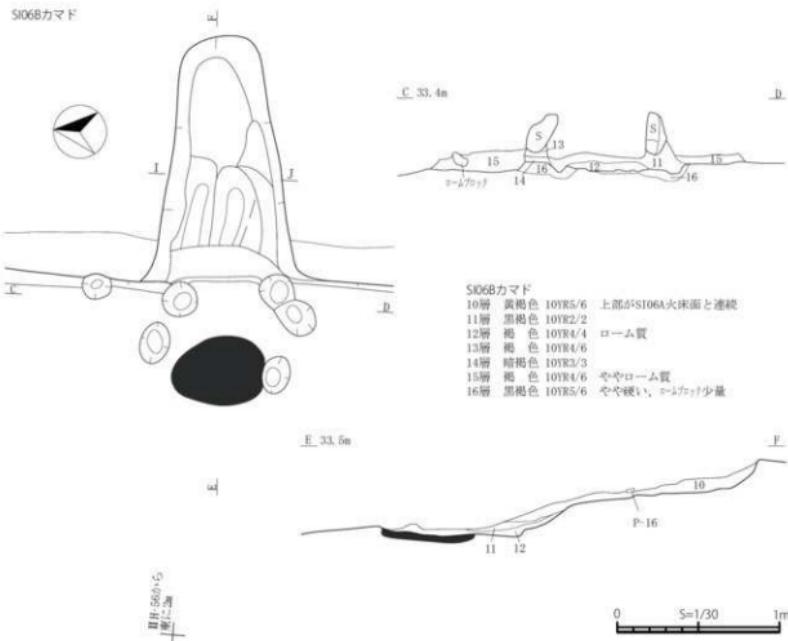


図25 第6号B竪穴住居跡－2

120cm、短軸50cm前後である。やや広い範囲が被熱しているが、炉跡と考えられる。

出土遺物 土師器甕と縄文土器少量が出土した。

小結 一边が5m前後の住居で、本調査区では中型に分類される。半地下式の構造の煙道をもつカマドを東壁に設けている。袖下には浅いピットが確認できたが、これは袖石を埋めるための掘方と思われる。また、中央付近には炉と思われる痕跡を確認した。

(島山)

第7号竪穴住居跡[SI07](図26)

位置と確認 II C-54・55グリッドに位置する。大半が調査区外に位置しているため、全体像は不明である。I層除去時、須恵器甕が纏まって出土したことから、下部に遺構の存在が想定された。遺構検出時に須恵器出土地点周辺の精査を行ったところ、方形プランを確認した。

重複関係 調査区内ではない。

規模・平面形 南半が調査区外に存在するため詳細は不明だが、方形を呈するものと思われる。北西壁の長さが3.25m、北東壁の長さが調査区内で2.88mを測る。推定床面積は9.3m²を測る。

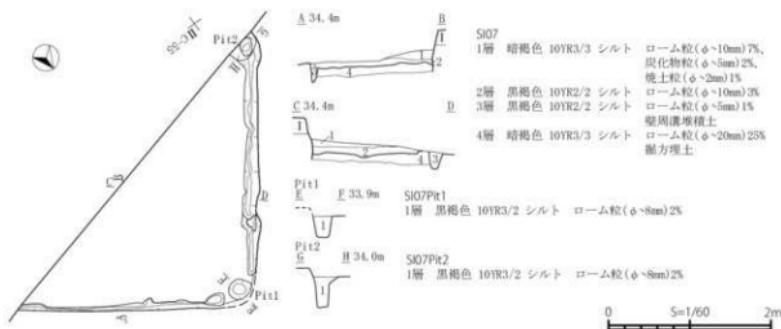


図26 第7号竪穴住居跡

堆積土 4層に分層できた。第4層は掘方埋土で、ロームを多量に含んでいる。第3層は壁周溝内に堆積している。第2層は床面を全て覆い、第1層が更にその上を覆っている。

壁面・床面 遺構確認時に北西壁は確認できず、北東壁で僅かに立ち上がりを確認できた。やや開き気味に立ち上がるるものと推測する。床面はやや凹凸が目立つ。

壁周溝 柱穴部分を除き確認できた。幅は最大27cm、深さは最大28cmを測る。

カマド 確認できなかった。調査区外に存在するものと思われる。

柱穴・土坑 住居北隅・西隅で検出した。平面形はいずれも不整円形で、深さはPit 1が28cm・Pit 2が39cmを測る。住居規模から想定し、これらが主柱穴になるものと考える。

出土遺物 土器は確認面からの出土が最も多く、次いで第1層からとなっている。埋没が進行して窪地状態となった際に、周辺からの廃棄行為が存在したものと思われる。図示できたものとして、土師器では高台壺(図52-10)、須恵器では甕(図60-7)がある。

小結 本調査区では極小型に分類される。壁が直線的に整えられ、規格性が高い。

(浅田)

第8号竪穴住居跡[SI08](図27)

位置と確認 II K-58・59 グリッドに位置する。調査区東側の斜面地で唯一検出した遺構となる。遺構確認時、本遺構の周間に存在する風倒木痕と共に検出した。

重複関係 遺構との重複は無いが、周囲の風倒木痕と重複し、全て本遺構が新しい。

規模・平面形 長軸2.46m、短軸2.17mの隅丸方形を呈する。東側の斜面に面した部分は削平を受けしており、東隅は欠落している。推定床面積は4.2m²を測る。カマドは1基検出したが、煙道部が検出できなかったため、主軸は不明である。

堆積土 3層に分層できた。第3層は東側から南側の壁際にのみ確認できたため、住居機能停止後の初期堆積に伴うものであろう。第2層は床面全面を薄く覆う。南側にのみ被熱粘土ブロックやシルト岩が堆積していることから、本遺構南側から窪地状態にあった本遺構への廃棄行為が存在したことを

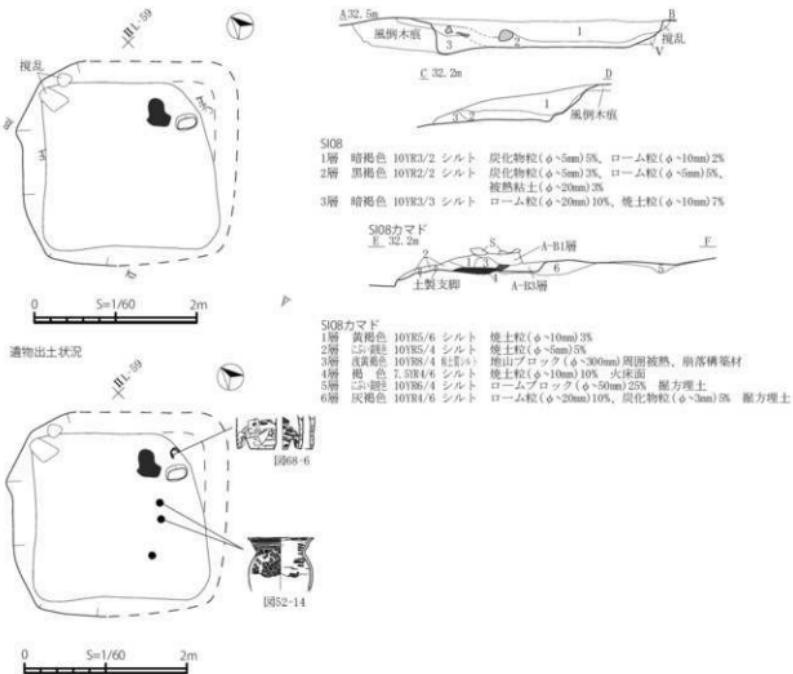


図27 第8号竪穴住居跡

示唆している。第1層は残った窪地を埋没させるが、斜面地であるため斜面上方からの流入土である可能性が高い。

壁面・床面 確認できた壁面は西側は大きく傾斜している。南側は風倒木痕と切り合っているが、断面観察の結果、垂直に立ち上がっている。

壁周溝 検出できなかった。

カマド 住居東隅の床面上で火床面を確認した。また、煙道部は削平により確認することができなかつたが、土製支脚の脚部が埋設された状態で出土した(図68-6)。この状況を基に、火床面と土製支脚を結んだ方向で煙道部を構築したと仮定した場合、住居東隅に煙道を設けることになる。更にこの方角は斜面下方にあたるため、壁面には削平が無かったとしてもクロボク土しか存在しない。このため煙道が存在した場合は、地下式の構造を構築するのは非常に困難であったと思われる。右袖部に被熱カマドに関する堆積土は4層に分層できた。第4層は火床面でV層が被熱している。火床面の上部は、構築材である被熱底顕著なシルト岩が、破碎した状態で覆っている。第3層は南東壁側に偏って堆積している。第1・2層はローム主体で焼土粒が混入する。なお第5・6層は住居掘方埋土となる。

柱穴・土坑 検出できなかった。

出土遺物 土器は第2層からの出土が最も多くなっている。このため被熱シルト岩と同様、窪地状態のまま埋没が進行した時点で、南側からの廃棄行為が存在したことを示している。図示できたものとしては非クロロ使用の土師器壺(図52-11・12)、擦文土器甕(図52-14)等がある。

小結 本調査区では最も小さい竪穴住居跡で、極小型に分類される。立地や構造的な比較を行っても、本調査区では例を見ないものである。出土遺物も様相が異なり、調査区東側の対岸に位置する金沢街道沢(1)遺跡との関連が想定される。

(浅田)

第9号竪穴住居跡[SI09](図28)

位置と確認 II H・II I-58・59グリッドに位置する。平坦面と調査区西側の斜面の変化点に近く、緩やかに東側に傾斜する地形となっている。全体的に耕作による削平の影響を大きく受けしており、東側は失われている。

重複関係 確認できなかった。

規模・平面形 不整隔丸方形を呈するものと思われ、確認できた範囲で、長軸3.13m、短軸2.58mを測る。南隅は張り出すように大きく丸みを帯びている。一方北西壁側は直線的に張り出している。推定床面積は6.9m²を測る。カマドは1基検出し、N-119°-Wに主軸を持つ。

堆積土 3層に分層できた。第3層は南隅の張り出し部分にのみ堆積しており、第2層は住居中央付近に薄く堆積している。残りの部分は第1層で覆われている。

壁面・床面 削平の影響で壁面はほとんど把握することができなかつた。確認部分では開き気味に立ち上がっている。床面にはやや凹凸が見られる。

壁周溝 確認できなかつた。

カマド 煙道部の構造は半地下式で、火床面から14°上方に傾斜している。煙道長は72cmと短く、煙出部は確認できない。袖部から煙道部にかけ、側面に板状のシルト岩を立てているが、掘方は確認できなかつた。シルト岩は強い被熱痕が観察でき、袖部は粘土で覆われている部分も存在するが、大半が露出していたと想定される。袖部から焚口部の構造は失われており詳細は不明である。堆積土は3層に分層できた。第3層は火床面の被熱範囲で、第VI層が非常に強く焼け込んでいる。第2層は焼土が母材になっていることから、カマド構築材の崩落に伴う堆積と考える。第2層上面から第1層にかけて土器が出土している。火床面は袖部に囲まれた場所に位置し、長軸72cm、短軸61cm、被熱厚4cmを測る。

柱穴・土坑 Pit 1・3はカマド左脇と住居南隅に位置し、規模や形態から住居内土坑と判断した。Pit 2は柱穴と思われるが、対になる柱穴は検出できなかつた。なお、Pit 3東側で焼土を検出し、精査したところ、壁面を抉り込む形となつた。柱穴の可能性も考え図化したが、形が不定形のため、現段階では掘方に伴うものと考えておく。

出土遺物 カマド周辺を中心とし土器・土製品が出土している。カマドからは土師器甕(図52-15、図53-2～5)、土師器壺(図55-6)が出土している。カマド脇のPit 1からは土師器甕(図53-1)や土製品(図68-11)が出土している。図52-15、図53-4はカマド堆積土とPit 1堆積土で接合している。このこと

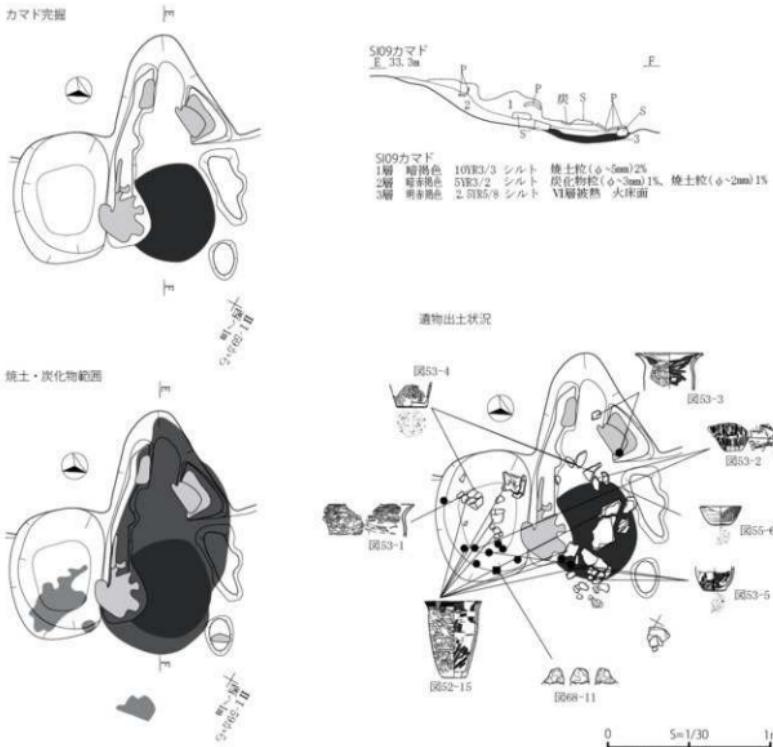
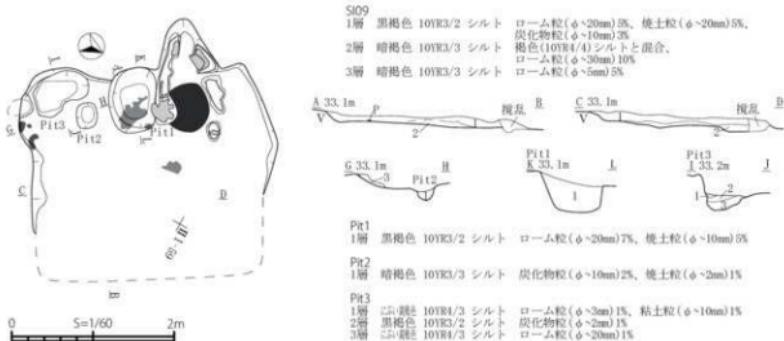


図28 第9号竪穴住居跡

からカマド周辺の遺物は住居機能停止後、Pitとカマドの埋没過程で廃棄されたものと思われる。また製塙土器の胴部破片が第5号性格不明遺構出土製塙土器と接合している(図53-7)。

小結 小規模の竪穴住居跡で、構造的に本調査区内において類似するものが見られない。本調査区では極小型に分類される。

(浅田)

第10号竪穴住居跡[SI10](図29)

位置と確認 II F-57・58、II G-58 グリッドに位置する。第IV層上面で行った遺構確認時、炭化物の集中範囲が東西方向に伸びているのを確認した。またその北東側で焼けたシルト岩の集中を確認し、竪穴住居跡と判断した。しかし西側と北側のプランが明瞭では無かったことから、掘り下げを継続した結果、プランが消失する結果となった。この段階で、掘り込みの非常に少ない遺構であることが判明した。

重複関係 明確に重複する遺構は無い。第5号性格不明遺構が本遺構の北側に位置しており、本遺構の掘り込みが明瞭でないため、関連を確認することができなかった。このため別遺構として取り扱つたが、本遺構に伴う可能性もある。

規模・平面形 北側を中心にプランを把握することができなかつたため、詳細は不明だが、南側の壁周溝が直線的であること、北側の焼土堆積が本遺構に伴うと判断しているため、方形を呈するものと推測する。推定床面積は 13.9m^2 を測る。カマドは1基検出したが、煙道部を検出できなかつたため、主軸を確認できなかつた。

堆積土 2層に分層できた。第2層が床面を薄く覆っている。第1層は焼土との混合層で、出土炭化材との関連が指摘できる。

壁面・床面 壁は検出できなかつた。床面は西側にやや下る傾斜となつており、カマドから離れる程凹凸が見られる。

壁周溝 南側とカマド以南の東側にのみ検出した。南側は 3.7m の長さを測る。いずれもPit 1から伸びる方向となつてゐる。幅は最大 31cm 、深さは最大 22cm を測る。

カマド 確認時、被熱シルト岩の集中範囲として把握できた部分である。当初、壁周溝の位置関係から、東壁に構築したカマドと判断した。東壁周溝の延長線上に火床面が存在する。煙道部は確認できなかつた。シルト岩の分布範囲が火床面を中心に円形に広がつてゐたが、構造復元につながる情報は得られなかつた。堆積土は4層に分層できた。第4層は火床面で第IV層が被熱した部分にあたる。第2・3層は被熱シルト岩片が混在する層である。構造物の崩落に伴う堆積と捉えることも可能だが、シルト岩が細かく砕けているものが含まれているため、意図的に構造物が破碎された可能性も指摘できる。第1層は自然堆積層と認識した。

柱穴・土坑 4基検出した。いずれもカマドより南側に位置している。Pit 1は壁周溝の軸線上に位置している。Pit 2は壁周溝より外側に位置することになるが、Pit 3・4と比較した際、壁周溝と平行する位置にあたることから本遺構に含めた。Pit 3・4は重複しており、Pit 3が新しい。

出土遺物 カマド及び堆積土から土師器甕、擦文土器、製塙土器、土製支脚が出土している。カマドからは図53-8・9、図54-1～3・6・8・13、図68-3 土製支脚は壁周溝の脇から出土しており、廃

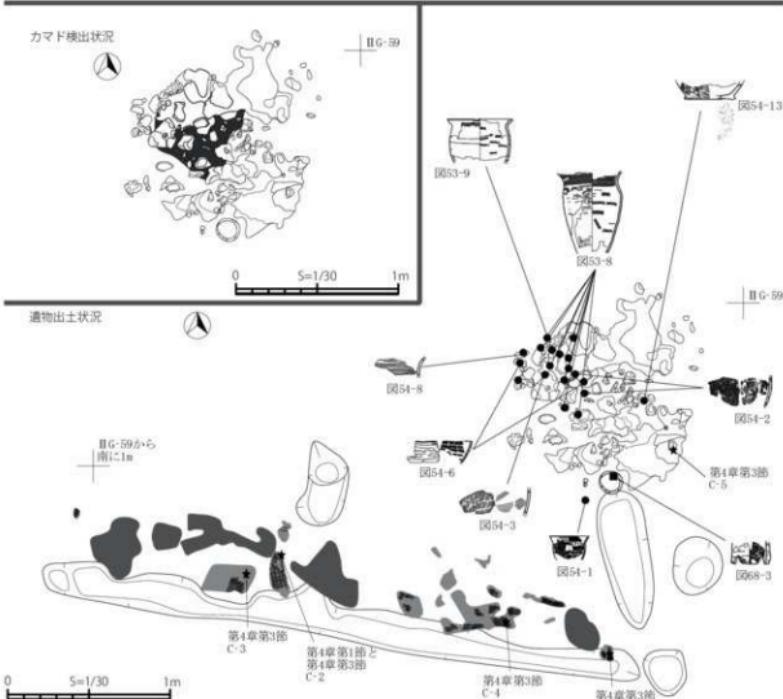
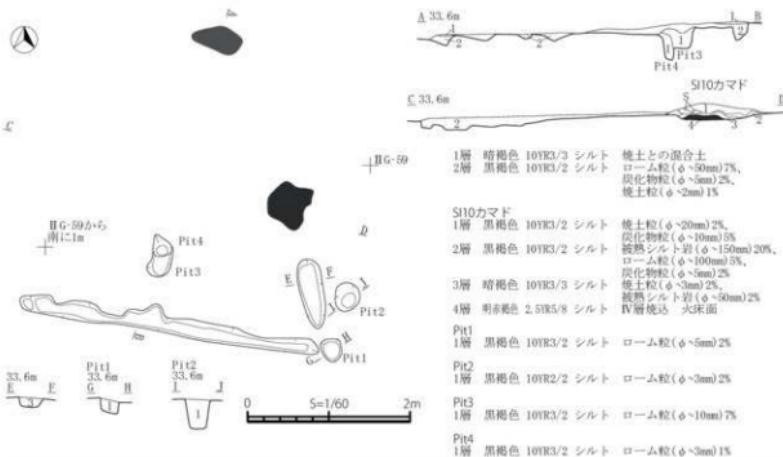


図29 第10号竪穴住居跡

棄時に原位置を失っていると考えられる。南壁周溝沿いから出土した炭化材は、第2層中にはほぼ同一レベルで出土しており、本遺構の機能停止後、一定の時間を経て焼け落ちたものと推測する。構造が明確になるような遺存状況のものは無く、細かい単位に崩れてしまっていたため詳細は不明である。現段階では出土位置が壁周溝に沿っていることや、柱材のようなものが確認できず、板状の薄いものが多く存在していることから、壁周溝に立てられた壁材が片付けなどで焼かれた際に内側へ倒壊した可能性を挙げておきたい。遺存状況の比較的良好な5点の炭化物(C-1~5)について樹種同定を行った結果、C-1はサクランボ属、C-2はクリ、C-3・4はスギ、C-5は広葉樹と同定された(第4章第3節参照)。またC-2を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、 2σ で7世紀末から9世紀後葉の値を示しており、 1σ では8世紀末から9世紀初頭の確率が最も高くなかった(第4章第1節参照)。小結 挖り込みが非常に少なく、平地式に近い構造など、本調査区の中でも類例の無い特異な遺構となっている。床面積の詳細な計測は困難であるが、本調査区では小型に分類される面積に収まるとしている。周辺遺跡で似た構造を持つものとして、鯨ヶ沢町外馬屋前田(1)遺跡(県教委1998)の第1号工房跡とした遺構が挙げられる。カマドは浅い掘り込みの外側に位置し、火床面側面を取り囲むように白色粘土や黄褐色土で土手が構築されている。周辺からは鉄生産関連遺物が出土している点は本遺跡と異なる点である。

(浅田)

第12号A堅穴住居跡[S12A](図30)

位置と確認 II D・II E-58・59・60グリッドに位置する。南側は調査区外に位置しているため詳細は不明である。遺構確認時、第13号A・第14号A堅穴住居跡のプランと共に第IV層上面で検出した。

重複関係 第12号B・C堅穴住居跡、第13号A堅穴住居跡、第14号A堅穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

規模・平面形 長軸6.83m、短軸6.79mの方形を呈するものと思われる。床面積は42.8m²を測る。

堆積土 3層に分層できた。第3層は西壁側にのみ確認できた。第2層は床面全面と壁周溝を埋め、第1層が窪地状態の中央部に堆積している。いずれも自然流入によるものと思われる。

壁面・床面 壁面は上部がやや開き気味に立ち上がる。壁高は24cmを測る。床面はほぼ平坦であった。第12号B堅穴住居跡と重複する部分は、構築時に埋め戻した土が踏み固められ硬化しており、貼床の様相を呈する。

壁周溝 確認範囲全面で確認できた。最大幅24cm、深さ最大63cmを測る。

カマド 確認できなかった。調査区外に存在するものと思われる。

柱穴・土坑 6基検出した。Pit 2・4・5が主柱穴と考えられる。Pit 2は掘方を持つ。Pit 1は西隅に位置するが、他の住居隅には対応する柱穴が見当たらない。

出土遺物 土器は第2層からの出土が最も多く、次いで床面からとなっている。床面から出土したのは土師器甕(図55-6・7・12・14・15)、土師器杯(図55-8)がある。土師器壺(図56-3)は第13号A堅穴住居跡第1層と遺構間接合している。

小結 本調査区では特大型に分類される。重複する堅穴住居跡の中では最も新しい。

(浅田)

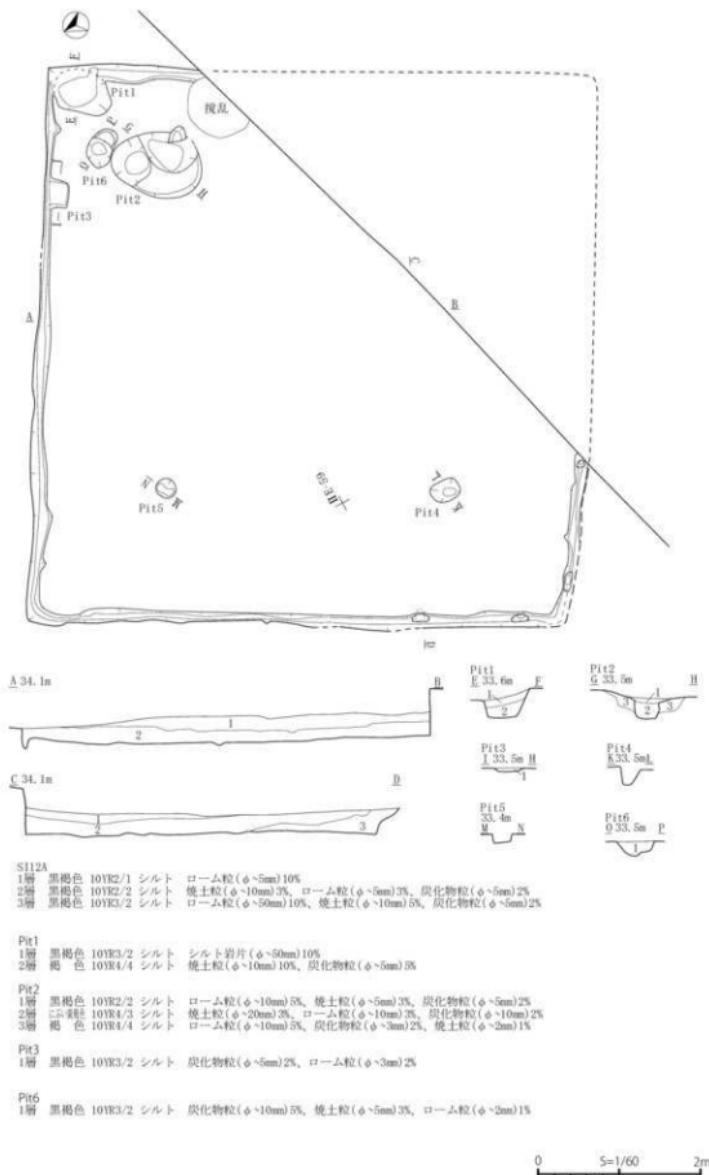


図30 第12号A竪穴住居跡

第12号B堅穴住居跡[SI12B](図31)

位置と確認 II D-58・59・60、II E-59・60 グリッドに位置する。南側は調査区外に位置しているため不明である。第12号A堅穴住居跡を床面まで掘り下げた際に、方形のプランを確認した。このため一部先行して掘り下げ、本遺構の存在を確認した。

重複関係 第12号C堅穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。また第12号A堅穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

規模・平面形 長軸4.15m、短軸3.74mの方形を呈するものと思われる。推定床面積は14.7m²を測る。

堆積土 1層のみ確認した。ローム主体の混合土で、第12号A堅穴住居跡構築時に一気に埋め戻され、貼床として機能している。

壁面・床面 壁は第12号A堅穴住居跡により壊されており不明である。床面はほぼ平坦である。

壁周溝 確認可能な北東壁側と北西壁側で確認できた。ほぼ一定の幅と深さで構築されており、幅は最大21cm、深さは最大28cmを測る。一方南東壁側と南西壁側では確認できなかった。

カマド 検出できなかった。調査区外に存在するものと思われる。

柱穴・土坑 住居北隅に柱穴状の張り出しが存在するが、壁周溝と同一の掘り込みで、明確に柱穴と認定できなかった。西隅では張り出しも確認できなかった。

出土遺物 土器は堆積土第1層から最も多く出土した。第12号A堅穴住居跡構築時に混入したものと思われる。

小結 第12号堅穴住居跡で行われた、最初の拡張に伴う構築となる。本調査区では小型に分類される。

(浅田)

第12号C堅穴住居跡[SI12C](図32)

位置と確認 II D-59・60、II E-59グリッドに位置する。南側は調査区外に位置しているため不明である。第12号B堅穴住居跡完掘後、床面に方形のプランを検出した。当初は第12号B堅穴住居跡の掘方と考えていたが、堆積土を掘り下げた際に、底面から被熱範囲を検出した。また掘方とするには底面が丁寧な掘り込みであったことから、更に古い堅穴住居跡として認定した。

重複関係 第12号B堅穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

規模・平面形 調査区内では長軸3.30m、短軸2.79mを確認した。隅丸方形を呈するものと思われる。推定床面積は7.1 m²を測る。

堆積土 1層のみ確認した。ローム主体で、第12号B堅穴住居跡を構築する際に埋め戻され、貼床として機能していたと考えられる。

壁面・床面 壁は第12号B堅穴住居跡に壊され失われている。床面はほぼ平坦である。

壁周溝 確認できなかった。

カマド 確認できなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴・土坑 確認できなかった。

炉跡 堅穴住居跡の根拠となったもので、住居中央やや東寄りから床面の被熱痕を検出した。確認範囲では長軸48cm、短軸44cmを測る。南側は調査区外に伸びている。

出土遺物 出土しなかった。

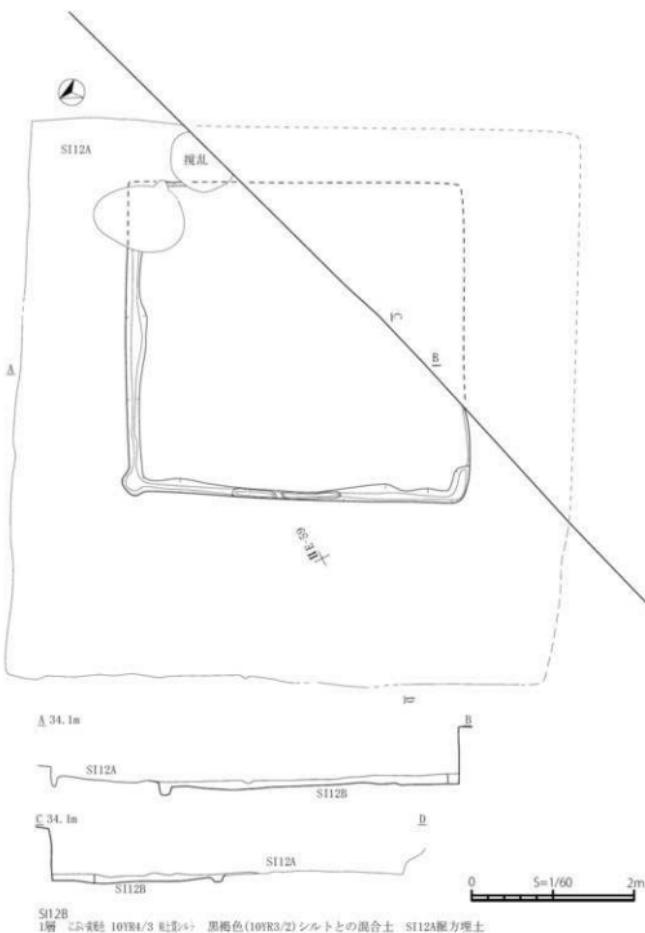


図31 第12号B竪穴住居跡

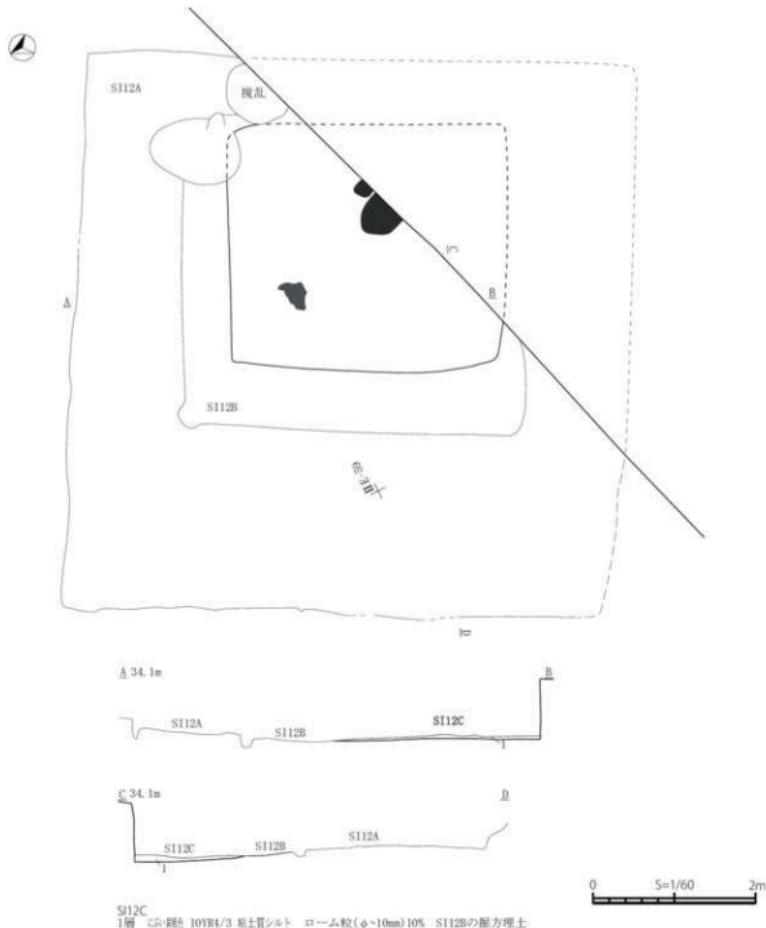


図32 第12号C竪穴住居跡

小結 本調査区では極小型に分類される。第12号堅穴住居跡としては2回の拡張が行われているが、本遺構は最も古い段階に構築されたものである。床面に炉跡を検出しているが、炉跡を伴う堅穴住居跡の中では最も小さい。

(浅田)

第13号A堅穴住居跡[SI13A](図33~35)

位置と確認 II C-56・57、II D-56・57・58グリッドに位置する。遺構確認時、第12号A・第14号A堅穴住居跡のプランと共に第IV層上面で検出した。南東側は調査区外に位置する。

重複関係 第12号A・第14号A堅穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。また第5号・第10号土坑と重複し、本遺構が古い。

規模・平面形 長軸6.63m、短軸5.77mの方形を呈するものと思われる。推定床面積は41.1m²を測る。カマドは1基検出し、N-71°-Wに主軸を持つ。

堆積土 4層に分層できた。第4層は壁周溝内に堆積しており、壁際から流入した初期堆積土と捉えられる。第3層は北西側を中心床面上を覆うような堆積を示す。統いて第2層の堆積により床面がすべて埋没したものと思われる。第1層は、混入物の確認できないロームが薄く堆積しており、人為堆積の様相を呈する。本層の生成要因として、本遺構と重複している第5・10号土坑構築時の掘り上げ土である可能性が考えられる。

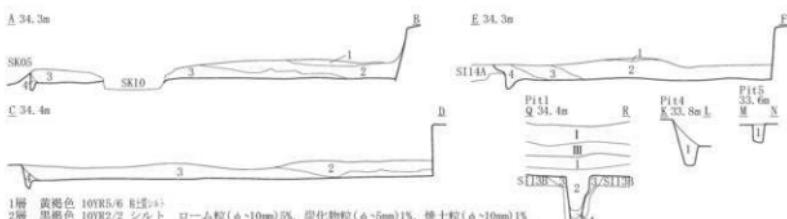
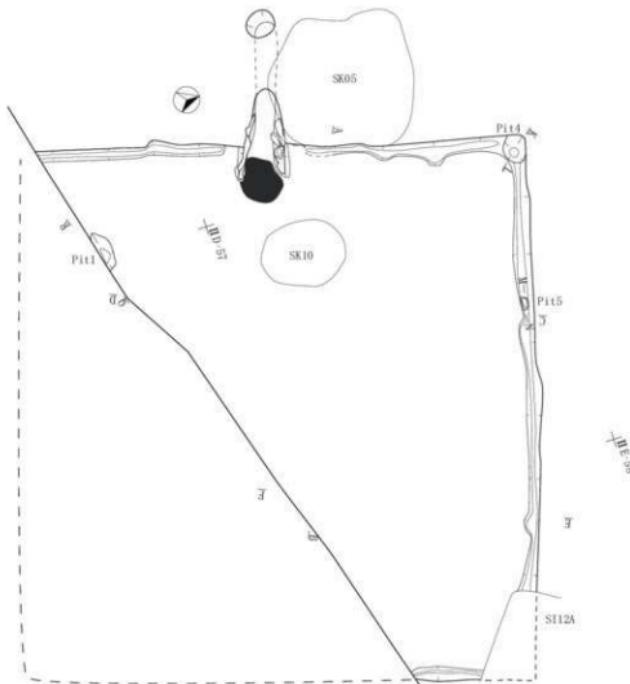
壁面・床面 壁面を確認できた部分は僅かであるが、確認された範囲ではほぼ垂直に立ち上がっていた。床面は、ほぼ全面で第13号B堅穴住居跡の埋め戻し土を貼床として使用しているため、細かい凹凸が存在するが、全体としては平坦に整えられている。なお住居中央より東側は木根による搅乱を受けている。

壁周溝 確認できた部分はカマド以外全て構築している。幅は最大18cm、深さは最大47cmを測る。

カマド 西壁ほぼ中央に構築していると思われる。煙道部の形態は地下式で、煙道長は167cmを測る。壁面を火床面とほぼ同一レベルで掘り抜き、煙出部に到達する。但し壁から70cmのところまでは、半地下式のように天井部を掘り抜いている。袖部から煙道天井開放部までの構造は、側壁に板状のシルト岩を立てて配置している。また窓設置用の掘方には、火床面両脇から細長い溝状に掘り込まれている。

住居壁の外側に位置する部分には蓋石が残存し、さらにその上部には構築材の灰白色粘土が残存していた。このような構造は、半地下式の第1号A堅穴住居跡カマドに持ちいられているものと同様である。煙道部の堆積土は第1~7層にあたるが、第1層は煙道天井開放部を一気に埋没させているのに対し、第2~7層は、天井崩落土と黒褐色土の互層となっており、堆積状況が大きく異なる。第7層と第1層の境界が明瞭に立ち上がるような状況を示しており、第7層の火床面側は取り除かれたような状況となっている。以上の状況からカマド本体は位置を変更せず、煙道部の形態を地下式から半地下式に変更している可能性が考えられる。構造転換の契機は第7層の崩落、堆積にあると考えられる。

天井部を構成していた第7層の崩落は、煙道を大きく塞ぐことを意味すると共に、当時の地表面に影響するような陥没を引き起こしていた可能性がある。そうなれば陥没部分を掘り起こした場合必然的に半地下式の掘り込みができるため、地下式の煙道復旧を目指さず、結果的に半地下式への変更を余儀なくされたことになる。煙出部は僅かに下方に傾斜し、深さは29cmを測る。遺構確認時、煙出部上



1層 黄褐色 10YR5/6 E 34.3m
2層 黒褐色 10YR2/2 シルト ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)5%、炭化物粒($\phi \sim 5\text{mm}$)1%、堆土粒($\phi \sim 10\text{mm}$)1%
3層 黒褐色 10YR3/2 シルト ローム粒($\phi \sim 50\text{mm}$)30%、炭化物粒($\phi \sim 5\text{mm}$)3%、硬土粒($\phi \sim 10\text{mm}$)1%
4層 黒褐色 10YR2/2 シルト ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)20% 堆肥混堆積土

Pit1
1層 S113a 2層 S113a 3層 桂瓶部に流入
2層 S113a 3層 桂瓶部に流入
3層 晴褐色 10YR2/2 シルト ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)5%
4層 黄褐色 10YR5/6 E 34.3m 崩落土
5層 桂瓶部空洞
6層 黄褐色 10YR5/6 E 34.3m 植方埋土

Pit4
1層 黑褐色 10YR3/2 シルト ローム粒($\phi \sim 20\text{mm}$)7%、炭化物粒($\phi \sim 1\text{mm}$)1%

Pit5
1層 黑褐色 10YR3/2 シルト ローム粒($\phi \sim 20\text{mm}$)5%

0 S=1/60 2m

図33 第13号A竪穴住居跡-1

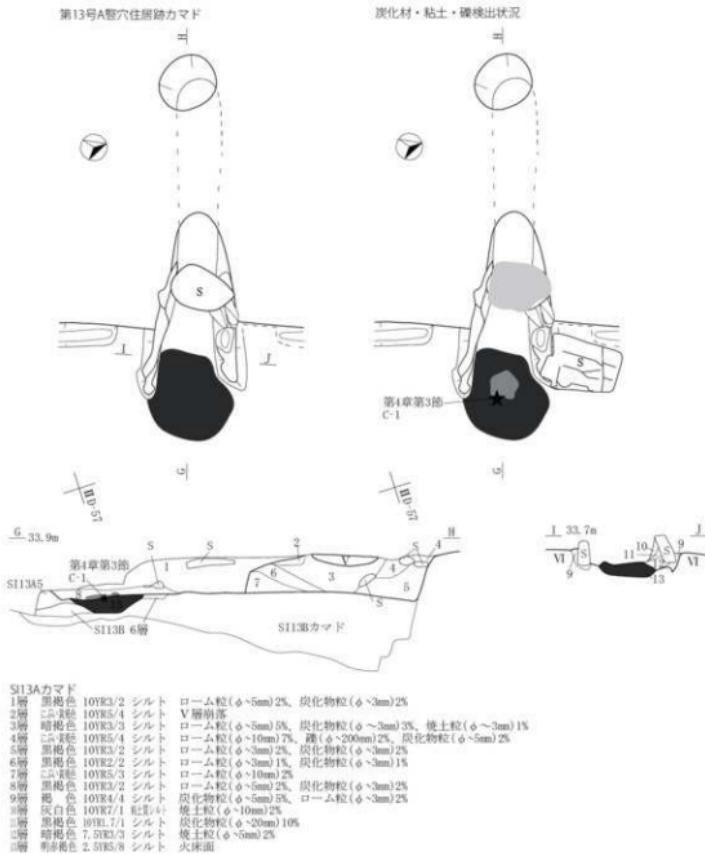


図34 第13号A型穴住居跡-2

に小型亜円礫が集中しており、煙出部プラン確認以前は性格不明の集疊遺構と認識していた。その後、礫を取り上げプラン確認したところ、複数の小型亜円礫が煙出部内にさらに落ち込んでいることを確認したため、本遺構に伴うものと判断した。調査区内で、カマド煙道部に破碎した土器や土製支脚が重なるように出土した例は第6号A型穴住居跡等でも確認されているが、機能停止後に礫で覆うような状況になっている事例は第3号A西カマドで煙出部を塞ぐように横たえている事例のみで、小型亜円礫を伴うものは本遺構のみである。また、カマド掘り下げ時に右袖からカマド右側にかけて板状のシルト岩が出土した。右袖に立てかけるように傾斜しており、被熱により遺存状況は悪かった。大き

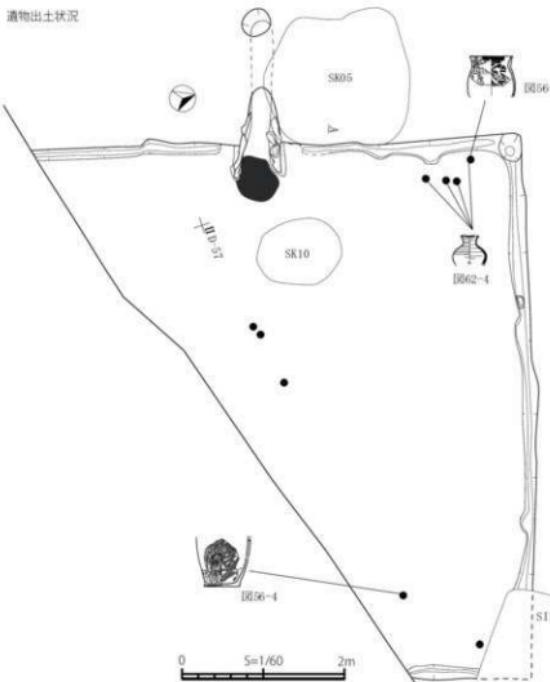


図35 第13号A竪穴住居跡-3

さ等も考慮すると、この礫がカマド本体部分の天井部を覆う芯材として使用されていたと想定される。そうであれば機能停止後に解体され、脇に置かれていた状況となる。堆積土は13層に分層できた。第9～12層は掘方埋土となる。また第13層は火床面の被熱範囲となる。火床面は第13号B竪穴住居跡カマド上に位置するため、カマド堆積土が強い被熱を受けて形成している。長軸53cm、短軸50cm、被熱厚は11cmを測る。火床面上に堆積している第8層から出土した炭化物について、樹種同定を行った結果、アサダとの結果を得た(第4章第3節参照)。

柱穴・土坑 住居南東側でPit 1を検出した。南側は調査区外に位置している。調査区壁面で断面観察できたため基本層序から確認でき、5層に分層できた。第13号B竪穴住居跡を大きく掘り込んでおり、柱を立てた後、第3層で掘方を埋めている。第5層は空洞となっており、壁崩落土の第4層で蓋がされているような状況であった。このことから、住居機能停止後、一定期間は少なくとも第5層部分までは柱根が残存しており、腐朽とともに空洞化したものと推測する。堆積土上部は床面を覆う住居第3層が流入していた。また、北西隅でPit 4を、壁周溝内でPit 5を検出した。主柱穴はPit 1と思われるが、対になる柱穴は見つからなかった。このため住居隅のPit 4が主柱穴になる可能性も

挙げられる。

出土遺物 土器は確認面及び第1層からの出土で総数の3分の2を占め、次いで床面からの出土が多い。北西隅から須恵器壺(図62-4)、土師器甕(図56-11)が、北東隅から土師器甕(図56-4)が出土した。

小結 本調査区では特大型に分類される。カマドは、同一火床面を用いつつ、煙道部のみ地下式から半地下式へ改築している可能性があり、本調査区では例がない。

(浅田)

第13号B堅穴住居跡[SI13B](図36～37)

位置と確認 II C-56・57、II D-56・57・58に位置する。第13号A堅穴住居跡調査中に床面に方形のプランを検出した。南東側は調査区外に位置する。

重複関係 第12号A・第13号A堅穴住居跡、第10号土坑と重複し、いずれも本遺構が古い。

規模・平面形 長軸6.03m、短軸5.36mの方形を呈するものと思われる。北西壁は直線的だが、北東壁はやや歪みを持つ。推定床面積は35.3m²を測る。カマドは1基検出し、第13号A堅穴住居跡カマドと同様、N-71°-Wに主軸を持つ。

堆積土 2層に分層できた。いずれもロームを混入しており、第13号A堅穴住居跡への拡張に伴い、埋め戻されたものと思われる。第5層は第13号A堅穴住居跡の貼床として機能している。第6層は第13号A堅穴住居跡構築時に掘り下げたクロボク土が主体と考えられるが、北西隅では確認できなかつた。拡張した面積はそれほど大きくなく、面積が大きい本遺構の床面を埋めきるほど土量が出なかつた可能性がある。

壁面・床面 壁は第13号A堅穴住居跡構築時に失われている。床面はほぼ平坦に整えられている。

壁周溝 カマド周辺と北東隅で一部途切れるが、その他は壁の凹凸に沿って構築されている。幅は最大29cm、深さ最大27cmを測る。

カマド 西壁ほぼ中央に構築していると思われる。煙道部は地下式の構造を持ち、火床面から9°下方に傾斜する。第13号A堅穴住居跡カマド煙道が上部に重なるように構築されているため、煙出部上部は失われているが、第13号A堅穴住居跡カマドと同一箇所から排煙していたものと思われる。煙出部はやや傾いて掘り込まれており、確認面からの深さは72cmを測る。煙出部奥壁は弱い階段状になつておらず、煙道部と煙出部両側から掘り込んだ際、接続部分のずれに伴うものと思われる。カマド本体は全く確認できなかつた。掘方にも存在しないことから、礎の設置もなかつたものと思われる。堆積土は6層に分層できた。第5層は煙出部最下層に自然流入した土と判断できる。その上に第4層が堆積している。下部に被熱痕を持つことから煙道天井部の崩落土と捉えることができる。その後第2・3層と黒色土が堆積したあと、ローム主体の第1層が堆積、完全に埋没している。第1層は第13号A堅穴住居跡構築時に埋め戻したものと捉えられる。第6層は火床面の被熱範囲となつてゐる。火床面は長軸53cm、短軸48cm、被熱厚6cmを測る。

天井崩落土が除去されず、煙道を塞いでいる状況のまま、第13号A堅穴住居跡のカマドが構築されており、第13号A堅穴住居跡カマドで見られたようなカマドの復旧痕跡は見られない。このことから、第13号B堅穴住居跡から第13号A堅穴住居跡への建て替えの契機は、カマド煙道部天井崩落に伴う機能不全が一つの要因であった可能性として挙げられる。

第13号B竪穴住居跡

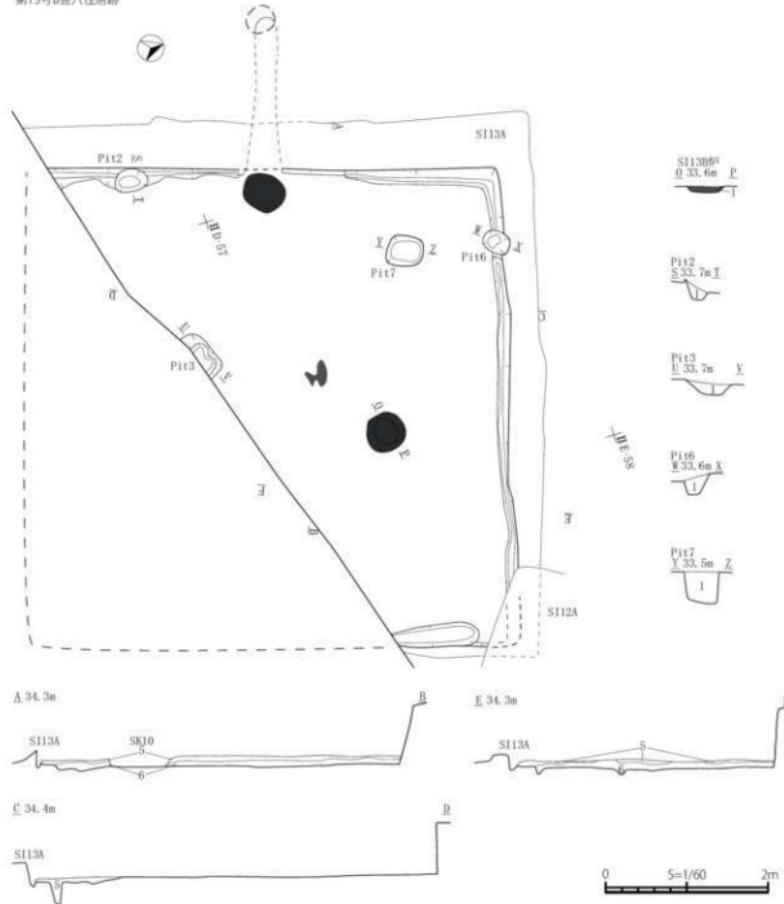


図36 第13号B竪穴住居跡-1

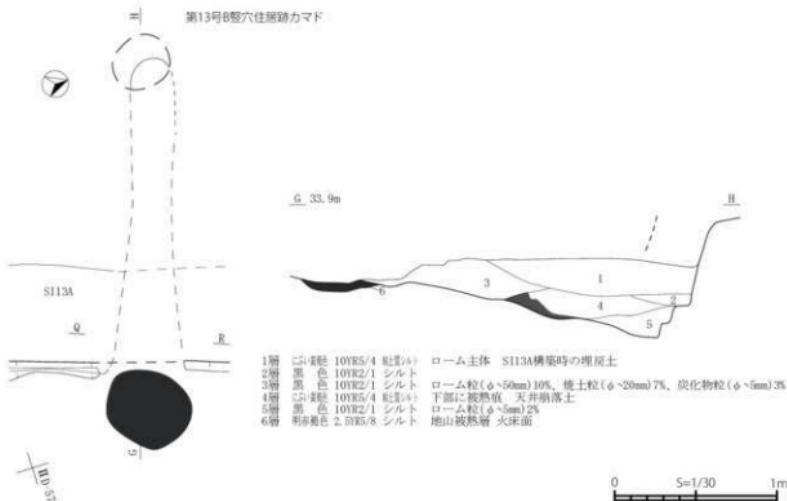


図37 第13号B竪穴住居跡－2

柱穴・土坑 4基検出した。Pit 7は隅丸方形を呈し、住居対角線上に位置することから主柱穴と考えられるが、対になる柱穴は検出できなかった。Pit 2・6は壁周溝の位置にあり、Pit 6は一部壁から張り出している。Pit 3は掘り込みが浅く柱穴とは認定できない。

炉跡 住居中央からやや北側で検出した。直径50cmの不整円形を呈する。深さは床面から6cmを測る。底面が直接被熱しているが、被熱厚が1cmと薄く、カマドの被熱厚と比較すると使用頻度が少なかつたと捉えることができる。周辺より鉄生産関連遺物の出土もなく、鍛冶炉としても認定できない。カマドが最終的に機能しなくなった可能性があることから、一時的にカマドの代替施設として利用したことと想定される。

出土遺物 土器は第6層から僅かに出土したに留まる。埋戻しの際に混入したものと思われる。

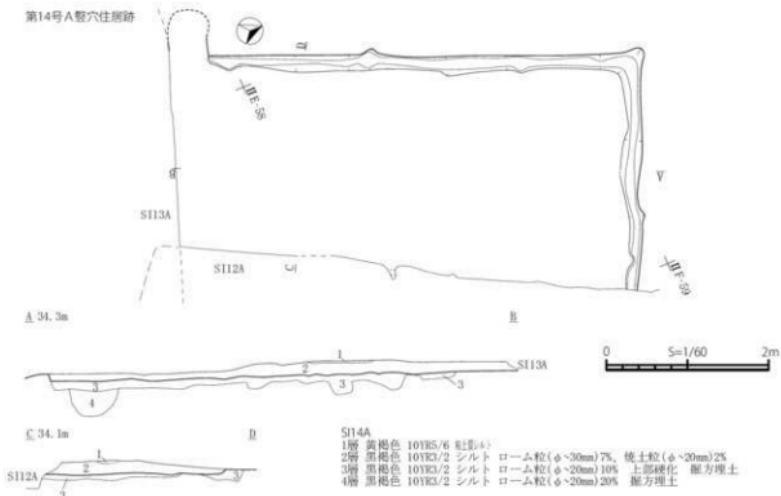
小結 重複関係が確認できる中では古い遺構となる。床面に炉跡を伴い、本調査区では大型に分類される。

(浅田)

第14号A竪穴住居跡[SI14A](図38～39)

位置と確認 II D-57・58、II E-57～59、II F-58 グリッドに位置する。遺構確認時、第12号A・第13号A竪穴住居跡のプランと共に第IV層上面で検出した。

重複関係 第14号B竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、第12号A竪穴住居跡、第13号A竪穴住居跡、第6号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。



規模・平面形 調査区内では長軸5.67m、短軸2.79mを測り、方形を呈するものと思われる。推定床面積は37.5m²を測る。カマドは1基検出し、N-68°-Wに主軸を持つ。

堆積土 4層に分層できた。第3・4層は掘方埋土となる。第2層は確認された範囲の床面を全て覆っている。壁際に初期堆積土が確認できないことから、住居機能停止後、人為的に埋め戻されている可能性がある。第1層は第13号A竪穴住居跡第1層と類似しており、埋没後の周辺遺構掘り上げ土が被っているものと思われる。

壁面・床面 壁面はほぼ直線的に構築され、確認面までの高さは最大39cmを測る。床面は北側に僅かに傾斜するがほぼ平坦と捉えられる。

壁周溝 確認できた範囲でカマド以外の部分に全て構築していた。幅は最大41cm、深さは最大48cmを測る。

カマド 北西壁南寄りに構築していると推測する。壁周溝が途切れる部分で、壁外へ伸びる煙道部の張り出しこと、カマド構築材と考えられる灰白色粘土質シルトが出土したため、カマドと認定した。火床面は確認できなかったため、造り替えに伴う旧カマドの可能性もある。煙道部の構造は半地下式で、床面とほぼ水平レベルで伸びる。堆積土は4層に分層できた。第4層は掘方埋土で、不定形に掘り込まれた部分を埋めている。第2層は灰白色粘土で、構築材崩落土と考えられる。第1層から出土した炭化物について、樹種同定を行った結果、クリとの結果を得た(第4章第3節参照)。

柱穴・土坑 確認できなかった。

出土遺物 土器は第3層から最も多く出土している。次いで床面、第2層となる。第3層出土土器は構築時に混入した可能性が高い。第2層出土土器は埋戻し土の可能性が高いことから、これらも混入

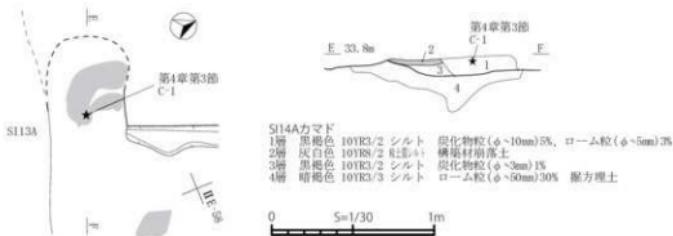


図39 第14号A堅穴住居跡－2

の可能性が高い。床面からは土師器壺(図56-13)や土師器甕(図56-16)が、カマドから土師器壺(図56-14)が出土している。

小結 第14号B堅穴住居跡を拡張して構築しており、面積は大きく拡大しているものと思われる。本調査区では大型に分類される。

(浅田)

第14号B堅穴住居跡[SI14B](図40)

位置と確認 II D・E-58 グリッドに位置する。第14号A堅穴住居跡掘り下げ時、床面の方形プランで検出し、土層断面で確認した。

重複関係 第14号A・第12号A堅穴住居跡と重複し、いずれも本遺構が古い。

規模・平面形 調査区内では長軸3.82 m、短軸1.46 mを測る。重複により詳細は不明であるが、方形を呈するものと推測する。推定床面積は13.3m²を測る。

堆積土 1層のみ確認できた。第5層は堀方埋土で、ローム粒を多量に含む。

壁面・床面 壁は重複遺構に壊されており確認できなかった。床面は第14号A堅穴住居跡の掘方で掘り込まれており、確認状態では凹凸の多い状態であったが、構築時は平坦に整えられていたものと思われる。

壁周溝 南西側と北東側で一部途切れるが、基本的にカマド部分以外全周していると推測する。最大幅31cm、深さ33cmを測る。

カマド 検出できなかった。削平を受けた南側に位置したものと思われる。

柱穴・土坑 調査範囲では検出できなかった。

出土遺物 出土しなかった。

小結 第12・13・14号堅穴住居跡の重複関係の中で、最も古い位置付けが可能である。本調査区では小型に分類される。

(浅田)

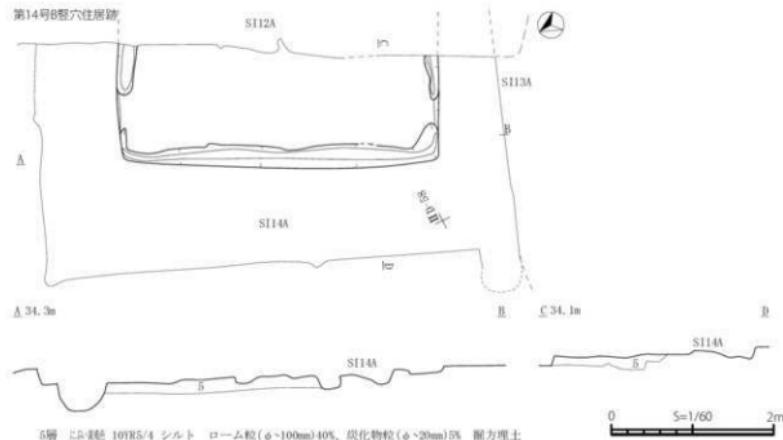


図40 第14号B竪穴住居跡

(2)溝跡[SD](図41)

溝跡は、調査区東端で1条、IV層上面で検出した。溝跡東側は斜面となっている。南西側は調査区外へ伸びており、全体像は不明である。軸方向は第1号竪穴住居跡と類似する。底面に柱穴等は検出しなかった。巨視的には直線状に掘られているが、詳細に観察すると細かく蛇行しているように見える。堆積土は単層で、確認面に近い上層には灰白色粘土塊が2m程の間で出土している。粘土塊の一部は被熱痕を確認できることから、解体されたカマド本体等が機能停止後に廃棄されたものと思われる。機能としては根拠に乏しいが、何らかの区画を意図した構造物であったと推測する。出土遺物は土師器甕(図57-1～4)、土師器壺(図57-5)が出土している。被熱粘土同様、機能停止後に廃棄されたものと思われる。軸方向が一致する竪穴住居跡の時期や出土遺物の様相から、平安時代に機能していたと考えられる。

(浅田)

(3)土坑[SK](図42・43)

12基検出した。諸特徴によって、以下のように分類した。

I群：第2・7・9・12・13号土坑の5基が該当する。後述する諸特徴から、製炭土坑に該当するものと思われる(窯跡研究会1997)。最大の特徴は、底面直上層に多量の炭化物を混入する共通点にある。炭化物は破碎されたもので占められている。平面形は隅丸方形や楕円形を呈する。壁面の上部や底面の一部には薄い被熱痕が検出された。底面は平坦で、壁は第2号土坑のように垂直に立ち上がるものがある。第9号土坑第2層には火山灰ブロックが混入しており、分析の結果、白頭山-苦小牧火山灰と判明した(第4章第2節参照)。底面が完全に埋没し、窪地状態のところへ流入したものと考

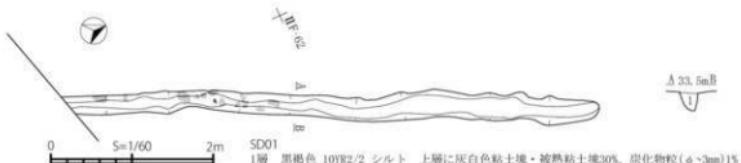


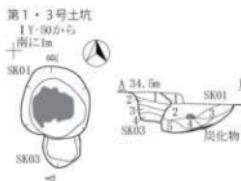
図41 溝跡

えられる。堆積土は第7・9・12号土坑は自然堆積の流入土で徐々に埋没している。第2号土坑は炭化物層上部を第1層で覆われ、確認面まで埋没している。

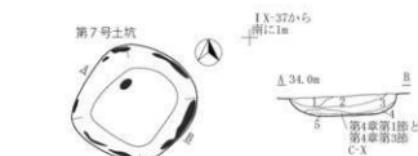
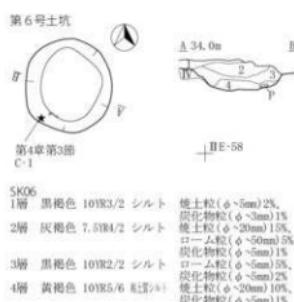
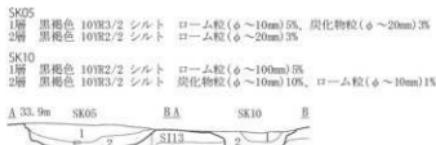
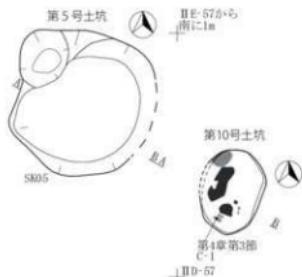
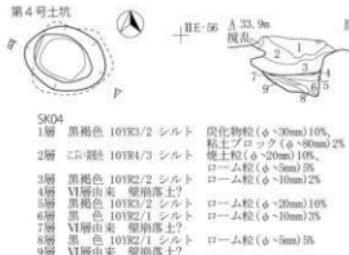
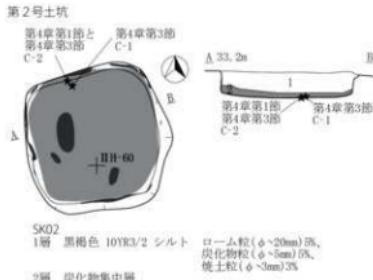
調査区東西で傾向に違いが無いか調べるため、調査区東側の第2号土坑と調査区西側の第7号土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った。第2号土坑の結果は、 2σ で7世紀後半から8世紀後半の値を示し、 1σ では7世紀後半から8世紀前半の確率が最も高くなかった。また、第7号土坑の結果は、第2号土坑と同様に 2σ で7世紀後半から8世紀後半の値を示し、 1σ では7世紀後半から8世紀初頭の確率が最も高くなかった（第4章第1節参照）。古木効果の可能性が指摘されているものもあるが、上記の結果から見ると同様の年代を示し、竪穴住居跡の年代より古く出ている。また、第2号土坑第2層出土の2点、第6号土坑第3層出土の1点、第7号土坑第5層出土の1点、第9号土坑堆積土出土の1点、第12号土坑第2層出土の1点、第13号土坑第1層出土の1点、計7点について樹種同定を行った。その結果、第2号土坑C-1がモクレン属、それ以外はすべてクリとなり、同様にクリを選択的に採取している傾向が読み取れる（第4章第3節参照）。

II群：平面形は不整円形から楕円形を呈し、第3～6号、第10号土坑が該当する。第5・10号土坑はいずれも第13号A竪穴住居跡の堆積土やカマド煙道を掘り込んでおり新しい。堆積土はいずれも2層に分層できた。クロボク土を主体とし、炭化物の混入が見られるが、I群の混入量から比較すると明らかに少ない。第10号土坑は底面に被熱痕があり、当初は製炭土坑との関連を考えた。しかし検討を加えた結果、出土炭化物が少ないと、壁面の被熱が確認できなかったこと、規模が一回り小さいことが相違点として挙げられ、さらに周間に存在する焼土遺構や隣接する第5号土坑との関連が高くなってきたため、本群に含めた。出土遺物は、土器が第5号土坑の第2層から3点のみに留まるが、鉄滓は第5号土坑の確認面から5点と、本調査区の中では最も多い出土地点となっている。また第10号土坑の第2層から羽口が出土している。第10号土坑第2層出土の炭化物1点について樹種同定を行った。その結果、ブナ属と同定された（第4章第3節参照）。

第6号土坑の堆積土は4層に分層できた。最下層の第4層と、窪地化した状態で堆積している第2層には焼土粒が多量に混入している。第1層と第3層は黒褐色で混入物の割合も少なく、周囲から流入したものと捉えられる。出土遺物は土器が139点、2640g出土している。全ての層から出土しているが、最も多いのは第2層となる。復元率の高い土器が多く、土師器壺（図57-9）や、土師器甕（図57-10、図58-1・2）が出土している。図58-1・2は似た器形をしており、一括廃棄されたものと思われる。羽口は第2層から出土している（図70-1）。第6号土坑第3層から炭化種実が出土している。全てオニグルミの核の破片と思われ、29点、10.4g出土した。以上の結果から、第6号土坑は機能



SK01	黒褐色	10YR3/2	シルト	地成粒土壤($\phi \sim 50mm$)5%
1層	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物($\phi \sim 50mm$)10%, ローム粒($\phi \sim 10mm$)7%
2層	黒褐色	10YR3/2	シルト	ローム粒($\phi \sim 10mm$)7%
3層	黒褐色	10YR3/6	シルト	V層起源
4層	黒褐色	10YR7/8	シルト	ローム主体
5層	黒褐色	10YR2/2	シルト	底面上に炭化物集中、ローム粒($\phi \sim 10mm$)5%



1層 黒褐色 10YR2/2 シルト	ローム粒($\phi \sim 1mm$)微量
2層 黒褐色 10YR3/2 シルト	軟らかくしまりなし ローム粒($\phi \sim 3mm$)微量
3層 黒褐色 10YR2/2 シルト	軟らかくしまりなし ローム粒($\phi \sim 1mm$)微量
4層 黒褐色 10YR3/2 シルト	軟らかくしまりなし ローム粒($\phi \sim 1mm$)微量
5層 黒色 10YR2/1 シルト	ローム粒・ロームブロック少量、炭化物多量、優土粒微量 軟らかくしまりなし

0 5m 1/60 2m

図42 土坑-1

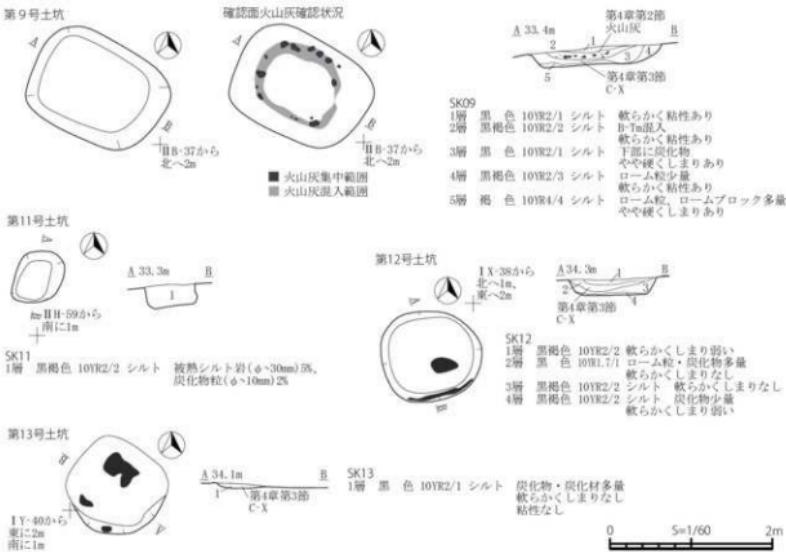


図43 土坑一2

停止後少なくとも2回の廃棄行為が存在し、鉄生産関連遺物が含まれていることから、鉄生産関連遺構の片付け等に伴う廃棄に伴う可能性が考えられる。

本群は鉄生産関連遺物が他群と比べ多いこと、周間に焼土遺構が存在するなど、鉄生産に関連する遺構である可能性が高い。機能時期については、古代の遺構を掘り込むことや出土遺物の様相から古代に帰属すると考える。

III群：平面形は隅丸方形から楕円形を呈し、断面形はフラスコ状に壁面を抉る形態となる。第1・4号土坑が該当する。第1号土坑は第3号土坑と重複し、本遺構が新しい。第4号土坑は重複を確認できなかった。第1号土坑の堆積土は5層に分層できた。底面上と第4層上に炭化物の集中を確認できた。炭化物は非常に細かいもので、周間に被熱痕もないことから、土坑機能停止後、廃棄されたものと思われる。第4号土坑は9層に分層できたが、上部と下部で堆積の様相が異なる。上部の第1～3層は機能停止後自然流入したものと思われる。一方、第4～9層までは第VI層起源のローム土とクロボク土が互層になっている。大きく傾斜した底面に沿うように堆積しており、その上部に壁面が抉れる部分があることから、壁面の崩落と周間からの自然流入による互層が形成されたと判断した。出土遺物は第4号土坑第1層から土師器甕の破片が1点出土しているのみである。堆積土流入時に混入したものと思われる。このため、詳細な時期比定は困難であるが、出土遺物と堆積土の様相から古代に帰属するものとして捉えておきたい。性格についても不明である。

IV群：平面形は隅丸方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。第3・11号土坑が該当する。第3号

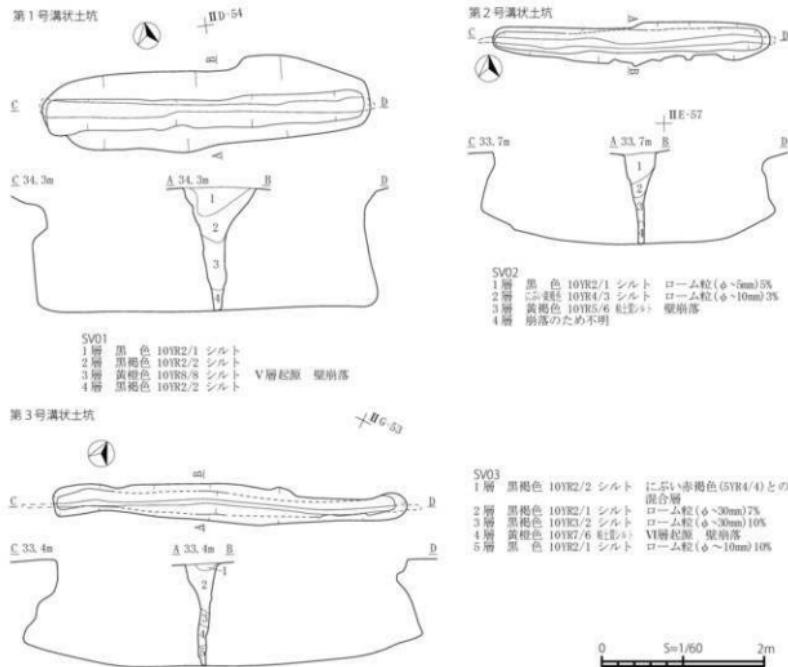


図44 溝状土坑

は第1号土坑と重複し、本遺構が古い。堆積土は4層に分層できたが、いずれも自然堆積と考えられる。また第11号土坑は単層で、重複は確認できなかった。調査段階で第10号竪穴住居跡の北側に位置し、竪穴住居跡に伴う柱穴の可能性を考えていた。堆積土は単層で、土器は34点出土している。この中で、製塩土器が第10号竪穴住居跡と接合している(図54-14)。その他、堆積土上層から被熱シルト岩が出土しており、第10号竪穴住居跡カマドと類似する内容となっているが、関連付けるには距離が離れていたことから、単独の土坑として扱った。

(浅田)

(4)溝状土坑[SV](図44)

3基検出した。いずれも調査区南東側に散在しており、古代の遺構とも重複関係はない。軸方向はいずれも東西方向を示している。東側には段丘を開析する大きな谷地形が存在し、調査区西側には埋没谷が位置する。このため東西の谷に挟まれた、南北に延びる段丘縁辺部の平坦面上に構築していることがわかる。平面形は第1号のみ確認面の幅が広くなっている。断面形はV字状を呈する

が、第1号のみ開口部付近の開きが大きい。これは第2・3号と比較し、第1号の壁崩落が大きいことを示している。第2・3号の長軸方向の壁面は大きく抉り込まれ、底面は端部付近を中心に傾斜するが、第1号は大きな抉り込みは見られず、底面は水平である。細かい点では相違点があるものの、3基とも元は同様の形態であったと想定されるため、機能的にも大きな差はないものと考えられる。堆積土はいずれも底面に自然流入土が堆積した後、壁崩落土によって下層が埋没する。崩落により開口部が広がり、窪地状態となった部分に、黒色～黒褐色を基調としたクロボク土が自然流入し、埋没が完了している。出土遺物が無いため時期比定の材料に乏しいが、遺構周辺から縄文土器が出土していることから、縄文時代の構築としておきたい。

(浅田)

(5) 焼土遺構[SN] (図45)

自然堆積土層内で被熱痕を検出し、明確な掘り込みを伴わないものを焼土遺構とした。調査区内では6基検出した。分布を見ると、第5号土坑の位置するIIID-56グリッド周辺に3基、第10号堅穴住居跡の南北に1基ずつ、調査区西側の第9号土坑北側に1基となっている。

第2・3・4号焼土遺構はIID-56グリッド周辺にまとまっている。いずれも第III層が被熱して形成されている。平面形は規模に違いがあるものの南東～北西方向に細長い。強い被熱により硬化した部分が観察できる。出土遺物は第4号焼土遺構から1点確認できたのみである。周辺から鉄生産関連遺物は出土しておらず、明確な鍛冶炉として認定するには根拠に乏しいが、遺構周辺では鉄生産関連遺物を出土したII群土坑が存在する。後述する炭化物集中範囲も本遺構周辺で検出していることから、鉄生産に関連する遺構の可能性を指摘しておきたい。

第6号焼土遺構は第14号A堅穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。第IV層が被熱し硬化した部分が観察できる。遺物は土器が17点している。接合復元後に図示できたのは土師器壺(図58-3)と土師器坪(図58-4)である。

第7号焼土遺構は第III層が被熱している。被熱面の平面形は不整橢円形を呈する。層の変化は漸移的である。

第8号焼土遺構は唯一調査区西側で検出した。第IV層が被熱している。東側に硬化部分が存在し、西側は扇形に被熱痕が弱まっている。遺物は土器が1点出土している。

(浅田)

(6) 性格不明遺構[SX] (図46)

5基検出した。前述した遺構分類に該当せず、性格が明確でない遺構である。以下に諸特徴を述べる。第1・3号性格不明遺構は焼土集中範囲である。焼土遺構と異なる点は、焼土遺構が遺構自体が被熱を受けており、その場で火を焚いていることが明白であるのに対し、第1・3号性格不明遺構は浅い窪みに焼土を多く含む堆積土が存在する点である。つまり火を焚いているのは別の場所で行っている点にある。分布を見ると、第2・3・4号焼土遺構と重なる位置にあたる。確認は第1号が第II層掘り下げ時、第3号がIII層掘り下げ時である。平面形は第1号が不整隅丸方形を呈する。一方第3号焼土遺構は第2・3・4号焼土遺構と同様に、南東～北西方向に細長い形となり、関連性が窺われる。

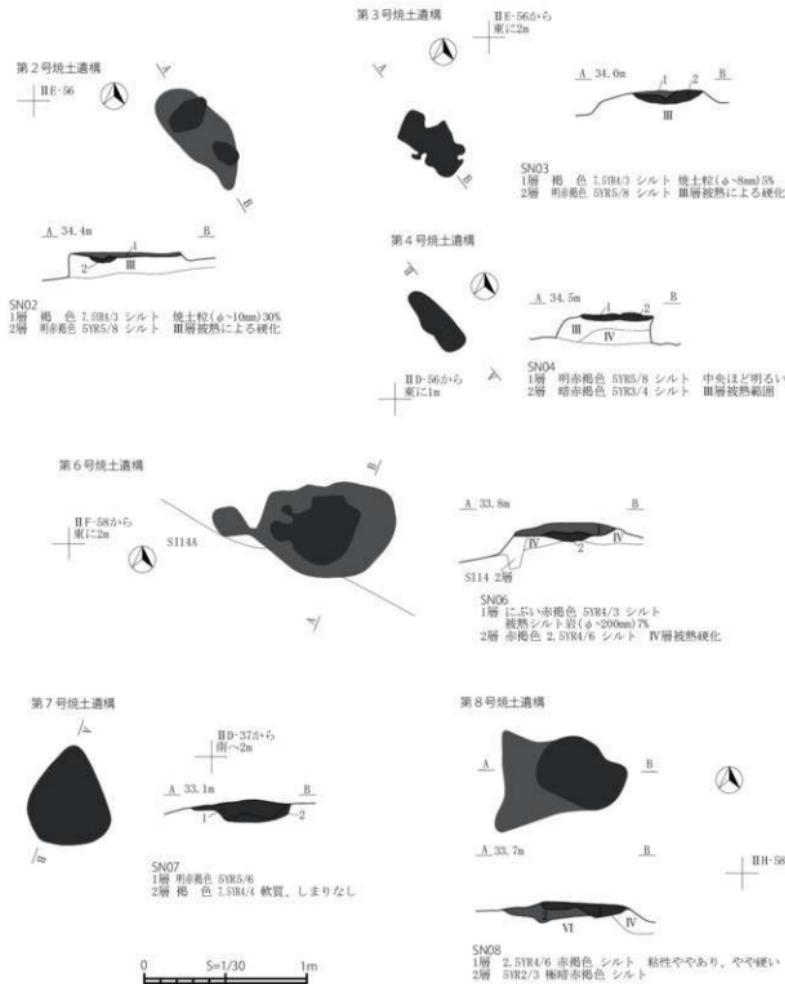


図45 焼土遺構

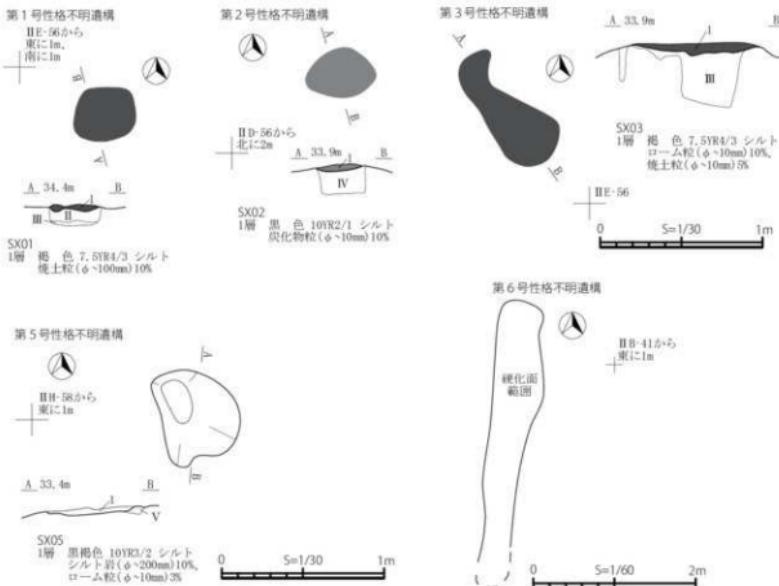


図46 性格不明遺構

第2号性格不明遺構は炭化物集中範囲である。前述の第1号性格不明遺構と平面規模は変わらないが、堆積土に焼土ではなく炭化物を多く含んでいる。分布を見ると、第2・3・4号焼土遺構や第1・3号性格不明遺構と重なるため、これも何らかの関連を持つ可能性が高いと思われる。

第5号性格不明遺構は被熱シルト岩や土器片が多量に出土した遺物集中範囲である。遺物を取り上げた下部には、非常に浅い掘り込みが存在した。しかし平面形は不定形で、人為的な掘り込みとするには躊躇するものである。このため土坑とせず、性格不明遺構として扱った。遺物は土器が97点、1227g出土している。土師器甕(図58-5)、土師器壺(図58-6)、製塩土器(図58-7)が見られ、第10号竪穴住居跡や第11号土坑と出土内容が似ている。位置的には第10号竪穴住居跡の北側、第11号土坑の西側に位置し、第8号焼土遺構が本遺構の西側に位置する。直接結びつきを示すものではないが、出土遺物の類似性は遺構同士の関連について示唆を与えるものと思われる。

(浅田)

第2節 出土遺物

本調査区から出土した遺物の主体を占めるのは、古代の土器である。土師器・須恵器・擦文土器・製塙土器の他、破片状態では明確な区分が困難な土製支脚も含んだ出土総量は、4532点、60196.7gとなつた。この内、遺構内から出土したのは4052点、54504.9gとなり、90%近くが遺構内からの出土となつてゐる。

(1) 土師器・擦文土器・製塙土器(図47~59)

調査区で出土した状態は大半が破片資料であり、特に土師器、製塙土器、土製支脚は諸特徴に欠け、判別が困難であった。このため整理段階で接合復元を行つた際に分別を行つた。以下、判断基準と共に諸特徴を記載する。

土師器：素焼きの土器で、成形・整形技法に伴う器面変化はあるものの、装飾を意図する要素は見られない。墨書、刻書なども本調査区では出土していない。以下、器種毎に記載する。

甕：92点図示した(図47-2～5・8～11、図48-6～11、図49-7～17、図50-1～3・9～12、図51-3～8・10～12、図52-1・2・4・7～9、図52-13・15、図53-1～5・8～10、図54-1・3～5・13、図55-1～7・10～16、図56-4・5・11・16、図57-1～4・8・10、図58-1～3・5、図59-4・6)。本調査区で最も多く出土した器種である。

成形技法ではロクロ使用と非ロクロ使用に分類することが可能である。ロクロ使用のものは、図47-8、図49-15、図50-9、図55-3・4・6・10・16、図57-4、図58-3、図59-6を図示した。図47-8は外面胴部最下部に横方向のケズリ調整が観察でき、切り離し後の再調整が施されている。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部が短く外反する。図49-15は口縁部が強く外反するが、口唇部に受け口状成形は見られない。図50-9は内湾気味に立ち上がる胴部下半で、再調整の痕跡は確認できない。図55-3は口縁部で、外反の度合いはそれほど大きくない。口唇部の受け口状成形は見られない。図55-4・6は小型で、4は底面糸切後、ナデ調整が施されている。図55-16は口縁部で、胴部から緩やかに外反し、口唇部を上方に挽き出して、弱い受け口状にしている。図55-10・図59-6は胴下半を叩き調整している。外面は平行叩目が、内面は平行當て具痕が観察された。器形の全体像は不明だが、諸特徴から出羽型甕(伊藤2006)にあたると思われる。図57-4は胴下半部から底部にかけて残存している。鉢になる可能性も考えたが、内底面のロクロ使用時の凹凸が大きく、内面を意識した作りではないと捉え、甕とした。上半部が無いため壺になる可能性も残されている。図58-3は口縁部から胴部で、口縁部は強く外反した後、口唇部にかけ垂直に挽き出し、受け口状に成形している。

上記以外が非ロクロ使用の成形となる。外面に輪積痕が顕著に観察できるものが存在することから、輪積みによる成形と確認できる。胎土には角の取れた砂粒が含まれることから、砂粒が波で洗われる鳴沢川河口から七里長浜にかけての砂を混入させているものと推測する。外面調整はI:ミガキ、II:ナデ、III:ケズリが見られる。内面はナデが主体となる。

復元個体を中心に口縁部形態を見ると、以下のように分類できる。

A:口縁部が長く、大きく外反し、口縁端部が最大径となるもの(図50-11、図51-3、図52-1、図53-1・3・8)。外面調整はI・II・IIIだが、Iが多い。図50-11は胴部下半は底部から直線的に開き、胴部上半は垂直に近い立ち上がりを見せる。口縁部は長く大きく外反する。このため最大径は口縁部に位置する。調整は内外面ともミガキ調整となっている。内外面ミガキ調整が観察できるのは他に図

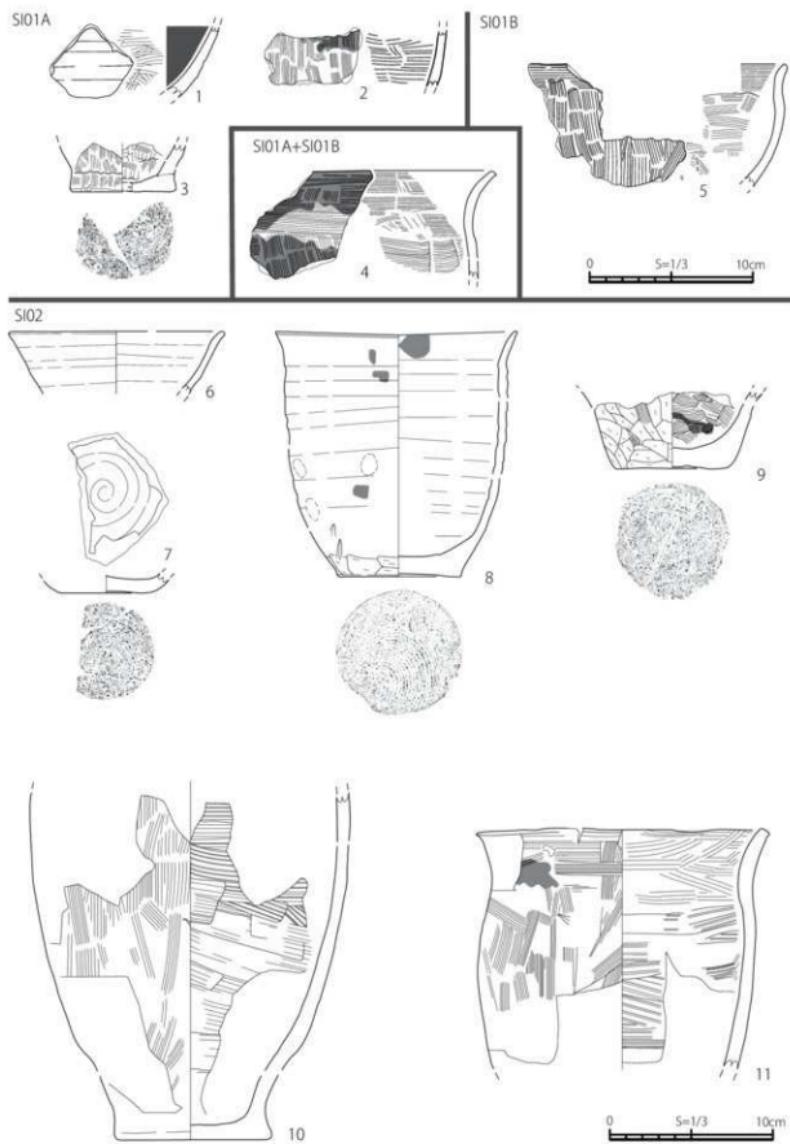


図47 土師器・擦文土器・製塩土器—1

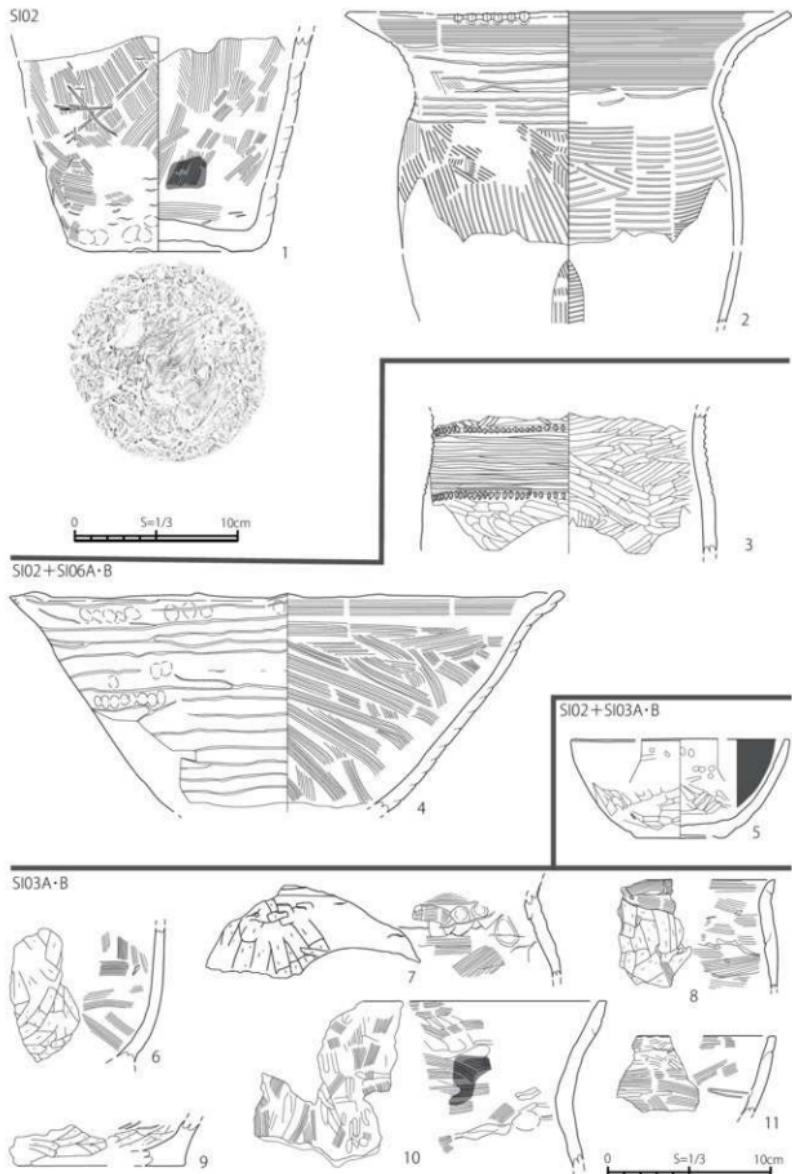


図48 土師器・擦文土器・製塩土器一2

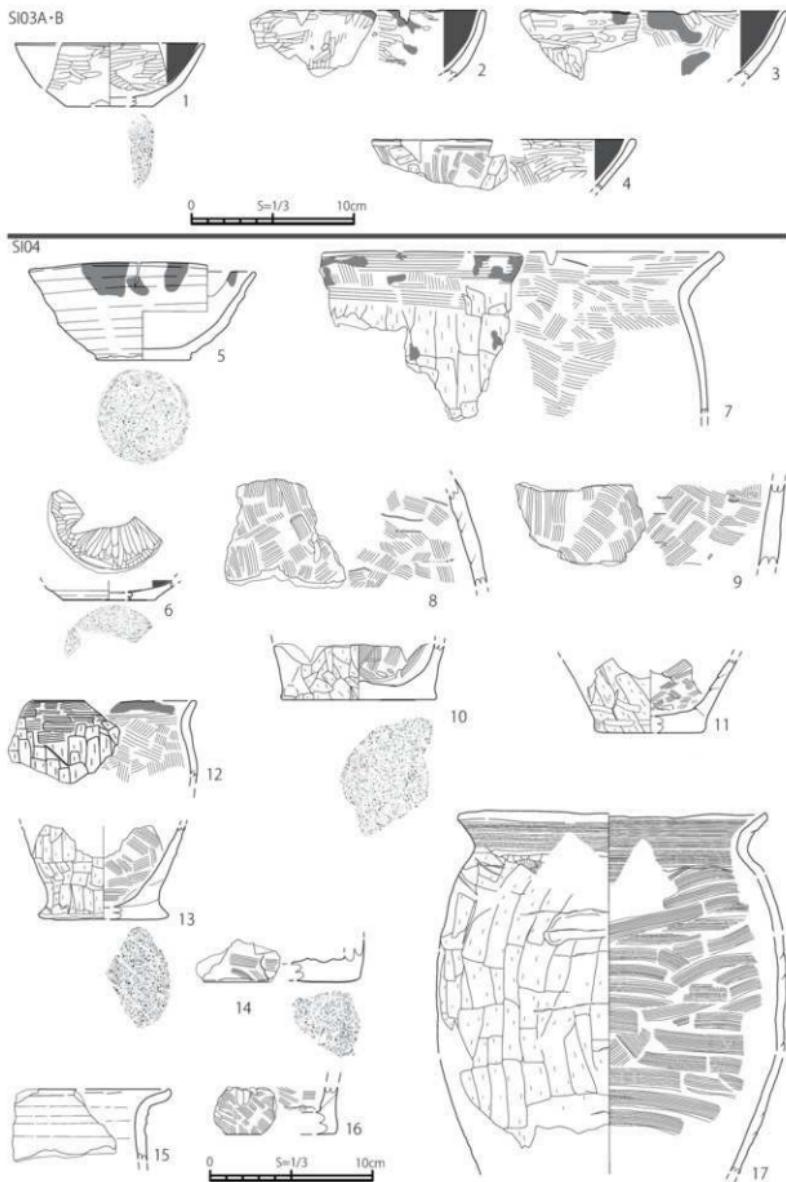


図49 土師器・擦文土器・製塙土器-3

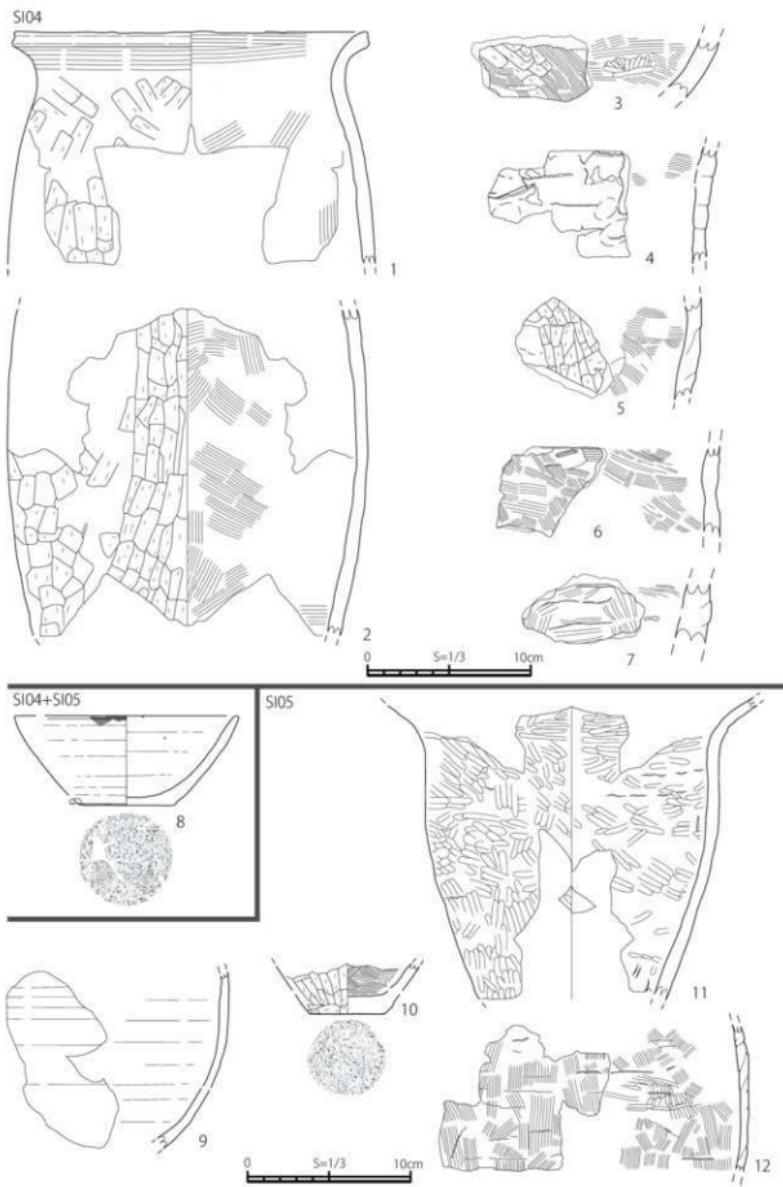


図50 土師器・擦文土器・製塙土器-4

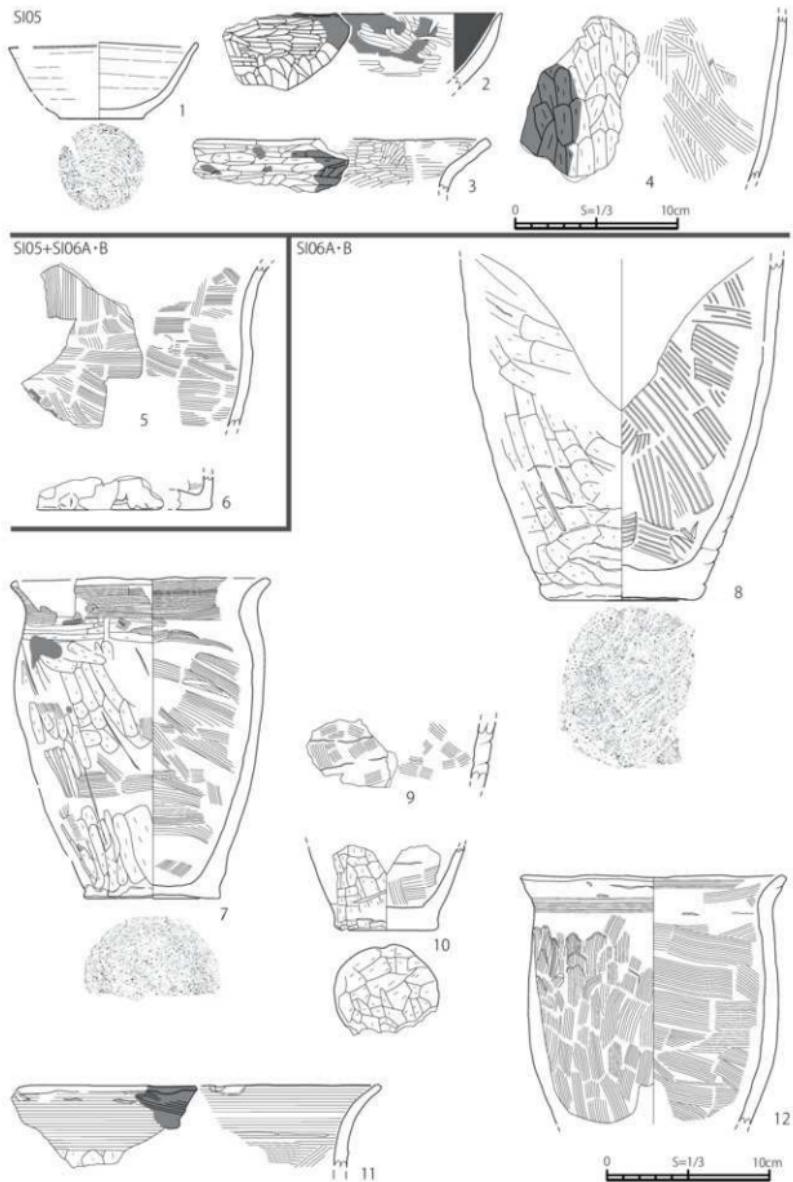


図51 土師器・擦文土器・製塩土器－5

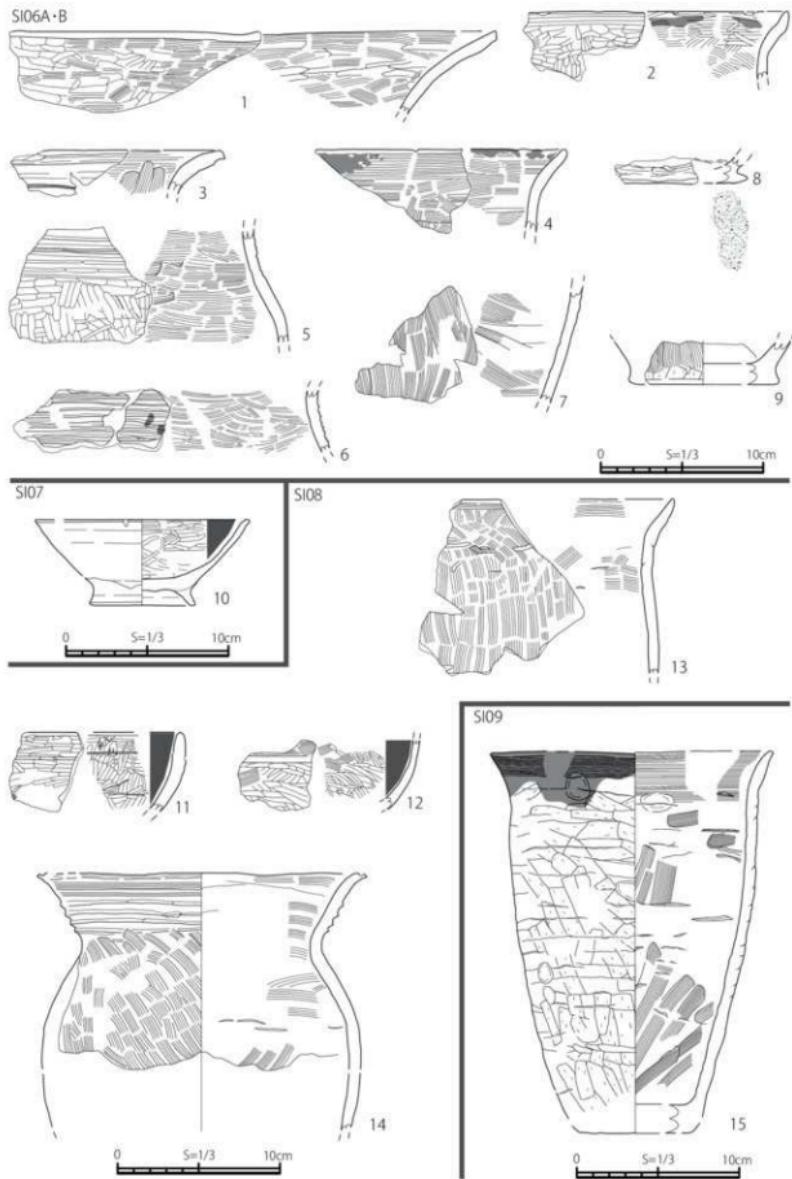


図52 土師器・擦文土器・製塩土器-6

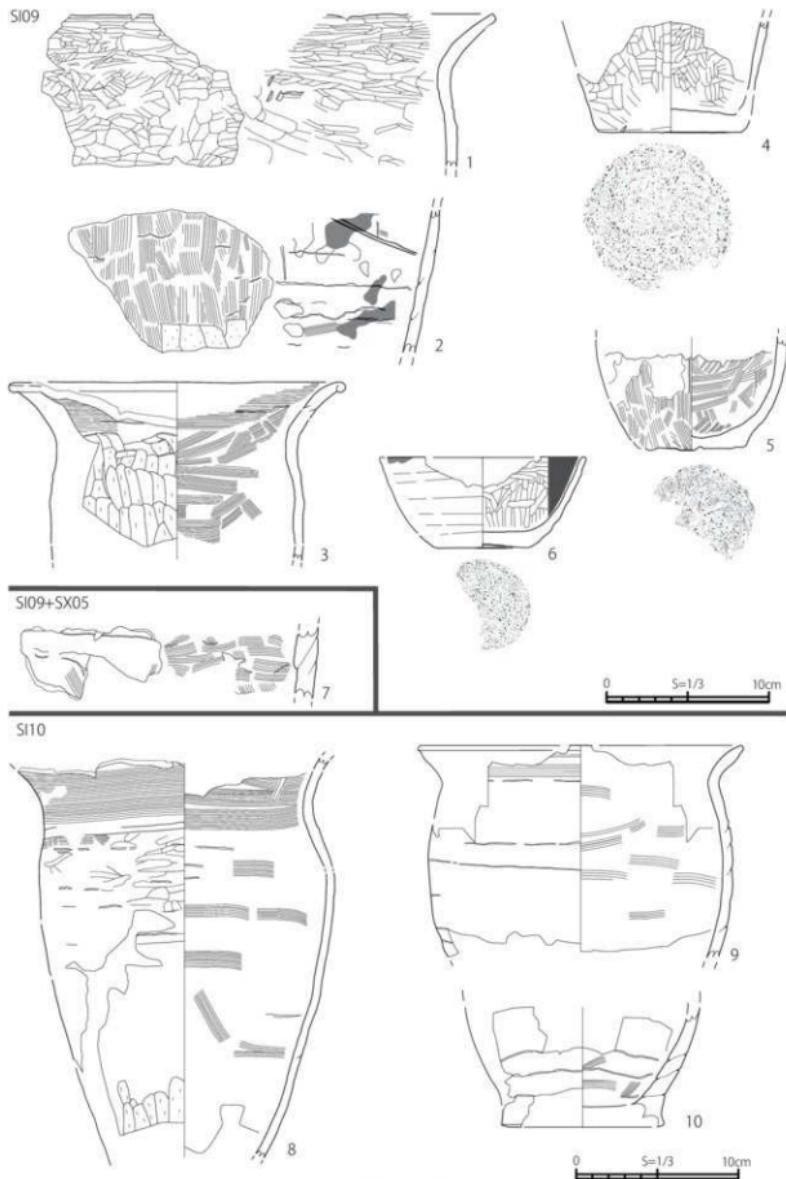


図53 土師器・擦文土器・製塩土器—7

SI10

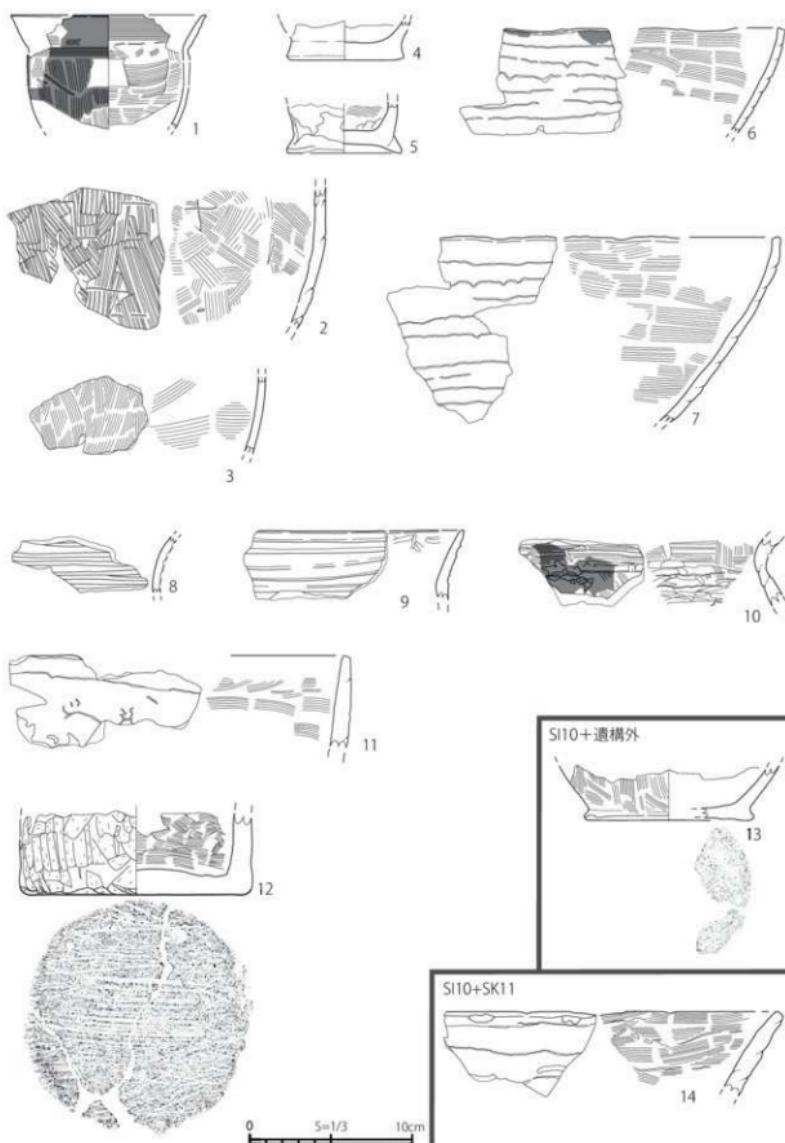


図54 土師器・擦文土器・製塩土器-8

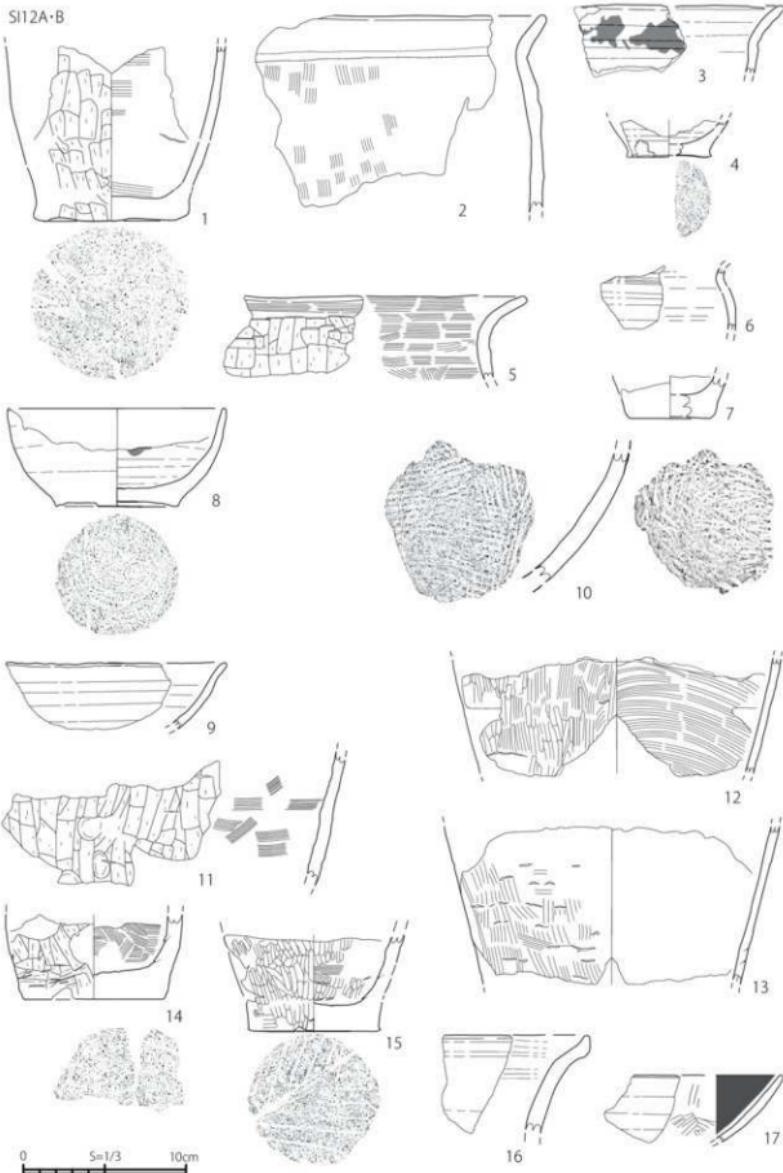


図55 土器・擦文土器・製塩土器-9

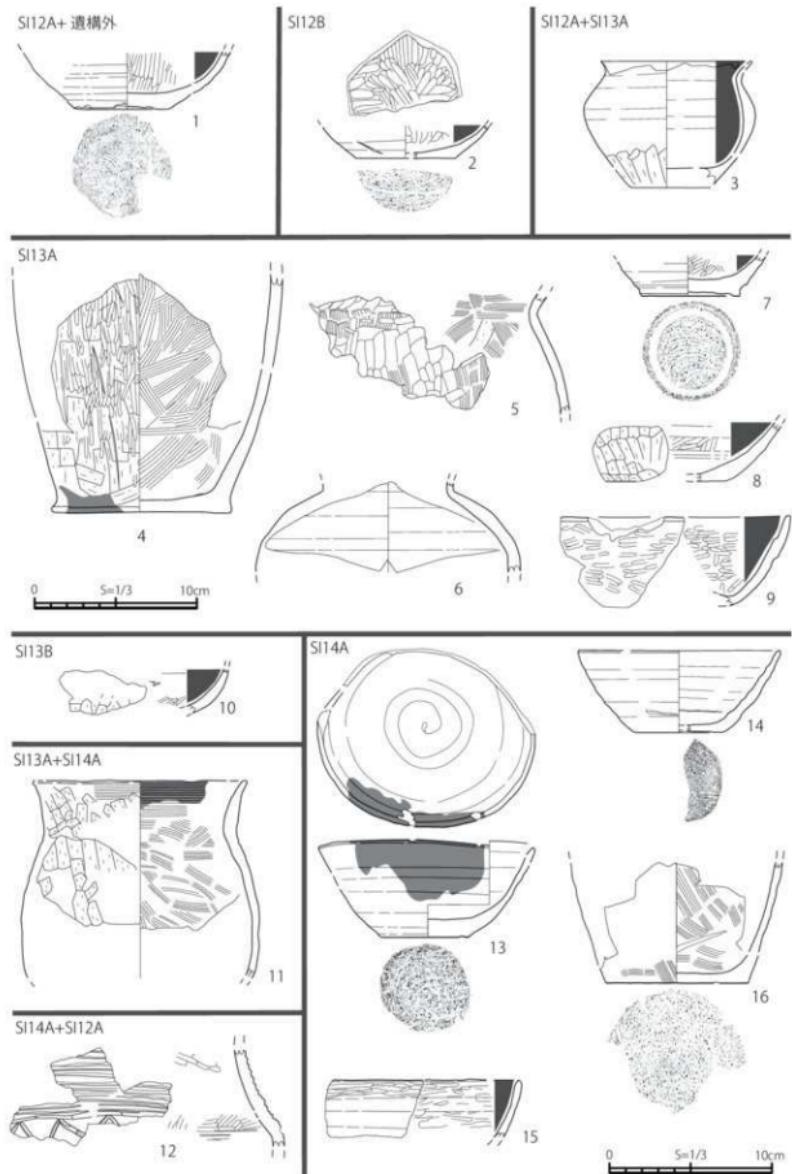
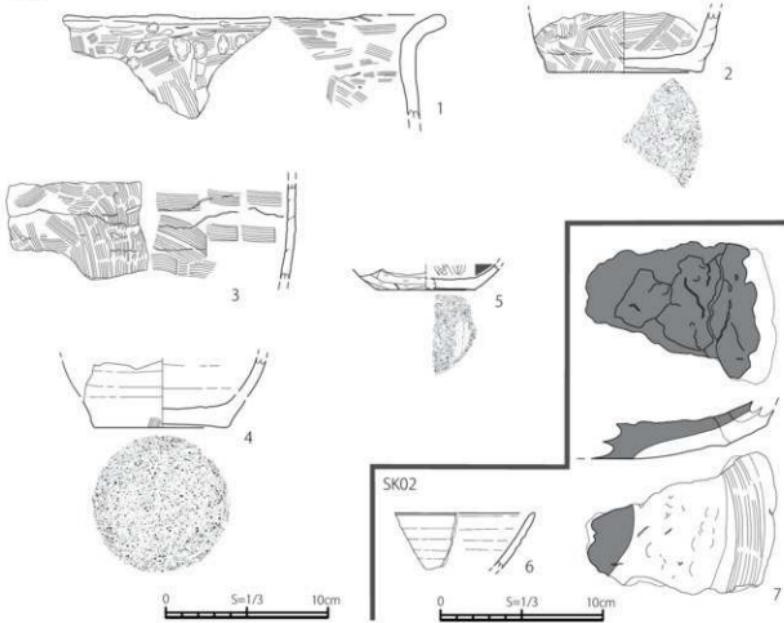


図56 土師器・擦文土器・製塩土器-10

SD01



SK05

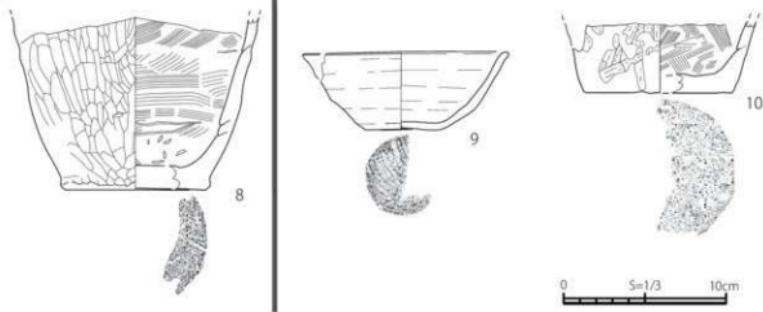
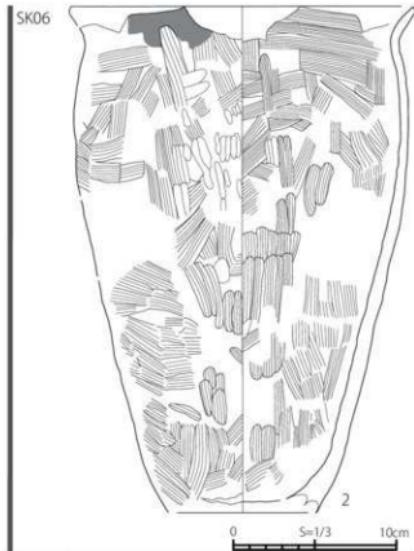
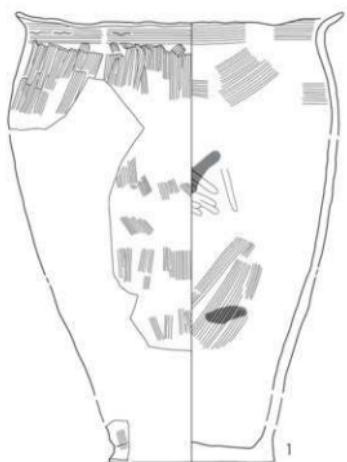
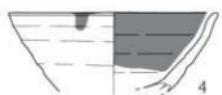


図57 土師器・擦文土器・製塩土器-11

SK06+ 遺構外

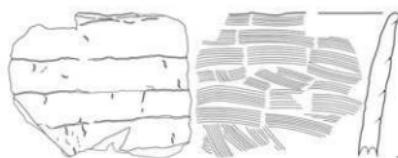
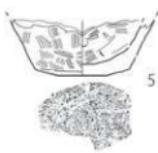


SN06



0 S=1/3 10cm

SX05



0 S=1/3 10cm

図58 土師器・擦文土器・製塩土器-12

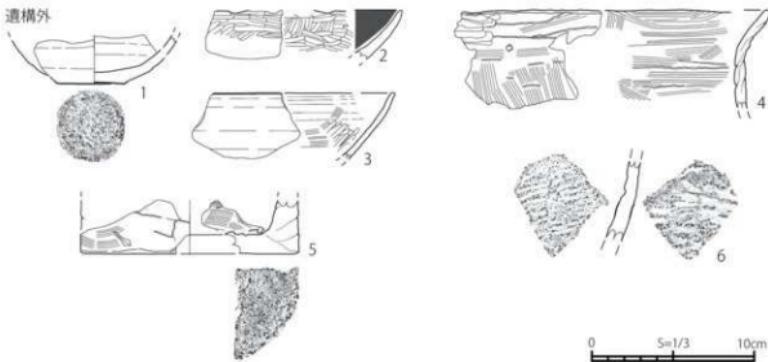


図59 土師器・擦文土器・製塩土器-13

53-1・4、図55-15がある。図53-4は胴下半から底部にかけて残存している。底部の張り出しが見られないことから、再調整後にミガキ調整を行っているものと思われる。図55-15は底部に木葉痕が観察できる。外面調整にミガキを含むものは、図48-10・11、図49-8・11・16、図50-3、図52-1・2、図53-8、図55-12、図56-4、図57-1・8、図58-1・2が挙げられる。李平下安原遺跡22号竪穴住居跡や42号竪穴住居跡から類例が出土しており、第I c期、9世紀初頭に分類されている（青森県教委1988）。本調査区出土例は、図53-3のようにケズリ調整を施すものが見られることから、李平下安原遺跡よりも後出と考えられる。また、つがる市清水遺跡SI05からも類例が出土しており（青森県教委2002）、9世紀後葉の年代観が与えられている（齋藤2008）。B：底部から緩やかに開く胴部をもち、口縁部の外反も小さいもの（図47-4・11、図48-10、図49-12、図51-11、図52-4・13・15、図56-11、図59-4）。外面調整はI・II・IIIが見られ、II・IIIが多い。C：口縁部がくの字状に屈曲外反し、口縁部は短く、口唇部と胴部上半が最大径になるもの（図49-17、図50-1・2、図51-7・12、図53-9、図54-1、図55-2・5、図56-5、図57-1、図58-1・2）。外面調整はI・II・IIIがあるが、IIIが多い。図50-1・2は同一個体である。口縁が短く強い外反を示し、口唇部は横方向からの押さえで断面角状になっているが、受け口状にはなっていない。ロクロ使用の図55-16と形態は類似するが、図55-16の胎土が精製されているのに対し、図50-1・2は小礫や砂粒を多く含み、胴部外面は全面ケズリ調整となっている。ロクロ使用窯を模倣して製作したものと思われる。D：口縁部が短く、僅かに外傾するもの（図47-5、図48-8）。外面調整はII・IIIが見られる。E：口縁部が内湾するもの（図48-11、図52-2）。外面調整はI・IIが見られる。

B～Eに関して、口縁部の短小化、屈曲の銳角化が見られるのは、Aより後出の要素と捉えることができ、形態的に9世紀後葉の資料と類似する（齋藤2008）。

底部属性は磨滅等で確認できないものを除き、図示した24点で比較すると、a：ナデ調整が8点（図47-3、図51-6・8、図52-9、図53-4、図54-5、図56-4、図57-2）、次いでb：砂底が7点（図49-10、図52-8、図55-1、図56-16、図57-10、図58-1・2）、c：ケズリ4点（図50-10、図51-10、図53-5、

図55-14)、d : 木葉痕 4点(図47-9、図49-13、図55-15、図58-5)、e : 笹葉痕と思われるもの 1点(図57-8)となった。簾状圧痕などの編組系压痕(浅田・東海林2014)は 1点も確認できなかった。

壺 : 34点図示した(図47-1・6・7、図48-5、図49-1~6、図50-8、図51-1・2、図52-11・12、図53-6、図55-8・9・17、図56-1・2・8~10・13~15、図57-5・6・9、図58-4、図59-1~3)。成形技法ではロクロ使用と非ロクロ使用に分かれる。非ロクロ使用は第8号竪穴住居跡から出土した、図52-11・12が挙げられる。11は内溝する胴部から直立する口縁部を持ち、外面上に1条の沈線が横方向に巡っているものと思われる。12は11の沈線がさらに浅くなっている。いずれも内外面ともミガキ調整が施され、内面黒色処理を施している。

ロクロ使用のものは、本調査区での主体を成す。器形は底部から緩やかに内溝するものが多い。底部は回転糸切後、切り離し部分の再調整に用いられるケズリ調整は見られない。以下、図示したものについて、黒色処理の有無と、器面調整ごとに記す。

黒色処理が施されない、非黒色処理ものは図47-6・7、図49-5、図50-8、図51-1、図53-8・9、図56-13・14、図57-6・9、図58-1、図59-1・3である。器形に歪みが大きいものが目立つことと、復元率が高いことが挙げられる。口唇部に部分的に光沢のある煤の付着が観察できるものがあり、灯明皿として最終利用されているものと思われる。

内面ミガキ調整で黒色処理が施されるものは図47-1、図49-6、図53-6、図53-17、図56-1・2である。また、内外面ミガキ調整で黒色処理が施されるものは、図48-5、図49-1~3、図51-2、図56-9・15、図59-2である。黒色処理が施されているものでも口唇部に煤の付着が観察できるものがある。非黒色処理と同様、灯明皿として転用されているものと思われる。

外面ケズリ調整で黒色処理が施されるものは図49-4、図56-8・10、図57-5である。再調整の可能性もあるが、確認できるものは底部付近だけでなく胴部全体に調整が及ぶことから、再調整のみを意識したものではなく、全体の器厚調整を意識したものと考える。

高台壺 : 2点図示した(図52-10、図56-7)。図52-10は小型の高台壺になる。ロクロ使用後、外側に張り出す高台を貼り付けている。外面にも貼付けの際の調整痕が観察できる。底面の切り離し痕は、高台貼付時にナデ調整で消えているものと思われる。内面は中央から斜め上方向に引き上げるような作りとなっているため平坦面が無い。口縁部は開き気味に立ち上がり、口唇部が僅かに外側に聞く。内面はミガキ調整後に黒色処理が施される。図56-7は底部糸切後、細い粘土紐を貼り付け、低い高台を作出している。底面の糸切痕は明瞭に残存しており、高台貼付部分のみ調整を行っていることがわかる。内面はミガキ調整で黒色処理が施される。類例としては、李平下安原遺跡48号竪穴住居跡から、いずれも内面黒色処理の高台壺が出土している。第Ⅰd期に分類されており、9世紀代の年代が与えられている(青森県教委1988)。

壺 : 2点図示した(図56-3・6)。3は第12号A竪穴住居跡と第13号A竪穴住居跡から出土したものが接合している。ロクロ使用で、器高に対して口縁が広く聞く小型の広口壺になる。口縁部は外反するが全て欠損している。底部付近には再調整を施した縦方向のヘラケズリが観察できる。内面は黒色処理を施しているものと思われる。6は須恵器長頸壺の模倣と思われるもので、胴部破片のみ出土した。ロクロ使用で、大きく屈曲する頸部との境界が僅かに確認できる。外面は二次被熱による磨滅が顕著に観察できる。

塙：5点図示した（図48-4、図54-6・7、図57-7、図58-6）。図48-4は第2号竪穴住居跡と第6号竪穴住居跡から出土したものが接合している。口縁部まで大きく開き、口唇部でさらに外反する。外面は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、輪積痕もそのまま残されているが、内面は丁寧なナデ調整が施されている。図54-6・7は同一個体と考えられる。成形技法や調整は図48-4と同様だが、口縁部は口唇部に向かって緩やかに内湾する点が異なる。6と7では口唇部の形状が、6は外側に削がれるように傾斜しているのに対し、7は内側に傾斜する。このため口唇部は場所によって歪みが生じていることが想定される。図57-7は塙としたが、諸特徴が他と大きく異なる。胴部～底部にかけての残存で、底部外面に強い二次被熱痕が観察できる。内面は全面被熱による剥離で失われており、かなり強い加熱が行われたことを示唆している。底部外面は指頭圧痕が観察でき、明瞭な調整は観察できないが、胴部の境界に帯状の高まりがあり、高まりの上部はナデ調整が施されている。器厚も厚く、異質な存在となっている。図58-6は口唇部に向かい緩やかに内湾する。口唇部は平坦に整えられている。外面下部はケズリ調整、内面はミガキ調整が観察できるが、両面とも輪積痕が観察でき、丁寧な調整とは言えない仕上がりになっている。

擦文土器：本報告では、基本的に土師器と成形・整形技法に共通点を有するが、口縁部を中心に、器面を全周する意図的な装飾効果を施す土器を擦文土器とした。口縁部から胴部最大径にかけて、断面形が段階状になる段状沈線、もしくは棒状工具による多条の横走沈線を巡らるのが基本的な施文となる。これらは成形時に口縁部を大きく外反、もしくは内湾させるための屈曲部に生じた段差を起源とし、次第に装飾化する過程で数が増加し、段差が段状沈線へ、そして棒状工具による沈線へと変化したものと捉えられる。また、多条横走沈線の施文範囲は、口縁部に限定的であったものが、次第に胴部最大径まで下ってくる点は、時間差によるものと理解できる。そして器形の変化として、口縁部と胴部の境界が明確であったものが、次第に境界が不明瞭になる変化に合わせ、刻目列による区画が用いられたり、鋸歯文を加えるといった、新たな加飾に繋がっていったものと捉えられる。以上の基準を基に、擦文土器と判別可能な11点を図示した。

図48-2は大型で、口縁部が大きく開き、口唇部には部分的に刻目列を施文する。口唇部直下からナデ調整だけの無文部分を持ち、そこから口縁部・胴部境界より少し下部まで、横走する10条程の段状沈線が巡る。沈線間は一定ではなく、歪みが大きい部分も存在する。胴部外面と内面はハケメ調整が施される。類例として青森市江渡遺跡SI-02カマド出土土師器に形態が挙げられ、9世紀中葉の年代が与えられている（青森市教委2005、斎藤2008）。図48-3は、口縁部・胴部境界から胴部最大径の間に、横走する10条程の段状沈線が巡る。横走沈線の上下には刻目列が巡り、文様帶の区画を意図したものと思われる。上部刻目列の上には2本1単位の鋸歯文が施される。内外面ともミガキ調整が施される。図52-3は口縁部破片である。口唇部直下に段状沈線が、屈曲の変化点を通るように沈線がそれぞれ確認できる。内外面ともにナデ調整が施される。図52-5は口縁部・胴部境界まで段状沈線が8条確認できる。沈線間は一定ではない。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整となっている。図52-6は段状沈線が8条確認できる。器厚や施文方法、色調などから、図56-12と同一個体の可能性が高い。図52-14は口縁部から胴部下半まで残存する。胴部は最大径まで丸みを帯び、口縁部・胴部境界で大きく括れる。口縁部は大きく外反し、くの字状になる。口唇端部には沈線状の歪みが確認できる。段状沈線は約4条確認でき、口縁部内に収まっている。沈線下端は胴部のナデ調整が被ってい

る。器面には二次被熱による磨滅が観察できる。図54-2は胴部下半と思われる破片で、図48-2と諸特徴が似ており、同一個体の可能性がある。図54-8・9は同一個体の可能性が高く、小型の部類に入る。9は二次被熱による器面磨滅が著しい。口唇部下から段状沈線が7条確認できる。図54-10は口縁部・胴部境界をわずかに超えるところまで沈線が施文される。間隔が広く、2条のみ確認できる。図56-12は横走する段状沈線が約10条確認できる。最下部の沈線は外と比べ鋭利に入っており、区画の効果がある。沈線下に鋸歯文が施文される。施文具は横走沈線と同一と思われる。

製塙土器：外面は輪積痕を残すものが多いが、内面は丁寧なナデ調整を施している。破片での出土が目立つ。これは二次被熱痕が強いものほど細かく破碎しているため、被熱による劣化の影響が大きいものと推測する。全体像を確認できるような復元はできなかった。外面の輪積痕が明瞭で、二次被熱痕も観察できる。平内町大沢遺跡(青森県教委2005)で出土したような、口縁部が大きく外反する形態は確認できなかった。底部は柵目痕が観察できるものが多い。製塙土器と判別可能な12点を図示した。以下、部位ごとに詳細を述べる。

口縁部は3点図示した。図54-11、図58-7は外傾する口縁を持ち口唇部が先細りとなる。一方、図54-14は、外傾の度合いが前の2点より大きい。

胴部破片は6点図示した。図50-4で、指頭圧痕が残存する。図50-5は外面にケズリ調整が、図50-6・7、図51-9、図53-7はナデ調整が施される。

胴部から底部にかけては3点図示した。図48-2は基本的に外面調整は行われず、輪積痕が明瞭に観察できるが、刻書が施される部分のみナデ調整が施されている。刻書は鋭利な先端を持つ工具を用い、×を施文後、×の交点の上を通るように水平に刻んでいる。内面はナデ調整となっている。底部は上げ底で、底面には工具痕が残されている。図54-12は底面が平坦で、柵目痕が明瞭に観察できる。外面はケズリ調整を施している。図59-5も平底で、胴部は垂直に立ち上がる。底部は使用によると思われる磨滅が観察できる。

(浅田)

(2)須恵器(図60~62)

16点図示した。いずれも破片での出土であり、器形復元できたものは少ない。胎土分析を行っていないため、産地推定の根拠は肉眼観察による特徴観察のみであるが、最寄りの古代須恵器窯跡である五所川原窯跡と認定できるものは、1点も確認できなかったことが最大の特徴といえる。以下、器種毎に説明を行う。

壺：2点図示した(図60-3・4)。いずれも第6号堅穴住居跡から出土している。口縁部は欠損しており器高は復元できない。切り離しはいずれも回転系切で、底径は復元値で6.6cmと6.4cmである。器厚は3が薄手なのに対し、4はやや底部が厚くなる。胎土は精製されているが、焼成はやや軟質に仕上がっており、色調は3が灰白色、4はそれよりやや暗い。3は内面に平滑部分が観察できる。ロクロ使用に伴う凸部分が磨れており、転用観として用いられた可能性がある。五所川原窯跡に特徴的見られる

甕：12点図示した。図61-1は胴部から底部まで接合できた。外面は、平行タタキ調整の上から斜方向のカキメが施される。カキメは一定間隔で施されており、螺旋状に施文されている可能性がある。

底部は丸底で、使用によるものと思われる磨減が観察できる。図61-3は、口縁部と胴部の境界から胴上部にかけての破片で、外面は平行タタキ調整の上から横方向、ないしは斜方向のカキメが施される。内面は円弧状の当て具痕が観察できる。これは円形の当て具の端部を用い、横方向にずらしながら連続使用したものと思われる。胎土には白色粒の混入が目立つ。内面は平滑部分が確認でき、転用硯として用いられたものと思われる。これらと同一個体と思われるのが、図60-1・5、図62-1・6である。図62-3は口縁部から胴部にかけて残存している。外傾する口縁を持ち、口唇部が大きく外側に張り出す。胴部は丸みを帯び、外面に平行タタキ、内面に平行当て具痕が観察できる。平行当て具痕の平行線内に斜行する筋を観察することができる。外面は全体的に自然釉がかかり、内面にも口縁部から胴部にかけて器面が荒れる部分がある。このため焼成温度は相当高かったことが想定される。なお図60-2は同一個体と思われる。

図62-2・5は胴部破片で、同一個体と考えられる。外面は平行タタキで、平行線の中に直交する筋が観察できる。内面は平行当て具痕が観察できる。内外面ともに光沢があり、硬く焼き縮まっていることから、焼成時の温度が高かったものと思われる。胎土には白色の小角礫が混入している。

図60-6・7は同一個体と考えられる。本調査区内では最大の大きさとなる。口縁部はロクロナデ、胴部外面は平行タタキとなっている。二次被熱を受けており器面の剥落を起こしている部分もある。内面は口縁部はロクロナデ、下部に一部ミガキが施される。胴部は平行当て具痕が観察される。

壺：2点図示した。図61-2は壺の高台部分と思われる。胴部の破断面と高台端部には、意図的に打ち欠いたと思われる敲打痕が見られるが、その部分も磨り込まれており、稜線が丸まっている。内底面と高台内面の両面には平滑部分が確認できる。このため転用硯として用いられたものと思われる。平滑部分は調整痕が全く確認できないぐらい磨り込まれており、使用頻度の高さを物語っている。

図62-4は小型の長頸壺である。口縁部は歪みが大きく、波打つような形状である。胴部は張り出し、胴下半部にかけて器厚が増している。

(浅田)

(3) 繩文土器(図63)

繩文時代の遺構は溝状土坑が存在する。しかし溝状土坑からの出土は無く、全て古代の遺構堆積土と第II・III層からの出土となっている。古代の遺構から出土したものも、繩文時代から見ると後世の搅乱にあたるため、全て遺構外から出土したものとして取り扱い、まとめて図示した。

土器の諸特徴を基にI～V群に分類した。以下、分類毎に記載する。

I群：胎土に纖維が顕著に混入し、肉眼観察で他との差異を見出しやすい。前期末葉、円筒下層d式に比定される(図63-1～3)。図63-1は口縁部で、僅かに外反し、胴部との境界に連続する刺突列を持つ。施文具は、先端が爪形に湾曲した半截竹管状の棒状工具を用いている。図63-3は図63-1と胎土や焼成が似ており、同一個体の可能性がある。施文原体は多軸絡条体と思われるもので、短い距離で縱方向に回転させている。

II群：中期前葉、円筒上層b式に比定される。2点図示した(図63-4・5)。図63-4・5はいずれも胎土に砂粒が多量混入しており、同一個体の可能性がある。文様施文は隆帶と先端が曲線となるヘラ状工具による連続刺突が観察できる。いずれも隆帶が観察できる。

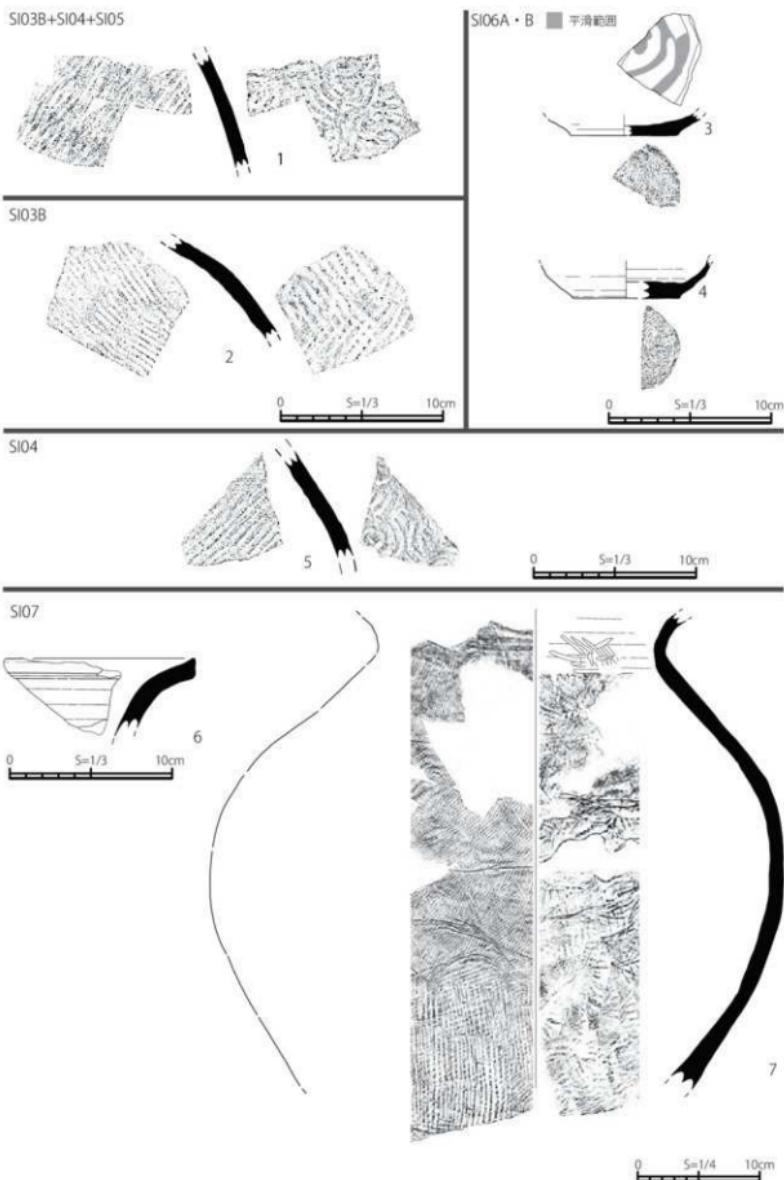


図60 須恵器-1

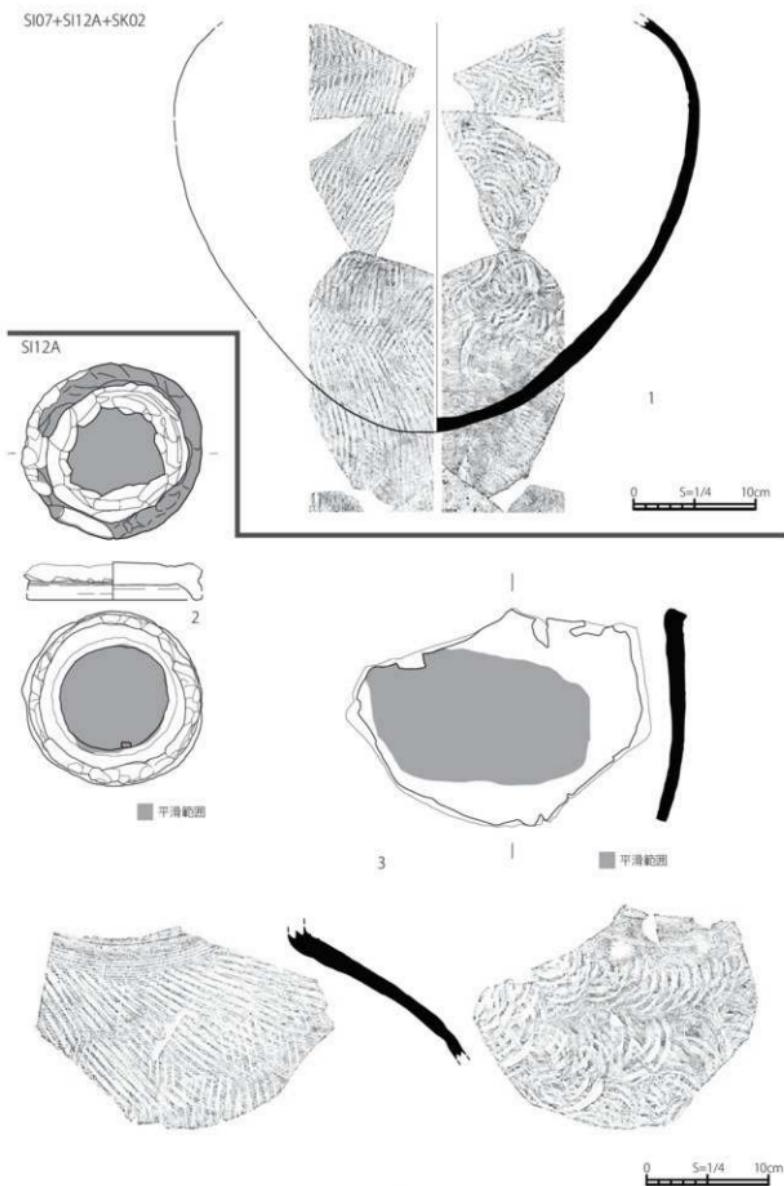


図61 須恵器-2

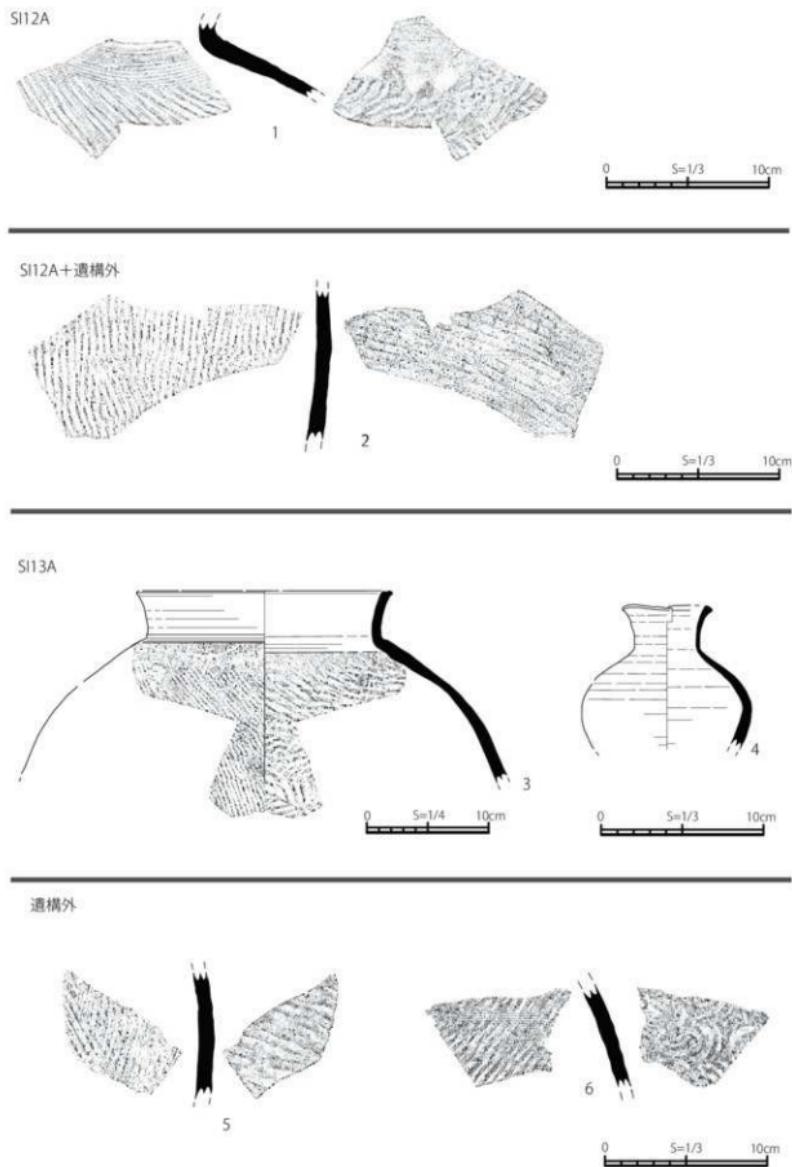


図62 須恵器-3

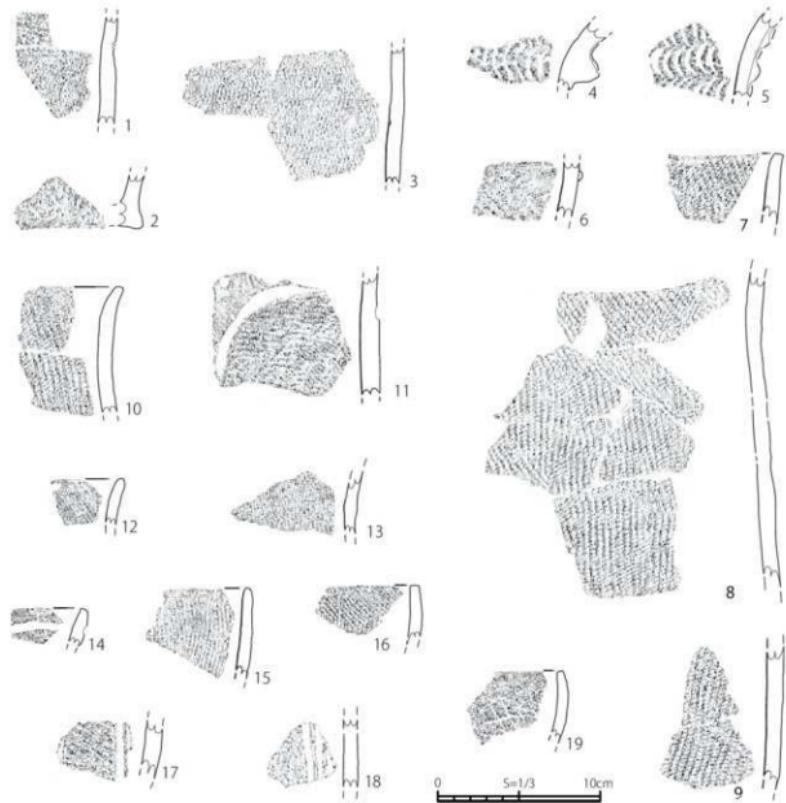


図63 繩文土器

III群：中期中葉、円筒上層d式に比定される。1点図示した。図63-6は器面に細い粘土紐貼付が観察でき、端部は剥離している。胎土はII群に類似しており、砂粒の混入が目立つ。

IV群：中期後葉から末葉にかけてのものと思われる。7点図示した(図63-7～11・17・18)。焼成が良好で、硬質感がある。口唇部は平坦に面取りされている。図63-7～9は同一個体と考えられる。口唇部は面取りされ断面角状となる。口唇部は緩やかに外傾し、緩やかに湾曲する胴部を持つ。10は大きく外反する口縁部となる。11は胴部破片で、湾曲する沈線で磨消部分と縄文を区画している。17・18は縦方向に沈線施文が施される。

V群：後期以降に比定される。6点図示した(図63-12～16・19)。12・13・15・16は原体が細かく、IV群とは異なる。14は断面角状の口唇部下に横走する沈線施文が施される。15・16は内湾する口縁を

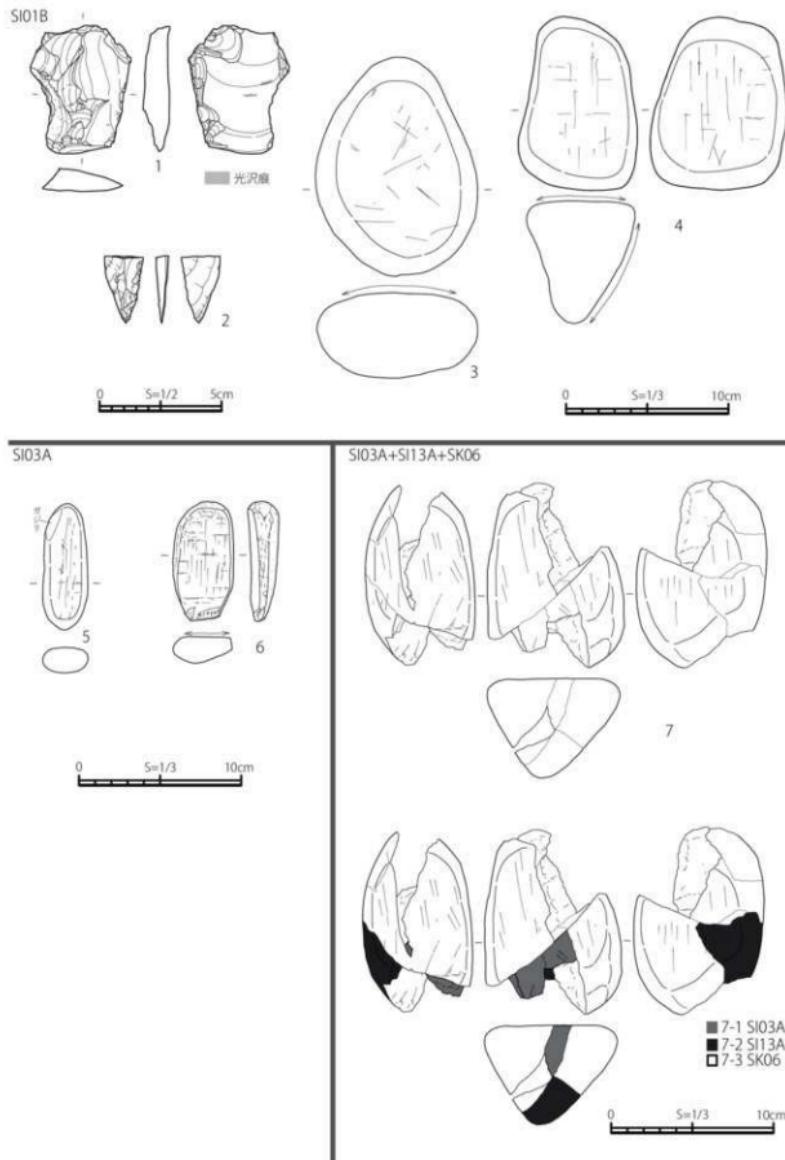


図64 石器-1

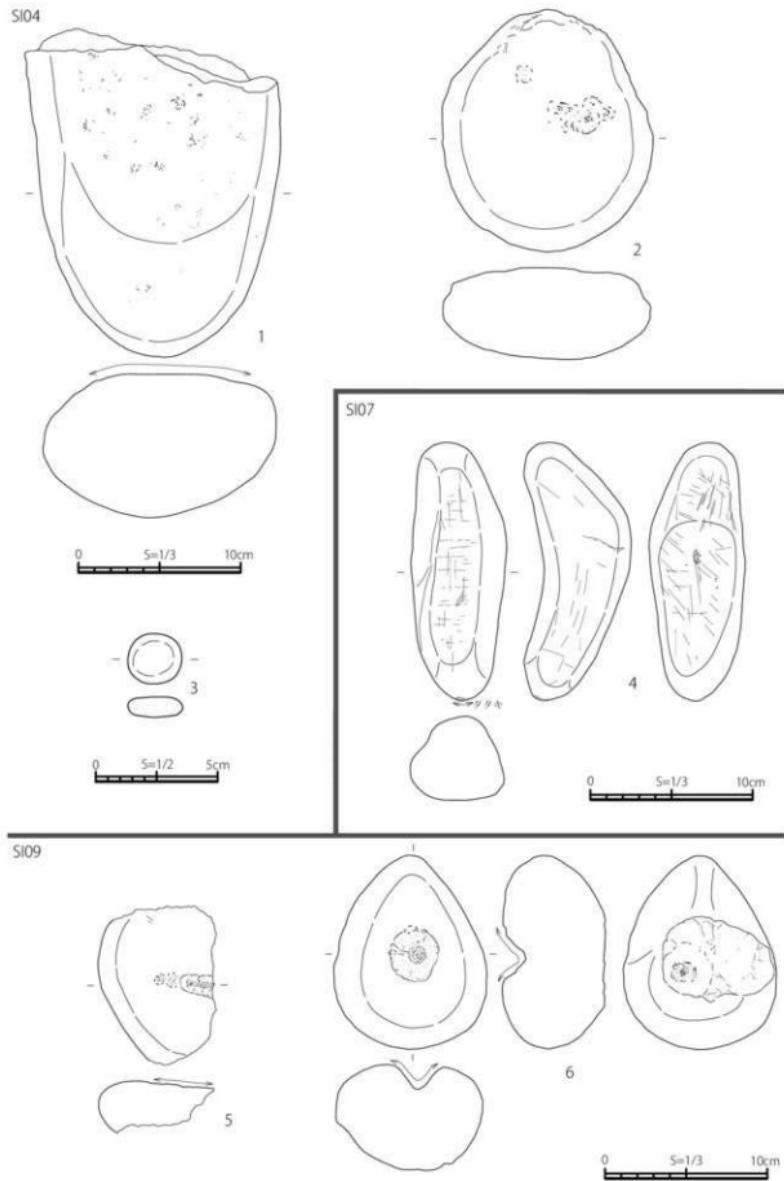


図65 石器-2

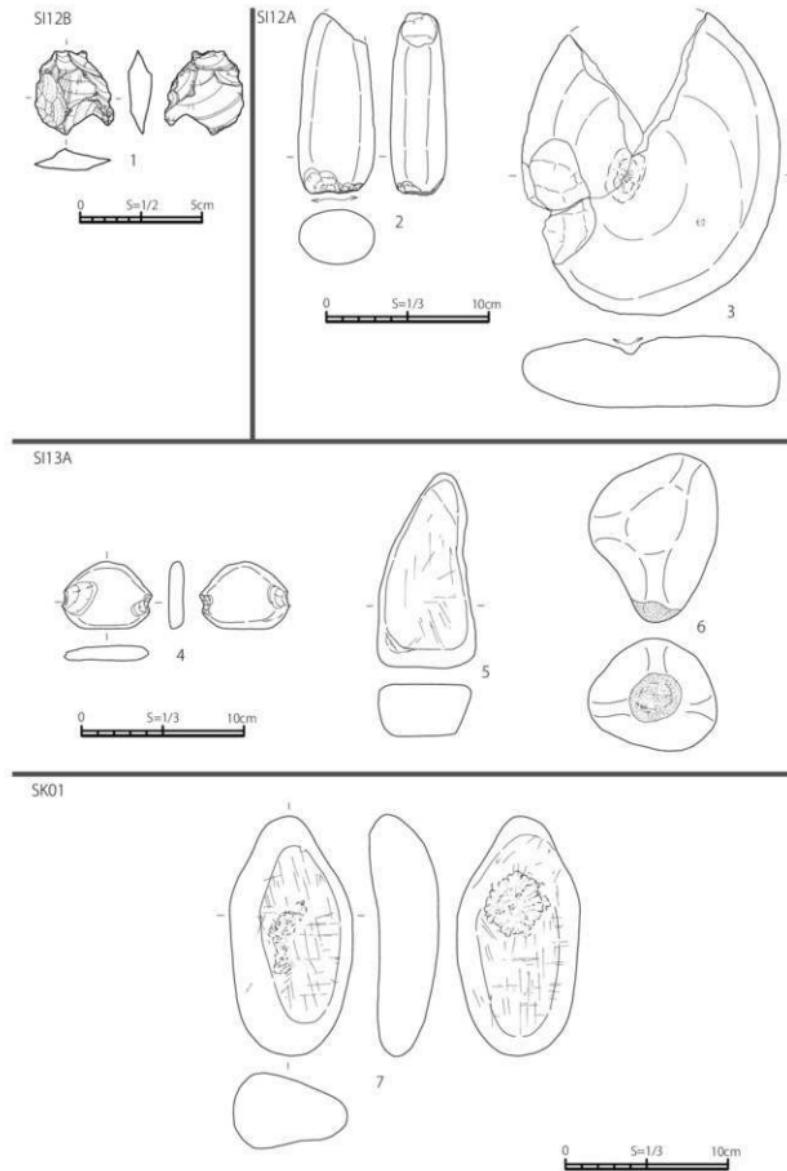


図66 石器-3

遺構外

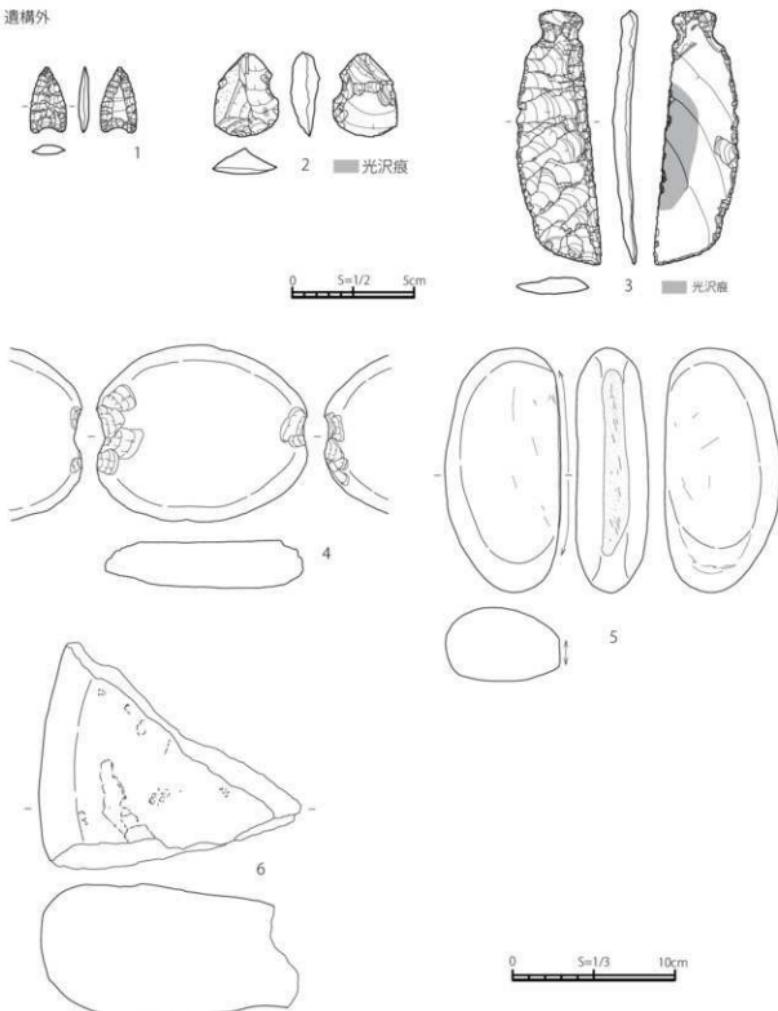


図67 石器-4

持つ。網目状撚糸文が施される19も同様である。12・15は口唇部が先細りとなる。内面は丁寧なミガキが施される。

(浅田)

(4)石器(図64~67)

今回の調査で出土した石器は45点である。これには縄文時代に属するものと平安時代に属するものがある。大半は平安時代の遺構に伴って出土したが、ほとんどが縄文時代の石器である。平安時代に属することが確実な石器は砥石であるが、台石、搬入礫に平安時代と思われるものがある。以下、器種ごとに記述する。

石鎌(図67-1) 1点出土した。小形の凹基無茎鎌で、丁寧な調整が施されている。完形である。

石匙(図67-2・3) 2点出土した。2は小形の横型石匙である。器体の一部に光沢痕が見られる。つまみ部の抉りは浅いことや、刃部調整などに大石平型石鎌と似る部分もある。3は松原型石匙である。全体に丁寧な作りである。裏面左側側に光沢痕が見られる。

不定形石器(図64-1・2) 4点出土し、2点を図示した。1は表面左側縁と裏面右側縁に浅い急斜度調整が施されているもので、器体の一部に光沢痕が見られた。2は何かの石器の破片であり、剥片の右側邊に連続する微細剝離痕が見られた。

Uフレイク・剥片(図66-1) Uフレイク2点と剥片10点が出土し、うち黒曜石の剥片1点を図示した。分析はしていない。

磨石(図67-5) 2点出土し、うち1点を図示した。全体に器面は滑らかであるが、とくに磨面に顕著である。石材は花崗閃緑岩である。

敲石(図66-2・6) 2点出土した。2は棒状礫の一端、6は不整梢円礫の一端を利用したものである。石材はとともに凝灰岩である。

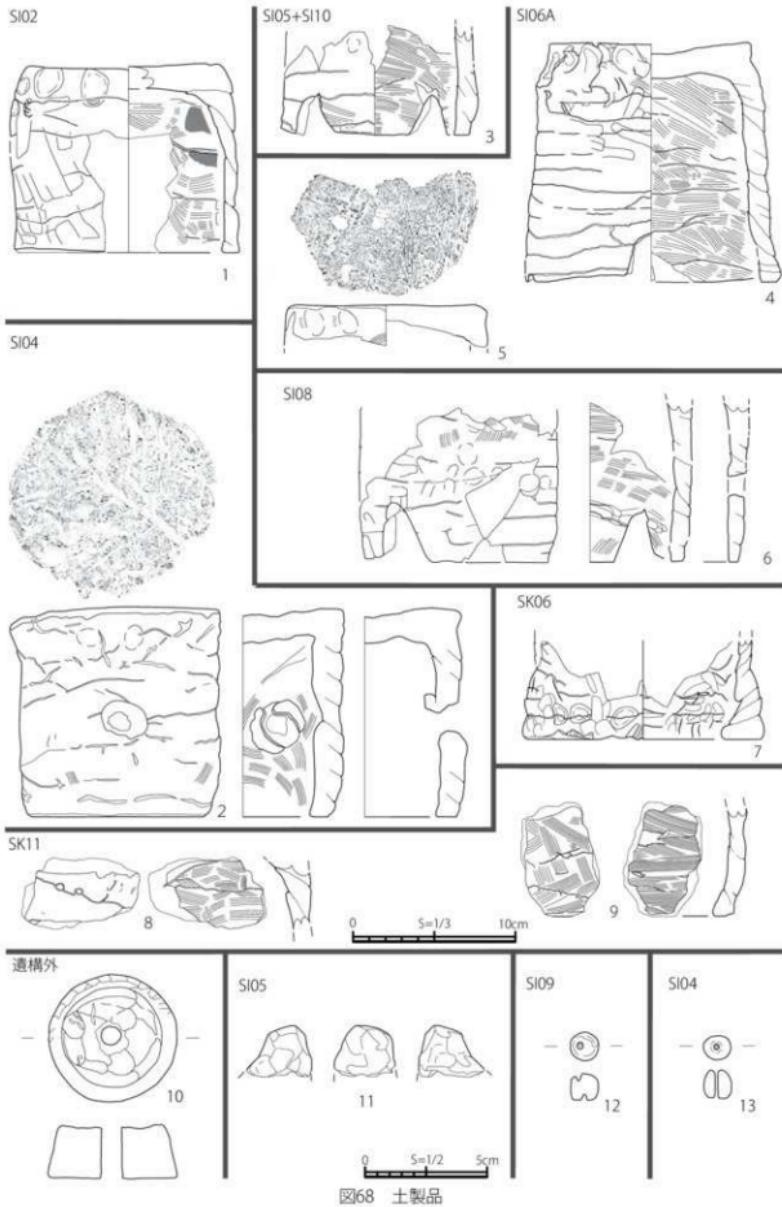
凹石(図65-5・6) 3点出土し、うち2点を図示した。5は凝灰岩の破礫を利用したもので、片面に凹孔が見られる。6は両面に凹孔が見られるもので、一方の面には深さ12mmの掻鉢状の凹孔が見られる。石材は安山岩である。

石錘(図66-4、図67-4) 2点出土した。2点とも長軸両端を打ち欠いて作られている。石材は凝灰岩である。

台石(図65-1、図66-3、図67-6) 3点出土した。図65-1は平坦面に敲打痕がみられる。図66-3は扁平礫の片面に敲打による深い凹孔が見られるもので、大きさから台石とした。図67-6は平坦な面に打痕が見られる。

砥石(図64-4~7、図65-4、図66-5・7) 平安時代の遺構から7点出土した。第1号竪穴住居跡からは流紋岩製の2面利用の砥石が出土した。第3号竪穴住居跡からは凝灰岩製の砥石が3点出土した。うち2点は8cmに満たない小形のものである(図64-5・6)。また、図64-7は第3号・第13号竪穴住居跡および第6号土坑から出土した破片が接合したもので、3面利用の砥石である。第7号竪穴住居跡から出土したものはバナナ状の形態の鍬を素材としたもので、3面に研ぎ痕が見られる。凝灰岩製である。第13号竪穴住居跡および第1号土坑からは流紋岩製のものが出土した。

搬入礫(図64-3、65-2・3) 7点出土し、3点を図示した。明確な利用の痕跡が見られないものを



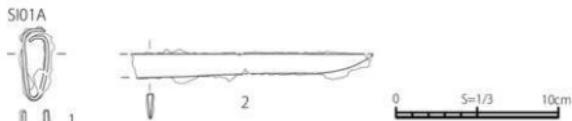


図69 鉄製品

一括した。図65-2は玉髓質の扁平な白い小石である。遊具(基石)の可能性が考えられる。図64-3は器面がいくぶん平滑であることから砥石的な利用が、図65-3は台石的な利用が考えられるものの、推測の域を出ない。

(畠山)

(5)土製品(図68)

土製支脚：土製品の主体を成すものである。破片での出土も多く、磨滅の進行により製塙土器との判別が困難なものも存在した。外面調整は積極的に行わず、板状の円形粘土板上に粘土紐を積み上げる製作技法や、輪積痕を明瞭に残す整形は製塙土器と共通だが、内面の調整が弱いことや、透かしを入れる点で製塙土器と大きく異なる。粘土紐の接合が外傾接合であること、2のように天井部に木葉痕があることから、製作時は製塙土器と同様に、天地を返し、天井部を底にして製作していたと考えられる。

個別記載にあたり、分類及び用語の表現については柏木大延による基準を用いた(柏木2013)。ここでは図示可能な9点を提示した(図68-1～9)。本調査区で出土した土製支脚は全て円筒状支脚に分類される。本遺跡周辺地域における土製支脚の形態としては一般的な形態となる。天井部の形態は、天井部が残存する1～5のいずれも、全て天井部を覆うと考えられ、A II類に分離される。6は体部に円孔と脚部の切込み両方を持つA c類に分類される。2は円孔が確認できるA II b類に、3・4は透かしが確認できるA II d類に分類される。7～9は胴部から脚部の破片で、詳細な分類はできない。7は接地面が厚くなっている、9は内湾する特徴がある。

その他：土製紡錘車、土鉢、土玉が出土している(図68-10～13)。10は土製紡錘車で表採資料となる。全面ミガキ調整を施しているものと思われるが、二次被熱による磨滅により確認できない部分がある。断面形は逆台形で、上辺側はやや窪む。文様等は確認できなかった。11は土鉢と思われるものである。器面調整は明瞭でなく、穿孔も確認できない。特徴に欠けるため判断に苦しむが、現段階では紐部の先端部と想定しておきたい。12・13は土玉である。13は丸玉で、細い鋭利な棒状工具で直線的な穿孔を施しているのが観察できる。一方、12は土玉の形態をしているが、完全に穿孔していない点で13と異なる。先端の鋭利な棒状工具を円筒状の粘土に刺しているが、表裏面とも中心まで届いていない。また穿孔位置は表裏面でそれぞれおり、完全に穿孔しようとした痕跡が見当たらない。このため単なる失敗品ではなく、玉を模倣した製品である可能性も考慮しておく必要がある。

(浅田)

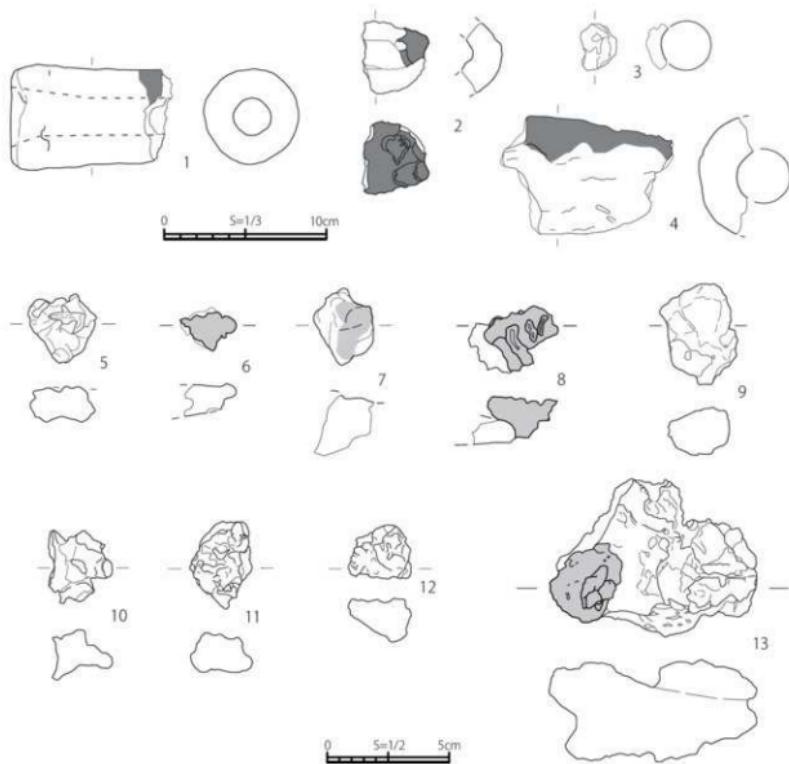


図70 鉄生産関連遺物

(6)鉄製品(図69)

2点、34.2g出土し、全て図示した(図69-1・2)。いずれも第1号A堅穴住居跡からの出土である。1は床面から出土した責金具である。帯状の板を3回折り曲げ、角の丸い二等辺三角形にし、端部を重ね合わせている。2は刀子である。刃は欠損しており不明である。棟はほぼ水平となっている。床面と柱穴からの出土で離れているが、本調査での鉄製品の出土はこれだけであること、責金具が刀子の刃幅に合うことから、元は一組であった可能性がある。

(浅田)

(7)鉄生産関連遺物(図70)

本調査区で出土した鉄生産関連遺物としては、鉄製品、羽口、炉壁・羽口溶解物、焼成粘土塊、鐵

表2 石器・石材一覧

	石鏃	石匙	不定形 石器	U型 片	剥片	磨石	敲石	凹石	石鍤	砥石	台石	搬入繩	小計
珪質頁岩	1	2	4	2	9								18
黒曜石					1								1
玉 鮎											1		1
凝灰岩						2	2	2	4		2		12
安山岩						1				3	3		7
流紋岩									3		1		4
花崗閃緑岩					2								2
小計	1	2	4	2	10	2	2	3	2	7	3	7	45

治渾、砥石がある。以下、項目毎に諸特徴を記載する。なお、鉄製品は(6)鉄製品の項で、砥石は(4)石器の項で述べているため割愛する。

羽口：4点図示した(図70-1～4)。いずれも破損しているため全体像は不明である。また溶損角度を検出することもできなかった。1は胴部から基部が残存している。基部はやや径が大きくなる。内径は2.3cmを測る。2は先端部で外面は溶損が確認できる。3は遺存状況が悪いが、胴部内面と思われる。内径は3.0cmと推測する。4は胴部で、内径は3.3cmと推測する。このように内径は2～4cmの間に収まることから、鍛冶炉に伴うものと捉えることができる。1については3cmを下回ることから、鍛錬鍛冶炉用であった可能性が挙げられる。

炉壁溶解物：2点図示した(図70-5・6)。強い被熱を受け炉壁や羽口が溶解した部分で、発泡しているため軽い。6は第IV層からの出土となっているが、周辺に関連遺構もない地点であることから、耕作や木根による影響を受けた可能性が考えられる。

炉壁：1点図示した(図70-7)。表面は溶融し光沢がある。表面直下は気泡状の空隙が形成されている。小片のため部位は判別できないが、カマドでの被熱はこれほど高温にはならないことから炉壁と判断した。

焼成粘土塊：1点図示した(図70-9)。カマドでも精製可能なものであるが、よく被熱していることから炉壁になる可能性もあるため、本項で記載した。被熱による磨滅が著しく、機能時の情報は得られなかった。

鍛冶滓：5点図示した(図70-8・10～13)。8は鍛冶滓に羽口先端部が着着したもので、羽口溶解物が滓の上部に確認できる。10は鍛冶滓(含鉄)で、錆膨れによる破損が起きている。11・12は第5号土坑確認面から出土した鍛冶滓で、11の表面には鍛造剥片が再結合している。基本的に鉄生産に絡む排滓行為は、関連遺構周辺に行われるのが一般的である。実際、鳴戸(3)遺跡内に製鉄炉が存在することが判明しているが、本調査区から製鉄滓は1点も出土していない。このことから、本調査区内では鍛冶遺構と断定できるものが無く、遺構から鍛冶行為が行われていたと判断できる情報は得られなかつたが、本資料により、第5号土坑周辺で鍛錬鍛冶行為が行われていた可能性が高くなつた。13は楕円形鍛冶滓の破片である。破断面の観察により、滓が二段重ねになつてゐることがわかる。このため、少なくとも同一炉で排滓するまでに二回操業していることがわかる。

(浅田)

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

(株) バレオ・ラボ

1 はじめに

青森県西津軽郡鰯ヶ沢町に位置する鳴戸(3)遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている(第4章第3節参照)。

2 試料と方法

試料は、住居跡である SI02Pit1 から出土した試料 No. 1 (PLD-27313)、SI04 の試料 No. 2 (PLD-27314)、SI10 の試料 No. 3 (PLD-27315)、製炭土坑である SK02 の試料 No. 4 (PLD-27316)、SK07 の試料 No. 5 (PLD-27317) の、計 5 点である。試料 No. 1、5 は最終形成年輪が、試料 No. 2 は辺材部が残っていたが、試料 No. 3 と 4 は最終形成年輪および辺材部が残っていなかった。樹種同定の結果、試料 No. 1 はカエデ属、試料 No. 2 はスギ、試料 No. 3 ~ 5 はクリであった。測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-27313	グリッド: B M-55 遺構: SI02Pit1 層位: 6 層下位 試料 No. 1 遺物 No. C-X	種類: 艇化材(カエデ属) 試料の性状: 最終形成年輪 採取位置: 外側 3 年輪分 状態: dry	不明	前処理前重量: 216.63mg 燃焼量: 6.51mg 精製炭素量: 4.05mg 炭素回収量: 1.04mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)
PLD-27314	グリッド: II E-53 遺構: SI04 層位: 床面 試料 No. 2 遺物 No. C-X	種類: 艇化材(スギ) 試料の性状: 辺材部 採取位置: 外側 5 年輪分 状態: dry	不明	前処理前重量: 28.32mg 燃焼量: 6.11mg 精製炭素量: 3.80mg 炭素回収量: 1.01mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)
PLD-27315	グリッド: II F-58 遺構: SI10 層位: 2 層 試料 No. 3 遺物 No. C-2	種類: 艇化材(クリ) 試料の性状: 部位不明 採取位置: 外側 3 年輪分 状態: dry	不明	前処理前重量: 194.37mg 燃焼量: 7.75mg 精製炭素量: 4.32mg 炭素回収量: 1.02mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)
PLD-27316	グリッド: II H-59 遺構: SK02 層位: 2 層 試料 No. 4 遺物 No. C-2	種類: 艇化材(クリ) 試料の性状: 部位不明 採取位置: 外側 3 年輪分 状態: dry	不明	前処理前重量: 69.89mg 燃焼量: 4.26mg 精製炭素量: 12.43mg 炭素回収量: 1.01mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)
PLD-27317	グリッド: I Y-36 遺構: SK07 層位: 5 層 試料 No. 5 遺物 No. C-X	種類: 艇化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪 採取位置: 外側 5 年輪分 状態: dry	不明	前処理前重量: 133.61mg 燃焼量: 6.25mg 精製炭素量: 3.84mg 炭素回収量: 0.99mg	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2%, 水酸化ナトリウム: 1.0%, 塩酸: 1.2%)

3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示し

た¹⁴C年代を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めてない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正には0xCal4.1(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は95.4%信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を曆年年代に較正した年代範囲	
					1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
PLD-27313 SI04 [†] 試料No. 1	9	-26.06 \pm 0.21	1164 \pm 18	1165 \pm 20	778AD(11.9%) 791AD 806AD(6.3%) 818AD 825AD(10.8%) 842AD 862AD(31.3%) 895AD 929AD(7.6%) 946AD	775AD(82.6%) 900AD 922AD(12.8%) 948AD
PLD-27314 SI04 試料No. 2	9	-22.13 \pm 0.23	1215 \pm 18	1215 \pm 20	770AD(8.6%) 779AD 790AD(34.8%) 830AD 837AD(25.7%) 867AD	724AD(6.6%) 739AD 767AD(88.8%) 882AD
PLD-27315 SI10 試料No. 3	9	-25.88 \pm 0.20	1225 \pm 18	1225 \pm 20	723AD(15.0%) 740AD 767AD(11.6%) 778AD 791AD(4.8%) 827AD 840AD(16.8%) 864AD	695AD(0.8%) 706AD 710AD(21.5%) 745AD 764AD(73.2%) 882AD
PLD-27316 SK02 試料No. 4	9	-22.48 \pm 0.22	1258 \pm 19	1260 \pm 20	695AD(62.1%) 747AD 763AD(6.1%) 768AD	678AD(95.4%) 775AD
PLD-27317 SK07 試料No. 5	9	-26.78 \pm 0.17	1300 \pm 19	1300 \pm 20	669AD(46.5%) 710AD 746AD(21.7%) 764AD	664AD(64.2%) 721AD 741AD(31.2%) 768AD

4 考察

以下、 2σ 曆年年代範囲(確率95.4%)に着目して、年代の古い順に結果を整理する。

製炭土坑であるSK07の試料No.5(PLD-27317)は664-721 cal AD(64.2%)および741-768 cal AD(31.2%)、SK02の試料No.4(PLD-27316)は678-775 cal AD(95.4%)で、7世紀後半～8世紀後半の曆年年代を示した。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。試料No.5は最終形成年輪が残っており、測定結果は木の枯死もしくは伐採年代を示すが、試料No.4は最終形成年輪が残っていないため、古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合は、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

堅穴住居跡であるSI10の試料No.3(PLD-27315)は695-700 cal AD(0.8%)、710-745 cal AD(21.5%)、

764–882 cal AD(73.2%)で、7世紀末～9世紀後半の暦年代を示した。これは、飛鳥時代～平安時代に相当する。なお、試料No.3は最終形成年輪が残っていないため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

SI04の試料No.2(PLD-27314)は724–739 cal AD(6.6%)および767–882 cal AD(88.8%)で、8世紀前半～9世紀後半の暦年代を示した。また、SI02Pit1から出土した試料No.1(PLD-27313)は775–900 cal AD(82.6%)および922–948 cal AD(12.8%)で、8世紀後半～10世紀中頃の暦年代を示した。いずれも奈良時代～平安時代前期に相当する。なお、試料No.1は最終形成年輪が残っているが、試料No.2では最終形成年輪は残っておらず、辺材部は残っていた。したがって、試料No.2はわずかではあるが古木効果の影響を受けている可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337–360
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.E., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869–1887.

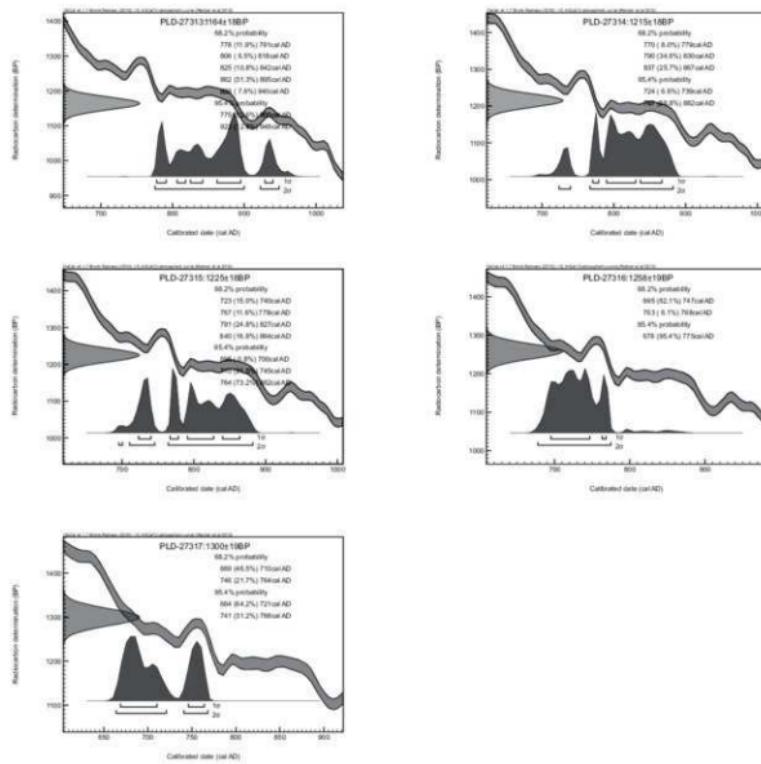
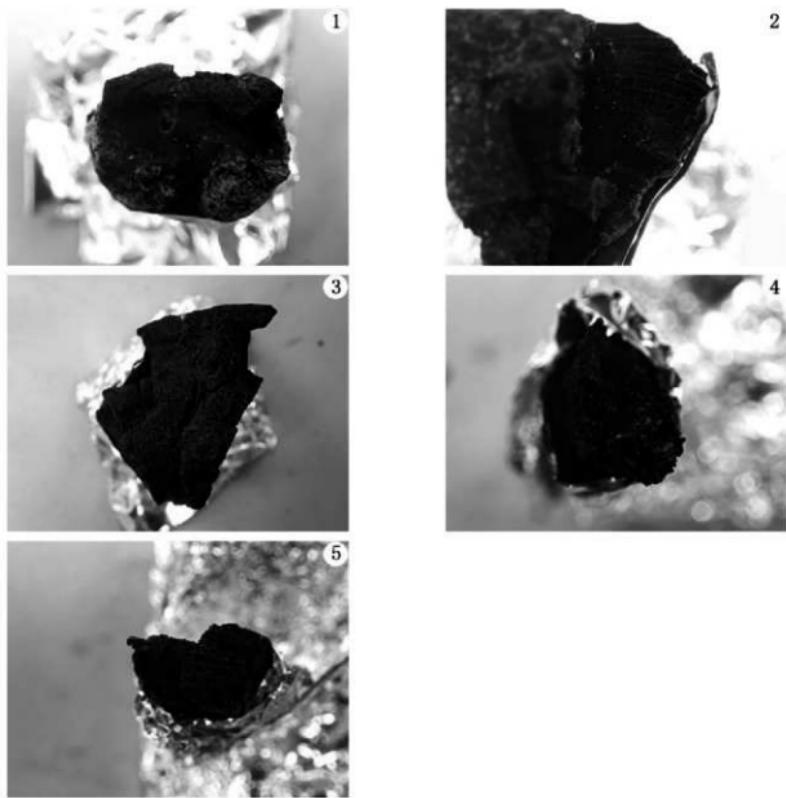


図1　暦年較正結果



図版1 鳴戸(3)遺跡 年代測定試料

1. 試料No. 1 (PLD-27313)
2. 試料No. 2 (PLD-27314)
3. 試料No. 3 (PLD-27315)
4. 試料No. 4 (PLD-27316)
5. 試料No. 5 (PLD-27317)

第2節 鳴戸(3)遺跡の火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科 柴 正敏

鰐ヶ沢町鳴戸(3)遺跡より採集された3試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載を行った。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井, 2003)。試料No. 3の1試料について、電子プローブマイクロアナライザ(EPMA)を用いて、ガラスの化学組成を決定した(表2-1及び2-2)。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230、使用条件は加速電圧15kV、試料電流 6×10^{-9} アンペアである。

ガラスの形態及び構成鉱物(表1)、ならびにガラス粒子の化学組成により、3試料とも白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)に帰属される。表2には、試料No. 3のB-TmガラスのEPMAによる化学組成を示した。本ガラスの組成は、アルカリ粗面岩質(表2-1)及びアルカリ流紋岩質(表2-2)であり、半年～1年間の休止期を挟んで起こった2度の10世紀噴火の後半部を代表するものに帰属できる(柴・岩下, 2005)。

参考文献

- 青木かおり・町田 洋 (2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — K_2O-TiO_2 図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258.
- Hayakawa, Y. (1985), Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol. 60, 507-592.
- Machida, H. (1999), Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201.
- 町田 洋・新井房夫 (2003)、新編火山灰アトラス ～日本列島とその周辺～、東京大学出版会、pp. 336.
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19.
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 (2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 ～宇樽部の一露頭を例として～。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17.
- 柴 正敏・岩下紗弥佳 (2005)、青森県に分布する白頭山苦小牧テフラに含まれる火山ガラスの化学組成。白神研究、第2号、65-71.
- 柴 正敏・佐々木 実 (2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化、月刊地球、第28巻、第5号、322-325.

表1 鳴戸(3)遺跡の火山灰

試料No.	採取場所	層位	火山灰と構成鉱物	火山灰の 種類	備考
1 S103B	2層		火山ガラス (pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	plant opal を含む
2 S106A カマド	4層		火山ガラス (pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	plant opal を含む、海綿骨針を含む
3 SK09	2層		火山ガラス (pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、单斜輝石、不透明鉱物	B-Tm	plant opal を含む

表2-1 鳴戸(3)遺跡、火山ガラスのEPMA分析値(B-Tm(1))

重量%										
No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO [*]	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	66.14	0.18	14.49	4.56	0.11	0.04	0.90	4.52	5.30	96.24
2	65.90	0.27	14.46	4.47	0.24	0.09	0.89	4.58	5.54	96.43
3	67.13	0.28	14.18	4.18	0.14	0.10	0.76	4.38	5.35	96.51
4	68.96	0.21	12.47	3.94	0.13	0.06	0.58	3.99	4.98	95.32
5	65.60	0.36	14.18	4.24	0.15	0.14	0.94	4.02	5.65	95.28
6	65.31	0.31	14.11	4.16	0.13	0.08	0.74	4.69	5.73	95.26
7	65.44	0.04	19.10	0.25	0.04	0.00	0.53	6.61	7.46	99.46
8	65.84	0.33	14.89	4.63	0.13	0.12	1.03	4.35	5.54	96.85
9	67.24	0.31	14.77	4.26	0.13	0.12	0.89	4.56	5.86	98.13
10	67.70	0.25	14.21	4.18	0.10	0.05	0.83	4.42	5.45	97.19
11	68.09	0.30	12.54	3.99	0.08	0.05	0.62	4.20	5.12	94.99
12	66.15	0.29	14.14	4.18	0.12	0.10	0.78	4.16	5.72	95.63
13	67.05	0.35	14.14	4.28	0.16	0.09	0.81	4.38	5.65	96.90
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO [*]	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最少	65.31	0.04	12.47	0.25	0.04	0.00	0.53	3.99	4.98	94.99
最大	68.96	0.36	19.10	4.63	0.24	0.14	1.03	6.61	7.46	99.46
平均	66.66	0.27	14.44	3.95	0.13	0.08	0.79	4.53	5.64	96.48
標準偏差	1.130	0.086	1.580	1.128	0.046	0.038	0.147	0.660	0.601	1.282
 100%に規格化した値										
No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO [*]	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	68.72	0.19	15.06	4.74	0.12	0.04	0.94	4.70	5.51	100
2	68.34	0.28	14.99	4.63	0.25	0.10	0.92	4.75	5.75	100
3	69.56	0.29	14.70	4.33	0.15	0.10	0.79	4.54	5.55	100
4	72.35	0.22	13.09	4.13	0.13	0.06	0.61	4.18	5.23	100
5	68.85	0.38	14.88	4.45	0.16	0.14	0.99	4.22	5.93	100
6	68.56	0.32	14.81	4.37	0.13	0.09	0.78	4.93	6.01	100
7	65.79	0.04	19.20	0.25	0.04	0.00	0.53	6.64	7.50	100
8	67.98	0.34	15.37	4.78	0.13	0.12	1.06	4.49	5.72	100
9	68.52	0.32	15.05	4.34	0.13	0.12	0.91	4.65	5.97	100
10	69.66	0.25	14.62	4.30	0.11	0.05	0.85	4.55	5.61	100
11	71.68	0.32	13.20	4.20	0.09	0.05	0.66	4.42	5.39	100
12	69.17	0.30	14.79	4.37	0.12	0.11	0.82	4.35	5.98	100
13	69.19	0.36	14.59	4.41	0.16	0.09	0.83	4.52	5.84	100
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO [*]	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最少	65.79	0.04	13.09	0.25	0.04	0.00	0.53	4.18	5.23	100
最大	72.35	0.38	19.20	4.78	0.25	0.14	1.06	6.64	7.50	100
平均	69.11	0.28	14.95	4.10	0.13	0.08	0.82	4.69	5.84	100
標準偏差	1.616	0.089	1.448	1.172	0.048	0.040	0.152	0.622	0.554	

B-Tm(1)	68.4	0.4	14.8	4.4	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3
---------	------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

町田・新井

(2003)

FeO^{*}：全鉄をFeOとして表した。

表2-2 鳴戸(3)遺跡、火山ガラスのEPMA分析値(B-Tm(2))

重量%										
No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	71.21	0.13	9.83	3.75	0.13	0.01	0.16	3.54	4.13	92.88
2	73.67	0.2	10.24	3.61	0.04	0.03	0.19	3.39	4.62	95.99
3	72.11	0.11	9.73	3.56	0.1	0.03	0.17	3.32	4.46	93.58
4	71.59	0.18	9.55	3.81	0.03	0	0.2	3.47	4.6	93.43
5	72.29	0.2	10.07	3.79	0.15	0.01	0.2	3.63	4.51	94.85
<hr/>										
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最少	71.21	0.11	9.55	3.56	0.03	0	0.16	3.32	4.13	92.88
最大	73.67	0.2	10.24	3.81	0.15	0.03	0.2	3.63	4.62	95.99
平均	72.17	0.16	9.88	3.7	0.09	0.02	0.19	3.47	4.46	94.15
標準偏差	0.939	0.04	0.275	0.112	0.053	0.014	0.018	0.124	0.198	1.258
<hr/>										
100%に規格化した値										
No.	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
1	76.67	0.14	10.59	4.04	0.14	0.01	0.17	3.81	4.44	100
2	76.75	0.21	10.67	3.76	0.04	0.03	0.2	3.53	4.81	100
3	77.06	0.12	10.39	3.8	0.1	0.03	0.19	3.55	4.77	100
4	76.63	0.19	10.22	4.08	0.04	0	0.22	3.72	4.92	100
5	76.21	0.21	10.61	3.99	0.16	0.01	0.21	3.83	4.76	100
<hr/>										
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
最少	76.21	0.12	10.22	3.76	0.04	0	0.17	3.53	4.44	100
最大	77.06	0.21	10.67	4.08	0.16	0.03	0.22	3.83	4.92	100
平均	76.66	0.17	10.5	3.94	0.1	0.02	0.2	3.69	4.74	100
標準偏差	0.303	0.041	0.187	0.143	0.057	0.015	0.018	0.143	0.177	

B-Tm(2) 75.9 0.2 10.3 4.1 0 0.1 0.2 4.7 4.3

町田・新井

(2003)

FeO*: 全鉄を FeO として表した。

第3節 鳴戸(3)遺跡出土炭化材の樹種同定

(株) バレオ・ラボ

1 はじめに

岩木山を源流とする鳴沢川の河口に面した段丘上に立地する鳴戸(3)遺跡で、出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定も行っている（第4章第1節参照）。

2 試料と方法

試料は、堅穴住居跡であるSI02から2点、SI02Pit1から1点、SI04から2点、SI13AカマドおよびSI14Aカマドから各1点、焼成土坑であるSK02から2点、SK06、SK07、SK09、SK10、SK12、SK13から各1点の、計20点である。

発掘調査所見では各遺構の時期は平安時代頃と考えられ、放射性炭素年代測定の結果では、SK07の試料No.16、SK02の試料No.14は飛鳥時代～奈良時代、SI10の試料No.7は飛鳥時代～平安時代、SI04の試料No.5およびSI02Pit1から出土した試料No.3は奈良時代～平安時代前期を示した。

遺存状態が良好な試料について、残存半径と残存年輪数の計測と、直径の復元を行なった。残存半径は、試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。また復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で剖断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行った。残りの試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3 結果

同定の結果、針葉樹ではスギの1分類群、広葉樹ではアサダとクリ、ブナ属、モクレン属、サクラ属、イヌエンジュ、カエデ属の7分類群の、計8分類群がみられた。また材の劣化が激しくて放射断面しか観察できず、広葉樹までの同定となつた試料があった。クリが最も多く8点で、スギが4点、イヌエンジュが2点、アサダとブナ属、モクレン属、サクラ属、カエデ属、広葉樹が各1点みられた。年輪の計測結果では、試料No.7のクリで残存半径2.6cm内に5年輪みられたように、遺跡内でみると相対的に年輪幅がやや広い試料があったが、ほとんどの試料では、試料No.3のカエデ属で残存半径1.3cm内に15年輪みられたように、遺跡内で相対的に年輪幅が狭い試料が多かつた。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

表1 鳴戸(3)遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種 / 遺構	SI02	SI02 Pit1	SI04	SI10	SI13A カマド	SI14A カマド	SK02	SK06	SK07	SK09	SK10	SK12	SK13	合計
スギ	2	2												4
アサダ					1									1
クリ			1			1	1	1	1	1	1	1	1	8
ブナ属												1		1
モクレン属									1					1
サクラ属				1										1
イヌエンジュ	2													2
カエデ属		1												1
広葉樹				1										1
合計	2	1	2	5	1	1	2	1	1	1	1	1	1	20

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1)スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 1a-1c (No. 5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、高さ1~5列程度となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(2)アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版1 2a-2c (No. 11)

小型の道管が単独ないし2~数個不定方向に複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1~4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帶上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(3)クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (No. 7)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帶にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(4)ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2 4a-4c (No. 18)

小型の道管が単独ないし2~3個複合し、密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1~4列のものと広放射組織がみられる。

ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

(5)モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版2 5a-5c (No. 13)

小型の道管が単独または2~3個複合し、やや疎らに散在する散孔材である。道管は單線子を有し、道管相互壁孔は階段状となる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1~2列となる。

モクレン属にはホオノキやコブシなどがある。代表的なホオノキは、山間の肥沃なところに散生する落葉高木の広葉樹で、材は軽軟で堅くなく、切削その他の加工は極めて容易である。

(6)サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 図版2 6a-6c (No. 6)

小型の道管が単独ないし2~7個放射状または斜め状に複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有し、内壁には明瞭ならせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1~3列となる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す意味で、広義のサクラ属とした。

(7) イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. マメ科 図版3 7a-7c(No.2)

年輪の始めにやや大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が数個複合して配列する環孔材であるが、試料では年輪界を探取できなかった。軸方向柔組織は周囲状、年輪界状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～4列となる。

イヌエンジュは北海道、本州、四国、九州の低山地帯に多く分布する落葉中高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。心材の保存性が高い。

(8) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版3 8a-8c(No.3)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部纖維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(9) 広葉樹 Broadleaf-wood 図版3 9b(No.10)

材の劣化が激しく、横断面および放射断面の観察を行えなかつた。接線断面の観察で、道管が確認できたため、広葉樹と判断した。放射組織は幅1～4列となる。

4 考察

堅穴住居跡では、SI02ではイヌエンジュが2点、SI02Pit 1ではカエデ属が1点、SI04ではスギが2点、SI10ではスギが2点とクリ、サクラ属、広葉樹が各1点みられた。材の用途については、焼けた建築材や燃料材の残渣と考えられるが、詳細は不明である。スギは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ。またアサダとクリ、サクラ属、カエデ属、イヌエンジュは、重硬な材質である。また燃料材としてみると、クリは長時間燃焼し続けるという材質を持つが、その他の樹種は燃料材としての利用は顕著ではない（伊東ほか, 2011）。

直径の復元では、SI02の試料No. 3(カエデ属)で復元直径3cm、SI04の試料No. 5(スギ)で復元直径5cm、SI10の試料No. 6(サクラ属)と試料No. 7(クリ)がそれぞれ復元直径7cmとなり、直径10cm以下の材が多数を占めていた。

堅穴住居跡であるSI13Aカマドではアサダが1点、SI14カマドではクリが1点みられた。材はカマド内から採取されており、試料は燃料材であると考えられる。クリは前述の通り燃料材に適しているが、アサダも薪炭材に適した樹種である（伊東ほか, 2011）。材質を考慮して、燃料材を利用していた可能性が考えられる。

直径の復元では、SI13Aカマドの試料No.11(アサダ)が、復元直径16cmであった。直径16cmの材を丸木のまま使用していた、もしくはみかん割り状などに材を割って利用していた、などの可能性が考えられる。

製炭を行っていたと考えられる焼成土坑では、SK02ではクリとモクレン属が各1点、SK10ではブナ属が1点、SK06とSK07、SK09、SK12、SK13ではクリが各1点みられ、クリの産出が目立った。これらの炭化材は、焼成された炭（以下炭製品と呼ぶ）か、炭製品を焼成する際の燃料材であったと考えられる。焼成土坑では、焼成部と燃焼部の境が曖昧であり、炭製品と燃料材の区別は難しい。また取

上げ後の試料の形状観察からは、炭製品であったか燃料材であったかの判断はできなかった。なおクリとブナ属、モクレン属は、いずれも薪炭材に適した樹種である（伊東ほか, 2011）。材質を考慮して、燃料材を伐採利用していた可能性が考えられる。

復元直径では、SK06の試料No. 15(クリ)が復元直径2cm、SK09の試料No. 17が復元直径17cmであった。中津軽郡西目屋村の鬼川辺(1)遺跡で検出された、中世～近世の製炭土坑では、1～11cmの炭化材が利用されていたが(小林, 2014)、鳴戸(3)遺跡の復元直径17cmの炭化材は、丸木のまま利用していくか、割り材を行って大きさを揃えていたかは、形状観察では確認できなかった。

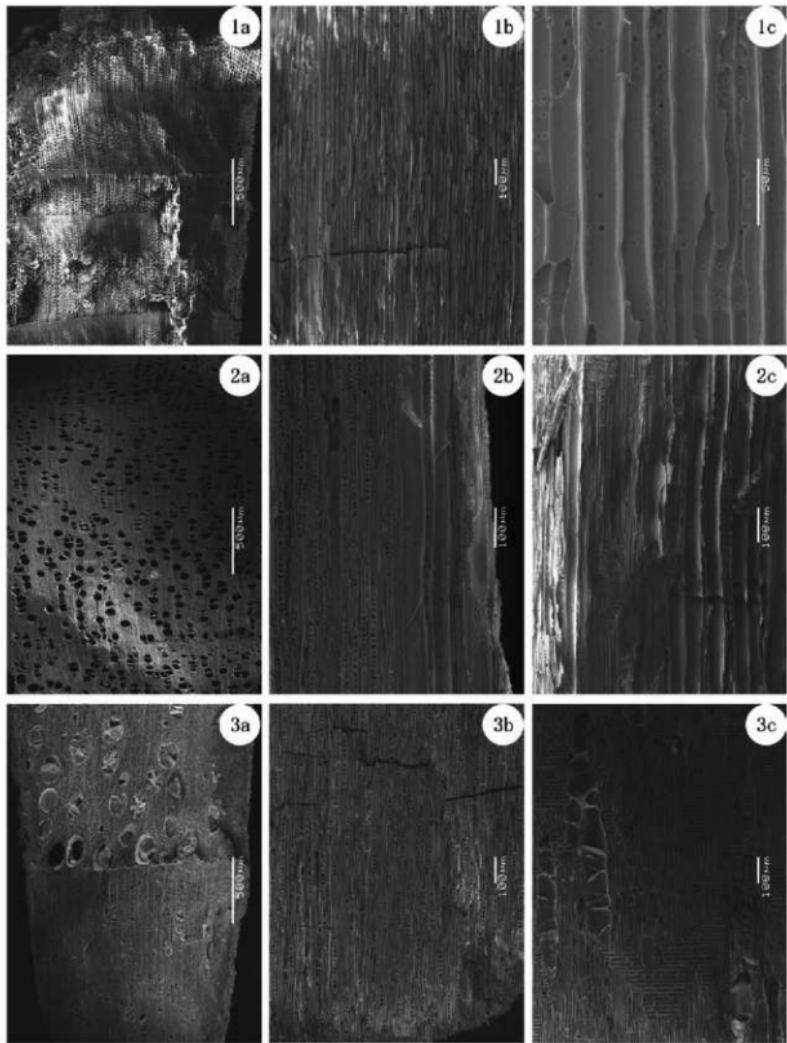
青森県内では、中津軽郡森田村の八重菊(1)遺跡で、平安時代の製鉄炉(B区12号遺構)出土炭化材の樹種同定が行われ、クリが最も多くみられている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 2001)。鳴戸(3)遺跡でもクリが多くみられ、青森県下の平安時代の製炭では、クリを多く利用する傾向が確認できた。

引用文献

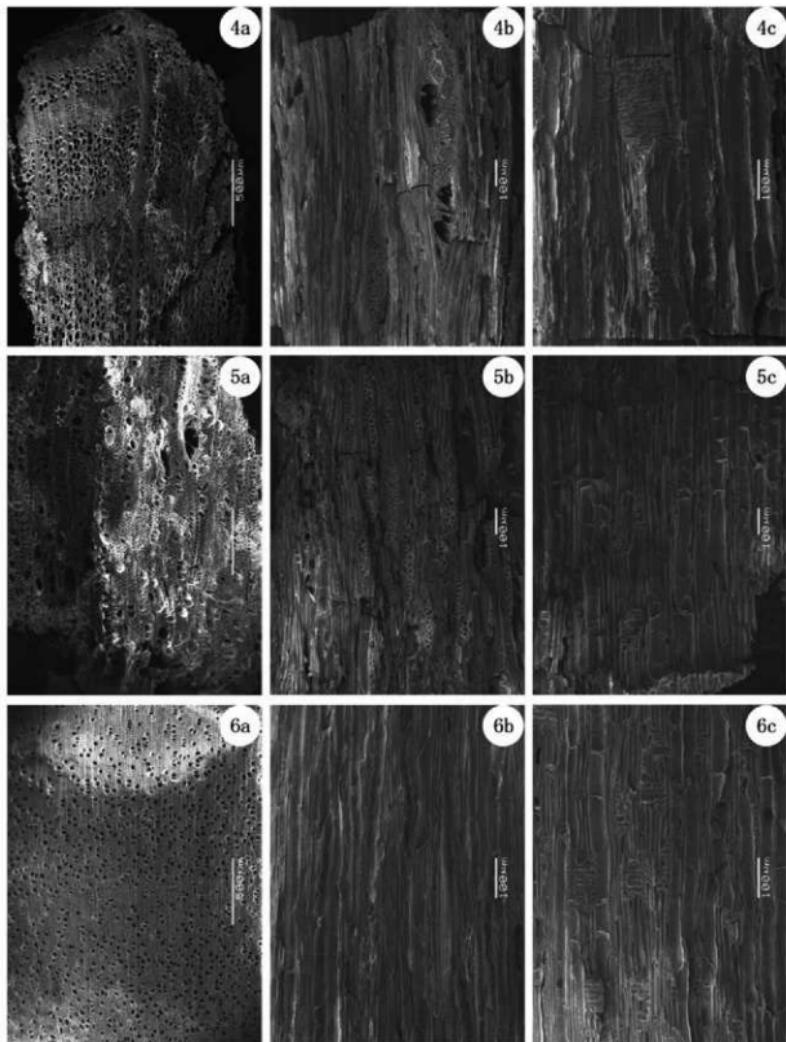
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。
小林克也 (2014) 鬼川辺(1)・(3) 遺跡出土炭化材の樹種同定, 青森県埋蔵文化財調査センター編「鬼川辺(1)遺跡・鬼川辺(2)遺跡・鬼川辺(3)遺跡」: 100-104, 青森県埋蔵文化財調査センター。
バリノ・サーヴェイ株式会社 (2001) B区12号遺構(製鉄炉)と鉄滓の自然科学分析, 青森県西津軽郡森田村教育委員会編「八重菊(1)遺跡」: 197-244, 青森県西津軽郡森田村教育委員会。

付表1 鳴戸(3) 遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

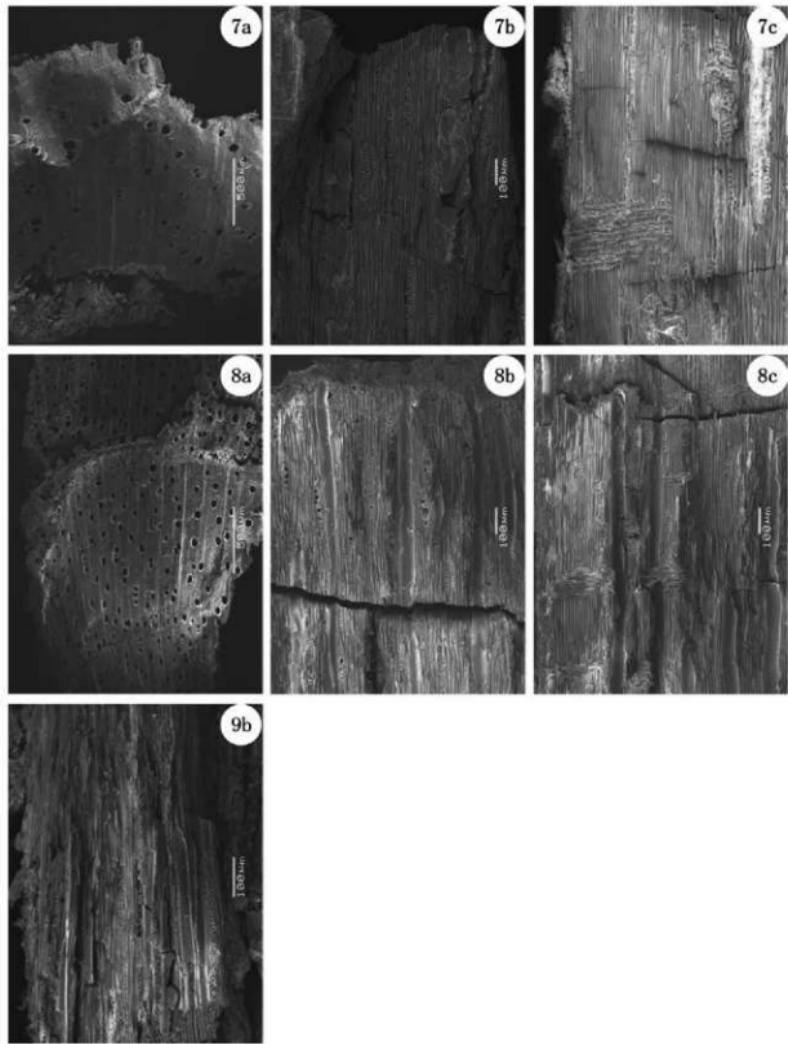
試料No.	遺構名	グリッド	層位	取上番号	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	復元直徑(cm)	年代測定番号
1	SI02	II M-54	堆積土	C-1	イヌエンジュ	-	-	-	
2	SI02	II L-55	堆積土	C-2	イヌエンジュ	0.3	2	-	
3	SI02Pit1	II M-55	6層下位	C-X	カエデ属	1.3	15	3	PLD-27313
4	SI04	II E-53	床面	C-1	スギ	0.4	6	-	
5	SI04	II E-53	床面	C-2	スギ	2.2	19	5	PLD-27314
6	SI10	II F-58	2層	C-1	サクラ属	2.4	17	7	
7	SI10	II F-58	2層	C-2	クリ	2.6	5	7	PLD-27315
8	SI10	II F-58	2層	C-3	スギ	0.3	3	-	
9	SI10	II F-58	2層	C-4	スギ	0.2	2	-	
10	SI10	II F-58	2層	C-5	広葉樹	-	-	-	
11	SI13Aカマド	II D-56	8層	C-1	アサダ	2.4	27	16	
12	SI14Aカマド	II D-57	1層	C-1	クリ	0.4	3	-	
13	SK02	II H-60	2層	C-1	モクレン属	0.4	4	-	
14	SK02	II H-60	2層	C-2	クリ	0.3	5	-	PLD-27316
15	SK06	II E-58	3層	C-1	クリ	0.8	19	2	
16	SK07	I Y-36	5層	C-X	クリ	0.7	19	-	PLD-27317
17	SK09	II B-36	堆積土	C-X	クリ	1.3	13	17	
18	SK10	II D-58	2層	C-1	ブナ属	0.3	2	-	
19	SK12	I X-38	2層	C-X	クリ	2.2	21	-	
20	SK13	I X-40	1層	C-X	クリ	1.9	13	-	



図版1 鳴戸(3)遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)
1a-1c. スギ(No. 5)、2a-2c. アサダ(No. 11)、3a-3c. クリ(No. 7)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版2 岐戸(3)遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)
4a-4c. プナ属 (No. 18)、5a-5c. モクレン属 (No. 13)、6a-6c. サクラ属 (No. 6)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版3 鳴戸(3)遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)
7a-7c. イヌエンジュ(No. 2)、8a-8c. カエデ属(No. 3)、9b. 広葉樹(No. 10)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第5章 総括

第1節 検出遺構

鳴戸(3)遺跡は、鳴沢川河口に面した海岸段丘上に位置する。調査前の現況は主に畠と林であった。以前の調査では遺構が確認できなかつたが、調査の結果、調査区東側の段丘縁辺部から、縄文時代の溝状土坑と、平安時代の堅穴住居跡を中心とした集落跡を検出した。溝状土坑は3基の検出に留まつたが、縄文時代のある時期に狩猟域であったことが確認された。集落跡は、調査区西側では土坑しか検出できなかつたこと、堅穴住居跡が調査区南側へ伸びるものが多いことから、調査区東側に位置する谷に沿つて展開しているものと思われる。

本調査区で検出した堅穴住居跡は20軒を数える。規模を比較するため、床面積を10m²毎に区切り、極小型、小型、中型、大型、特大型の5類型に分類した。結果は以下のとおりである(図71)。

特大型(40m²以上) - 3軒 : 第3号B・第12号A・第13号A

大型(30~40m²) - 3軒 : 第1号A・第13号B・第14号A

中型(20~30m²) - 3軒 : 第3号A・第6号A・第6号B

小型(10~20m²) - 7軒 : 第1号B・第2号・第4号・第5号・第10号・第12号B・第14号B

極小型(10m²以下) - 4軒 : 第7号・第8号・第9号・第12号C

このように、本調査区で主体となるのは小型であり、ほぼ半数を占める。アルファベットを付した、同一箇所で重複する堅穴住居跡を比較すると、いずれも小さいものから大きいものへ変化していることがわかる。このことから、堅穴住居跡が同一場所で重複する例は、規模を拡張する建て替えに伴うものと考えられる。規模毎の特徴を見ると、特大型から中型にかけては、対角線上に主柱穴を配置するものが多い。対して小型や極小型では、主柱穴は確認できなかつた。このことから、規模によって上屋構造に差異が生じていることが想定される。

第3号B堅穴住居跡の堆積土中層にあたる第2層と、第6号A堅穴住居跡カマド堆積土第4層に混入していた火山灰は、分析の結果、10世紀に降下した白頭山一苦小牧火山灰(以下、B-Tmと表記)とされた。このことから、これらの遺構はB-Tm降下以前に廃絶しており、火山灰降下時には埋没が進行していたことがわかる。鳴沢川流域の古代集落で、堅穴住居跡堆積土内に火山灰堆積が見られる外馬屋前田(1)遺跡では、B-Tmが主に床面を直接覆う層へ混入している。このことから、第3号B堅穴住居跡は外馬屋前田(1)遺跡例より相対的に古い位置付けを行うことができる。その他の堅穴住居跡ではB-Tmを確認できなかつた。これは遺構上部が耕作による削平の影響を受けているためと考えられるが、その場合、遺構の埋没は第3号B堅穴住居跡よりさらに進行しているか、もしくは既に埋め戻されているなど、埋没が完了していたことを示唆している。

カマド構築位置を見ると、堅穴住居跡が同一箇所で重複する場合、新しい堅穴住居跡のカマドは古い堅穴住居跡のカマド煙道と重なるように構築しており、カマド位置をずらして構築するのは第3号B堅穴住居跡のみとなる。カマドの主軸方向が確認できたものは、南東方向と北西方向が多く、南北方向が1基存在する。再び外馬屋前田(1)遺跡で検出した堅穴住居跡のカマド主軸方向と比較してみると、外馬屋前田(1)遺跡では南東方向を指向していることがわかる(図72)。上述したB-Tm堆積状

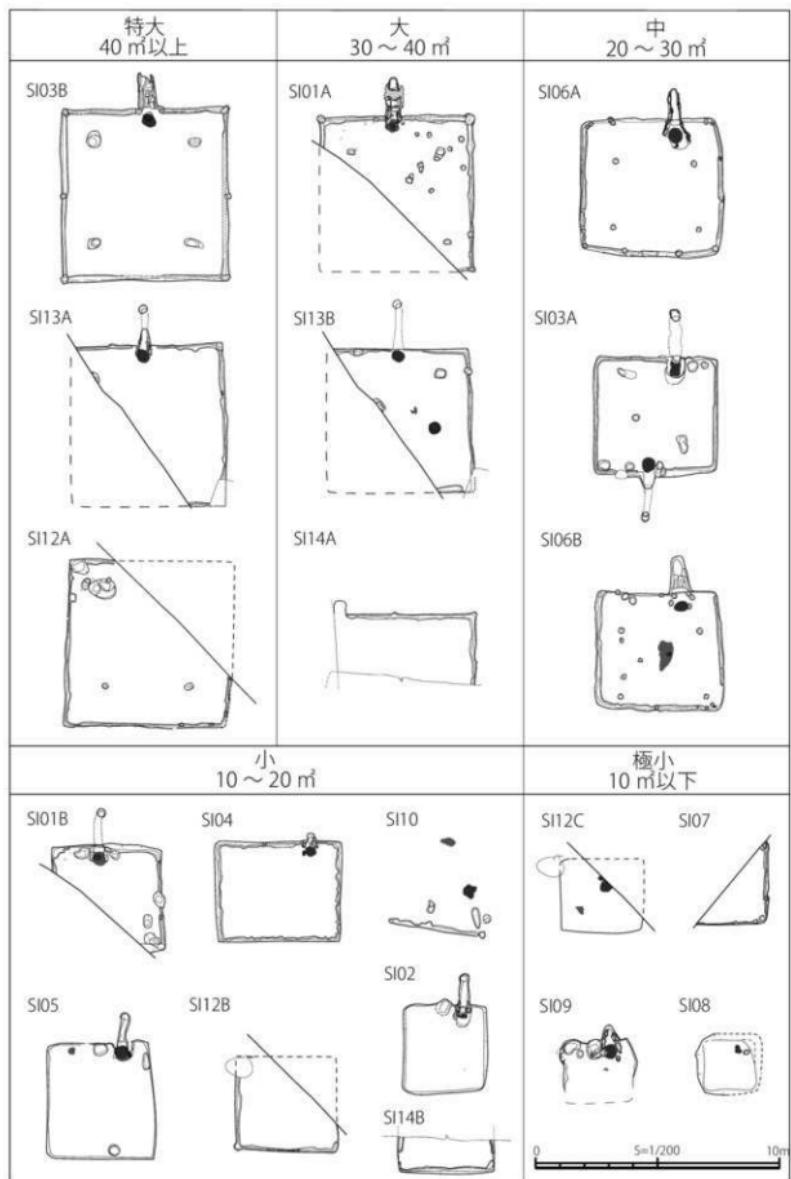


図71 堪穴住跡集成図

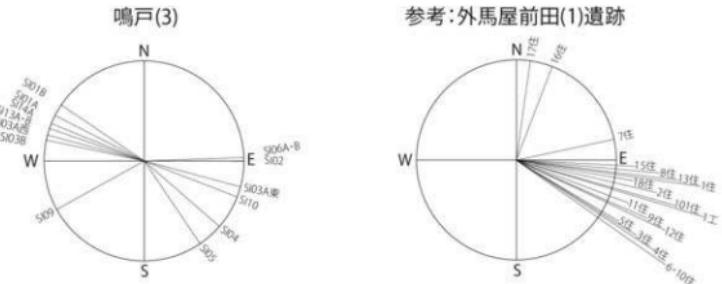


図72 カマド主軸方向一覧

況の差異から、外馬屋前田(1)遺跡は本調査区より相対的に新しい段階の集落跡と考えられるため、南東方向に軸方向を持つカマドは、本調査区の中でも新しい要素と考えられる。

また、同一箇所で重複する竪穴住居跡以外でも、第1号と第12号、第2号と第6号、第4号と第7号、第3号と第13号の各竪穴住居跡は、それぞれカマド主軸方向が類似する。これらは一定間隔を置いて構築されており、同時期に機能していた可能性がある。同時期存在の可能性を検討するため、図73に遺構間の土器接合状況を示した。各遺構間の関係を見てみると、大半が近隣の遺構、もしくは重複関係のあるもので、廃棄後に本来の位置から移動したものと思われる。一方、第2号竪穴住居跡と第6号A竪穴住居跡は、土師器と擦文土器で接合関係が確認できた。いずれも機能停止後の初期堆積に伴うもので、同時期に同様の埋没状況であった可能性が高い。このことから、少なくとも第2号竪穴住居跡と第6号A竪穴住居跡は同時期に機能していた可能性が高いと考える。その他の組み合わせは積極的に同時期性を証明できる情報は無かったが、2軒を1単位とした集落構造が存在した可能性を指摘しておきたい。本調査区は集落の一端を垣間見たに過ぎないため、今後周辺域の調査事例から検証を行う必要があるだろう。

カマドの構造についても類似点が見られる。カマドの煙道形態は、拡張に伴う建て替えと考えられる重複関係より、地下式から半地下式へ移り変わる傾向を示している。半地下式のカマドの中で、基盤層の露頭から崩落したと考えられる板状のシルト岩片を、カマド袖部だけでなく、煙道側壁や天井部の構築材に用いているカマドを持つのは第1号A、第3号B、第13号Aの各竪穴住居跡である。第13号A竪穴住居跡は地下式から半地下式への改築を同一遺構内で行っている可能性があり、カマド構造を考える上で変換点になるものと思われる。板状礫をカマド構築材に用いる例は、深浦町蘿原遺跡（青森県教育委員会 2003）や、北海道小樽市蘭島解屋沢遺跡（小樽市教育委員会 1991）に見られる。

以上の調査所見を基に、調査区内の竪穴住居跡変遷を考察すると、図77のようになる。調査区内における最も古い竪穴住居跡は、唯一東側谷に面する斜面地に構築された第8号竪穴住居跡が該当するものと考える。ここからは古手の土師器や擦文土器が出土している。次にカマドの主軸方向から、北西側に主軸を持つ竪穴住居跡を古い要素と捉え、更に重複関係から最も古い第14号A・B竪穴住居跡を第8号竪穴住居跡の次に位置付けておく。その次に、第14号と重複する第13号A・B竪穴住居跡、

土師器

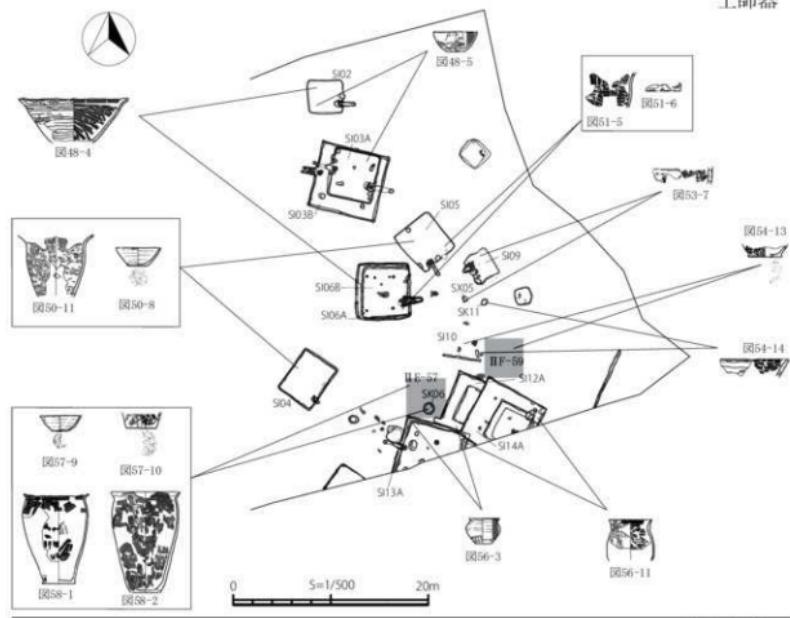
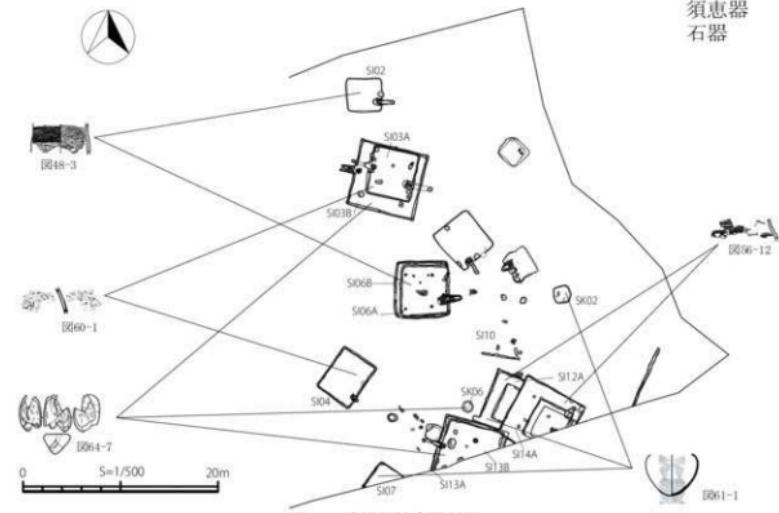
擦文土器
須恵器
石器

図73 遺構間接合関係図

凡例：素+輪面、底+方凹口、P=平底

	須恵器 壺、甕、壺 壺	土師器 壺	土師器 甕	土師器 壺、壺、甕															
S101A																			
S102																			
S103A+B																			
S104																			
S105																			
S106A+B																			
S107																			

図74 出土土器構成図-1

	須惠器 壺、甕 坏	土師器 壺	土師器 甕	土師器 壺、壺、鉢	塗、鉢	擦文	製鹽
S108							
S109							
S110							
S112A							
S112B							
S113A							

圖75 出土器構成圖—2

凡例：箭→箭頭，盾→盾形，刀→刀刃，L→L型

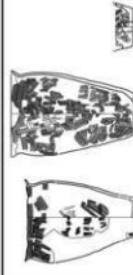
	須惠器 壺、甕、壺 壺	土師器 壺	土師器 甕	土師器 壺、甕、鉢	土師器 壺、甕、鉢	擦文	製塗
SI14A							
SD01							
SK02							
SK05							
SK06							
SN06							 
SX05							

圖76 出土土器構成圖—3

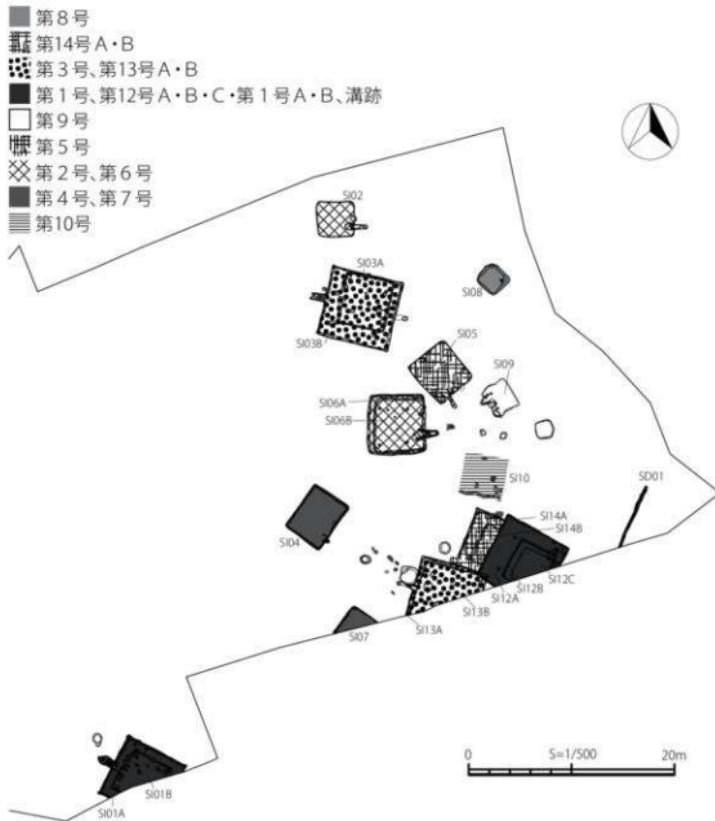


図77 竪穴住居跡時期別分布図

それとカマド主軸方向が類似する第3号A・B竪穴住居跡が位置付けられる。さらに第13号A竪穴住居跡より新しい第12号A・B・C竪穴住居跡、それと主軸方向が類似する第1号A・B竪穴住居跡の順に変遷するものと思われる。第12号竪穴住居跡はカマドがいざれも南側の調査区外に存在すると考えられることから、より新しい位置に位置付けられることが考えられる。カマド主軸方向が南東を向く第9号竪穴住居跡は比較対象が無いが、カマドの主軸方向が北西方向から南東方向へ変遷するとした場合、変遷過程にあるものと捉え、その中間に位置付けておきたい。カマド主軸方向が南東を向くものが本調査区では後出の竪穴住居跡と捉えるならば、より南側に近い第5号竪穴住居跡や、カマド主軸方向がほぼ真東を向く第2号・第6号A・B竪穴住居跡があり、南東を向く第4号竪穴住居跡、

それと竪穴住居跡の方向が類似する第7号竪穴住居跡、そして外馬屋前田(1)遺跡第1工房跡との形態的な類似点が挙げられた第10号竪穴住居跡は、本調査区の中では最も新しい時期に位置付けられるものと考える。

以上のように、竪穴住居跡のカマド主軸方向を基準とした分類の結果、Ⅰ期：斜面地に構築された竪穴住居跡、Ⅱ期：カマド主軸方向が北西を向く竪穴住居跡、Ⅲ期：カマド主軸方向が南東方向を向く竪穴住居跡、の順に変遷するものと考えられる。出土土器の所産時期と合わせて検討すると、現段階ではⅠ期が9世紀前葉以前、Ⅱ期が9世紀中葉、Ⅲ期が9世紀後葉以降としておきたい。

土坑は12基検出した。この内Ⅰ群とした5基については、底面上に炭化物を多く含むこと、底面や壁面の一部が被熱しているなどの共通点が確認できたことを根拠に、製炭土坑と判断した。分布を見ると、竪穴住居跡とは対照的に、調査区西側に多く構築してことがわかる。出土遺物は、第2号土坑で堆積土中から土師器や須恵器が出土しているが、全て機能停止後の窪地状態のときに廃棄、または混入したものと思われる。放射性炭素年代測定の結果はいずれも7世紀後半から8世紀代を示している。これは、集落の機能時期より古い年代値となる。また、集落と製炭土坑の時期差については、本調査区で最も古い9世紀前半の土器が出土した第8号竪穴住居跡は、製炭土坑の分布と重ならないこと、さらに製炭土坑はこれまでの調査事例で、集落には伴わず、集落周辺域で検出される事例が多いことから、本調査区の製炭土坑は、集落形成の前段階に機能していた可能性が挙げられる。第8号竪穴住居跡の対岸に位置する金沢街道沢(1)遺跡では、本調査区より古い段階の土器が出土する竪穴住居跡が検出されており、炭生産との関連を検討する必要があるだろう。製炭土坑出土炭化材の樹種は、同定の結果、大半がクリであった。この結果から、本調査区周辺域にクリが一定量生育する、里山的な環境を想定することができる。またクリは炭に用いられることが多い樹種であり、意図的に選択された可能性が高いことを示している。また製炭土坑は鳴戸(3)遺跡以外でも、外馬屋前田(1)遺跡、塙沢遺跡、今須(3)遺跡、新沢(1)遺跡・新沢(2)遺跡で検出されており、鳴沢川流域の基本的な生業形態の一つとして捉えることができる。7世紀後半から8世紀代の製炭土坑は、三沢市駒沢(6)遺跡で検出している(県教委2013)。形態は隅丸方形で、炭化物の出土状況なども類似点が多い。相違点は炭化材の樹種に見られ、駒沢(6)遺跡がコナラ属コナラ節に対し、本遺跡ではクリが主体となる。周辺域での分析事例数が少ないため今後の調査事例の増加を待たなければならないが、炭生産に用いられた樹種が太平洋側と日本海側で異なる点は今後注目すべきだろう。

本調査区で、鉄生産関連遺構と明確に認定できるものは無いが、鉄生産関連遺物が出土した第5・6・10号土坑がある。その周辺から同様の形態を持つ第1～3号焼土遺構を検出したこと、性格不明遺構とした焼土集中範囲、炭化材集中範囲が纏まっていることを確認した。第5・10号土坑は、第13号A竪穴住居跡堆積土を掘り込んでおり、第13号A竪穴住居跡の堆積土最上層には掘り上げ土が被っていることから、これらの遺構が機能していた際には、第13号A竪穴住居跡は完全に埋没していたことになる。このことから、鉄生産関連遺物が出土した遺構、並びにその周辺遺構については、本調査区の中では新しい時期に位置付けられる。これらの集中範囲西側には、調査区内では新しい時期にあたる、第4号・第7号竪穴住居跡が存在している。第4号竪穴住居跡堆積土からも鉄生産関連遺物が出土していることも、何らかの関連性がある可能性がある。鉄生産関連遺物は羽口、鉄滓、炉壁がある。羽口はいずれも破片資料で全体を窺うことはできないが、先端部の溶融や被熱痕が明瞭に観察できるも

のが多く、使用後廃棄されたものと見ることができる。また出土鉄滓は全て鍛治滓と考えられ、鍛造剥片が付着した滓が存在すること、羽口の内径が小さいことなどから、少なくとも周辺で鍛錬鍛冶が行われていた傍証は得られた。明確な鍛冶炉は特定できなかったものの、鉄生産関連遺物の出土地点が、焼土造構の集中範囲付近に纏まっていることから、焼土造構が鍛冶炉として使用されていた可能性を挙げておきたい。なお、第6号土坑は堆積土に被廃された焼土に伴い、鉄滓や羽口など鉄生産関連遺物が出土していることから、土坑の機能停止後、窪地への廃棄行為が存在したと考えられ、排滓場として機能したものと思われる。なお、本遺跡西側で検出された製鉄炉に伴う製鉄滓は1点も出土しておらず、本調査区と製鉄炉の関連については慎重に判断する必要があるが、現段階では結びつける要素は存在しない。

第2節 出土遺物

本調査区からは縄文土器・土師器・擦文土器・製塙土器・須恵器・石器・土製支脚・土製品・鉄生産関連遺物が出土した。

縄文土器は、縄文時代中期から後期にかけてのもので、いずれも包含層や古代の遺構内堆積土から出土した破片資料であった。溝状土坑の存在から狩猟場であった可能性が挙げられており、出土遺物は調査区周辺に存在する集落から持ち込まれたものと推測する。

本調査区で最も出土量が多かったのは土師器で、遺跡の主体を成す古代の集落に伴うものである。器種としては壺、甕、壠、壺がある。壺は非ロクロ使用で内面黒色処理を施し、ミガキ調整を施すものと、ロクロ使用で内面黒色処理を施すもの、施さないものが挙げられる。非ロクロ使用の壺は、底部形態が確認できないため詳細な検討ができないが、外面に弱い沈線が巡り、口縁部にかけて内湾する器形を持つ。これらの特徴は8世紀後半から9世紀前葉まで存在するものと捉えられており(岩井2009、宇部2013)、調査区内では最も古い位置付けをすることが可能であろう。ロクロ使用成形のものは、口径が11~14cm、底径が5.2~7.5cm、器高が4.7~6.1cmまで幅を持つ。器形は底部から直線的に口縁部まで立てあがるもの(図56-13・14)と、底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部の向きがやや上向き(図55-8)のものが見られる。他に口縁部が大きく歪んでいるもの(図49-5)や、灯明具として用いられたと考えられる、口縁部に煤が付着するものが一定量存在する。所産時期はいずれも9世紀中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

甕は長胴甕で占められ、球胴甕は含まれない。成形はロクロ使用のものとロクロ不使用に分かれる。ロクロ使用では胴部外面にタタキ、内面に当て具痕が観察できるもののが存在し、諸特徴から北陸型甕と思われる(図55-10)。所産時期は9世紀後半とされている。器形を見ると、口縁部が大きく外反するものから、小さく屈曲するものまで見られる。器面調整はミガキ、ナデ、ケズリが見られ、口縁部の形態と合わせると、口縁部が短くなるほど、ケズリ調整が選択されることが多い。この変化は時期差と捉えることができる。口縁部が大きく開く形態は奈良時代から見られるもので、古い要素と言える。一方口縁の短小化は新しい要素とすことができ、これと伴うケズリ調整が多用されるものも新しい要素を持つと認識できる。所産時期は諸特徴から9世紀後半を中心にして、一部10世紀初頭に入るものも含まれる可能性がある。

壠は一定量存在するが、器形復元できるものは少なかった。使用痕跡はあるが、使用方法について

は不明な点が多い。本調査区では堅穴住居跡の床面から炉が検出できたものが3軒存在するほか、他とは異なる住居形態を持つ第10号堅穴住居跡でも出土していることから、カマドでの煮沸行為以外の用途も検討する必要がある。

須恵器は貯蔵具である壺や甕が多く、壺が少ない。胎土や焼成、色調など、いずれも最寄の釜跡である五所川原窯跡の特徴を見出すことができなかった。胎土分析を行っていないため肉眼観察による判断ではあるが、諸特徴から秋田県域の窯で製作された可能性が高いと推測した。共伴土師器の年代から、本調査区資料は五所川原須恵器窯跡の本格操業前にあたり、本調査区より新しいと考えられる外馬屋前田(1)遺跡や今須(3)遺跡では五所川原産須恵器が出土していることから、当時の須恵器流通の状況を考える上で示唆に富んでいる。

壺はいずれも切り離しが回転糸切で、器面に磨痕が観察できるものは、いずれも転用硯と考えられる(図61-3等)。甕の器形や整形技法には秋田県横手市富ヶ沢B窯跡に類似する見られる。図61-1や図62-3は秋田県横手市富ヶ沢B窯跡出土須恵器の特徴が見られる。図61-1は外面の斜行するカキメに類似するものが見られる。口縁部が無いため詳細な検討ができないのが残念である。図62-3の類似点は富ヶ沢A・B・C窯跡の中で自然軸がかかる窯が富ヶ沢B窯跡のみであること、口唇部を外側に強く挽き出す点などがある。相違点は内面の当て具痕が平行で、富ヶ沢B窯跡では平行当て具が下半部のみに見られる点である。富ヶ沢B窯跡は9世紀前半を中心とした時期の操業と捉えられており(東北古代土器研究会2008)、本調査区との時期差が生じるが、本遺跡出土資料は転用硯として再利用されていること、破片が複数の遺構に散在している点から、窯から運搬され、集落内に持ち込まれた後も、一定の経過時間が存在するものと想定される。

須恵器甕の一回個体の出土地点を見ると、第3号B・第4号・第5号・第7号・第12号A堅穴住居跡、第2号土坑に及び、広範囲に散在している点が特徴といえる。この中で床面から出土しているのは、第12号A堅穴住居跡だけである。このことから、これらの最も新しい帰属遺構は第12号A堅穴住居跡であり、他は既に埋没過程にあった可能性が高い。このような出土状況を示すものは他にないため、意図的に破片を廃棄していることも検討する必要があるだろう。

擦文土器は口縁部に横走沈線施文を基本とし、口唇部や横走沈線境界に刻目列や鉢齒文を施文するものがある。沈線は段状になるものが多く、器面調整はミガキやハケメ調整が用いられている。北海道石狩低地帯で出土している擦文土器と比較検討を行ったが、沈線施文や器厚などが明らかに異なり、石狩低地帯からの搬入は無いものと思われる。器面調整にミガキやナデは共通するものの、ハケメが使用される点で、土師器甕とは調整技法に差異が見られる。第8号堅穴住居跡から出土した図52-14は、沈線施文が口縁部・胴部境界までに限定され、本遺跡出土資料の中では古い要素を持っている。その他は口縁部・胴部境界を超えて、胴部最大径まで施文が施される等、新しい要素を持合わせている。鉢齒文が施文されるものはいずれも規則性が見られ、9世紀中葉～後葉とされる青森市江渡遺跡出土例、また、擦文前期末～中期初頭とされる札幌市K39遺跡第6次調査の第6文化層出土例に類似するものと思われる。新沢(1)遺跡から出土した擦文土器は、横走沈線の上に変形した鉢齒文が施文されることから、本調査区出土資料より後出の位置付けができる。以上の諸特徴から、第8号堅穴住居跡出土は8世紀後葉～9世紀前葉、その他は9世紀中葉～後葉と位置付けておきたい。

製塩関連遺物として製塩土器と土製支脚が出土した。一方、明確に製塩遺構と認定できるものは調

査区内では確認できなかった。製塙遺構の立地としては、平内町大沢遺跡のように、海岸線から一段高い位置に構築されていたと推測する。土製支脚は第4号竪穴住居跡のようにカマド支脚として原位置から出土したものや、第2号・第6号竪穴住居跡のように、カマド煙道に破碎されて出土したものがある。いずれもカマド内部からの出土が多く、本来の使用方法からの転用、もしくは再利用が行われていたことを示している。製塙土器は二次被熱による磨滅や破損が多く、破片での出土が多い。この中で外面に刻書を施すものが確認できた。図48-1は刻書部分のみナデ調整を行い、製作時に三角形のような刻書を意図的に入れていることがわかる。今後の類例増加を待ちたい。

ここでは本調査区に焦点を絞った総括を行った。一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に係る発掘調査では鳴沢川流域の古代を考える上で重要な発見が続いており、今後も調査が予定されている。本調査区の成果と共に、全ての発掘調査の結果を総合的に検討することで、新たな歴史像を描くことができるものと考えている。
(浅田)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1988『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 青森県教育委員会 1990『生沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
- 青森県教育委員会 1997『鶴柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 青森県教育委員会 1998『平野遺跡・今須(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第231集
- 青森県教育委員会 1998『外馬屋前田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第242集
- 青森県教育委員会 2000『野木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
- 青森県教育委員会 2002『吉木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第331集
- 青森県教育委員会 2003『吉上山遺跡・葦野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第347集
- 青森県教育委員会 2005『高屋敷館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
- 青森県教育委員会 2006『舟ノ前遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2007『太田野(2)遺跡・大田野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
- 青森県教育委員会 2012『青森県遺跡詳細分布調査報告書24』青森県埋蔵文化財調査報告書第523集
- 青森県教育委員会 2013『鶴沢(5)遺跡・鶴沢(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第529集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2014『平成26年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』配布資料
- 青森市教育委員会 2004『江渡遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第75集
- 秋田県教育委員会 1989『一般国道7号八電能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
- 秋田県文化財調査報告書第178集
- 秋田県教育委員会 1992『鶴田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第220集
- 鰐ヶ沢町教育委員会 1979『鳴戸遺跡』鰐ヶ沢町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書1
- 鰐ヶ沢町教育委員会 1999『今須(3)遺跡』鰐ヶ沢町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書5
- 鰐ヶ沢町教育委員会 2002『平野(2)遺跡』鰐ヶ沢町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書10
- 小樽市教育委員会 1991『鶴島併用施設跡』小樽市埋蔵文化財調査報告書第2編
- 五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 札幌市教育委員会 2001『K39遺跡 第6次調査』札幌市文化財調査報告書65
- 札幌市教育委員会 2001『K39遺跡 第7次調査』札幌市文化財調査報告書66
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『美沢川流域の遺跡群Ⅲ - 新千歳空港建設用地に埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992『美沢川流域の遺跡群Ⅳ - 新千歳空港建設用地に埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- 浅田智晴・東海林心 2014『土器器底の黒色処理と妻の底部属性から見た地域性』『青森県考古学』第22号 青森県考古学会
- 伊藤武士 1998『秋田城跡周辺須恵器群の動向について』『秋田考古学』第46号 秋田考古学協会
- 伊藤博幸 2000『兜型甕・出羽型甕・北奥型甕 - 東北地方の平安期窯の製作技術論を中心に - 』『吉岡康暢先生古希記念論集』
- 陶器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会
- 岩井浩介 2010『早稻田遺跡出土資料の再々検討 - 津輕平野南西部における古代後半期の供膳具について - 』『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
- 岩井浩介 2008『津輕地域ににおける古代土器食膳具の変遷 - 9世紀～11世紀を中心に - 』『青山考古』第24号 青山考古学会
- 宇部則保 2013『古代馬鹿川流域周辺の土器様相』『研究紀要』第2号 八戸市埋蔵文化財センター是川繩文館
- 岩木山刊行会 1968『岩木山』岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書
- 小山内寿一・岡田康博 1983『木造田神遺跡出土の後北式土器について』『弘前大学考古学研究』2
- 窓跡研究会 1997『古代の土器生産と焼成遺構』真陽社
- 柏木大延 2013『古代北・北海道における土器支脚の系譜とその意義』『物質文化』93号 物質文化研究会
- 齋藤淳 2008『北奥出士の攤文土器について』『青森県考古学』第16号 青森県考古学会
- 鉄闇廻遺物の分析評価グループ 2005『鉄闇廻遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工部会
- 「鉄の歴史 - その技術と文化 - 」フォーラム
- 東北古代土器研究会 2004『東北古代土器集成 - 忽恵器・窓跡編 - 』(出羽) 研究報告4

観察表の表記について

遺構法量に関する数値を囲む（ ）は残存値を示す。縄文土器の計測値で口径・底径における（ ）内の数値は推定復元値を、器高における（ ）内の数値は現存値を示す。また、石器の計測値における（ ）内の数値は現存値を示す。単位は長さをcm、面積をm²、重量をgに統一している。

表3 穴穴住居跡観察表

回数	遺構番号	略号	位置	カマド輪	規模面積	付属施設	カマド形態	備考
7 8 9	1A	SI01A	I X-49-50・51 I Y-49-50	N-63° -W	633×631×38 (35.3)	Pit 1: 23×18×28, Pit 2: 37×33×51, Pit 3: 22×18×5, Pit 4: 22×18×34, Pit 5: 21×16×19, Pit 6: 26×23×23, Pit 7: 21×18×18, Pit 8: 21×18×18, Pit 9: 27×22×16, Pit 10: 32×24×18, Pit 11: 23×22×28, Pit 12: 18×16×24, Pit 13: 33×23×28, Pit 14: 34×30×37, Pit 15: 32×21×20, Pit 16: 47×40×25, Pit 17: 40×33×37, 火床面: 55×49×9, カマド: 159×76×38	半地下	IV層上面確認 壁周溝: 幅35, 深20
10 11	1B	SI01B	I X-49-50 I Y-49-50	N-56° -W	449×440×27 (16.1)	Pit 1: 66×52×40, Pit 19: 54×34×21, Pit 20: 70×45×28, Pit 21: 66×44×14, Pit 22: 49×35×9, 大床面: 57×54×10, カマド: 147×36×49	地下	SI01A床面確認 壁周溝: 幅44, 深20
12 13	2	SI02	II L-54-55 II M-54-55	N-90° -E	360×342×38 11.9	火床面: 38×19×1, カマド: 123×41×30	半地下	IV層上面確認 放射性炭素年代測定 第4章第1節 樹種同定(第4章第3節)
14 15	3A	SI03A	II J-54-55-56 II K-54-55-56 II L-54	N-75° -W N-105° -E	507×477×24 21.1	Pit 1: 7×40×21, Pit 8: 42×21×15, 火床面: 57×48×5, カマド: 182×62×29 火床面: 62×43×5, カマド: 193×44×27	地下	SI03B瓶下時確認 壁周溝: 幅39, 深10
16 17 18	3B	SI03B	II J-54-55-56 II K-54-55-56	N-78° -W	710×672×27 42.1	Pit 1: 79×58×31, Pit 2: 60×45×31, Pit 3: 52×49×47, Pit 4: 60×32×22, 火床面: 56×51×5, カマド: 144×68×30	半地下	IV層上面確認 壁周溝: 幅43, 深15 火山灰分析 (第4章第3節)
19 20	4	SI04	II E-53-54-55 II F-53-54-55	N-131° -E	510×405×48 17.6	火床面: 43×40×6, カマド: 29×28×8	半地下	IV層上面確認 放射性炭素年代測定 (第4章第1節) 樹種同定 (第4章第3節) 壁周溝: 幅28, 深37
21	5	SI05	III H-57 II I-56-57-58 II J-57	N-146° -E	476×447×36 19.1	Pit 1: 47×46×18, Pit 2: 60×52×25, 火床面: 66×63×8 カマド: 121×39×33	半地下	IV層上面確認 壁周溝: 幅69, 深27
22 23	6A	SI06A	II G-55-56-57 II H-55-56-57	N-88° -E	590×554×35 28.1	火床面: 66×59×5, カマド: 119×48×35	半地下	IV層上面確認 火山灰分析 (第4章第3節) 壁周溝: 幅27, 深16
24 25	6B	SI06B	II G-55-56-57 II H-55-56-57	N-88° -E	531×481×28 21.1	Pit 1: 23×22×32, Pit 2: 25×24×33, Pit 3: 23×20×31, Pit 4: 28×23×23 火床面: 55×43×5, 伊賀: 120×59	-	S106A瓶下時確認 壁周溝: 幅38, 深21
26	7	SI07	II C-54-55	-	(325)×(288)×23 (9.3)	Pit 1: 29×24×28, Pit 2: 36×19×39	-	IV層上面確認 壁周溝: 幅27, 深16
27	8	SI08	II K-58-59 II L-58	-	246×(217)×45 (4.2)	火床面: 34×29×7	-	IV層上面確認
28	9	SI09	II H-58-59 II I-58-59	N-119° -W	313×(258)×36 (6.9)	Pit 1: 83×61×53, Pit 2: 33×28×16, 73×44×44, 火床面: 59×49×4 カマド: 172×61×34	半地下	IV層上面確認
29	10	SI10	II F-57-58 II G-58	N-111° -E	(370)×(12)×22 (13.9)	Pit 1: 29×25×19, Pit 2: 36×30×38, Pit 3: 28×24×25, Pit 4: 39×34×33, 大床面: 61×60×6	半地下	IV層上面確認 放射性炭素年代測定 (第4章第1節) 樹種同定 (第4章第3節) 壁周溝: 幅31, 深22
30	12A	SI12A	II D-58-59-60 II E-58-59-60	-	683×679×24 42.8	Pit 1: (86)×(62)×28, Pit 2: 113×80×22, Pit 3: 34×23×10, Pit 4: 37×27×23, Pit 5: 25×23×12, Pit 6: 50×30×17	-	IV層上面確認 壁周溝: 幅24, 深25
31	12B	SI12B	II D-58-59-60 II E-59-60	-	415×374×18 (14.7)	-	-	
32	12C	SI12C	II D-59-60 II E-59	-	339×(292)×0 (7.1)	0	-	
33 34 35	13A	SI13A	II C-56-57 II D-56-57-58	N-71° -W	663×(577)×25 (41.1)	Pit 4: 37×20×27, Pit 5: 17×6×22, 火床面: 53×50×11, カマド: 161×25×29	半地下	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節) 壁周溝: 幅18, 深23
36 37	13B	SI13B	II C-56-57 II D-56-57-58	N-71° -W	603×(536)×14 (35.3)	Pit 1: 50×9×56, Pit 2: 41×28×22, Pit 3: 35×26, Pit 4: 62×12×19, Pit 5: 49×45×9, 大床面: 53×48×6, カマド: 167×28×29, 伊賀: 50×49×6	地下	S113A瓶下時確認 壁周溝: 幅29, 深11
38 39	14A	SI14A	II D-57-58 II E-57-58-59	N-68° -W II F-58	(567)×(279)×39 (37.5)	カマド: 60×83×10	半地下	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節) 壁周溝: 幅41, 深23
40	14B	SI14B	II D-58 II E-58	-	(382)×(146)×27 (13.3)	-	-	

表4 溝跡観察表

回 数 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
41	1	SD01	II E-61・62, II F-62	(600)	30	67	IV層上面確認

表5 土坑観察表

回 数 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考	分類
42	1	SK01	II Y-49	90	87	46	IV層上面確認	III
42	2	SK02	II G-59・60, II H-59・60	200	189	37	IV層上面確認 放射性炭素年代測定(第4章第1節) 樹種同定(第4章第3節)	I
42	3	SK03	II Y-49	30	16	36	IV層上面確認	IV
42	4	SK04	II D-55, II E-55	83	79	62	IV層上面確認	III
42	5	SK05	II D-56	197	181	32	IV層上面確認	II
42	6	SK06	II E-57	152	117	25	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節)	II
42	7	SK07	II Y-36	157	142	32	IV層上面確認 放射性炭素年代測定(第4章第1節) 樹種同定(第4章第3節)	I
43	9	SK09	II B-36	178	142	33	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節) 火山灰分析(第4章第2節)	I
42	10	SK10	II D-57	105	82	14	S13A型下7時確認 樹種同定(第4章第3節)	II
43	11	SK11	II G-58・59, II H-58・59	74	62	33	IV層上面確認	IV
43	12	SK12	II W-38, I X-38	125	114	23	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節)	I
43	13	SK13	I X-40	126	119	9	IV層上面確認 樹種同定(第4章第3節)	I

表6 溝状土坑観察表

回 数 番号	遺構 番号	略号	位 置	主軸方向	長軸	短軸	深さ	備 考
44	1	SV01	II C-53・54	N-82°-E	409	105	158	IV層上面確認
44	2	SV02	II E-56・57	N-89°-E	344	40	116	IV層上面確認
44	3	SV03	II F-52・53	N-65°-W	431	50	87	IV層上面確認

表7 焼土遺構観察表

回 数 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
45	2	SN02	II D-56, II E-56	72	31	6	III層上面確認
45	3	SN03	II D-56	47	28	8	III層上面確認
45	4	SN04	II D-56	45	17	5	III層上面確認
45	6	SN06	II E-58, II F-58	113	40	11	IV層上面確認
45	7	SN07	II C-36	62	52	14	III層上面確認
45	8	SN08	II H-57	72	65	12	IV層上面確認

表8 性格不明遺構観察表

回 数 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
46	1	SX01	II D-56	41	37	4	II層上面確認
46	2	SX02	II D-56	43	31	4	IV層上面確認
46	3	SX03	II E-55	80	38	7	III層上面確認
46	5	SX05	II G-58, II H-58	62	55	4	V層上面確認
46	6	SX06	II A-40・41, II B-40・41	(325)	63	-	III~IV層上面確認

表9 土師器観察表

図 番号	出土 位置	層位	質種	部位	口径	底径	器高	外面 調整	内面 調整	底面 属性	備考	整理 番号
47 1	SI01A	確認面	坏	胴	-	-	(1, 2)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	-	I Y-50	H1
47 2	SI01A	確認面	裏	胴	-	-	(3, 4)	ナデ、煤	ハケメ	-	I Y-50	H3
47 3	SI01A	確認面	裏	胴～底	-	(6, 0)	(2, 9)	輪積痕、ナデ、 ミガキ	輪積痕、ナデ、 ミガキ	ナデ	I Y-49・50	H2
47 4	SI01A SI01B	裏	口～胴	-	-	(6, 6)	ナデ、煤	ハラナデ	-	I Y-49	H4	
47 5	SI01B	床面	裏	口～胴	-	-	(7, 5)	ナデ	ナデ	-	P-2	H5
47 6	SI02	床直	坏	口～胴	(13, 0)	-	(3, 8)	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ	-	IIW-55 P-13	H10-1
47 7	SI02 SI02 37°	床直	坏	底	-	(5, 8)	(1, 2)	ロクロ	ロクロ	回転 糸切	IIW-55 P-12, 31	H10-2
47 8	SI02 SI02 37° SI02 37°	裏	口～底	14.8	7.5	15.0	ロクロ、 ケズリ、 指頭圧痕、煤、 工具痕	ロクロ、煤	回転 糸切	II-55, II-54-55, P-5・9-15-18 +20-24-25-37 +39-40-50-55	H6	
47 9	SI02 37°	裏	口～底	-	(7, 0)	(4, 7)	ケズリ、ナデ、 黒斑	ハラナデ、ナデ、 工具痕、煤	ケズリ、 ナデ、 木葉痕	IIW-55 P-35	H9	
47 10	SI02 SI02 37° SI02 37° 側道 SI02P1t1	2, 3, 床面 8 堆積土	裏	胴～底	-	(9, 3)	(21, 3)	ナデ、キズ、 磨滅	ハケメ、磨滅	磨滅	IIW-55 P-11-26-27-39 +45	H7
47 11	SI02 SI02 37°	床面 2, 8	裏	口～胴	(18, 0)	-	(14, 7)	ヨコナデ、 ナデ、工具痕、 めくれ、磨滅、 煤	ヨコナデ、ナデ、 工具痕、 ハケメ、磨滅	-	II L-55 P-21-42-45-46 +47	H8
48 4	SI02 SI02 37° SI02 37° 側道 SI06A+B	床面 堆積土 堆積土 堆積土	壞	口～胴	33.5	-	(13, 6)	輪積痕、 指頭圧痕	ハケメ、ナデ	-	IIH-II L-M-55	H12
48 5	SI03A SI03B	堆積土 1	坏	口～底	(13, 0)	(5, 4)	(6, 1)	ミガキ、 火ハジケ、 黒斑	ミガキ、 黒色処理、 火ハジケ	欠け (剥離)	IIK-55 -1・2	H22
48 6	SI03A	床直	裏	胴	-	-	(8, 2)	ケズリ、 磨滅、 二次被熱	ナデ、キズ、 黒斑	-	H17	
48 7	SI03A 東37° 側道	堆積土	裏	胴	-	-	(5, 7)	ケズリ、 工具痕	輪積痕、 ナデ、 指頭圧痕、 めくれ	-	H16	
48 8	SI03A	裏	口～胴	-	-	(6, 6)	ケズリ、ナデ、 黒斑	輪積痕、 ナデ、 黒斑、磨滅	-	IIK-55, 灯明具	H20	
48 9	SI03A	床直	裏	底	-	-	(2, 3)	ケズリ、 磨滅	ケズリ、キズ、 黒斑	-	IIK-55	H18
48 10	SI03A	裏	口～胴	-	-	(10, 2)	ナデ、ミガキ	輪積痕、ナデ、 ミガキ、 指頭圧痕、煤	-	IIK-55	H15	
48 11	SI03A	裏	口	-	-	(4, 7)	輪積痕、ナデ、 ミガキ	ナデ、工具痕	-	IIK-55	H19	
49 1	SI03B	1	坏	口～底	(11, 6)	(5, 3)	(3, 9)	ミガキ、磨滅	ミガキ、 黒色処理	回転 糸切	IIK-55 -1・2	H23
49 2	SI03A+B	2	坏	口～胴	-	-	(4, 5)	ミガキ、磨滅	ミガキ、 黒色処理、 煤	-	II J-54, II K-55	H21
49 3	SI03B	1 2上位	坏	口～胴	-	-	(4, 2)	ミガキ、煤	ミガキ、 黒色処理	-	II E-55, 灯明具	H26
49 4	SI03B Pit 9	堆積土	坏	口	-	-	(3, 1)	ケズリ、ナデ	ミガキ、 黒色処理	-	H24	
49 5	SI04	壁際土	坏	口～底	14.0	5.7	6.0	ロクロ、煤、 タール状の光 沢ある付着物、 二次被熱	ロクロ、煤、 磨滅	回転 糸切	灯明具、 瓦ス丸、 II F-54 P-1	H28
49 6	SI04	1	坏	底	-	(5, 8)	(0, 9)	ロクロ	ミガキ、 黒色処理	回転 糸切	II K-54	H27
49 7	SI04	1 2 堆積土	裏	口～胴	(12, 2)	-	(10, 4)	ケズリ、ナデ、 煤	ナデ	-	II F-54 P-35	H29-1
49 8	SI04 37°	2	裏	胴	-	-	(6, 6)	ナデ、ミガキ	輪積痕、ナデ	-	II F-54 P-35	H29-2
49 9	SI04	床面	裏	胴	-	-	(5, 6)	ナデ	輪積痕、ナデ	-	II F-54 P-3	H29-3

回	番号	出土位置	層位	器種	部位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面属性	備考	整理番号	
49	10	SI04	堆積土	甕	胴～底	-	(9.4)	(3.4)	ケズリ、指頭圧痕	ナデ、工具痕	砂底	II E-55 (試掘トレンチ)	H35	
49	11	SI04	堆積土	甕	胴～底	-	(6.4)	(4.5)	ケズリ、ナデ、ミガキ	輪積痕、ナデ	磨減	II E-55 (試掘トレンチ)	H36	
49	12	SI04	床面	甕	口～胴	-	-	(5.0)	ケズリ、ナデ	ナデ、煤	-	II F-55	H36-1	
49	13	SI04	床面	甕	胴～底	-	(8.0)	(5.8)	ケズリ	ナデ	木炭痕	II E-55	H36-2	
49	14	SI04	堆積土	甕	底	-	-	(2.6)	ナデ、めくれ	輪積痕	ナデ	II E-55 (試掘トレンチ)	H37	
49	15	SI04	堆積土	甕	口	-	-	(4.4)	クロコ	ロクロ、黒斑	-	II E-55 (試掘トレンチ)	H38	
49	16	SI04	堆積土	甕	底	-	-	(2.9)	ナデ、ミガキ	輪積痕、ナデ	-	-	H39	
49	17	SI04 SI04 17) ⁺	1, 2, 5, 床面 2, 4	甕	口～胴	18.8	-	(22.3)	輪積痕、ケズリ ナデ、黒斑、煤	ナデ、煤	-	II E-54 P-3~9	H40	
50	1	SI04 SI04 17) ⁺	1 2	甕	口～胴	(21.4)	-	(14.2)	ケズリ、ナデ、磨減	ナデ、磨減	-	II E-54 P-14~27	H42-1	
50	2	SI04 SI04 17) ⁺	2 2	甕	胴	-	-	(20.0)	ケズリ、磨減	ナデ、磨減	-	II E-54 P-10~12・13 16~33・34	H42-2	
50	3	SI04	2	甕	胴	-	-	(3.9)	ケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	-	II E-54 P-3~9	H40	
50	8	SI04 SI05	1 堆積土	壺	口～底	(13.7)	5.7	5.5	クロコ、煤	ロクロ、煤	回転 糸切 磨減	灯明具 II-57, II-54 II-55 (試掘トレンチ)	H45	
50	9	SI05 17) ⁺	1	甕	胴	-	-	(10.8)	クロコ、磨減	ロクロ	-	II E-57 P-1~8	H46	
50	10	SI05	1	甕	胴～底	-	4.6	(3.1)	ケズリ	ナデ	ケズリ	II E-57	H50	
50	11	SI05 SI05 17) ⁺	1, 2	床面	口～胴	-	-	(18.0)	輪積痕、ミガキ	輪積痕、ミガキ、 工具痕	-	II E-57 P-4~5	H43	
50	12	SI05	床面	甕	胴	-	-	(8.9)	輪積痕、ナデ	輪積痕、ナデ、 ミガキ	-	II E-57	H48	
51	1	SI05	1 床面	壺	口～底	(11.8)	5.2	4.7	クロコ、黒斑、 二次被熱	ロクロ	回転 糸切 走み大	II E-57 P-12	H52	
51	2	SI05	1	壺	口～胴	-	-	(4.7)	ミガキ、煤	ミガキ、 黑色処理、煤	-	灯明具 II-57	H51	
51	3	SI05	1	甕	口	-	-	(3.3)	ケズリ、煤	ナデ、ミガキ	-	II E-57	H44	
51	4	SI05 SI05 17) ⁺	床面 1	甕	胴	-	-	(10.1)	ケズリ、煤	ナデ	-	II E-57 P-15	H47	
51	5	SI05 SI06A-B 17) ⁺	1 1	甕	胴	-	-	(9.9)	ナデ (ハケメに近い)	輪積痕、 指頭圧痕、ナデ	-	II E-57	H45	
51	6	SI05 SI06A-B 17) ⁺	1 1	甕	底	-	-	(2.1)	輪積痕、 指頭圧痕、磨減	ナデ、二次被熱、 工具痕	ナデ	II E-56・57	H49	
51	7	SI06A-B 17) ⁺	1 6	甕	口～底	(16.0)	8.2	19.7	ケズリ、ナデ、 工具痕、めくれ、 吸虫黒化	ナデ、ミガキ、 工具痕	ナデ	II E-56 P-13~14	H55	
51	8	SI06A 17) ⁺	5 6 10	甕	胴～底	-	9.6	(21.0)	輪積痕、ケズリ、 黒斑	ハケメ、ナデ、 工具痕	ハケメ、ナデ、 ナデ	P-6~10~15	H54	
51	10	SI06A-B 17) ⁺	堆積土 床直	甕	胴～底	-	(6.2)	(5.2)	ケズリ、工具痕	輪積痕、ナデ	ケズリ	-	H52	
51	11	SI06A-B 17) ⁺	2 床直	甕	口	-	-	(5.1)	ケズリ、ナデ、 次被熱、煤	ナデ、指頭圧痕	-	-	H59	
51	12	SI06A 17) ⁺	7	甕	口～胴	(15.8)	-	(15.3)	輪積痕、ナデ	輪積痕、ナデ	-	P-5	H56	
52	1	SI06A-B 17) ⁺	4	甕	口	-	-	(5.0)	ナデ、ミガキ (ハケメに近い)	ナデ、ミガキ	-	P-9	H60	
52	2	SI06A-B 17) ⁺	1	甕	口	-	-	(4.1)	ナデ、ミガキ 煤	ナデ、ミガキ、 煤	-	II E-56, II E-56	H57	
52	4	SI06A-B 17) ⁺ SI06B 壁直	2 堆積土	甕	口	-	-	(5.2)	ヨコナデ、ナデ、 磨減、煤	ナデ、磨減、煤	-	-	H67	
52	7	SI06A-B 17) ⁺	1 堆積土	甕	胴	-	-	(7.2)	ナデ (ハケメに近い)	ナデ	-	II E-56	H65	
52	8	SI06A-B 17) ⁺	1	甕	底	-	-	(1.6)	輪積痕、ナデ	ナデ	砂底	II E-56	H61	
52	9	SI06A-B 17) ⁺	2	甕	胴～底	-	(9.2)	(2.7)	ケズリ、ナデ、 黒斑	ナデ、磨減	ナデ、 磨減	-	-	H66
52	10	SI07	1	高台壺	口～底	(13.2)	6.5	5.3	クロコ	ロクロ、ミガキ、 黑色処理	-	貼付痕複数 高台部泥ユビナ デ痕の間み(高 台貼付時の押さ え) II-C-55	H68	
52	11	SI08	2	壺	口～胴	-	-	(4.9)	ミガキ、沈殿、 磨減	ミガキ、 黑色処理、磨減	-	II K-58	H69	

回	番号	出土位置	層位	器種	部位	口径	底径	器高	外面調査	内面調査	底面属性	備考	整理番号	
52	12	S108	1	环	胴	-	-	(4.3)	段状沈跡、ナデ、ミガキ、工具痕	ナデ、ミガキ、工具痕、黒色処理	-	H11-K-58	H70	
52	13	S108	1 2 床面	甕	口～胴	-	-	(10.7)	輪積痕、ナデ、工具痕	輪積痕、ナデ、磨滅	-	H11-K-58	H71	
52	15	S109 S109 付1 S109 付1 Pit 1	1 2 床面	甕	口～底	17.5	(7.0)	23.5	輪積痕、ナデ、指頭圧痕、煤	輪積痕、ナデ、指頭圧痕	-	H11-59 P-12-15-22 +23-25~29	H73	
53	1	S109Pit 1	1	甕	口～胴	-	-	(9.4)	ミガキ	ミガキ	-	P-28	H74	
53	2	S109 付2 S109 付2 Pit 2	1 2	甕	胴	-	-	(8.8)	輪積痕、ケズリ、ナデ	輪積痕、ナデ、二次被熱による煤	-	P-21-32	H75	
53	3	S109 付2	1 2	甕	口～胴	(20.0)	-	(10.9)	輪積痕、ケズリ、ナデ	輪積痕、ナデ	-	P-18-20	H76	
53	4	S109 S109 付2 S109 付2 Pit 2	1 2 床面	甕	胴～底	-	8.7	(6.8)	ミガキ	ミガキ	ナデ、 ケズリ	P-19-21-36	H76	
53	5	S109 付2 S109Pit 2	1 1	甕	胴～底	-	(6.5)	(6.8)	ナデ、火ハジケ	ナデ、工具痕、 磨滅	ケズリ	P-13-14-33	H79	
53	6	S109 付2	1	环	口～底	(12.7)	(5.6)	(5.6)	ロクロ、煤	ロクロ、ミガキ、 黑色処理	手切、 磨滅	P-16	H77	
53	8	S110 S110 付2	確認面 2、3	甕	口～胴	-	-	(24.5)	輪積痕、ケズリ、 ミガキ、胴下半磨滅	輪積痕、ナデ、 磨滅	-	H10-58 P-10-13-14- 19-25-29-30	H80	
53	9	S110 S110 付2	1、確認面 2	甕	口～胴	(19.7)	-	(13.1)	輪積痕、ナデ、 二次被熱による 磨滅	ナデ、 二次被熱による磨滅	-	H11-58- P-9	H81-1	
53	10	S110 S110 付2	1、2、 確認面 1	甕	胴～底	-	(9.2)	(7.4)	輪積痕、 二次被熱による 磨滅	輪積痕、ナデ	-	H11-58- H11-58 P-9	H81-2	
54	1	S110 S110 付2	1 2 確認面	甕	口～胴	(11.7)	-	(7.0)	沈跡（段状）、 ナデ、煤	ナデ	-	H11-P-58 P-2	H82	
54	3	S110 付2	3 確認面	甕	胴	-	-	(4.7)	ナデ	ナデ、磨滅	-	H11-P-58 P-29	H80	
54	4	S110 付2	1	甕	胴～底	-	7.3	(2.4)	二次被熱、磨滅	磨滅	-	H11-58	H84	
54	5	S110	確認面	甕	胴～底	-	(6.9)	(3.2)	ナデ、磨滅	ナデ、指頭圧痕	ナデ	H11-G-58	H85	
54	6	S110 付2	1 2 3	埴	口～胴	-	-	(6.5)	輪積痕、煤	ナデ、磨滅	-	P-7-26	H86-1	
54	7	S110	確認面	埴	口～胴	-	-	(11.4)	輪積痕	ナデ	-	H11-P-58- H11-58- 2	H86-2	
54	13	S110 付2 H11-59	2 II	甕	胴～底	-	(10.0)	(3.4)	ナデ	磨滅	磨滅	P-16	H83	
55	1	S112APit 1	1 2	甕	胴～底	-	9.5	(10.7)	ケズリ	輪積痕、ナデ、 磨滅	砂底	-	H11-60	H97
55	2	S112A S112APit 1	1	甕	口～胴	-	-	(12.0)	沈跡（段状）、 ナデ	磨滅	-	HE-60	H102	
55	3	S112A	2	甕	口	-	-	(4.2)	ロクロ、煤 沈跡（段状）	ロクロ	-	-	H92	
55	4	S112A	2	甕	胴～底	-	(5.1)	(2.2)	ロクロ	ロクロ	回転 糸切後 ナデ	H11-59	H94	
55	5	S112A	2	甕	口	-	-	(5.0)	ケズリ、ナデ	ナデ	-	HE-60	H95	
55	6	S112A+B	床面	甕	口縁付近	-	-	(4.0)	ロクロ	ロクロ	-	小型	H95	
55	7	S112A+B	床面	甕	胴～底	-	(5.0)	(2.6)	磨滅	磨滅	磨滅	P-8	H96	
55	8	S112A	床面	环	口～底	(13.4)	7.5	6.0	ロクロ、 二次被熱	ロクロ、煤	回転 糸切	P-5	H99	
55	9	S112A	2 3	环	口～胴	-	-	(4.0)	ロクロ、磨滅	ロクロ、磨滅	-	-	H96	
55	10	S112A	2	甕	胴	-	-	(7.8)	タタキ（平行）	当て具痕（平行）	-	P-2	H108	
55	11	S112APit 1 S112APit 6	1 1	甕	胴	-	-	(8.3)	輪積痕、ケズリ、 指頭圧痕	ナデ、磨滅	-	-	H105	
55	12	S112A	床面	甕	胴	-	-	(7.1)	輪積痕、ナデ、 ミガキ、黒斑	ナデ	-	P-11-12	H107-2	
55	13	S112APit 1	1	甕	胴	-	-	(9.7)	輪積痕、ナデ	磨滅	-	-	H107-1	
55	14	S112A	床面	甕	胴～底	-	(8.7)	(5.2)	ケズリ、工具痕、 二次被熱、磨滅	輪積痕、ナデ、 工具痕	ケズリ	P-13	H104	
55	15	S112A	2 床面	甕	胴～底	-	(7.7)	(5.9)	ミガキ、黒斑	輪積痕、ナデ、 ミガキ	木葉痕	H11-59 P-4-6-12	H106	
55	16	S112APit 2	2	甕	口	-	-	(6.0)	ロクロ、磨滅	ロクロ、磨滅	-	-	H103	
55	17	S112APit 6	1	环	口～胴	-	-	(4.1)	ロクロ	ミガキ、黒色処理、 磨滅	-	-	H106	

回	番号	出土位置	層位	器種	部位	口径	底径	器高	外観調整	内面調整	底面調査	備考	整理番号
56	1	SI12A HD-57	2 III	环	胴～底	-	5.4	(3.5)	ロクロ。めぐれ。磨減	ミガキ。黒色処理。	回転糸切		HII01
56	2	SI12B	1	环	胴～底	-	6.2	(2.0)	ロクロ。吸炭黒化。 キズ	ロクロ。ミガキ。 黒色処理	回転糸切		HII09
56	3	SI12A SI13A	床面 1	透	口～底 付近	(9.2)	(4.9)	(7.8)	ロクロ。ケズリ。 火ハシケ	ロクロ。黒色処理。 火ハシケ	-	HD-57 P-3・17	HII10
56	4	SI13A	床面	裏	胴～底	-	11.2	(14.4)	ケズリ。ミガキ。工具痕 煤	ナデ。煤。磨減	ナデ	P-8	HII16
56	5	SI13A	1	裏	口～胴	-	-	(7.5)	ナデ。ミガキ。磨減	ケズリ。ナデ。磨減	-	HD-57	HII12
56	6	SI13A	1	透	口～胴	-	-	(5.6)	ロクロ。 二次被熱による磨減	ロクロ	-	HD-57	HII11
56	7	SI13A	1	透	胴～底 付近	-	6.2	(2.5)	ロクロ。火ハシケ。 磨減	ミガキ。黒色処理。 火ハシケ	回転糸切 底付	HD-57	HII15
56	8	SI13A	1	环	胴～底	-	-	(3.6)	ケズリ。磨減	ロクロ。ミガキ。 黒色処理。磨減	-	HD-57	HII14
56	9	SI13A	1	环	口～底 底部付近	-	-	5.5	ミガキ	ミガキ。黒色処理	-	HD-57	HII13
56	10	SI13B	6	环	胴	-	-	(2.8)	ケズリ。磨減	ミガキ。黒色処理。 工具痕。磨減	-		HII17
56	11	SI13A SI14A	確認面 2、床面	裏	口～胴	(13.0)	-	(12.2)	ケズリ。ナデ。 火ハシケ	ナデ。煤	-	HD-57 P-1	HII18 -1
56	13	SI14A	床面	环	完形	(13.3)	5.4	6.0	ロクロ。煤	ロクロ。煤	回転糸切 の歪み P-3		HII20
56	14	SI14A HD-57	2 III	环	口～底	(12.3)	(5.6)	(5.2)	ロクロ。磨減	ロクロ。磨減	回転糸切	P-4	HII21
56	15	SI14A	3	环	口～胴	-	-	(3.5)	ロクロ。ミガキ	ロクロ。ミガキ。 黒色処理	-		HII19
56	16	SI14A	床面	裏	胴～底	-	8.7	(7.4)	ナデ。火ハシケ。煤	ナデ。ミガキ	砂底	P-3	HII18 -2
57	1	SD01	1	裏	口～胴	-	-	(6.4)	輪積痕。ナデ。ミガキ。 指削仕面。工具痕	輪積痕。ナデ	-		HII23 -1
57	2	SD01	1	裏	胴～底	-	(9.6)	(3.6)	輪積痕。ナデ。 工具痕。めぐれ	ナデ	ナデ。 磨減	HE-62	HII23 -2
57	3	SD01	1	裏	胴	-	-	(5.9)	輪積痕。ナデ	輪積痕。ナデ	-	HE-62	HII26
57	4	SD01	1	裏	胴～底	-	8.2	(4.3)	ロクロ。ナデ。磨減	ロクロ。磨減	回転糸切。 磨減	HE-62	HII25
57	5	SD01	1	环	胴～底	-	(6.0)	(1.6)	ロクロ。ケズリ再調整	ミガキ。黒色処理	回転糸切	HE-62	HII24
57	6	SK02	1	环	口～胴	-	-	(3.4)	ロクロ	ロクロ	-	IIH-60	HII29
57	7	SK02	1	埴	底	-	-	(3.5)	-	輪積痕。 二次被熱による磨減	ナデ	IIH-60 P-2	HII30
57	8	SK05	2	裏	胴～底	-	(8.6)	(10.6)	ケズリ→ミガキ	輪積痕。ナデ。 工具痕	複数箇所？		HII31
57	9	SK06 HE-57	1 III	环	口～底	(13.0)	4.6	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	HE-57	HII33
57	10	SK06 HE-57	1 III	裏	胴～底	-	(9.0)	(4.4)	ケズリ。化粧土。磨減	輪積痕。ナデ。 工具痕。磨減	砂底	HE-57	HII32
58	1	SK06 HD-56	2, 3, 4 I	裏	口～底	(20.1)	10.2	27.6	ヘラナデ。黒斑。 輪積痕	ナデ。ハケヌ。 ミガキ。煤	砂底		HII35 -1
58	2	SK06	2 3 4	裏	口～底	(21.0)	(9.0)	30.9	ナデ。ミガキ。煤。 磨減	ナデ。ミガキ。磨減	砂底		HII34
58	3	SK06	1	裏	口～胴	-	-	(5.4)	ロクロ。二次被熱。 磨減	ロクロ	-		HII28
58	4	SK06	1	环	口～胴	(12.8)	-	5.0	ロクロ。火ハシケ。煤	ロクロ。煤	-		HII27
58	5	SK05	1	裏	胴～底	-	(3.0)	(3.4)	ナデ	ナデ。工具痕	木製痕		HII37
58	6	SK05	1	埴	口～胴	-	-	(1.1)	輪積痕。ケズリ	輪積痕。ミガキ	-		HII36
59	1	HC-56	I	环	胴～底	-	4.0	(3.0)	ロクロ。磨減	ロクロ。磨減	磨減		HII41
59	2	-	表採	环	口～胴	-	-	(3.0)	ロミガキ 脇：磨減	ミガキ。黒色処理	-		HII45
59	3	HE-57	III	环	口～胴	-	-	(4.1)	ロクロ。磨減	ロクロ。ナデ。 ミガキ。磨減	-		HII42
59	4	II-1-58 風倒木瓶	堆積土	裏	口～胴	-	-	(6.0)	輪積痕。ナデ。 粘土粒付着。 粗いミガキ	輪積痕。ナデ	-		HII44
59	6	HE-60	現乱	裏	胴	-	-	(4.9)	タタキ (平行)。磨減	当て具痕 (平行)。 磨減	-		HII43

表10 撥文土器観察表

回	番号	出土位置	層位	断面	部位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面属性	備考	整理番号
48	2	SI02 SI02 2号 SI02 2号+左側 SI02 2号+堆積 SI02 2号+堆出	2 床直 堆積土 堆積土 堆積土 5	裏	口～胴	(26.8)	-	(19.2)	口唇：削み目列 胴：横走沈縫（段状）、 ハケメ、ナデ、 工具痕（沈線状）	ハケメ、ナデ、 工具痕（沈線状）	-	HIM-54-55、 HIL-55、 P-12・19 -34・36	H14
48	3	SI02 3号 SI06A+B	8 2	裏	胴	-	-	(8.7)	横走沈縫、細文、刻目、 ミガキ	ミガキ	-	P-44・45	H13
52	3	SI06A+B	1	裏	口	-	-	(2.8)	横走沈縫（段状）、ナデ	ナデ	-	HG-56	H58
52	5	SI06A 5号	3	裏	口～胴	-	-	(7.0)	横走沈縫（段状）、ミガキ	ミガキ	-	P-9	H63
52	6	SI06A+B	堆積土	裏	口	-	-	(3.8)	横走沈縫、ナデ、煤	ナデ、ミガキ	-	56-12と 同一の可能性	H64
52	14	SI08	2	裏	口～胴	(20.2)	-	(15.9)	横走沈縫（段状）、ナデ、 二次被熱による磨滅	輪積痕、ナデ、 二次被熱による磨滅	-	HK-58 P-1・2	H72
54	2	SI10 2号	2 3	裏	胴	-	-	(8.7)	輪積痕、ハケメ	輪積痕、ナデ、 工具痕、磨滅	-	P-11 (48-2と似て いる)	H91
54	8	SI10 2号	2	裏	口	-	-	(3.4)	沈線、磨滅	磨滅	-	P-8	H87
54	9	SI10	確認面	裏	口	-	-	(4.3)	沈線、磨滅、二次被熱	輪積痕、ミガキ、 磨滅、二次被熱	-	HG-58 54-10と同一 の可能性	H89
54	10	SI10	確認面	裏	口	-	-	(3.3)	輪積痕、比擬、ナデ、 ミガキ、工具痕、煤	輪積痕、ナデ、 ミガキ	-	HG-58 54-9と同一 の可能性	H88
56	12	SI12A SI14A	確認面 2、床面	裏	口	-	-	(6.1)	横走沈縫、細文、 ナデ	ミガキ、磨滅	-	52-6と同一 の可能性 HE-58 P-7	H122

表11 製塙土器観察表

回	番号	出土位置	層位	断面	部位	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面属性	備考	整理番号
48	1	SI02 SI02 2号 SI02 2号+堆積 SI02 2号+堆出	2、床直 堆積土 堆積土 堆積土 5	胴～底	-	10.5	(13.3)	輪積痕、ナデ、 ハケメ、指頭圧痕、 鉛筆痕、工具痕	ナデ、 工具痕、煤	ナデ 工具痕	HIL-55、 HIV-54-55 P-5・8・50・53	H11	
50	4	SI04	堆積土	胴	-	-	(6.5)	輪積痕、指頭圧痕、 めぐれ	ナデ、磨滅	-	HIF-55 (試掘トレンチ)	H38	
50	5	SI04	堆積土	胴	-	-	(6.3)	輪積痕、ケズリ	ナデ	-	HIF-55 (試掘トレンチ)	H39	
50	6	SI04	床面	胴	-	-	(5.5)	ナデ、工具痕	ナデ	-	IIF-F-54	H31	
50	7	SI04	床面	胴	-	-	(3.6)	輪積痕、ナデ	ナデ、剥離	-	P-37	H32	
51	9	SI06A	床直	胴	-	-	(4.1)	輪積痕、ナデ	ナデ	-	P-1	H147	
53	7	SX05 SI09	1 1	胴	-	-	(4.4)	輪積痕、ナデ	輪積痕、 ナデ	-	HII-59	H149	
54	11	SI10	確認面	口～胴	-	-	(5.7)	輪積痕	ナデ	-	HG-58	H148	
54	12	SI10 2号	2	胴～底	-	13.6	(5.0)	ケズリ、工具痕、 二次被熱による磨滅	ナデ、 工具痕	絞目痕、 ナデ	P-1	H146	
54	14	SI10 SK11	確認面 1	口	-	-	(5.2)	輪積痕	輪積痕、 ナデ	-	HG-58	H140	
58	7	SX05	1	口～胴	-	-	(8.7)	輪積痕、二次被熱、 磨滅	ナデ	-	-	H138	
59	5	-	表接 堆土	胴～底	-	(13.0)	(3.3)	輪積痕、ナデ、 植物圧痕	輪積痕、 ナデ	ナデ、 使用によ る磨滅	-	H150	

表12 須恵器観察表

図 番 号	出土 位置	層位	器種	部位	口径	底径	器高	外面 調整	内面 調整	底面 属性	備考	整理 番号
60 1	S103B S104 S105	2 1 1	甕	胴	-	-	(7.0)	タタキ(平行)	当て具瓶(円弧)	-	HJ-55, HJ-54, HJ-57, #660-5, 61-1・3, 62-1・6と同一	S1
60 2	S103B	2	甕	胴	-	-	(6.1)	タタキ(平行), 袖(自然灰袖) タタキ内に留まる	当て具瓶(平行)	-	HJ-54 #62-3と同一	S2
60 3	S106A・B	1	甕	底	-	(6.6)	(1.3)	ロクロ	ロクロ、磨り	回転 系切	#660-5 転用罐?	S3
60 4	S106A・B	1	甕	底	-	(6.4)	(2.3)	ロクロ	ロクロ	回転 系切	HJ-56	S4
60 5	S104	堆積土	甕	胴	-	-	(7.4)	タタキ(平行), カキメ	当て具瓶(円弧)	-	試掘トレンチ, HE-55, #660-1, 61-1・3, 62-1・6と同一	S5
60 6	S107	1	甕	口	-	-	(4.5)	ロクロ、磨滅	ロクロ	-	HC-55 #660-7と同一	S6
60 7	S107	1 確認面	甕	口～胴	-	-	(39.2)	ロクロ, タタキ(平行) 二次被焼	ロクロ, 当て具瓶(平行), ミガキ	-	HC-55 #660-6と同一	S7
61 1	S107 SK02 SI12A SI12APit 2 確認面 1 2 底面 確認面 1 3	甕	胴～底	-	2.8	(34.0)	タタキ(平行), カキメ	当て具瓶(円弧)	-	HC-55 #660-1・5, 61-3, 62-1・6と同一	丸底	S8
61 2	SI12A	床面	甕	底	-	(11.1)	(2.2)	ロクロ	ロクロ	-	転用罐 P-3	S9
61 3	SI12A	2	甕	胴	-	-	(8.1)	タタキ(平行), カキメ	当て具瓶(円弧), ナデ、使用痕	-	HJ-59 全転用罐 跡高(13.1) #660-2 60-1・5, 61-1, 62-1・6と同一	S10
62 1	SI12APit 2	2	甕	胴	-	-	(4.5)	タタキ(平行), カキメ	当て具瓶(円弧), 指觸圧痕、一部磨り	-	#660-1・5, 61-3, 62-1・6と同一 転用罐の可能性	S11
62 2	SI12A 遺構外	確認面 1	甕	胴	-	-	(9.0)	タタキ(平行), 全面溶融による光沢	当て具瓶(平行), 全面溶融による光沢	-	HE-59・61 #62-2-5と同一	S12
62 3	SI13A	1 2	甕	口～胴	(21.0)	-	(15.6)	ロクロ, タタキ(平行), 袖	ロクロ, 当て具瓶(平行), 袖、所蔵	-	HJ-57 #660-2と同一	S13
62 4	SI13A	3	甕	口～胴	(5.5)	-	(8.9)	ロクロ	ロクロ	-	P-1～4	S14
62 5	HJ-54	II	甕	胴	-	-	(7.3)	タタキ(平行), 全面溶融による光沢	当て具瓶(平行), 全面溶融による光沢	-	HC-54 #62-2と同一	S15
62 6	-	去探	甕	口	-	-	(6.6)	タタキ(平行), カキメ	当て具瓶(同心円)	-	#660-1・5, 61-1・3, 62-1と同一	S16

表13 繩文土器観察表

図 番 号	出土 位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法量			備考	分類	整理 番号
63 1	HJ-49	III	深鉢	口～ 外：刺突 ER側面押付	多軸轍条体？縫(平截竹管状工具先端)	内：ミガキ	跡高：(6.6)	船上鐵錐混入	I	J16
63 2	S102	2	深鉢	底	外：ER横	内：ミガキ	底：ミガキ 器高：(3.3)	船上鐵錐混入	I	J15
63 3	HJ-49	III	深鉢	胴	外：多軸轍条体？縫	内：ミガキ、火ハジケ	器高：(8.4)	船上鐵錐混入	I	J4
63 4	HJ-48	III	深鉢	胴	外：磨削、刺突(ヘラ状工具による連続刺突)	内：磨滅	器高：(4.2)	63-5と同一	II	J2
63 5	HJ-48	III	深鉢	胴	外：磨削、刺突(ヘラ状工具による連続刺突)	内：磨滅	器高：(5.4)	63-4と同一	II	J1
63 6	HJ-48	III	深鉢	胴	外：粘土紐貼付、ER横	内：磨滅	器高：(3.8)	63-5と同一	III	J3
63 7	HJ-56	I	深鉢	口	口：平 外：ER横 ER斜	内：ミガキ 跡高：(4.3)	63-8・9と同一	63-8・9と同一	IV	J18

回 番 号	出土 位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法量					備考	分類	整理 番号
					外:RL 横、RL 斜	内:ミガキ	器高:(19.3)	II H-56	63-18・19と 同一			
63 8	II 1-56 陶例木板 II 1-56	堆積土 I	深鉢	胴	口: 平	外:RL 斜、RL 縦	内:ミガキ	器高:(8.7)	II J-55, II 1-57 63-7・8と同一		IV	J20
63 9	S103B S105	2 1	深鉢	胴	口: 平	外:RL 斜、RL 縦	内:ミガキ	器高:(7.5)			IV	J19
63 10	II 1-56 陶例木板	堆積土	深鉢	口~胴	口: 平	外:RL 縦	内:ナデ	器高:(7.4)			IV	J7
63 11	II D-56	I	深鉢	胴	外:沈縫、LR 縦	内:ミガキ	器高:(7.4)				IV	J8
63 12	S105	床面	深鉢?	口	口: 平	外:LR 縦、めくれ?	内:ナデ	器高:(2.9)	II 1-57, 63-13と同一?		V	J13
63 13	S106A-B	堆積土 深鉢?	深鉢	胴	口: 平	外:沈縫、ナデ	内:ナデ	器高:(4.0)	黒底、63-12と同一?		V	J14
63 14	S108	2	深鉢	口	口: 平	外:沈縫、ナデ	内:ナデ	器高:(2.3)	II K-58		V	J15
63 15	S103A	2	深鉢	口	口: 平	外:RL 斜	内:ナデ	器高:(5.5)	黒底		V	J12
63 16	II 1-56	IV	深鉢	口	口: 平	外:RL 横	内:ナデ	器高:(3.6)			V	J17
63 17	-	表採	深鉢	胴	外:LR 縦、沈縫	内:ミガキ	器高:(3.6)				IV	J9
63 18	II D-54	I	深鉢	胴	外:RL 斜	沈縫(3条)	内:ミガキ	器高:(4.2)			IV	J16
63 19	S102	2	深鉢	口	口: 平	外:綱目状燃系文、ナデ	内:ナデ	器高:(4.4)			V	J11

表14 石器観察表

回 番 号	出土 位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考			整理 番号
									表面左側縫、裏面右側縫に浅型加工	剥片の右側辺に微細剝離	S-5	
64 1	S101B	確認面	不定形石器	珪質頁岩	5.1	3.9	1.3	27.9				5
64 2	S101B	2	不定形石器	珪質頁岩	2.7	1.6	0.4	1.3				2
64 3	S101BP1+20	底面	搬入縫	鰐歯岩	13.4	10.2	5.4	999.5	平坦面古面や平滑	剥材縫	S-5	40
64 4	S101B カマド	4	砥石	泥灰岩	10.3	8.3	7.4	741.2	2×面利用	S-3		37
64 5	S103A	2	砥石	鰐歯岩	7.9	2.8	1.6	31.0	小切	長軸に平行ないしは斜行する弱い縫合痕		32
64 6	S103A	薄土	砥石	鰐歯岩	7.4	3.7	1.8	52.5	扁平側の片面利用	弱い縫合痕		33
64 7	S103A S113A SK06	2 2 薄土	砥石	鰐歯岩	11.5	8.4	6.7	365.2	No.49a+ No.49b+ No.49c+ No.50	全体の2/3 3面利用	49a+b+c 50	
65 1	S104	3	台石	安山岩	19.1	16.4	8.9	3000.0	片端破損?: 平坦面に敲打痕	S-1		45
65 2	S104	床面	搬入縫	安山岩	15.0	13.0	5.7	1453.8	焼錆、頭面平滑	S-2		44
65 3	S104	床面	搬入縫	玉鶴	2.2	2.1	0.9	5.9	小縫?	白っぽい色調 S-1		20
65 4	S107	2	砥石	鰐歯岩	16.1	6.0	5.2	502.4	II C-55。バナナ状の縫合。頭面とその反対面が薄くに滑らか?			35
65 5	S109P1+2	1	凹石	鰐歯岩	10.0	7.2	3.2	223.7	破錆利用。片面に凹孔 S-2			29
65 6	S109	床面	凹石	安山岩	12.1	9.5	6.5	837.8	両面利用。L面には回転による深い凹孔			28
66 1	S112B	1	剥片	黑曜石	3.5	3.1	1.1	9.3	S-1			10
66 2	S112AP1+3	1	敲石	鰐歯岩	11.2	4.7	3.4	258.5	端部に敲打痕。器面滑らか。			25
66 3	S112A S112AP1+3	確認面	台石	安山岩	18.8	16.0	4.6	1352.6	No.41+No.42。ざらつく器面。深い凹孔。裏面には突出			41+42
66 4	S113A	2	石鏟	鰐歯岩	5.4	4.1	0.9	30.6	小形			21
66 5	S113A?†?	5	砾石	泥灰岩	12.1	6.1	3.2	357.0	1面利用			34
66 6	S113A?†?	5	砾石	鰐歯岩	10.6	7.9	6.0	592.1	端部に敲打痕			26
66 7	SK01	確認面	砥石	泥灰岩	15.0	7.5	4.8	633.5	両面利用			36
67 1	HG-58	III	石鏟	珪質頁岩	2.7	1.5	0.4	1.5	四基無茎 完形			1
67 2	HF-57	III	石鏟	珪質頁岩	3.4	2.5	1.1	7.6	又は大石平型石鏟?			3
67 3	HI-49	IV	石砲	珪質頁岩	10.5	3.1	0.7	27.0	縫形、む原型。裏面に光沢感			4
67 4	IU-33	I	石鏟	鰐歯岩	13.1	11.0	2.9	643.8	大型。較熱			22
67 5	表採	I	磨石	花崗岩	15.3	7.1	4.5	789.1	器体は滑らか。滑らかな磨痕			23
67 6	HC-56	II	台石	安山岩	16.5	13.7	8.4	2000.0	大型破片 被熱			43

表15 土製品(土製支脚)観察表

回 番 号	出土 位置	層位	部位	天井径 (cm)	脚部径 (cm)	切入径 (cm)	円孔徑 (cm)	器高	外面調整		内部調整	天井部	備考	整理 番号
									輪積板、ヘラナデ、 キズ、底部壓縮	輪積板、ヘラナデ、 キズ、焼				
68 1	S102 S102?†?	2, 3 1, 8	天井~脚部	12.4	13.6	-	-	11.6				天井部 砂底	P-40・54	B1
68 2	S104	裏方	完形	13	10.6	-	L.1	12.9	輪積板、指頭王板、 ナデ、巻き上げ、 円孔	輪積板、 ナデ、	木葉板	P-44	B2	

図 番 号	出土 位置	層位	部位	天井径 (cm)	脚部径 (cm)	切込径 (cm)	円孔径 (cm)	器高	外面調整	内面調整	天井部	備考	整理 番号
68 3	S105 S110	確認面 1	脚	-	(11.6)	(2.4)	-	(6.5)	輪積痕、指頭圧痕、ナデ、めくれ	輪積痕、ナデ	-	BG-58, II-57	B7
68 4	S106A#7+*	5	天井～脚部	12.4	(15.4)	(3.0)	-	14.7	輪積痕、ナデ、指頭圧痕、めくれ、二次被熱による磨滅	輪積痕、ナデ、中心くぼみ	P-12 脚部切り込み	D3	
68 5	S106A#7+*	5	天井	(11.2)	-	-	-	(2.5)	指頭圧痕、ナデ	内面剥離	ナデ、工具痕	P-11 68-8と同一の可逆性	B4
68 6	S108#7+*	2	脚	-	11.2	3.7	(1.5)	(9.5)	輪積痕、ナデ、指頭圧痕、二次被熱による磨滅	輪積痕、ナデ	-	P-3・4 外側内側穿孔、II-58	B6
68 7	SK06	2	脚	-	(14.6)	-	-	(6.0)	輪積痕、ナデ、工具痕、指頭圧痕	輪積痕、ナデ、工具痕	-		D10
68 8	SK11	1	胴	-	-	-	-	(4.1)	輪積痕	輪積痕、ナデ	-	68-5と同一の可逆性	D11
68 9	SK11	1	脚	-	-	-	-	(6.7)	輪積痕、ナデ	輪積痕、ナデ	-		D12

表16 土製品観察表

図 番 号	出土 位置	層位	器種	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	基面調整		備考	整理 番号
68 10	-	表採	土製鍬車	5.3	2.2	0.8	67.6	指頭圧痕、二次被熱による磨滅、ミガキ		-	D17
68 11	S105	1	土鉢	2.6	2.1	-	8.7	-		II-57	D15
68 12	S109	1	土玉 未完成品	1.1	1.1	0.2	1.4	-		土玉-1 下から穿孔するも未貫通	D16
68 13	S104	床面	土玉	1.1	1.1	0.1	1.3	-		II-E-55	D14

表17 鉄製品・鉄生産関連遺物観察表

図 番 号	出土 位置	層位	器種	材質	長	幅	厚	重	磁着度	メタル 還元	備考	整理 番号
69 1	S101A	床面	貴金属	鉄	4.4	1.7	0.2	11.7	6	酸化 (△)	I-X-49	Fe 1
69 2	S101AP1±2	1	刀子	鉄	(14.5)	(1.5)	(0.3)	22.5	6	酸化 (△)	IY-50	Fe 2
70 1	SK06	2	羽口	粘土	(9.8)	6.4	-	370.7	3	なし	II-E-57 内径2.5cm 先端部欠損 前面～基部	D18
70 2	SK10	2	羽口	粘土	(4.1)	(4.6)	-	30.5	3	なし	内径(1.6cm)先端部	D19
70 3	SK02	1	羽口	粘土	(2.2)	(2.9)	-	4.4	2	なし	II-D-56 内径(3.0cm)胴部	D20
70 4	II-B-53	1	羽口	粘土	(10.1)	(7.3)	-	155.6	2	なし	内径(3.3cm)胴部	D21
70 5	S112A	確認面	如塗溶解物	鉄津	2.8	2.8	1.4	5.7	3	なし	-	T 1
70 6	II-B-47	IV	如塗溶解物	鉄津	2.3	1.8	1.3	2.2	1	なし	-	T 2
70 7	S106A-B	床直	如塗	鉄津	2.4	3.1	2.5	6.2	1	なし	駆白灰色、粒子細かい	T 6
70 8	SK05	確認面	羽口付鍛冶津	鉄津	2.6	2.7	2.6	8.7	3	なし	II-D-56 (羽口付)	T 8
70 9	S103A	3	地堅土塊	粘土	4.2	3.1	1.9	12.7	2	なし	-	T 4
70 10	SI04	埋土塊	鍛冶津 (含鉄)	鉄津	3.1	2.5	2.1	9.0	12	II(○)	II-E-55(試掘トレンド)	T 7
70 11	SK05	確認面	鍛冶津	鉄津	2.5	3.6	1.6	15.5	7	酸化 (△)	鍛造剝片付着 II-D-56	T 9
70 12	SK05	確認面	鍛冶津	鉄津	2.5	2.2	1.8	15.7	9	酸化 (△)	II-D-56	T 10
70 13	SI09 #7+*	1	範形津 (含鉄)	鉄津	8.5	6.5	4.2	254.5	12	II(○)	2回操業	T 11



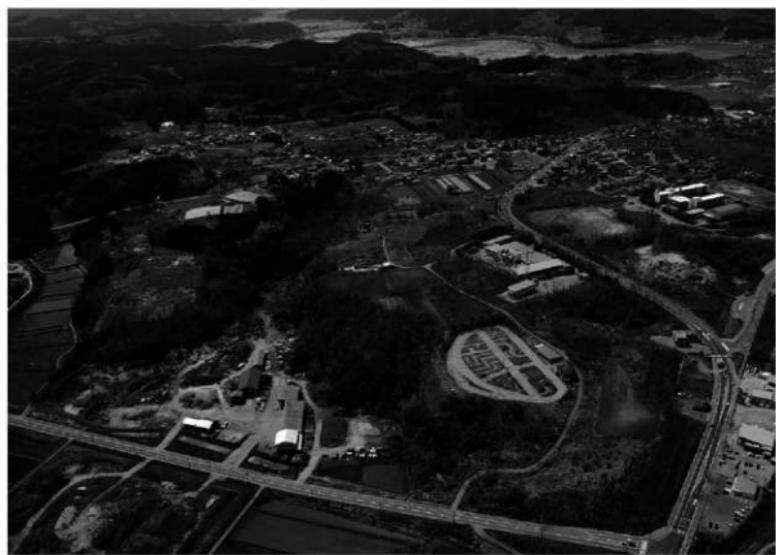
鳴戸(3)遺跡上空から鳴沢川河口と七里長浜を望む

南より



鳴戸(3)遺跡上空から金沢街道沢(1)遺跡と鳴沢川を望む

西より



遺跡遠景

北より



調査区西側調査終了

南より



調査区東側調査終了 (SI01)

西より



調査区東側調査終了 (SI02~14)

西より



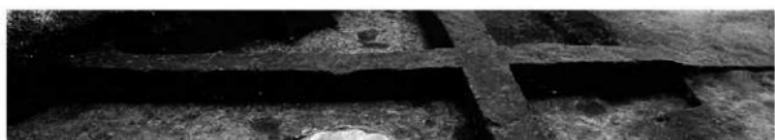
調査区東側調査終了 (SI12~14)

西より



第1号A整穴住居跡 完掘

東より



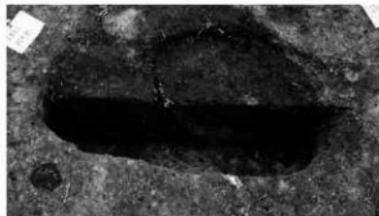
第1号A整穴住居跡 断面

北東より



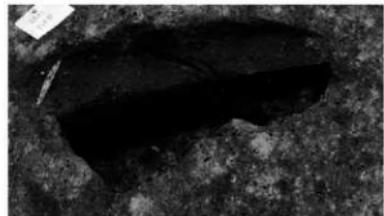
第1号A整穴住居跡 断面

南東より



第1号A整穴住居跡Pit2・Pit3 断面

北東より



第1号A整穴住居跡 Pit9・Pit10 断面

北より



第1号A型穴住居跡カマド 完掘

南東より



第1号A型穴住居跡カマド q-r断面

南東より



第1号A型穴住居跡カマド 天井磧検出状況

北より



第1号A型穴住居跡カマド 磁磧検出状況

南東より



第1号A型穴住居跡カマド 磁磧検出状況

北東より



第1号A型穴住居跡カマド 磁磧検出状況

南東より



第1号A型穴住居跡カマド 煙道 断面

北東より



第1号A型穴住居跡カマド K-I掘方断面

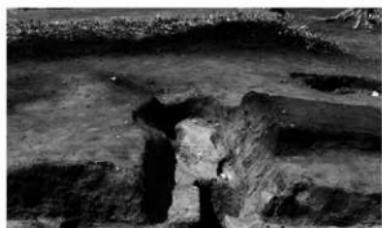
北西より



第1号A竪穴住居跡カマド m-n掘方断面 北西より



第1号A竪穴住居跡カマド q-r掘方断面 北西より



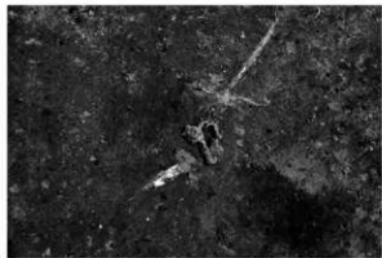
第1号A・B竪穴住居跡カマド 掘方完掘 南東より



第1号A竪穴住居跡カマド o-p掘方断面 北西より



第1号A竪穴住居跡 遺物出土状況 東より



第1号A竪穴住居跡 床面鉄製品出土状況 南より



第1号B竪穴住居跡 断面 北東より



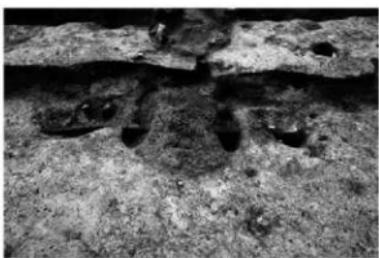
第1号A・B竪穴住居跡 完掘

東より

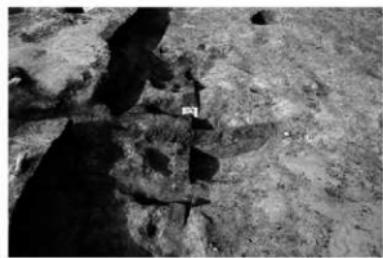


第1号A竪穴住居跡カマド 断面

南西より



第1号B竪穴住居跡カマド・Pit21・22 断面 南東より



第1号B竪穴住居跡カマド火床面 断面

南西より



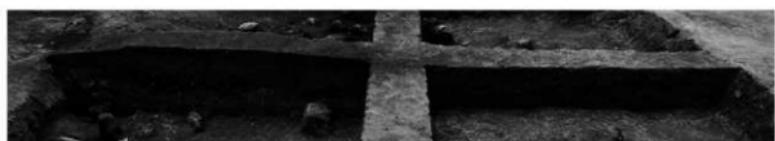
第1号B竪穴住居跡カマド火床面 断面

南東より



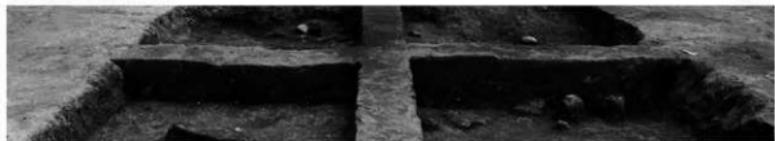
第2号竪穴住居跡 完掘

西より



第2号竪穴住居跡 断面

北より



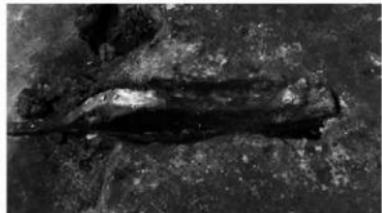
第2号竪穴住居跡 断面

西より



第2号竪穴住居跡カマド 確認

西より



第2号竪穴住居跡カマド 断面

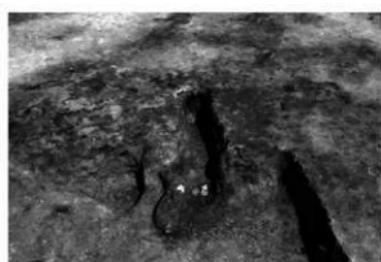
南より



第2号竪穴住居跡カマド 断面 西より



第2号竪穴住居跡カマド袖 断面 西より



第2号竪穴住居跡カマド 完掘 西より



第2号竪穴住居跡 炭化材出土状況 北東より



第2号竪穴住居跡 遺物・粘土出土状況 西より



第2号竪穴住居跡 擦文土器出土状況 北東より



第2号竪穴住居跡カマド煙道 遺物出土状況 南より



第2号竪穴住居跡カマド 遺物出土状況 西より



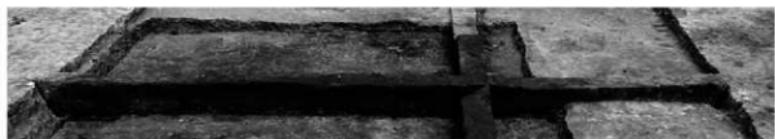
第3号A・B竪穴住居跡 完掘

西より



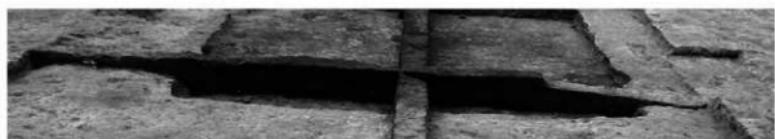
第3号A・B竪穴住居跡 完掘

東より



第3号A・B竪穴住居跡 断面

西より



第3号A・B竪穴住居跡 断面

南より



第3号A竪穴住居跡西カマド 完掘 東より



第3号A竪穴住居跡西カマド 堀方完掘 東より



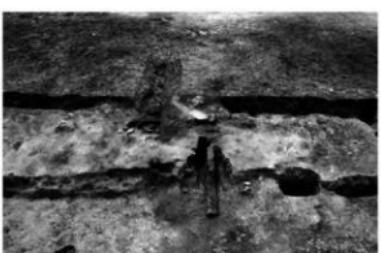
第3号A竪穴住居跡東カマド 確認 東より



第3号A竪穴住居跡東カマド 完掘 西より



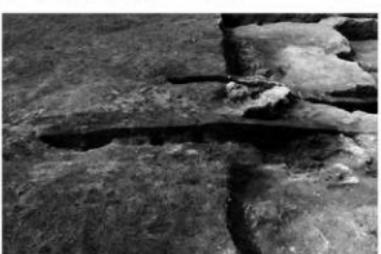
第3号A竪穴住居跡カマド 焼燬出土状況 南より



第3号A竪穴住居跡西カマド 確認 東より



第3号B竪穴住居跡東カマド 断面 南より



第3号B竪穴住居跡カマド 断面 南より



第3号A・B竪穴住居跡 挖方完掘

東より



第3号A・B竪穴住居跡 挖方完掘

西より



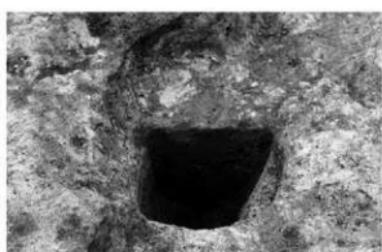
第3号B竪穴住居跡Pit 1 断面

南より



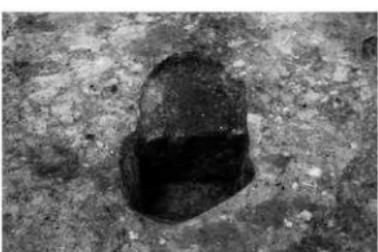
第3号B竪穴住居跡Pit 2 断面

南より



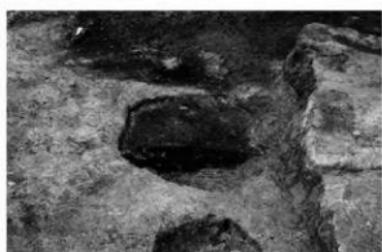
第3号B竪穴住居跡Pit 3 断面

南より



第3号B竪穴住居跡Pit 4 完掘

東より



第3号A・B竪穴住居跡Pit 5 断面

南より



第3号A竪穴住居跡Pit 7 断面

西より



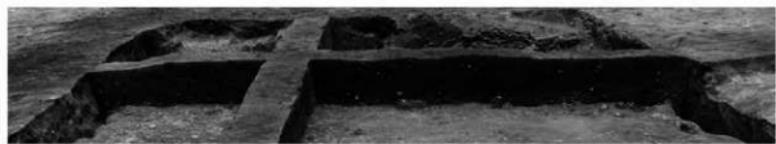
第4号竪穴住居跡 完掘

北西より



第4号竪穴住居跡 断面

南東より



第4号竪穴住居跡 断面

南西より



第4号竪穴住居跡カマド 完掘

北西より

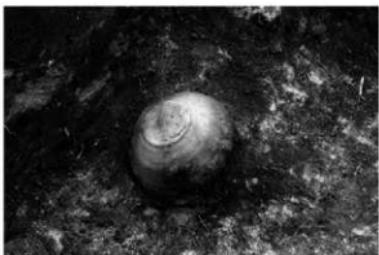


第4号竪穴住居跡 カマド 断面

北東より



第4号竪穴住居跡カマド 断面
南西より



第4号竪穴住居跡遺物出土状況(P-1)
南より



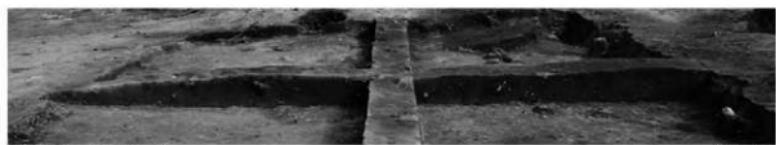
第4号竪穴住居跡 床面遺物出土状況
北より



第4号竪穴住居跡 炭化材出土状況
南西より



第5号竪穴住居跡 完掘
北西より



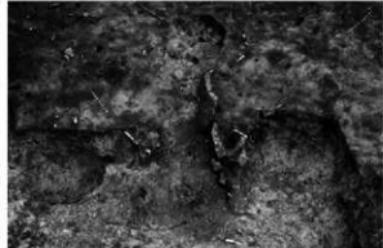
第5号竪穴住居跡 断面

北西より



第5号竪穴住居跡 断面

北東より



第5号竪穴住居跡カマド 完掘

北西より



第5号竪穴住居跡カマド 断面

北東より



第6号A・B竪穴住居跡 完掘

西より



第6号A・B竪穴住居跡 断面

南より



第6号A・B竪穴住居跡 断面

西より



第6号A竪穴住居跡カマド 完掘

西より



第6号A竪穴住居跡カマド 断面

西より



第6号A竪穴住居跡カマド 断面

南より



第6号A・B竪穴住居跡カマド火床面 断面

南より



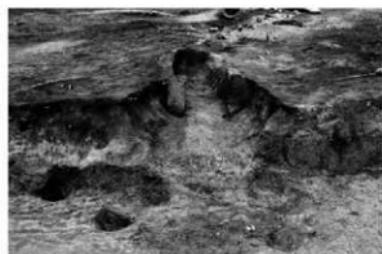
第6号A竪穴住居跡カマド 土器出土状況

南より

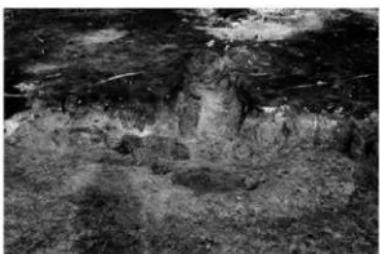


第6号A竪穴住居跡 遺物(P-9)出土状況

西より



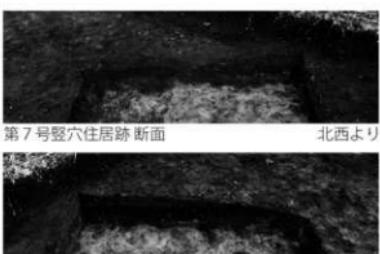
第6号A・B竪穴住居跡カマド煙道 断面 西より



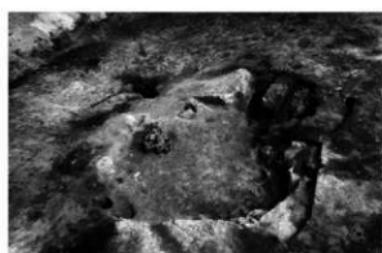
第6号A・B竪穴住居跡カマド 堀方完掘 西より



第7号竪穴住居跡 完掘 北東より



第7号竪穴住居跡 断面 北東より



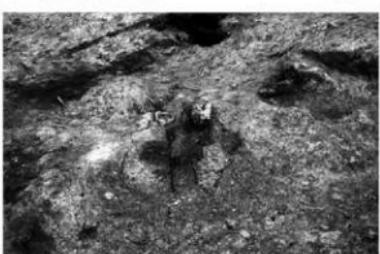
第8号竪穴住居跡 完掘 北西より



第8号竪穴住居跡 断面 南より



第8号竪穴住居跡 断面 北東より



第8号竪穴住居跡カマド 完掘 北西より



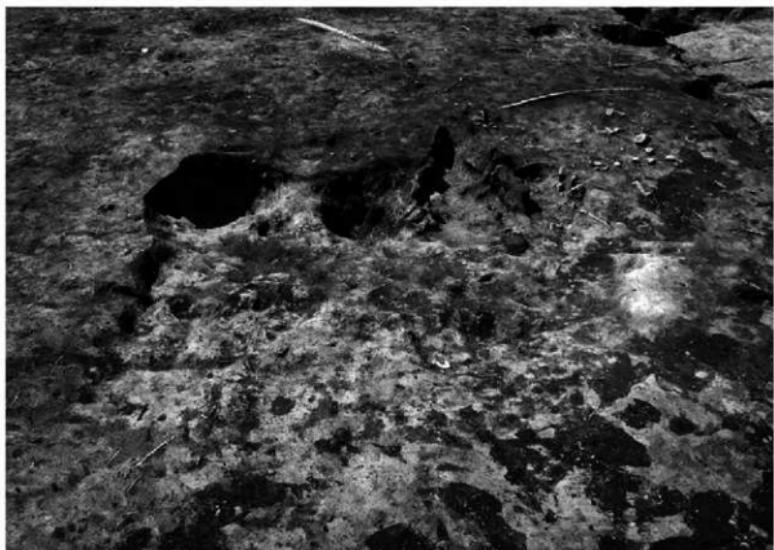
第8号竪穴住居跡カマド 断面



北東より

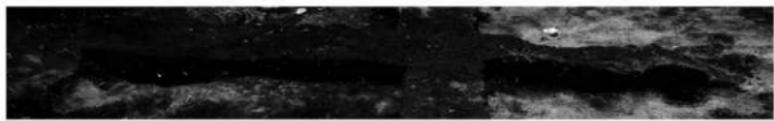
第8号竪穴住居跡 遺物出土状況

北西より



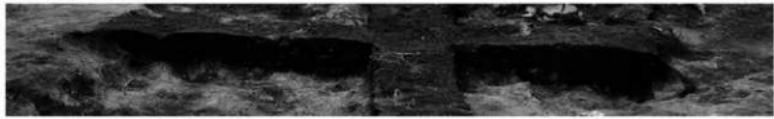
第9号竪穴住居跡 完掘

北東より



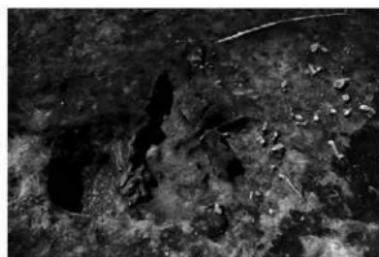
第9号竪穴住居跡 断面

南東より



第9号竪穴住居跡 断面

北東より



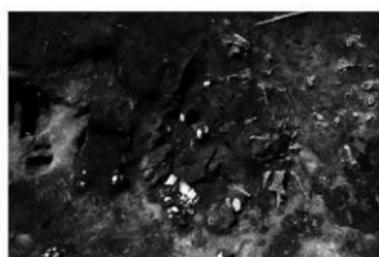
第9号竪穴住居跡カマド 完掘

北東より



第9号竪穴住居跡カマド 断面

東より



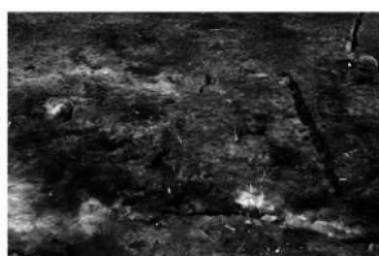
第9号竪穴住居跡カマド 遺物出土状況

北東より



第9号竪穴住居跡 炭化材出土状況

南より



第10号竪穴住居跡 完掘

西より



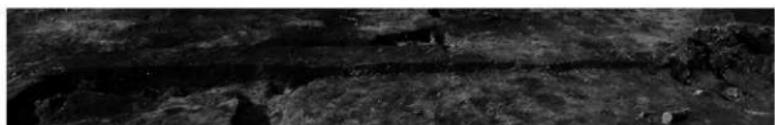
第10号竪穴住居跡 完掘

西より



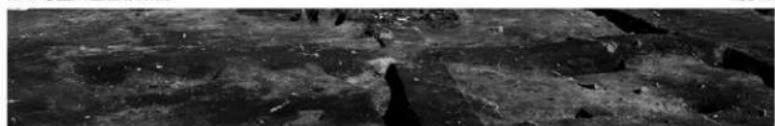
第10号竪穴住居跡 炭化材、焼土検出状況

西より



第10号竪穴住居跡 断面

南より



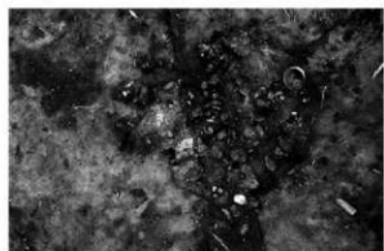
第10号竪穴住居跡 断面

西より



第10号竪穴住居跡カマド 断面

南西より



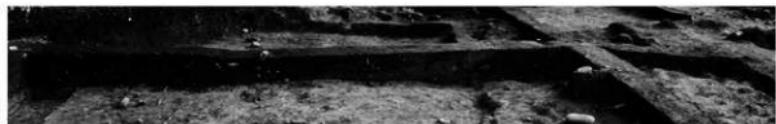
第10号竪穴住居跡カマド 遺物出土状況

西より



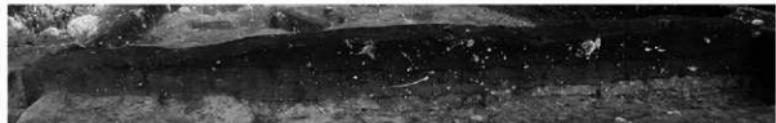
第12号A・B・C竪穴住居跡 完掘

北東より



第12号A・B・C竪穴住居跡 断面

北東より



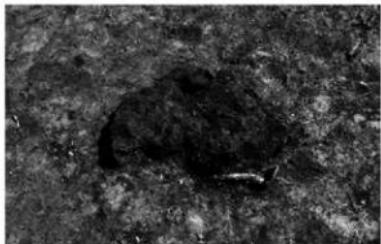
第12号A・B・C竪穴住居跡 断面

北西より



第12号A竪穴住居跡Pit 2 断面

北西より



第12号B竪穴住居跡 焼土焼出状況

北東より



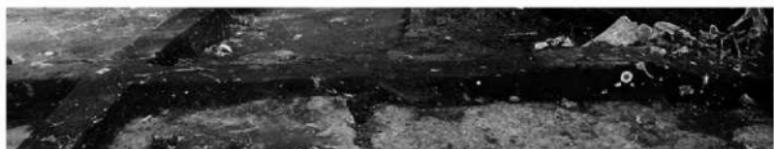
第13号A竪穴住居跡 完掘

北より



第13号A竪穴住居跡、第10号土坑 断面

南西より



第13号A竪穴住居跡 断面

北西より



第13号A竪穴住居跡 断面

西より



第13号A竪穴住居跡カマド 完掘

東より



第13号A竪穴住居跡カマド 完掘

東より



第13号A竪穴住居跡カマド 断面

北より



第13号A竪穴住居跡カマド 断面

北西より



第13号A型穴住居跡カマド 磁・石器出土状況 北より



第13号A型穴住居跡カマド 炭化材出土状況 東より



第13号A型穴住居跡カマド 検出状況

東より



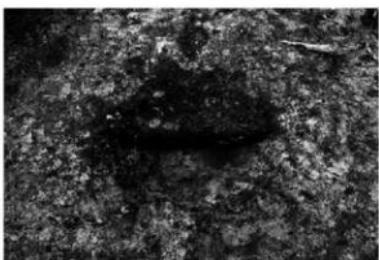
第13号B型穴住居跡 完掘

北より



第13号B竪穴住居跡 断面

西より



第13号B竪穴住居跡 炉断面

南より



第13号A・B竪穴住居跡カマド 完掘

東より



第13号B竪穴住居跡カマド 断面

北より



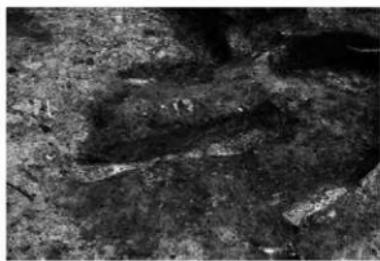
第13号A・B竪穴住居跡カマド 完掘

東より



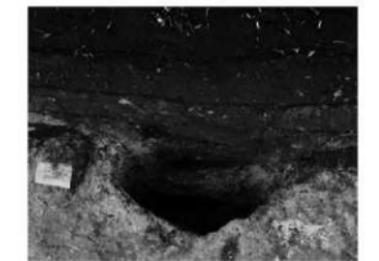
第13号B竪穴住居跡カマド 断面

北より



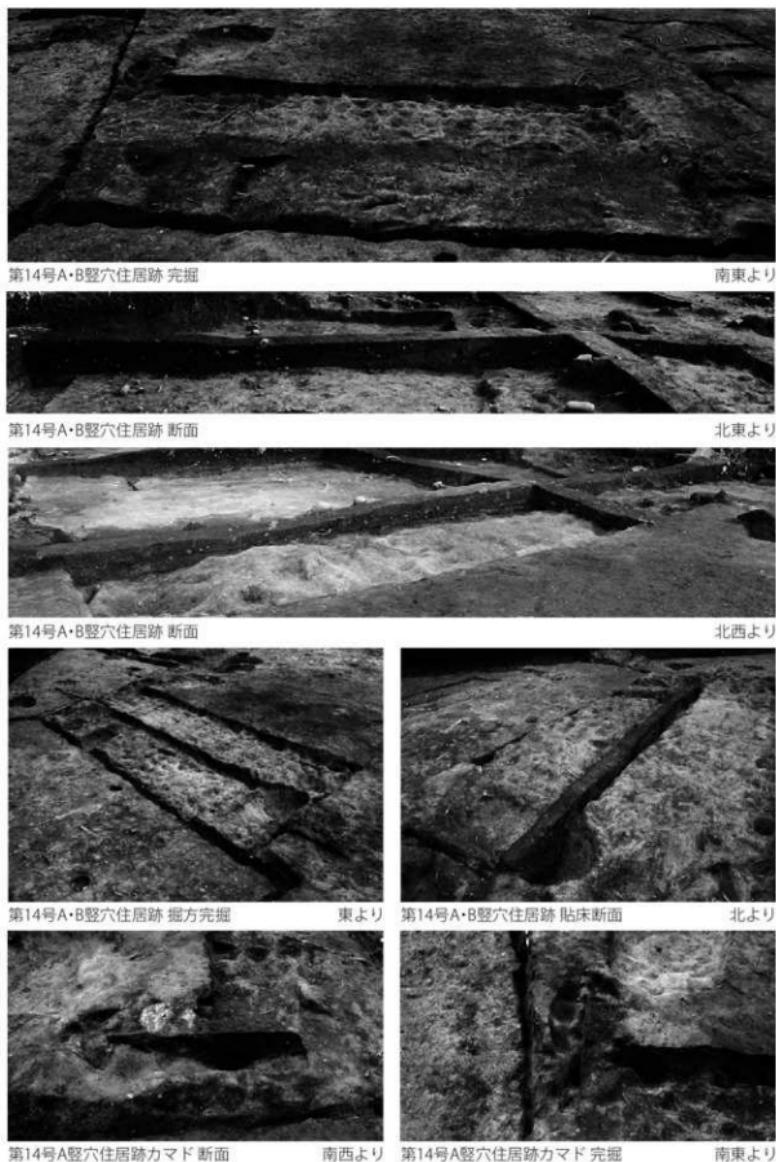
第13号B竪穴住居跡カマド火床面 断面

北より



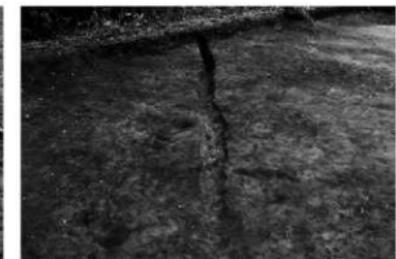
第13号A竪穴住居跡Pit 1 断面

北より



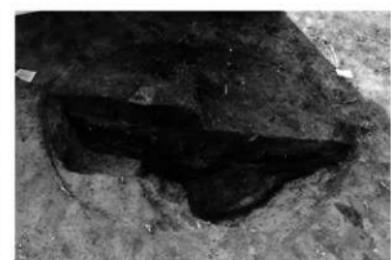


第1号溝跡 断面・粘土検出状況



北東より

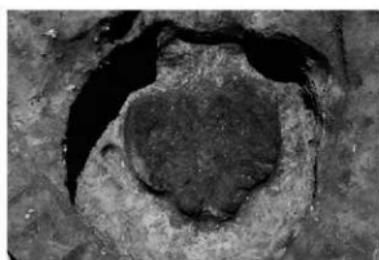
第1号溝跡 完掘



第1号・第3号土坑 完掘

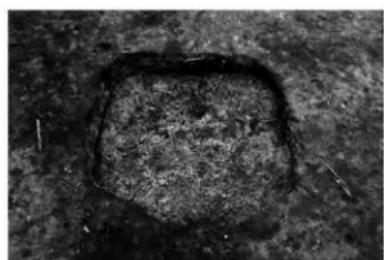
東より

第1号・第3号土坑 断面・炭化材出土状況 東より



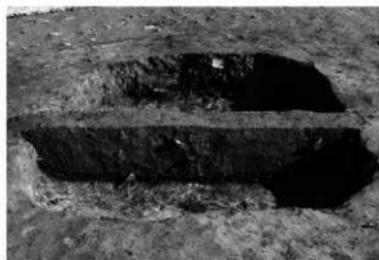
第1号土坑 炭化材出土状況

北より



第2号土坑 完掘

東より



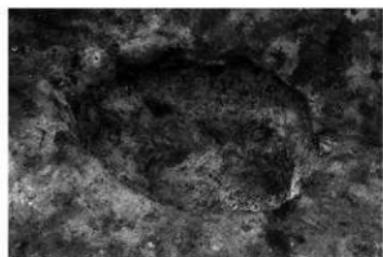
第2号土坑 断面

北より



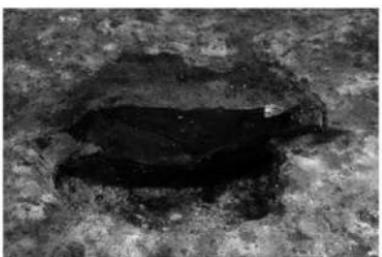
第2号土坑 炭化材出土状況

西より



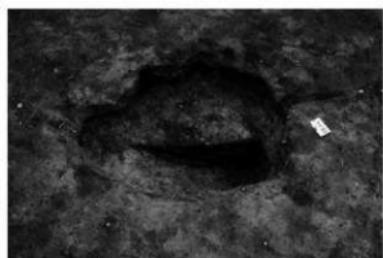
第4号土坑 完掘

北より



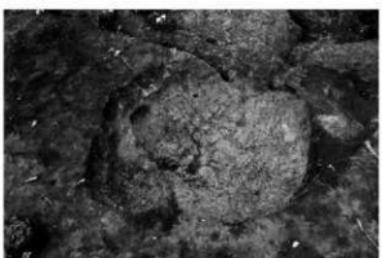
第4号土坑 断面

北より



第4号土坑 下部断面

北より



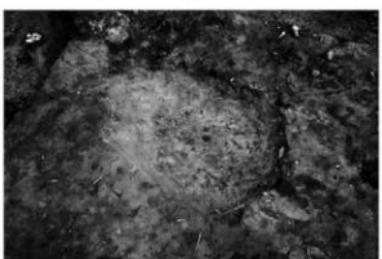
第5号土坑 完掘

西より



第5号土坑 断面

南西より



第6号土坑 完掘

北より



第6号土坑 断面

北より

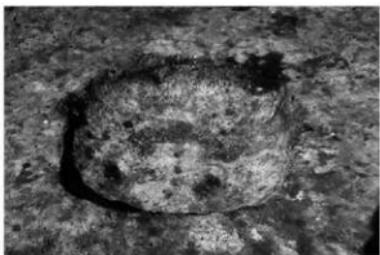


第6号土坑 焼土範囲

北より



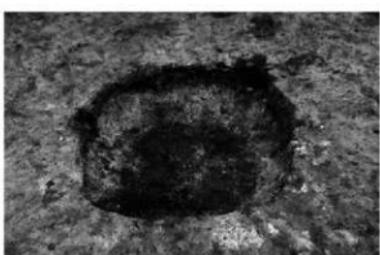
第6号土坑 焼土・遺物出土状況 西より



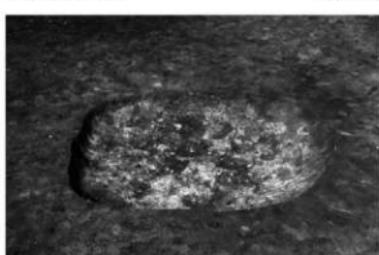
第7号土坑 完掘 南西より



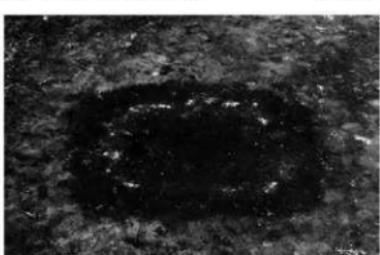
第7号土坑 断面 南西より



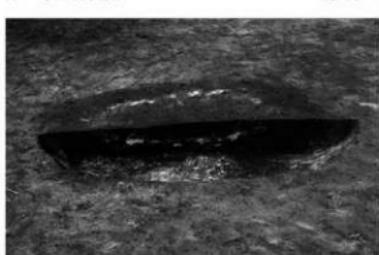
第7号土坑 炭化材出土状況 南西より



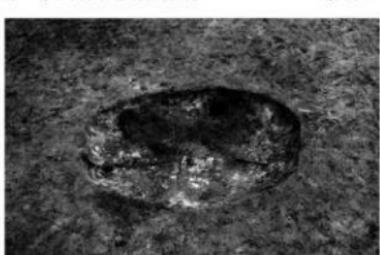
第9号土坑 完掘 南西より



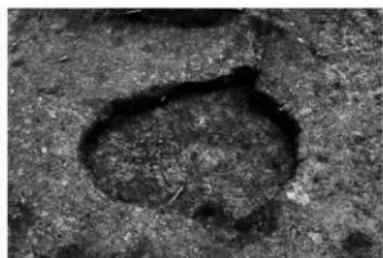
第9号土坑 火山灰検出状況 南西より



第9号土坑 断面 南西より

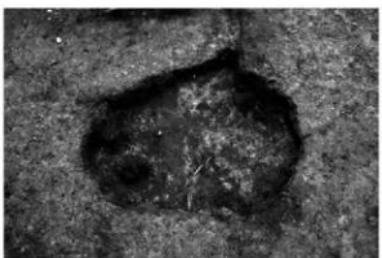


第9号土坑 炭化材出土状況 南西より



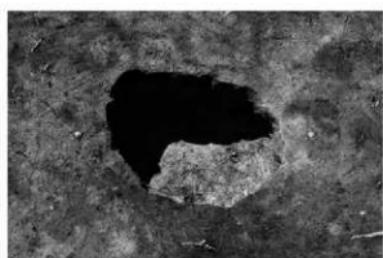
第10号土坑 完掘

東より



第10号土坑 炭化材出土状況

東より



第11号土坑 完掘

東より



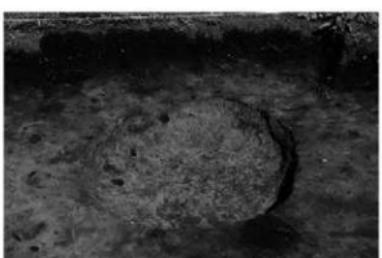
第11号土坑 断面

西より



第11号土坑 遺物出土状況

東より



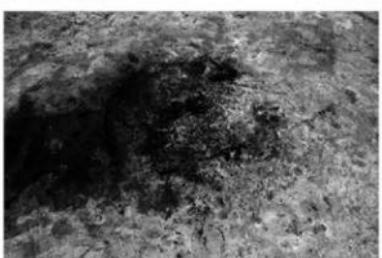
第12号土坑 完掘

西より



第12号土坑 断面

西より



第13号土坑 完掘

東より



第13号土坑 断面

東より



第1号溝状土坑 断面

東より



第1号溝状土坑 完掘

東より



第2号溝状土坑 断面

西より



第2号溝状土坑 完掘

東より



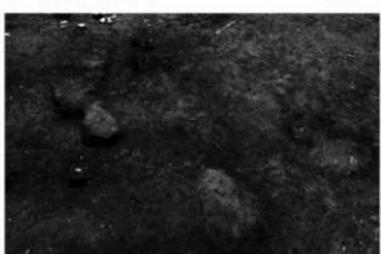
第3号溝状土坑 断面

南西より



第3号溝状土坑 完掘

南西より



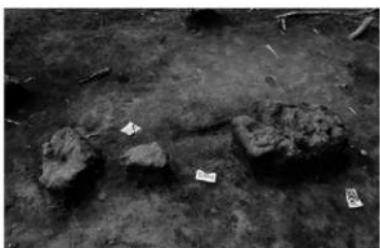
第2号焼土遺構 確認

北より



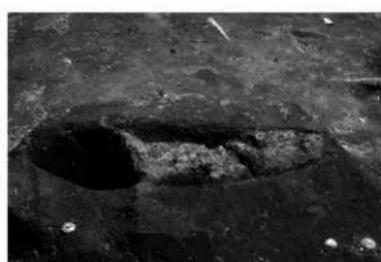
第2号焼土遺構 断面

西より



第2号・第3号焼土遺構 完掘

南西より



第3号焼土遺構 断面

西より



第4号焼土遺構 確認

西より



第4号焼土遺構 断面

北東より



第4号焼土遺構 完掘

北より



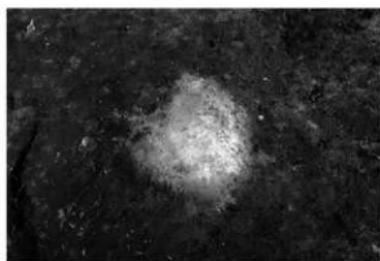
第6号焼土遺構 断面

東より

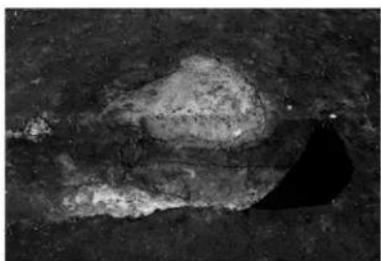


第6号焼土遺構 完掘

北より



第7号焼土遺構 確認



西より

第7号焼土遺構 断面

西より



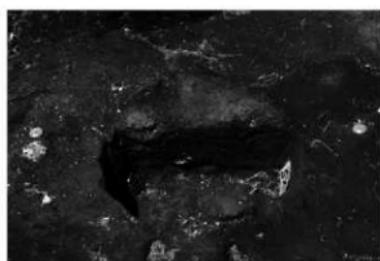
第8号焼土遺構 確認

北より



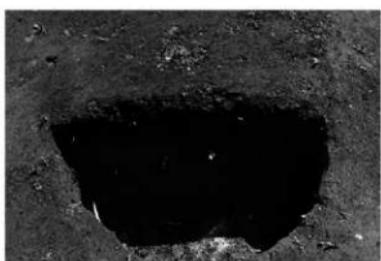
第8号焼土遺構 断面

北より



第1号性格不明遺構 断面

西より



第2号性格不明遺構 断面

西より



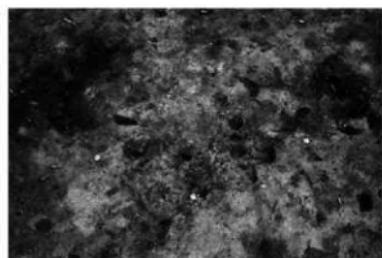
第3号性格不明遺構 断面

西より



作業風景

南より



第5号性格不明遺構 完掘

西より



第5号性格不明遺構 断面

西より



第5号性格不明遺構 遺物出土状況

西より



第5号性格不明遺構 遺物出土状況

東より



遺構外 遺物出土状況

東より



遺構外 遺物出土状況

東より



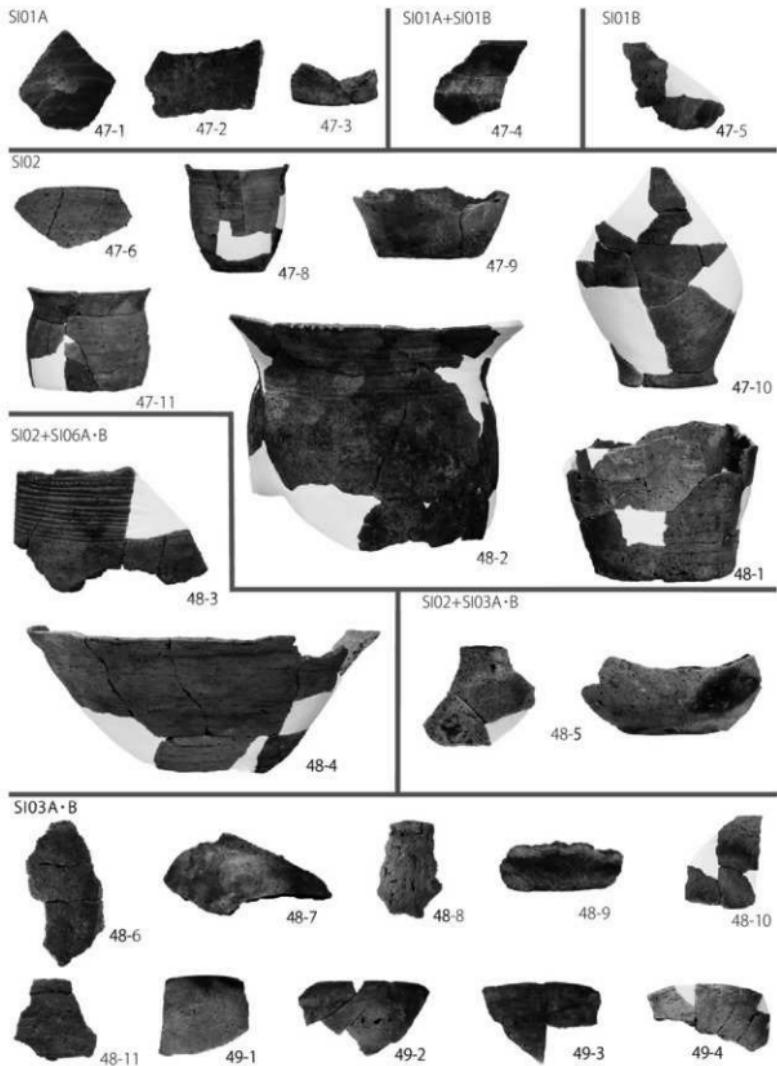
作業風景

北東より

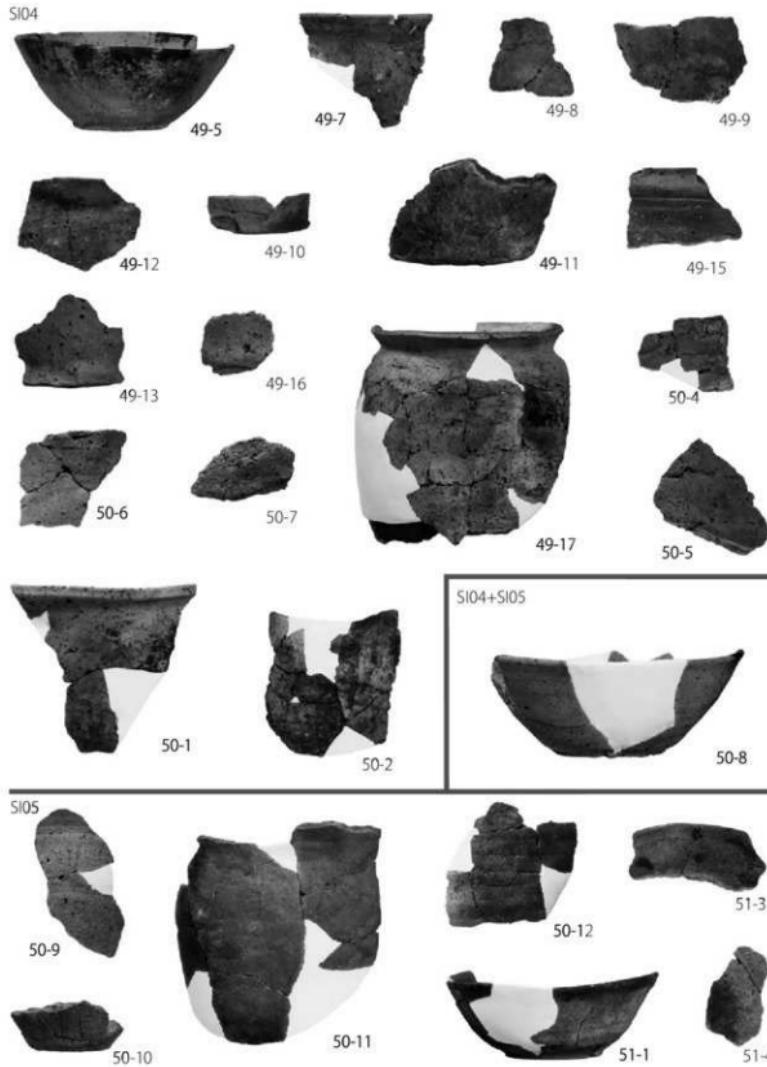


作業風景

東より



写 真 図 版 33



SI06A・B



51-7



51-8

SI05+SI06A・B



51-5



51-6



51-9



51-10



51-11



51-12



52-1



52-3



52-4



52-5



52-6



52-7

SI07



52-10

SI08



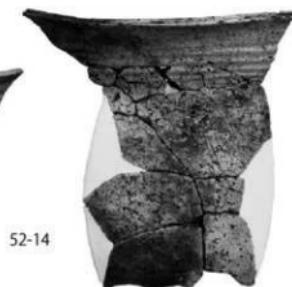
52-11



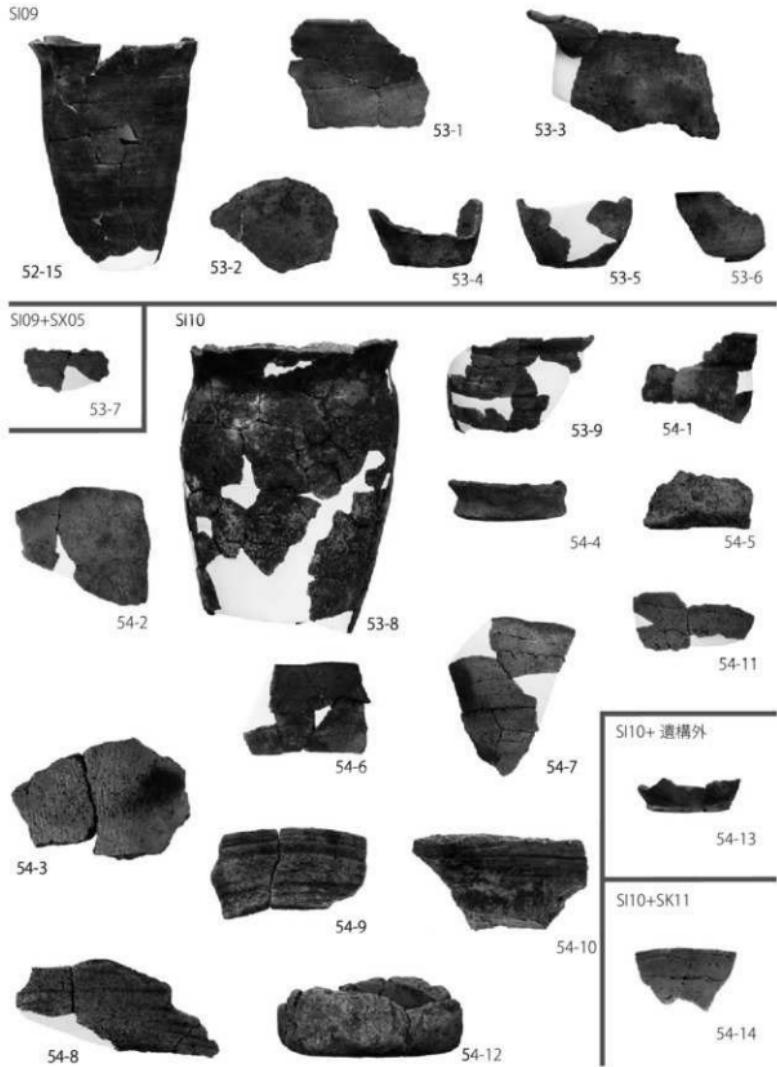
52-12



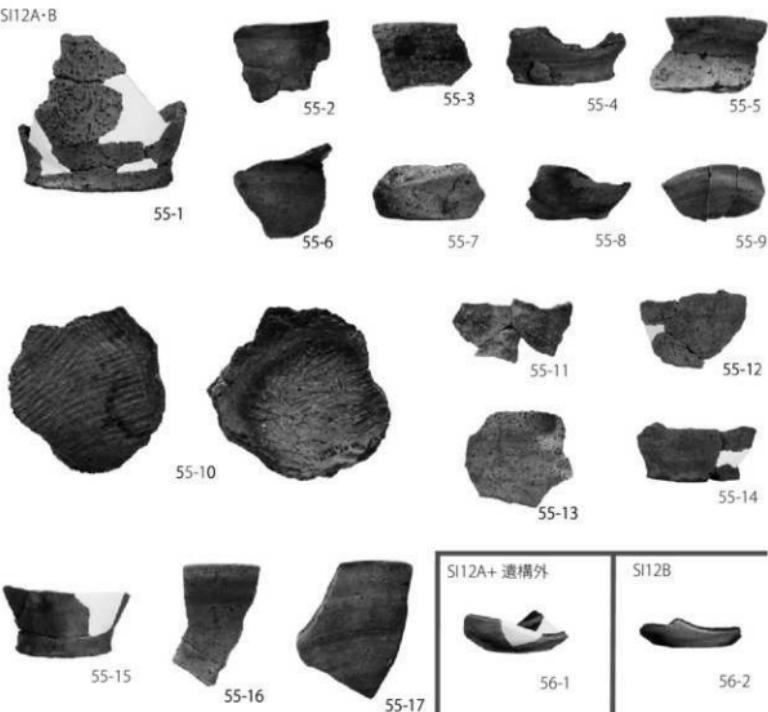
52-13



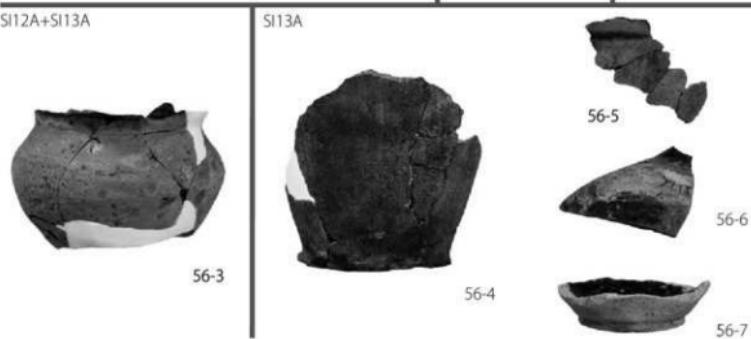
52-14

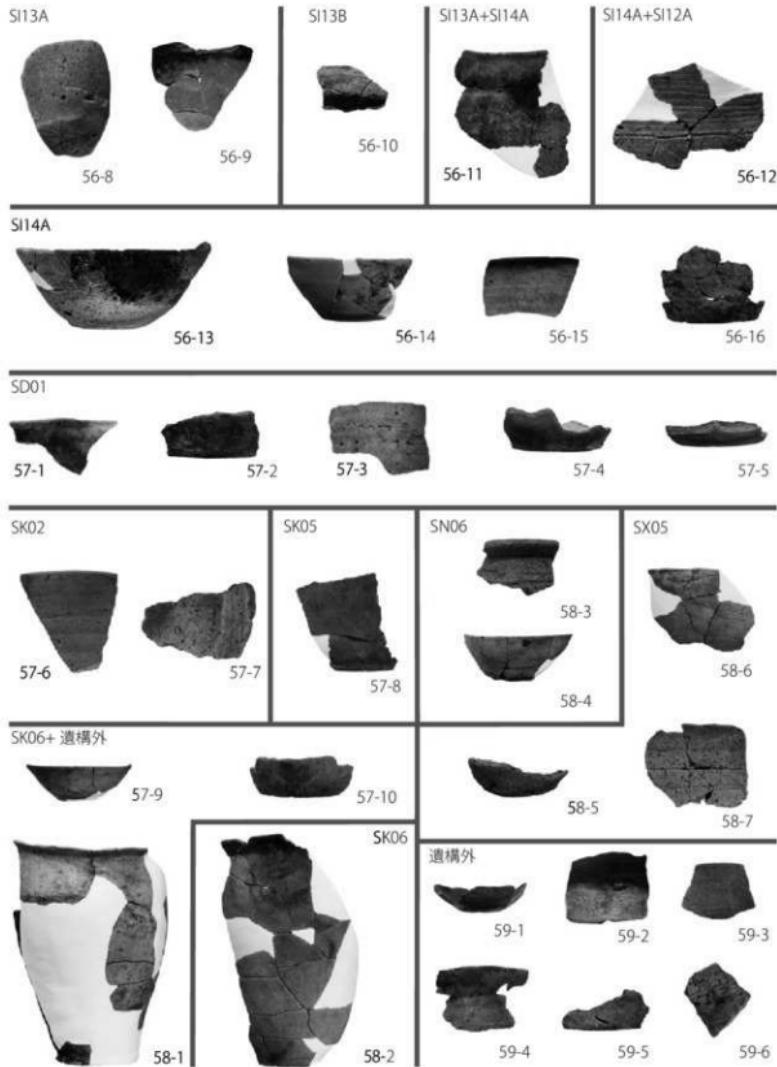


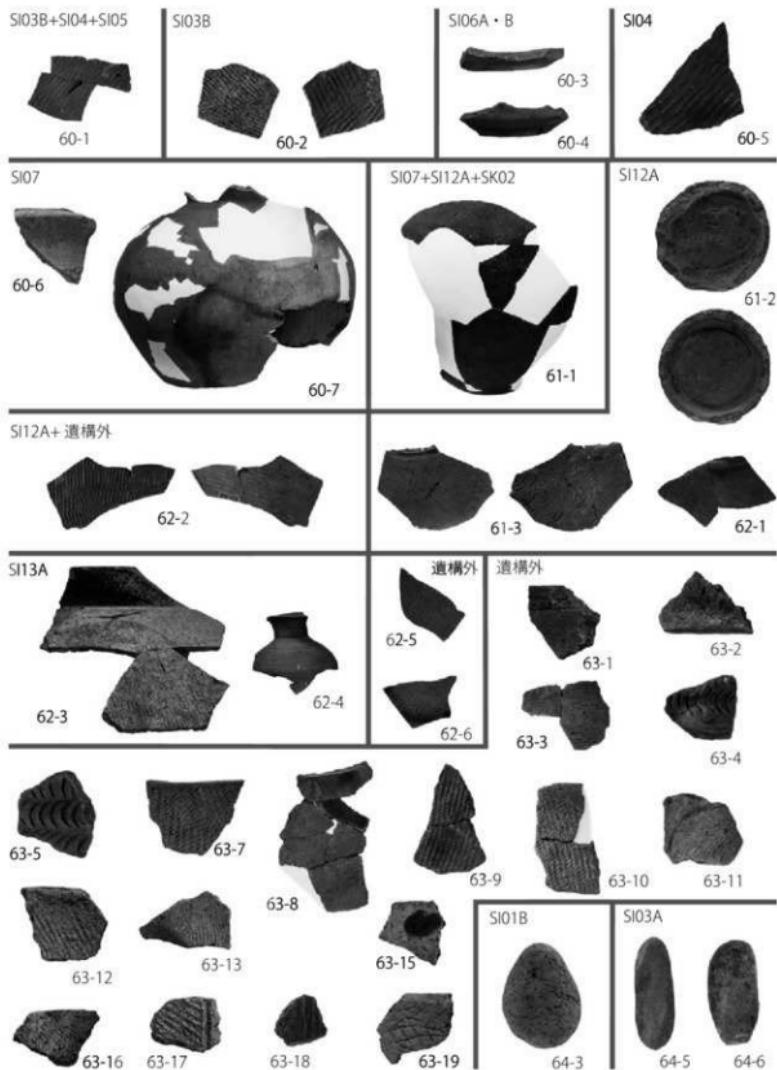
SI12A・B

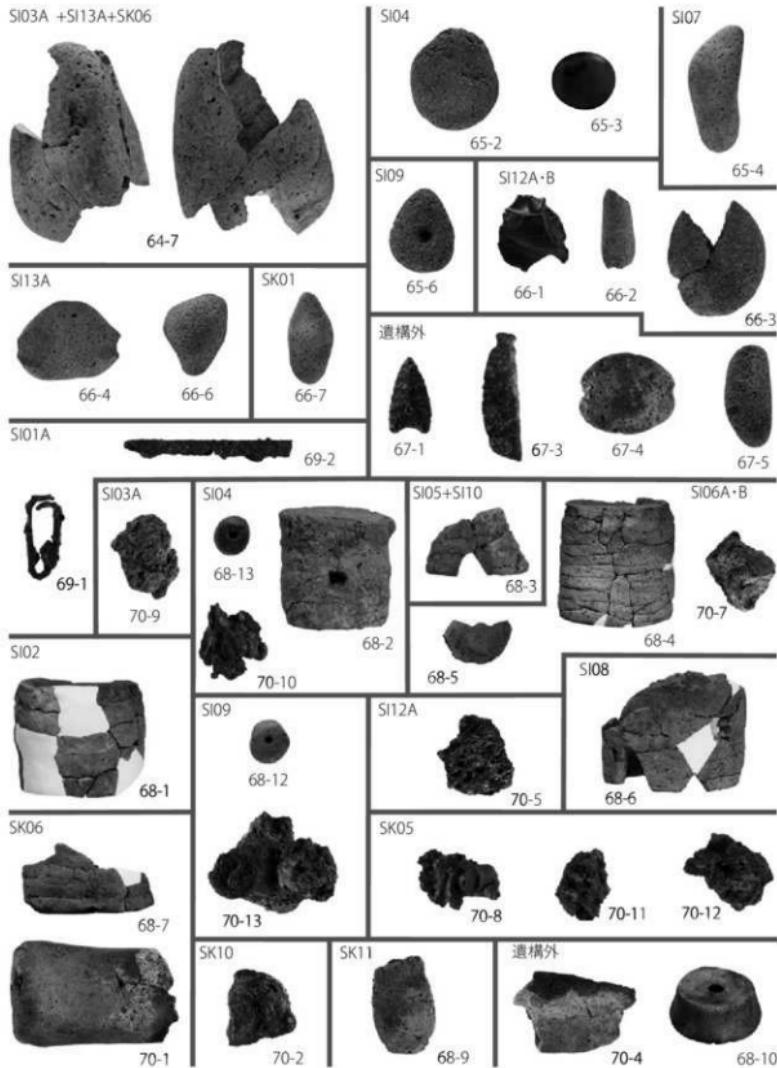


SI12A+SI13A









写 真 図 版 40

報告書抄録

ふりがな	なるとかっこさんいせき							
書名	鳴戸(3)遺跡							
副書名	一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第551集							
編著者名	浅田智晴・畠山昇							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2015年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
鳴戸(3)遺跡	青森県西津軽郡鷲ヶ沢町 大字舞戸町字鳴戸	02321 321111	40° 46' 55"	140° 14' 23"	20130604 ~ 20131007	4,700	記録保存調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鳴戸(3)遺跡	散布地	縄文時代	溝状土坑3	縄文土器・石器	・調査区東側に位置する段丘縁辺で平安時代の集落跡を検出。 ・成・鉄・埴生産に関連する遺構・遺物を検出。 ・非五所川原産須恵器、擦文土器が出土。			
			竪穴住居跡20					
			溝跡1					
	集落跡	古代	土坑12	土師器・須恵器・擦文土器・製塙土器・土製支脚・土製品・鉄製品・铁生産関連遺物				
			焼土遺構6					
			性格不明遺構5					
<p>鳴戸(3)遺跡は鳴沢川河口に面した段丘上に位置する。調査前の現況は主に畠と林であった。調査の結果、調査区東側の段丘縁辺から、平安時代の集落跡を検出した。調査区西側では土坑しか検出できなかったことや、遺構が調査区南側へ伸びていくことから、調査区東側に位置する谷に沿って集落が展開しているものと思われる。</p> <p>竪穴住居跡は主軸方向を合わせ、同一箇所で重複する事例が多く確認できた。いずれも新しい方の床面積が大きくなっていることから、拡張を伴う建替えであったと考えられる。住居規模は、床面積の規模には大小あり、大型には主柱穴が伴うが、小型には主柱穴が伴わない。カマドの煙道構築形態は、地下式から半地下式へ移り変わる傾向を示している。カマド構築には、基盤層の露頭から崩落したと考えられる板状のシルト岩片、カマド袖部だけでなく、煙道側壁や天井部の構築材に用いているものがある。一部竪穴住居跡や土坑から検出した火山灰は、分析の結果、白頭山・苦小牧火成灰と同定された。いずれも埋没がかなり進行した時点で流入している。</p> <p>調査区内における集落の開始は、東側谷に面する小型竪穴住居跡から出土した土師器や擦文土器から9世紀前葉と考えられる。他の竪穴住居跡は、竪穴住居跡の重複関係や出土遺物より、9世紀中葉から後葉に位置付けられる。</p> <p>土坑では製塙土坑を5基検出した。調査区内に散在しており、底面上に炭化物を多く含むこと、底面や壁面の一部が被熱しているなどの共通点が見られた。放射性炭素年代測定の結果、古代の年代となつた。また、出土炭化材の樹種同定の結果、大半がクリであった。</p> <p>鉄生産関連遺構として明確な根拠が得られたものは無いが、焼土遺構周辺の土坑で鉄滓や羽口などの鉄生産関連遺物が出土した。出土鉄滓は全て鍛冶津と考えられ、鍛造跡片が付着した滓の存在から、少なくとも周辺で鍛鍊鍛冶が行われていたことを示している。</p> <p>特筆すべき遺物として、土師器に伴い、五所川原窯跡ではない須恵器、擦文土器、製塙土器が出土したことが挙げられる。</p> <p>須恵器は貯蔵具である壺や甕が多く、壺は少ない。器面に磨痕が観察できるものがあり、転用罐と考えられる。甕の器形や整形技法には秋田県横手市鰐ヶ沢B窯跡に類似するものを見られる。</p> <p>擦文土器は口縁部に横走沈線を巡らし、口唇部や横走沈線境界に刻目列や擦文が施されるものがある。沈線は段状になるものが多く、器面調整はミガキやハケメ調整が用いられている。</p> <p>土師器は壺、甕、壠、壺が出土した。土師器には、口縁部に煤が付着するものが一定量存在し、灯明具に用いられたものと考えられる。</p> <p>製塙土器は、外面に刻書を施すものがある。土製支脚は円筒状のものが主体で、主にカマド支脚として使用されているが、意図的に破碎され、カマド煙道から重なった状態で出土したものがある。</p>								

青森県埋蔵文化財調査報告書第551集

鳴 戸（3）遺 跡

—一般国道101号鰐ヶ沢道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2015年3月26日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 青森オフセット印刷株式会社

〒030-0802 青森県青森市本町二丁目11-16

TEL 017-775-1431 FAX 017-775-1435
